

神 前 遺 跡

—和歌山橋本線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2014 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

神 前 遺 跡

—和歌山橋本線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2014 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター



調査地全景（南西から）



2区 201 溝土器出土状況（北から）



3区 屋敷地跡の周辺（南から）



3区 3106 石組井戸



5-4 区 弥生時代中期の溝群（後方は福飯ヶ峯・南西から）



5-4 区 弥生時代中期の溝群（後方は名草山・北東から）

巻頭図版 4



8区 弥生時代前期の8002溝（東から）



5040 流路の弥生土器



イノシシの顎骨（5187溝出土）



緑色片岩製の石包丁



銅鈴（5140溝出土）

序

和歌山市南東の平野部では、紀ノ川から取水した宮井用水の灌漑水路網を用いて耕作が行われ、豊かな水田が広がる田園風景が広がっています。弥生時代に始まるこの風景は先人のたゆまぬ努力の上に成り立っており、その歴史を探ることは私たちの先祖の歴史をたどることになります。

和歌山市神前遺跡は和歌山平野の南東部、和田川の形成した自然堤防上にありますが、紀ノ川から水をひく用水路が走る南端の地としても知られています。県道と歌山橋本線の道路改良工事に伴い平成21年度から3箇年にわたり実施した発掘調査で、神前の地に初めて水路が整備され、水田稲作が始まったころの遺跡がみつかりました。弥生時代前期から中期にかけて水路が多数つくられていく様子は、この地に住んだ人々の開拓の歴史を語る貴重な資料です。これらの水路から出土した多数の弥生土器は様々な文様で飾られており、時代や地域性を語る具体的な資料として注目されます。

また、神前遺跡では古墳時代の水路群や古代の溝・井戸のほか、中世後期から近世にかけて発展する屋敷地とみられる遺構群も確認されています。この地には雑賀五組のうち杜家郷に属する神前氏（後の中務氏か）が勢力をもっていたと考えられており、織田信長と繋がりをもって近世に向け発展していく地元有力者の動向を具体的に考えることができる遺跡としても重要です。

このたび神前遺跡の調査成果をまとめた発掘調査報告書を刊行することができることは、和歌山の歴史を知るうえでとても意義深いことであります。多くの関係者や地元の方々の御協力に感謝し、深く御礼申し上げたいと思います。

平成26年3月

公益財団法人和歌山県文化財センター

理事長 工 楽 善 通

例 言

1. 本書は和歌山市神前に所在する神前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、和歌山県海草振興局による県道と和歌山橋本線道路改良工事に伴うもので、平成 21～23 年度に発掘調査業務、平成 24・25 年度に出土遺物等整理業務を実施した。
3. 業務は和歌山県教育委員会の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。調査組織は以下のとおりである。

理 事 長	小関洋治（平成 21 年度）、鈴木嘉吉（平成 22 年度） 森 郁夫（平成 23～25 年度）、工楽善通（平成 25 年度）
専務理事	白藤正和（平成 22 年度）、小堀基二（平成 23・24 年度） 里森 修（平成 25 年度）
事務局長	田中洋次（平成 21～23 年度）、渋谷高秀（平成 24 年度） 勝浦久和（平成 25 年度）
管理課長	富加見泰彦（平成 21～23 年度）
主 査	松尾克人（平成 21～25 年度）
埋蔵文化財課長	村田 弘（平成 21～24 年度） 井石好裕（平成 25 年度）
発掘調査担当	富永里菜（平成 21 年度） 田中元浩（平成 22～23 年度） 津村かおり（平成 22 年度） 山野晃司（平成 23 年度）
遺物整理担当	佐伯和也（平成 24 年度） 丹野 拓（平成 24～25 年度）

4. 本書は平成 21～23 年度の実績報告書を参考として、丹野が編集・執筆した。付章の土器胎土分析については、株式会社パレオ・ラボの藤根久・米田恭子・佐々木由香氏が執筆したものを掲載した。
5. 銅鈴の保存処理は株式会社吉田生物研究所に委託し、動物骨の同定は丸山真史氏（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）に依頼した。
6. 発掘調査及び遺物整理において、当センター・県教育委員会職員及び関係諸機関の職員のほか、下記の方々のご教示・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する。（敬称略）
前田敏彦・清水梨代・大木要（和歌山市教育委員会）、藤敷勝則・内田和典（和歌山市文化スポーツ振興財団）、小賀直樹、水田義一（紀伊風土記の丘）、森岡秀人（日本考古学協会）、松尾信裕（大阪城天守閣）
7. 当事業で作成した図面・写真・台帳類は当センターが保管している。出土遺物は和歌山県教育委員会が所蔵している。

凡 例

1. 発掘調査及び出土遺物整理は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）に準拠して行った。
2. 実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）を基準とし、数値はm単位で表示している。また、図示した北は座標北を指す。
3. 発掘調査で使用した標高は、東京湾標準潮位（T.P.）を基準とした。
4. 土色は小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）『新版標準土色帖』2003年度版を基準とした。
5. 発掘調査で使用したコードは以下のとおりである。出土遺物・記録資料はこの調査コードを用いて管理している。
 - 09－01・307（2009年度県道と歌山橋本線発掘調査）
 - 10－01・307（2010年度県道と歌山橋本線発掘調査）
 - 11－01・307－2（2011年度県道と歌山橋本線発掘調査）
6. 遺構番号は調査順に通し番号で付けた。三桁ないし四桁の数字に続けて遺構の性格を表す語句を入れ、001溝・201土坑・3033溝などとした。なお、大型の穴を土坑、小型の穴をピットとし、これらのうち建物を構成するか、断面で柱痕が確認できるものを柱穴と表現した。

いくつかの個別遺構を統合した遺構については、遺構の性格を表す語句の後ろに通し番号を付け、掘立柱建物1などとした。
7. 出土遺物には1167までの通し番号を付けた。石器・石製品についてはS1～S71、木製品についてはW1～W12、金属製品についてはK1～K6の番号をつけて報告書に掲載した。その他、獣骨はH1～H28、土器胎土分析資料にはNo.1～30までの委託分析用の管理番号を振った。なお、遺物番号と写真番号は一致する。
8. 遺構図の縮尺は基本的に、調査区平面図を1/200～1/300、調査区土層断面図を1/60、個別の遺構図を1/40とし、必要に応じてそれ以外の縮尺を用いた。遺物実測図の縮尺は基本的に1/4であるが、石器・石製品は1/3、銭貨は1/2、鈴は1/1とした。
9. 本稿では、縄文時代晩期の突帯文土器の可能性のあるもの及びその特徴を残す弥生時代前期併行の土器を含めて突帯文系土器と呼称した。紀伊型甕（紀伊形甕）と通称される甕のうち、口縁部・肩部に突帯を貼り付けて上面を刻むものについては、突帯文系土器と弥生土器の紀伊型甕の移行期の土器として扱った。また、弥生土器の特徴を残す庄内式併行期の土器を弥生土器あるいは弥生V様式系土器と呼称した。庄内式併行期（庄内式期）は弥生時代と古墳時代の移行期として扱い、庄内式期で終わる遺構は弥生時代の遺構、庄内式期から始まる遺構は古墳時代の遺構として扱っている。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 既往の調査成果	2
第3節 発掘調査と出土遺物整理の経過	4
第2章 位置と環境	6
第1節 歴史地理的環境	6
第2節 調査の方法	9
第3章 調査成果	12
第1節 1区の調査	14
第2節 2区の調査	26
第3節 3区の調査	42
第4節 4区の調査	65
第5節 5区の調査	74
第6節 6区の調査	140
第7節 7区の調査	149
第8節 8区の調査	173
第4章 総括	184
付章 自然科学分析の成果	189
1節 神前遺跡出土土器の胎土分析	189
2節 レプリカ法による土器の種実圧痕の同定	208
土器観察表	212
石器・石製品観察表	234
金属製品観察表	236
木製品観察表	236
獣骨観察表	236
写真図版	
報告書抄録	
奥付	

挿図目次

図1	調査地の位置	1	図35	2区	石包丁・スクレイパー・石錘(石②) …	38
図2	神前遺跡における既往の調査	3	図36	2区	古墳時代の遺構	38
図3	調査区の配置	5	図37	2区	弥生～古墳時代の遺構出土土器 …	39
図4	神前遺跡周辺の旧地形	6	図38	2区	中・近世の遺構分布状況	39
図5	周辺の遺跡	8	図39	2区	中世の遺構	39
図6	地区割りの設定状況	10	図40	2区	中世遺構出土土器・瓦	40
図7	遺跡全体図	13	図41	2区	近世遺構出土土器・瓦	41
図8	1区 平面図	15	図42	3区	平面図	43
図9	1区 壁面土層図	16	図43	3区	壁面土層図	44
図10	1区 弥生～古墳時代の遺構分布状況	17	図44	3区	遺物包含層出土土器	45
図11	1区 弥生～古墳時代の溝①	18	図45	3区	弥生時代の溝	46
図12	1区 弥生～古墳時代の溝②	19	図46	3区	弥生時代前～中期の 遺構出土土器	47
図13	1区 弥生～古墳時代の遺構出土土器	20	図47	3区	石斧(石③)	48
図14	1区 古代末～近世の遺構分布状況	20	図48	3区	弥生～古墳時代の遺構	48
図15	1区 古代末期～中世初頭の 遺構出土土器	21	図49	3区	古墳時代頃の出土土器・土錘	49
図16	1区 031井戸出土木製品(木①)	22	図50	3区	古代の遺構(3020井戸・3081溝)	50
図17	1区 古代末期～近世の遺構	23	図51	3区	古代の遺構出土土器	51
図18	1区 中世の遺構出土土器・瓦	24	図52	3区	中世末～近世初頭の遺構①	52
図19	1区 近世の石製品	24	図53	3区	中世～近世初頭の 遺構②(3106井戸)	53
図20	1区 中世末期～近世の 遺構出土土器・瓦	25	図54	3区	中世末～近世初頭の 遺構出土土器・瓦	54
図21	2区 弥生～古墳時代の 遺構分布状況	26	図55	3区	近世の遺構①(埋桶)	55
図22	2区 平面図	27	図56	3区	近世の遺構②	57
図23	2区 壁面土層図	28	図57	3区	近世の遺構③	58
図24	2区 201・202溝(溝1)遺物出土状況 …	29	図58	3区	近世の遺構④	59
図25	2区 弥生～古墳時代の遺構	30	図59	3区	近世の遺構出土土器・瓦①	60
図26	2区 201溝(溝1)出土土器①	31	図60	3区	近世の遺構出土土器・瓦他②	61
図27	2区 201溝(溝1)出土土器②	32	図61	3区	中世末期～近世の 石器・石製品(石④)	62
図28	2区 201溝(溝1)出土土器③	33	図62	3区	中世末期～近世の 金属製品・銭貨(金属①)	63
図29	2区 201溝(溝1)出土土器④	34	図63	3区	中世末期～近世の木製品(木②) …	64
図30	2区 201・202溝(溝1)出土土器①	34	図64	4区	平面図	65
図31	2区 201・202溝(溝1)出土土器②	35	図65	4区	弥生～古墳時代の 遺構①(堅穴状遺構1)	66
図32	2区 202溝(溝1)出土土器	36	図66	4区	弥生～古墳時代の遺構②	67
図33	2区 203溝(溝5)・205溝(溝3)・207溝(溝2) 出土土器	36				
図34	2区 弥生時代の遺構出土土器	37				

図67	4区	弥生時代の遺構出土土器	68	図103	5区	溝9(5205)出土土器④	102
図68	4区	古墳時代の遺構出土土器	68	図104	5区	溝9(5205)出土土器⑤	102
図69	4区	双孔円盤(石⑤)	68	図105	5区	溝10(5118)出土土器①	103
図70	4区	近世の遺構①(4003井戸)	69	図106	5区	溝10(5187)出土土器②	104
図71	4区	近世の遺構②	70	図107	5区	溝10(5187)出土土器③	105
図72	4区	近世の遺構出土土器①		図108	5区	溝10(5012)出土土器④	106
		(各時代の遺物混在)	71	図109	5区	溝10分流(5215)出土土器	106
図73	4区	近世の遺構出土土器・瓦②	72	図110	5区	弥生時代溝11(5182・5014)他	108
図74	4区	硯(石⑥)	73	図111	5区	溝11(5182)出土土器①	109
図75	4区	近世の木製品(木③)	73	図112	5区	溝11(5182)出土土器②	110
図76	5区	平面図	75	図113	5区	溝11(5014)出土土器③	111
図77	5-1区	壁面土層図	77	図114	5区	溝11(5014)出土土器④	112
図78	5-2区	壁面土層図	78	図115	5区	古墳時代溝12(5180・5016)・ 溝13(5019・5144)・溝14(5142)	113
図79	5区	遺物包含層出土土器	79	図116	5区	溝12(5180・5016・5169) 出土土器	114
図80	5-4区	5040流路土層断面図	80	図117	5区	溝12関連遺構出土土器	115
図81	5区	5040流路出土土器①	81	図118	5区	溝13(5019)出土土器	116
図82	5区	5040流路出土土器②	82	図119	5区	弥生～古墳時代 溝14(5001)・ 溝15(5140・5002)	116
図83	5区	5040流路出土土器③	83	図120	5区	溝14(5142・5001)出土土器	117
図84	5区	5040流路出土土器④	84	図121	5区	溝15(5140・5002)出土土器	117
図85	5区	5040流路出土土器⑤	85	図122	5区	弥生時代の各種遺構①	118
図86	5区	5040流路出土土器⑥	86	図123	5区	弥生時代の各種遺構②	119
図87	5区	5040流路出土土器⑦	87	図124	5区	弥生時代の各種遺構③	120
図88	5区	5040流路出土土器⑧	88	図125	5区	弥生時代の各種遺構 出土土器①	121
図89	5区	5040流路出土土器⑨	89	図126	5区	弥生時代の各種遺構 出土土器②	122
図90	5区	弥生時代 溝6(5081)・ 溝7(5080・5227)・溝8(5096・5206)	90	図127	5区	弥生時代の各種遺構 出土土器③	123
図91	5区	溝6(5081)出土土器	91	図128	5区	弥生時代の各種遺構 出土土器④	124
図92	5区	溝7(5080・5227・5279)出土土器	92	図129	5区	弥生時代の各種遺構出土土器⑤	125
図93	5区	溝8(5096・5206)出土土器①	93	図130	5区	古墳時代の各種遺構①	127
図94	5区	溝8(5206)出土土器②	94	図131	5区	古墳時代の各種遺構②	128
図95	5区	溝8(5206)出土土器③	95	図132	5区	古墳時代の各種遺構出土土器①	129
図96	5区	溝8(5206)出土土器④	96	図133	5区	弥生時代末～古墳時代の 各種遺構出土土器②	130
図97	5区	溝8(5206)出土土器⑤	97				
図98	5区	溝8分流(5093)出土土器	97				
図99	5区	弥生時代溝9(5095・5205)・ 溝10(5118・5187・5012)	98				
図100	5区	溝9(5095)出土土器①	99				
図101	5区	溝9(5205)出土土器②	100				
図102	5区	溝9(5205)出土土器③	101				

図134	5区	打製石器(石⑦)	131	図160	7区	7000落ち込み出土土器②	159
図135	5区	石包丁・大型石包丁(石⑧)	132	図161	7区	7001溝出土土器	159
図136	5区	石斧・石錘・礫石器他(石⑨)	133	図162	7区	7002溝出土土器①	160
図137	5区	石皿・台石(石⑩)	134	図163	7区	7002溝出土土器②	161
図138	5区	紡錘車・白玉・砥石(石⑪)	135	図164	7区	7004溝出土土器	162
図139	5区	溝15(5140)出土銅鈴(金②)	136	図165	7区	弥生時代の遺構出土土器	165
図140	5区	古代末期～近世の遺構	137	図166	7区	打製石器・石包丁(石⑬)	166
図141	5区	古代・中世・近世の 遺構出土土器他	138	図167	7区	竪穴建物1の柱穴	167
図142	6区	平面図	141	図168	7区	古墳時代頃の遺構	168
図143	6区	壁面土層図	142	図169	7区	7157土坑出土土器	168
図144	6区	弥生～古墳時代の遺構	143	図170	7区	掘立柱建物2・3他	169
図145	6区	弥生時代の遺構出土土器	144	図171	7区	7013溝出土土器	170
図146	6区	石鍬(石⑫)	145	図172	7区	中世・近世の遺構他出土土器	170
図147	6区	中世の遺構①	145	図173	7区	近世の遺構	171
図148	6区	中世の遺構②(掘立柱建物1)	146	図174	7区	近世の木製品(木③)	172
図149	6区	近世の遺構	147	図175	8区	壁面土層図	174
図150	6区	中世・近世の遺構出土土器	148	図176	8区	8000落ち込み・8002溝遺物 出土状況	175
図151	7・8区	平面図	150	図177	8区	弥生～古墳時代の溝	176
図152	7・8区	下層遺構平面図	151	図178	8区	8002溝出土土器	177
図153	7区	壁面土層図	152	図179	8区	8002溝出土木製品(木④)	178
図154	7区	7000流路遺物出土状況	153	図180	8区	掘立柱建物1	179
図155	7区	7002溝遺物出土状況	154	図181	8区	中世～近世の遺構	180
図156	7区	7004溝遺物出土状況	155	図182	7・8区	7013・8013南北溝断面模式図	181
図157	7区	7061土坑	156	図183	8区	各種遺構出土土器	182
図158	7区	7165土坑	157	図184	8区	8013南北溝出土土器	182
図159	7区	7000落ち込み出土土器①	158	図185		神前遺跡の主要遺構の変遷	186

表目次

表1	調査・整理の概要	5	表5	金属製品観察表	236
表2	土器観察表	212	表6	木製品観察表	236
表3	石器・石製品観察表	234	表7	獣骨観察表	236
表4	石器石材の剥片数量	235			

写真目次

写真1	神前遺跡県3次調査区遠景	2	写真4	土層分層作業	4
写真2	神前遺跡県3次調査区	2	写真5	現地説明会	4
写真3	遺構掘削状況	4	写真6	遺物整理作業	4

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

和歌山県では、和歌山市郊外における渋滞緩和のため、また、2015年に計画されている紀の国わかやま国体開催前の道路開通を目指して、県内における道路改良工事が進められている。当該地においても県道と歌山橋本線・県道秋月海南線・県道松島本渡線道路改良工事が計画され、予定地の一部が井辺遺跡及び神前遺跡にかかることから、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課により平成21年2月から5次に渡る確認調査が実施された。

確認調査の結果、井辺遺跡及び神前遺跡は、いくつかの谷を挟みながら弥生時代～古墳時代を中心とする遺跡が展開しており、記録保存目的の本発掘調査が必要と判断され、当センターが受託することとなった。

当報告書の対象はこれらの本発掘調査の南半部にあたる県道と歌山橋本線道路改良事業に伴う範囲であり、神前遺跡における県の第1・2・4次調査（県道と歌山橋本線に伴う調査としては1～3次調査）にあたる。

神前遺跡の県第1次調査は2009年12月8日～3月5日に、神前遺跡の中央東側を通過する道路予定地の北側から1区と2区を対象範囲として設定し、1,653㎡の本発掘調査を実施した。1区と2区はやや離れた調査区であるが、ともに弥生時代から古墳時代にかけての多数の溝を検出した。

県第2次調査は2010年6月17日～10月22日に、第1次調査よりやや南側の平野部に3～6区を調査対象として設定し、4,644㎡の本発掘調査を実施した。3・4区は第1次調査の1区と2区の間に、5～6区は南側に設定した。

県第4次調査は2011年11月1日～2012年2月29日に、第1・2次の調査区より南側に7・8区を設定し、1,921㎡の本発掘調査を実施した。これにより県道と歌山橋本線に伴う調査が終了した。

なお、県の第3次にあたる本発掘調査は、2011年3月29日～10月5日まで、県道松島本渡線の道路改良工事に伴い井辺遺跡と神前遺跡の一部を対象として実施されている。神前遺跡内の調査区は本報告書の1区北側隣接地にあたるやや独立した調査区が設定されており、報告書は別途作成される計画となっている。



図1 調査地の位置

第2節 既往の調査成果

神前遺跡は、和歌山市神前地内に所在する集落遺跡で、遺跡として認識されている範囲は東西700 m、南北450 mである。現況として、北・西側は宅地化が進んでおり、南・東側は水田が広がっている。

神前遺跡の範囲内では、2013年度までに和歌山市による立ち会い調査を含めた9次に渡る調査と、和歌山県が当センターに委託した4次に渡る本発掘調査が行われている。本報告書の対象としている県の神前遺跡1・2・4次調査以外の主要な調査について概要を示す。

市の1次調査は、1996年1～2月に実施された。今回調査地の3区中央にあたる場所にトレンチを設定して実施された宅地開発に伴う220 m²の発掘調査である。調査区北端では東側に広がる弥生時代前期の落ち込み状地形があり、中央北東側には弥生時代後期の溝1条がある。その他、鎌倉時代の石積井戸1基をはじめ、近世初頭の溝・土坑等が発見され当該期の有力者の屋敷地と考えられている。

市の2次調査は、1997年7月に実施された。遺跡の西の縁辺にあたる小規模な調査で、調査成果からは少なくとも弥生時代の遺構の広がりはこの場所まで達しないと解釈できる。

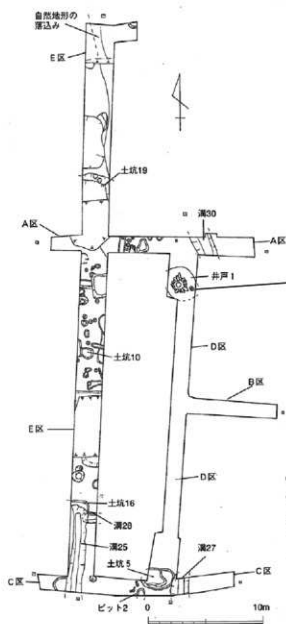
市の3次調査は、1999年1～2月に実施された。3箇所で計70 m²の調査区を設定し、本報告の3区から100 mほど東の現在の神前集落内と、今回調査地の西に存在する小丘陵の頂上付近、及び丘陵南西裾を調査した。このうち東の調査区では、第3遺構面（標高1.45～1.55 m）で弥生時代前期末～中期初頭の水田区画3単位と杭列、第2遺構面（標高1.70 m）で幅1.0～1.2 m、深さ0.5 mの弥生時代中期前葉の南北溝2条と鎌倉時代の東西溝、第1遺構面（標高1.72 m）で江戸時代の土坑等が確認されている。

県の3次調査は、県道と歌山橋本線道路工事に伴う調査と併行する時期に、連続する路線上の北側隣接地にあたる県道松島本渡線の道路改良工事の対象範囲で実施されている。弥生時代から古墳時代にかけての溝10数条と谷状地形、鎌倉時代の溝と耕作痕を検出した。

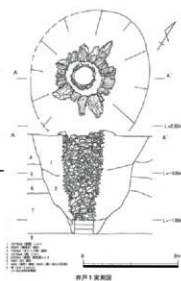
既往の調査成果は、和歌山市・市文化体育振興事業団の『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』、『和歌山市内遺跡発掘調査概報』のほか、和歌山県教育委員会の『和歌山県埋蔵文化財調査年報』、当センターの『和歌山県文化財センター年報』、『地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会発表資料集—』の各年度の冊子に紹介されている。



写真1 神前遺跡県3次調査区遠景（北から） 写真2 神前遺跡県3次調査区（北から）



神前遺跡・市1次調査区
(県2次調査3区内)



井戸1出土土器



神前遺跡・市3次調査A区

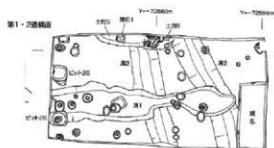


図2 神前遺跡における既往の調査

第3節 発掘調査と出土遺物整理の経過

神前遺跡・和歌山橋本線第1次調査（神前遺跡県1次調査）

1・2区を対象に実施し、調査期間は平成21年12月8日～平成22年3月5日、調査面積は1,653㎡である。調査準備後、平成21年12月16日より掘削を開始し、平成22年1月26日に第1回目の航空撮影（1区西半）、2月19日に第2回目の航空撮影（1区東半、2区）を行った。その後埋め戻しを始めながら実測作業等を行い、2月25日に埋め戻しを終え、現地調査を終了した。

調査は工事請負方式で実施し、掘削作業は株式会社弘安建設に、基準点測量および航空撮影・写真測量図化は株式会社南紀航測センターに委託した。

神前遺跡・和歌山橋本線第2次調査（神前遺跡県2次調査）

3～6区を対象に実施し、調査期間は平成22年6月17日～10月22日、調査面積は4,644㎡である。調査は南北に長い調査区を4つの大地区に分割し、さらに農機進入路と排土置場確保のため、5区を5-1～5-5区に、6区を6-1・6-2区に分割し、2つの工程に分け調査を行った。航空写真撮影・測量はラジコンヘリコプターを用い、平成22年9月9日と10月14日の2回行った。その後埋め戻しを始めながら残りの実測作業等を行い、10月22日に埋め戻しが終了した。

調査は工事請負方式で実施し、掘削作業等は株式会社ヤスダエンジニアリングに発注し、基準点測量・航空写真撮影・測量を和歌山航測に委託した。

調査成果については、周辺住民への調査案内の配布、現地公開、報道機関への成果の資料提供を行い周知に努めた。現地公開は平成22年9月11日に第1回目、平成22年10月15日・16日の両日に第2回目を行い、参加者は、第1回目は約230名、第2回目は約150名であった。平成22年10月15日には、岡崎小学校6年生の児童74名の現地見学を受け入れた。



写真3 遺構掘削作業



写真4 土層分層作業



写真5 現地説明会



写真6 遺物整理作業

神前遺跡・和歌山橋本線第3次調査（神前遺跡第4次調査）

7・8区を対象に実施し、調査期間は平成23年11月1日～2月29日、調査面積は1,921㎡である。調査準備後、11月16日より掘削を開始し、平成24年2月1日に航空写真測量を行った。その後2月29日に埋め戻しを終え、現地調査を終了した。現地説明会を1月28日に開催し、154人が参加した。

調査は工事請負方式で実施し、掘削作業等は有限会社芳野組に、基準点測量・航空写真撮影・測量は株式会社共和に委託した。

なお、発掘調査時に現地調査事務所等において、遺物洗浄・登録等の応急整理を行った。

第1次出土物等整理

平成24年度には第1次整理作業を行った。整理作業対象は出土遺物339箱のほか、写真・遺構図等である。主な作業として、出土遺物の洗浄・注記・接合・登録作業のほか、出土遺物の実測、遺構のトレース等を行った。整理対象遺物は弥生土器を中心とする土器が多く、石製品・木製品・金属製品が若干ある。

第2次出土物等整理

平成25年度には第2次整理作業を行った。主な作業として、出土遺物の復元・実測・トレース・組版・写真撮影、遺構のトレース・組版を行い、発掘調査報告書を作成した。

遺構図版はA2版のファイル5冊、航空写真を含む写真は計34冊に収納して当センターで保管している。遺跡調査後339箱にまとめてあった出土遺物は、発掘調査報告書掲載分143箱とその他255箱に整理し直して収納し、県教育委員会に移管した。

表1 発掘・整理の概要

	調査面積	調査期間	出土遺物量
1区	1,068㎡	2009年12月～ 2010年3月	18箱
2区	585㎡		35箱
3区	1,459㎡		87箱
4区	443㎡		18箱
5区	2,296㎡	2010年6月～ 2010年10月	172箱
6区	446㎡		12箱
7区	1,549㎡	2011年11月～ 2012年2月	45箱
8区	372㎡		11箱
計	8,218㎡	—	398箱

	整理対象	整理期間	成果物
第1次整理	出土遺物 398箱他	2012年4月～ 2013年3月	発掘調査 報告書 の刊行
第2次整理		2013年4月～ 2014年3月	

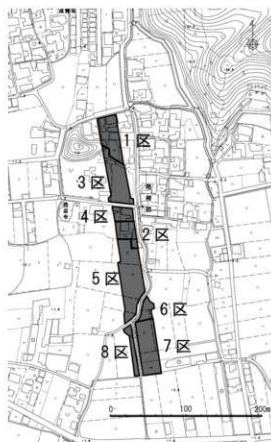


図3 調査区の配置

2 歴史的環境

旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺跡は調査が行われておらず、丘陵裾の溜池などでナイフ形石器が表採された地点が知られている。縄文時代には和歌山平野周辺の丘陵裾部で、鳴神貝塚、禰宜貝塚、吉礼貝塚、岡崎遺跡などが形成される。なかでも、昭和6年に国の史跡になった鳴神貝塚では、縄文時代中期から晩期および弥生時代前期にかけての遺物が出土しており、縄文時代晩期の土壌墓からは抜歯された女性の伸展葬人骨が発見された。また鳴神貝塚に隣接する鳴神IV遺跡では、縄文時代晩期の土壌墓3基や8体以上の人骨が発見されている。吉礼貝塚では縄文時代前期から後期にわたる土器が出土している。これらの貝塚から出土する貝類は主にハイガイ、ハマグリなどの海水系のものである。

弥生時代

JR和歌山駅東側一帯に広がる太田・黒田遺跡は、和歌山県を代表する弥生時代の大規模集落遺跡である。集落は弥生時代前期に始まり、中期には最盛期を迎え、中期後葉から後期前半にかけては、滝ヶ峰遺跡などの高地性集落が見られるようになり、平野部での遺跡の展開が激減する。弥生時代後期後半になると、ふたたび平野部で集落が見られるようになる。神前遺跡の周辺では井辺遺跡、秋月遺跡、太田・黒田遺跡などがあるが、これらの遺跡では、弥生時代後期から遺物・遺構が認められ、古墳時代前期に継続して集落が展開する。

古墳時代

古墳時代になると、一時的に秋月遺跡に前方後円墳、井辺遺跡に前方後方墳が出現するが、その後も周溝墓的な古墳の築造が継続する。古墳時代中期から後期にかけて、朝鮮半島との交易が盛んになり、和歌山市平野の東部丘陵上には850基の古墳から成る岩橋千塚が形成される。岩橋千塚は10地区に区分され、神前遺跡北東部に位置する飯坂ヶ峰には井辺前山古墳群（井辺前山地区）があり、井辺前山24号墳や井辺八幡山古墳などの前方後円墳が築かれている。神前遺跡から和田川を挟んだ南岸側には和田古墳群や竈山神社古墳が築かれる。

古代

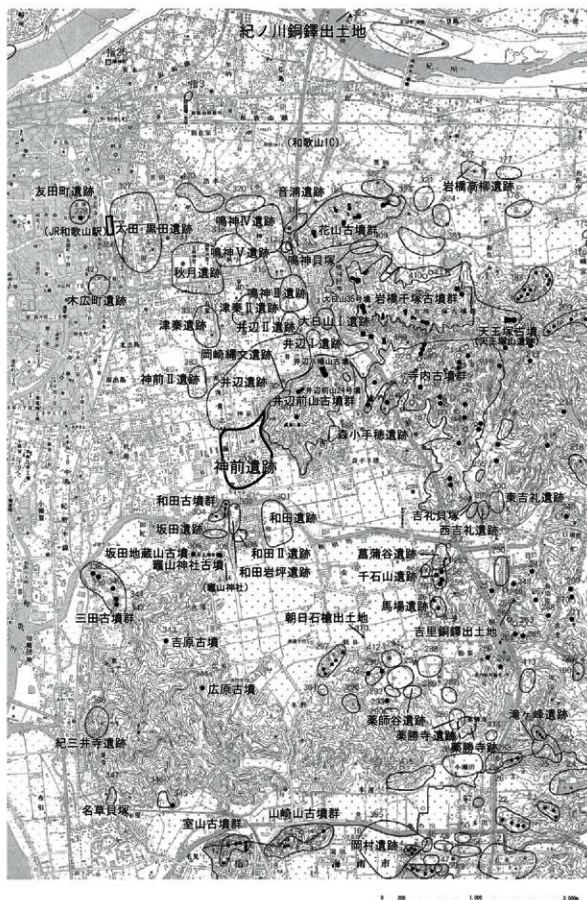
古代には、秋月遺跡の中央部に紀伊一ノ宮とされる日前・国懸神宮が造営された。日前宮南の平野部は、条理型地割が現在も確認され、古代より日前宮の神領であったとされる。神前遺跡の南西には竈山神社があるほか、周辺には式内社が多数分布する。また、太田・黒田遺跡では井戸から同開珎や万年通宝が、鳴神V遺跡からは陶硯、緑釉陶器、土馬が出土している。

中世

中世以降にも、太田・黒田遺跡や、秋月遺跡、鳴神遺跡などで遺構や遺物が見られる。太田・黒田遺跡南側には、豊臣秀吉による水攻めで著名な太田城の推定地があり、幅10m、深さ3mの16世紀の壕状の遺構が検出された。岩橋高柳遺跡では、掘立柱建物2棟と井戸2基の鎌倉時代の屋敷跡や室町時代の堀状遺構が検出されている。一方、室町時代の神前周辺は、日前・国懸宮の神事や祭事に関係し、雑賀五組の社家郷に属している。

近世

近世に入り、神前周辺は神前村と呼ばれるようになる。神前遺跡では、江戸時代初頭の溝や土坑、暗渠排水溝が検出されている。



第2節 調査の方法

地区割りの設定

発掘調査は原則的に当センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006）に準拠して行った。

遺構図作成や遺物取り上げの際に用いた調査区の地区割りは、平面直角座標系（世界測地系）第VI系の座標軸を使用した。地区割りの基点はX=-198.0km、Y=-72.0kmに設定し、和歌山市内を網羅する区割りを想定して太田・黒田遺跡第1次調査及び平成20年度秋月遺跡調査（県9次）時との重複を避けた。この基点から100m四方の区画を1単位とした中区画を設定し、北東端を基点とし西方向へローマ字の大文字でA～Jと、南方向へアラビア数字で1～10と表記した。今回の調査区はJ2～J4・13～14区となる。さらに4m四方の区画を1単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へローマ字の小文字でa～yと、南方向へアラビア数字で1～25と表記した。遺構図作成や遺物取り上げの際には原則として、4m四方の小区画で行い、中区画－小区画を組み合わせで表記し用いた。

方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値を使用した。

調査区の設定

調査区の東西幅は北側で約25m、南側で30～34mであり、部分的に21～40mとなる。中央での南北長が約340mの細長い道路用地で、南北座標軸より北→西に約10度傾く。

第1次調査

調査地は南北2箇所にわかれ、約70m離れている。北側を1区、南側を2区とした。1区は調査面積1,068㎡であり、幅約23m、長さ約62mで土地区画の都合上、南西部分は3区に含めた。2区は調査面積585㎡であり、幅約23m、長さ約35mで南西部分は5-1に含めた。

第2次調査

調査区名称は県1次調査のものを踏襲し、北から3区、4区、5区、6区を設定した。調査区については、当初設計には無い農機進入路やU字溝を確保しながら調査を行う必要が生じたため、5区を5-1区～5-5区の5箇所に、6区を6-1区・6-2区の2箇所に、さらに小地区を設定した。調査面積は4,644㎡である。

第3次調査（県道と歌山橋本線）

第2次調査の5・6区の南隣りに調査区を設定した。宮井用水「中溝水路」を挟んで東側に7区、西側に8区を配して調査を行った。7・8区は同時に掘削を行っており、調査面積は1,921㎡である。

掘削手順

1・5・6区は調査区外に掘削排出土の仮置き場が確保できないため、調査区を分割・反転して調査を行った。その他の調査区では掘削排出土を調査区外の道路用地内に横置きし、反転せずに掘削手順は一度で行った。掘削に際し、近世遺物包含層（第0～Ⅲ層）まで機械掘削を行った。一部に残存する弥生土器等の遺物包含層（第Ⅳ層）は人力掘削を行い、また第4層が存在しない地点では遺構検出面の10cm上位を人力掘削とし調査を進めた。包含層掘削後に遺構を検出し、遺構の埋土を人力掘削した。遺構検出は第Ⅴ層（基盤層）上面の1面で行った。

検出遺構はその種類にかかわらず、検出順に1から通し番号で遺構番号を付した。ただし調査

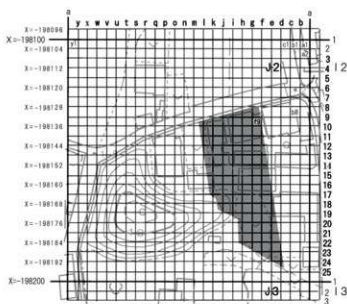
区を区別するため、1区の遺構は001～079とし、2区の遺構は201～270、3区以降の遺構は3001～、4001～とした。記述する場合、例えば「008溝」のように遺構番号・遺構の種類で表記するが、複数の遺構番号にまたがる溝はそれらをまとめて「溝1」等と表記した。第1次調査では調査区ごとに、第2・3次調査では各調査年度ごとに、溝1から順に現場で番号を付けている。

出土遺物は4m四方単位の小区画ごとに分けて取り上げ、1番からの登録番号を与え遺物登録台帳によって管理している。出土遺物はコンテナ（28ℓ）に収納した。ただし前述の遺構番号と異なり、調査区ごとに区別せずに出土日順に登録した。

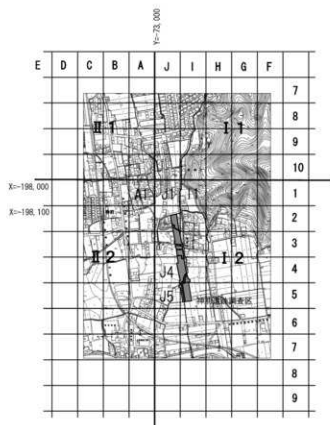
調査における記録として、写真撮影と記録図面を作成した。写真撮影については4×5判・6×7判・35mmのカラーリバーサルおよびモノクロフィルムを使用した。また600万画素相当のデジタルカメラを補助的に使用した。撮影内容は、基本的に日時・調査区・対象・方向・使用フィルムを付記したほか、デジタル画像データに内容を付して保存している。

記録図面については、航空写真測量によるS=1:50の遺構平面図と、調査員・調査補助員によるS=1:10・1:20の遺構実測図（断面図・平面図）、1:20の調査区土層図、S=1:100の遺構配置図を作成した。

航空撮影・測量については、ラジコンヘリにより、それぞれ調査地遠景の斜め写真と図化用の垂直写真を撮影した。



4mグリッド（小区画）設定状況（1区）



100mグリッド設定状況

図6 地区割りの設定状況

基本層序

調査前の現況は宅地及び耕作地・工場跡地である。調査区によってはⅡ～Ⅳ層の包含層に含まれる土器の量が少なく年代の判別が困難な場所もあるが、全体をみて推定される層位をあてている。

Ⅰ層：現代造成土

にぶい黄褐色系細砂

Ⅱ層：近現代耕作土

褐灰色細砂（a層）：近現代耕作土

褐色～明黄褐色細砂（b層）：床土

Ⅲ層：近世の遺物包含層（江戸時代後期の遺物包含層か）

暗い褐灰色～灰白色細砂

Ⅳ層：中世～近世初頭の遺物包含層

灰黄褐色～褐灰色細砂

Ⅴ層：弥生土器を含む遺物包含層

黄褐色～褐色のシルト～細砂

Ⅵ層：基盤層（無遺物とみられる層）

にぶい黄褐～黄褐色系のシルト～細砂（均質）

遺物を確認できない層をⅥ層としたが、遺物を含む流路より上層に当たる可能性がある堆積土はⅥ'層とした。

包含層と遺構面

遺構検出は地山であるⅥ層上面で行い、弥生時代前期から古墳時代中期の遺物が入る溝・土坑のほか、平安時代の溝・井戸等、中世～近世の屋敷地等についても同時に検出した。調査地は沖積地であり、無遺物の自然流路や堆積が認められるため遺構面の把握が難しい。

第Ⅵ層が無遺物層であり、これを弥生時代前期以降の遺跡が形成されたベース土として認識し、土層図ではスクリーントーンを貼り、旧地形を分かりやすくすることを意図した。

基盤層

地山である黄褐色シルト層は、同様の土層が周辺地域でも認識されており、基盤を成す河成堆積の砂泥層と考える。現地表は標高2.4m前後、黄褐色シルト層上面は標高2.0m前後であるが遺構面は削平されたとみられる。下層確認調査を行ったところ、黄褐色シルト層の厚さは0.7～1.0mほどで、その下にはグライ層である青灰色粘土層が堆積する。青灰色粘土層の下層は灰色細砂層が互層状に混じる。

基盤層であるⅥ層は、3区は標高約2m、5区付近で標高は約1.5m、8区では標高約1.3mであり、南東に向かい緩やかに傾斜している。Ⅵ層は、下層を確認できた箇所では上下3層に細分できる。土色は共に黄褐色～黄褐色で、シルト～細砂質土から中砂、粗砂へと細分される。

第3章 調査成果

神前遺跡では、県道と歌山橋本線道路改良工事に伴い、最大幅約 40 m、延長約 340 m、計 8,218 m²の道路敷地を対象に、3 年次・8 区に渡る発掘調査が行われた。弥生時代前期から江戸時代までの遺構を検出し、出土遺物総数は出土遺物整理事業前でコンテナ 339 箱分、整理後でコンテナ 398 箱分である。

調査面は 1 面であるが、遺構把握のため、本章では各調査区ごとに若干異なる基準で時代を区切り、遺構番号順に並べて報告する。これらの検出遺構に伴い土器の説明を行い、各調査区の年代別に石器・木製品・金属製品を並べている。また、各調査区の弥生時代から江戸時代までの変遷を理解するための基礎資料として、調査区ごとに壁面土層図を掲載した。

全調査区に共通して検出される遺構として、弥生時代前期から古墳時代中期までの多数の溝がある。これらの溝については各調査区での通し番号による 201 溝や 3033 溝など遺構名の他に、第 1 次調査の 1 区で溝 1～7、2 区で溝 1～5、第 2 次調査の 3～6 区で溝 1～16、第 3 次調査の 7・8 区で溝 1～10 の番号を振っている。1 本の溝に複数の遺構番号がついている場合があり、遺構番号と溝番号の分かりやすい方を調査区ごとに適宜選択して使用している。記述に統一感が欠けるが、諒解されたい。

これらの溝群については、大きく弥生時代前期新段階～中期中葉のものと庄内期から古墳時代中期のものに分かれるほか、自然地形での谷筋にあたり弥生時代と古墳時代の遺物が混在して出土する溝がある。また、弥生時代中期を中心とする溝群の下層には、これに先行する溝や自然流路、谷状地形があり、弥生時代前期の土器が出土するものが多数確認できる。このような遺構として、1 区の下層遺構 013、5 区の下層遺構 5040、6 区の下層遺構 6050、7 区の下層遺構 7000-8000 及び 7002-8002 溝、7061・7165・7166 井戸がある。

古代末から中世前期の遺構は、遺構密度が低く、調査区全体に散在する。平安時代の遺構は自然地形に沿った溝や井戸があり、鎌倉時代の遺構は掘立柱建物・井戸・溝がある。

室町時代から江戸時代にかけての遺構は東西・南北の区画溝があり、特に江戸時代後期には石組や木桶・桶を用いた遺構を含めた屋敷地に伴う遺構が検出されている。これらの遺構は 3 区を中心に集中して分布しており、屋敷地が形成されていたものと考えられた。

なお各調査区の主要遺構は次のものが挙げられる。1 区では弥生時代から古墳時代の溝 1～7 が検出されている。2 区では調査区の中央で 201・202 溝が検出されており、弥生時代前期から古墳時代前期までの遺物が多量に出土している。3 区では平安時代の遺物を含む 3081 溝、調査区北西部に散乱する備前焼大甕、井戸や石垣、暗渠、埋桶群を伴う中世末から近世にかけての遺構群が目目される。4 区では 4021 堅穴状遺構が検出されている。5 区では弥生時代前期の土器が大量に出土した 5040 流路とその上層に形成された弥生時代中期の溝群が目目される。出土した弥生土器は当該期の土器の変遷を考える上で貴重な資料といえる。6 区では鎌倉時代の掘立柱建物が検出されている。7・8 区では 7002・8002 流路から弥生時代前期の土器群が確認されているほか、旧流路上に落ち込みや溝が形成されている。

神前遺跡で出土した弥生土器は生駒山西麓産のものがほとんどなく、瀬戸内系の影響が強い。胎土に結晶片岩を含む土器が圧倒的に多いが、バリエーションがあり、弥生土器の胎土分析を行い、付章とした。

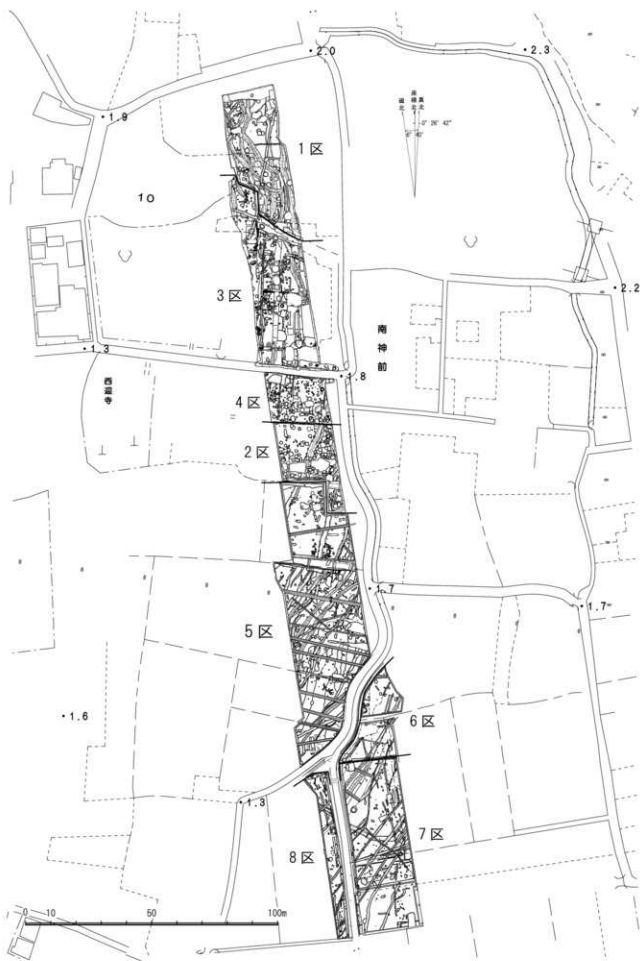


図7 遺跡全体図 (S=1:1,500)

第1節 1区の調査

1 概要

1区は調査対象地の北端にあたる調査区である。東西幅約22～25m、南北長約67mで、南北主軸が約10度西に傾く長方形の道路用地を基本とし、南西部は3区に接する。調査面積は約1,068㎡であり、幅約23m、長さ約62mである。

調査区の西側には中務の築山（塚山）と呼ばれる高さ6～7mの小丘陵があり、溝等の遺構はこの小丘陵を迂回して流れるようである。南西端部は1区の調査時には実施せず、3区の北西端部として調査を行っている。

1区では弥生時代前期～古墳時代中期の多数の溝、平安時代から鎌倉時代の南北方向の小溝と井戸、室町時代の区画溝・井戸・焼土坑、江戸時代の東西方向小溝と井戸・土坑を確認した。出土遺物は計18箱分で弥生土器・土師器・須恵器のほか、陶磁器・瓦が少量出土している。

2 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

1区の遺構は弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世の遺構を同一面で検出したが、各時代に整理して遺構・遺物について説明する。

(1) 弥生時代～古墳時代の溝群

1区では弥生時代前期～中期中葉、後期～庄内期、古墳時代中期の3時期の遺物の出土する溝が蛇行・混在する。各溝は上・中・下層が明確なものが多く、同一遺構名で異なる時期の遺物が検出されている。溝は検出面で幅約1.5～2.5m、深さ0.5～0.8mであり、屈曲が大きい。

検出面で、溝は次の7本にまとめて認識できる。溝1（019・020溝）、溝2（001・002・021溝）、溝3（007・016・022・023溝）、溝4（018・024・010溝）、溝5（006・003溝）、溝6（005溝）、溝5・溝6の延長部の溝（014・015・009・004溝）、溝7（013溝）である。

1区は南西部に小高い丘があり、溝1・4はこれより東側を南北方向に直線的に流れている。溝2・3・5・6・7は小丘陵の東側を地形に沿って流れている。断面形は緩いV字状を呈し、砂礫を含む自然堆積層のみられないため、人為的に掘削された可能性がある。溝1・溝4は並行してほぼ直線的に南流し、溝2・3・5は北西方向から蛇行して南東に流れる。いずれも1条の溝に複数の溝が重複あるいは再掘削されており、なかでも溝3・5は少なくとも3時期の変遷が認められる。またいずれも溝の下層に腐食質を含むとみられる暗褐色シルト層が堆積する。溝3を中心に弥生時代前期の可能性のある土器片が出土したが、溝の並行・先後関係は遺物量が少なく切り合い関係を中心に考える必要がある。なお溝6の北半では古墳時代の須恵器片が出土しており、古墳時代の溝が重複する可能性がある。

溝の切り合い関係と出土土器から、溝5と溝6が新しく、調査区東側では溝1→溝2→溝3→溝4、調査区西側では溝6→溝5→溝7の順に古くなる。溝7（013溝）は弥生時代前期、溝4・6では弥生時代後期から庄内式期の遺物が出土している。

001・002溝（溝2）

1区北半で検出された北西から南東へ向かう溝2の一部にあたる。幅1.5～2.0m、深さ0.7mで、上層（1層）、中層（2～4層）、下層（5・6層）に区分できる。遺物はほとんど出土していない。溝1の手前で南へと流路を変え、021溝と023溝に分かれるものと考えられる。

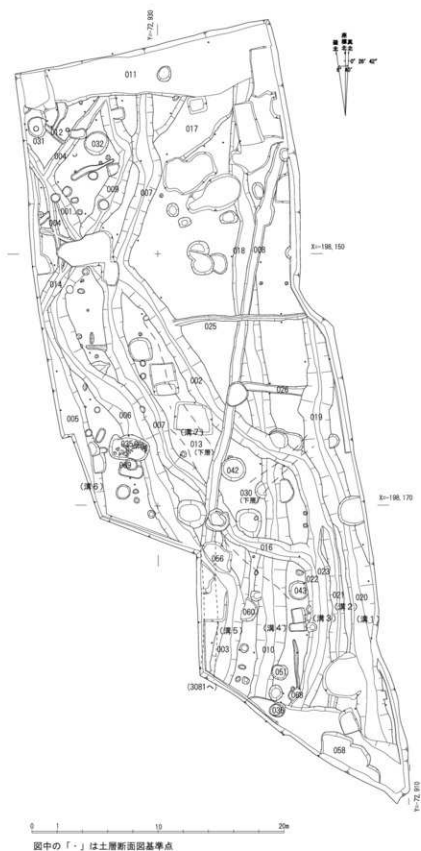
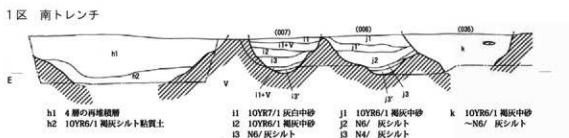
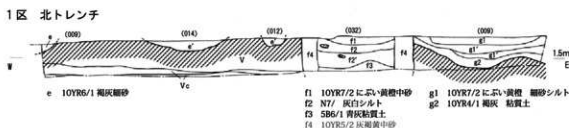
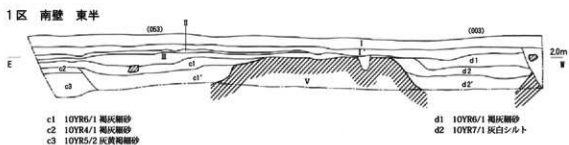
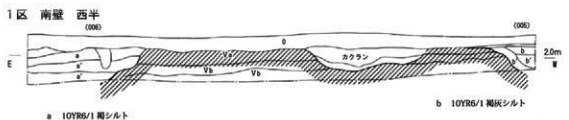
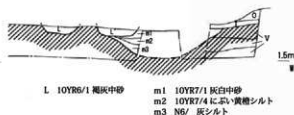


図8 1区平面図 (S=1:300)



1区の基本土層

- 0 表土
- I 10YR4/2 灰黄褐 (近現代耕作土)
- II 10YR5/2 灰黄褐シルト・細砂 (近世遺物包含層)
- III 10YR5/2 灰黄褐シルト・細砂 (中世~近世遺物包含層)
- IV 10YR6/3 に近い黄褐色シルト (弥生~中世遺物包含層)
- V 10YR7/6 明灰褐シルト~細砂 (地山か)
- Va 10YR7/4 に近い黄褐色中砂
- Vb 10YR7/2 に近い黄褐色中砂
- Vc N6/ 灰 5B6/1 青灰微砂粘質土



1区 東壁土層

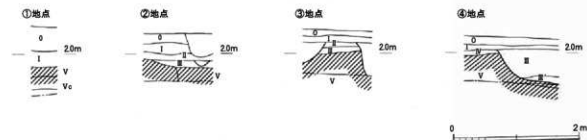


図9 1区 壁面土層図 (S = 1 : 60)

003 溝 (溝 5)

1 区南半の西端で検出された南北方向に流れる溝。屈曲して 006 溝に続く。図 13 に示した出土遺物の 1・2 は紀伊型甕の口縁部。1 は口縁部の屈曲が大きく、2 は口縁部の突帯部に刻目を施す。

005 溝 (溝 6)

1 区西端で検出された南北方向の溝。006 溝より新しい。弥生土器壺の底部片 (3) が出土しているが、遺構の形成年代を示す遺物であるか不明である。

006 溝 (溝 5)

1 区西側の北西から南東に向かう溝で、003 溝に繋がるものと考えられる。複数時期の溝が微妙に流路を変えながら流れており、最上層 (3 層)、上層 (4 層)、中層 (5・6 層)、下層 (7 層) に区分できる。4 は紀伊型甕口縁部。5 は甕で口縁端部はまるく、肩部は屈曲する。外面はハケ調整を施す。6 は古墳時代の高坏の接合部。

007・016 溝 (溝 3)

1 区西側で検出されたやや弧状を描く南北方向の溝。出土遺物はほとんどなく、006 溝・013 溝に後出する。調査区南側で南方へ屈曲する (022 溝) ものと考えられる。

009・014・015 溝

1 区北西で検出された北東から南西へ流れる溝。溝 1～7 と方位がやや異なり、残存する深さは約 45 cm と浅い。調査区西端で屈曲し 005 に繋がる可能性もあるが、明確ではない。出土遺物は、古墳時代中期までの遺物を含む。7～10 は 009 溝出土の弥生土器ないし土師器。7 は弥生土器壺で、肩部にヘラ描き沈線を施す。8～10 は弥生時代後期から庄内期相当の土器。8 は土師器壺の口縁部、9 は土師器壺の頸部、10 は弥生 V 様式系の甕底部で平底。15～18 は 014 溝出土の古墳時代中期の土器。15 は須恵器壺の口縁部。16～18 は土師器で、16 は壺口縁部、17 は高坏の接合部、18 は把手部分の破片。

010・018・024 溝 (溝 4)

1 区中央を南北に流れる溝。幅 1.5～2.5 m、深さ 0.6～0.8 m、延長約 53 m 分を検出した。溝の底は北から南へ、32 m で 4 cm 降る。11～13 は 010 溝で出土し、11 は弥生土器大口壺の口縁部。口縁端部が被厚し、刻目を施す。12・13 は弥生土器壺の底部で、外面はヘラミガキ調整、内面は板状工具によるナデを施す。26 はタタキ痕のある甕で、底部はややドーナツ底状を呈する。

013 溝 (溝 7)

1 区中央部南西寄りで検出した溝状遺構であるが、東側の肩部の輪郭が部分的に確認されたにとどまる。遺構の切り合い関係から、1 区で最も古い遺構とみられる。出土遺物は 14 で、弥生時代前期～中期の壺底部片である。1 区南西部にある小丘陵の東側を流れる弥生時代前期の下層流路の東肩部が検出されている可能性が考えられる。

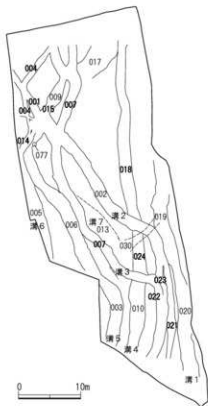


図 10 1 区 弥生～古墳時代の遺構分布状況

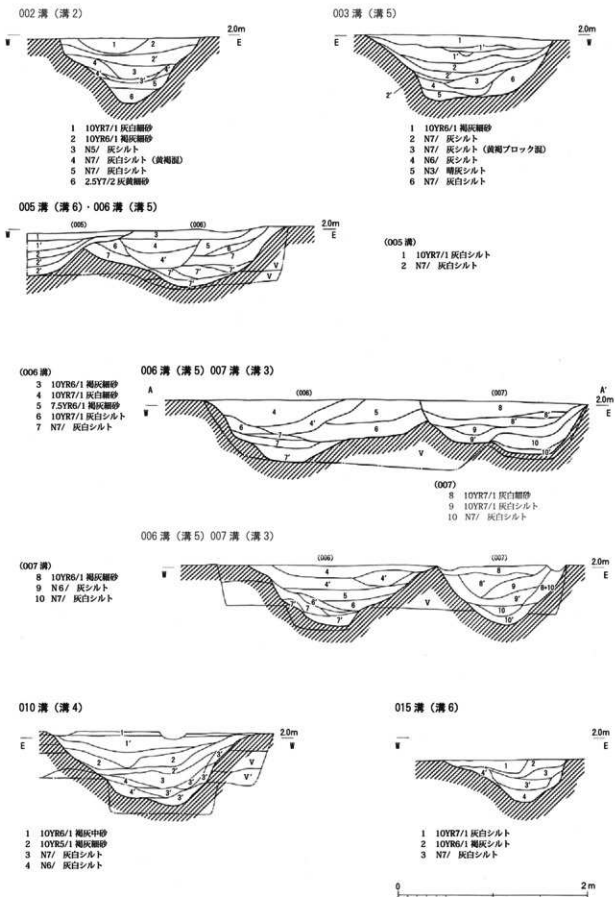


図 11 1 区 弥生～古墳時代の溝①(S = 1 : 40)

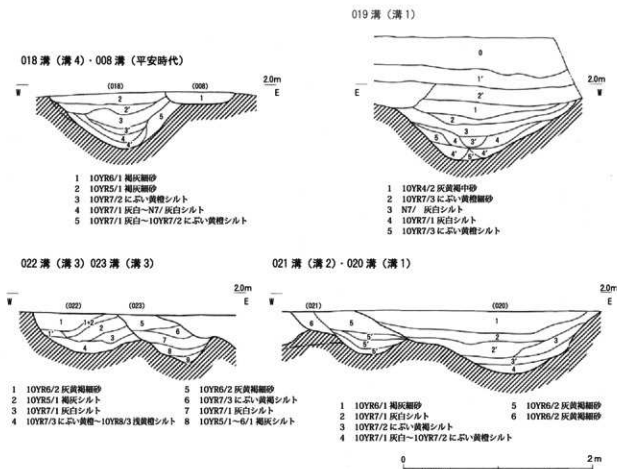


図 12 1 区 弥生～古墳時代の溝②(S=1:40)

019 溝・020 溝 (溝 1)

1 区東側で検出された溝で、北から南へわずかに傾斜して流れている。重複関係から、021 溝より新しいものと考えられる。19 は 019 溝から出土した突帯をもつ土器片。

021 溝 (溝 2 東側流路)

1 区南東部で検出した溝で、南北方向に流れ、屈曲して 002 に繋がる。21 は弥生土器広口壺の口縁部。弥生時代前期新段階。

022 溝 (溝 3)

1 区南東部で検出した南北方向の溝。023 溝に先行する。22～24 は 022 溝と 023 溝掘削中に出土した弥生土器。22・23 は広口壺口縁部で、弥生時代前期の遺物。24 はドーナツ底状の底部。

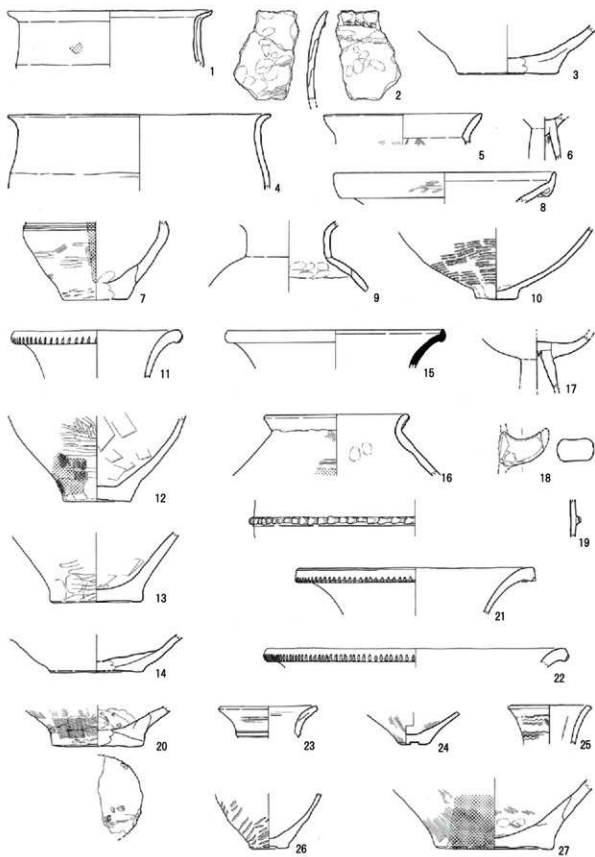
023 溝 (溝 2 西側流路)

1 区南東部で検出した南北方向の溝で、022 溝に後出する。25 は弥生時代中期の壺口縁部で、櫛描き波状文で飾る。

(2) その他の遺構

077 土坑

077 土坑は溝 5 の東肩に位置する。溝との厳密な先後関係は明らかでないが、検出状況や出土土器からほぼ同時期の可能性がある。径 50cm、深さ 10cm 程度の浅い土坑で、弥生土器片が出土した。



1・2: 003 溝 3: 005 溝 4~6: 006 溝 7~10: 009 溝 11~13: 010 溝
 14: 013 溝 15~18: 014 溝 19: 019 溝 20: 020 溝 21: 021 溝
 22~24: 022・023 溝 25: 023 溝 26: 024 溝 27: 068 土坑

0 20cm

図 13 1 区 弥生～古墳時代の遺構出土土器

3 平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺構と遺物

平安時代から鎌倉時代にかけての遺構は少ない。

008 溝

1区中央を縦断する平安時代末期の溝である。幅0.7m、深さ0.1mで、断面U字形を呈する。北北東から南南西へと直線的に流れている。28は土師器の皿ないし坏で、口径13.8cm、高さ2.2cm。口縁部は断続ナデ技法が見られる。29は土師器碗の口縁部。

031 井戸

1区北西に位置する031は木製の曲物を井戸側とする井戸である。径約30cmの曲物を縦に2個体設置し、最上部には片岩板石を円形に並べており、元は石積みであった可能性がある。井戸の底は標高0mに達し、通水層である青灰色細砂層まで達する。30は土師器碗の高台部であるが、高台は低い。31は土師器の高台部で、台付き皿の可能性が考えられる。

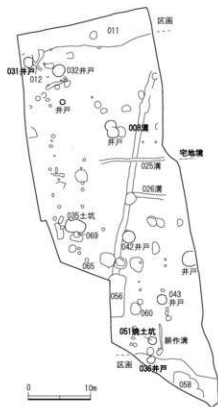


図14 1区 古代末～近世の遺構分布状況

4 室町～江戸時代の遺構と遺物

(1) 室町時代の遺構

室町時代の遺構は、区画溝と井戸・土坑・焼土坑が確認される。

011 区画溝

1区北端で確認された東西方向の区画溝と考えられる遺構。調査区内で幅3～5m、深さ0.3～0.4mの箱堀状の遺構となる。32は龍泉窯の青磁碗で、見込みに福の文字を陰刻する。33は土師器小皿。34は瓦器碗で高台は形骸化している。14世紀前半頃の遺物とみられる。35は備前焼播鉢で、クシ目は少ない。

012 溝

1区北西部で検出された小溝。幅0.4m。土師器小皿(36)が出土している。

035 土坑

1区南西部で検出された土坑で、多量の石が出土している。36は底部糸切りの土師器小皿。38は土師器焙烙で、口縁部外側に低い銚をもち、外面はタタキ調整で深い。16世紀後半の遺物とみられる。

036 井戸

内径約0.9mの井戸で、井戸底に据えたと見られる木製曲げ物が出土している。39の龍泉窯製青磁が出土している。

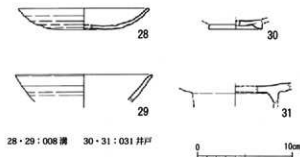


図15 1区 古代末期～中世初頭の遺構出土土器

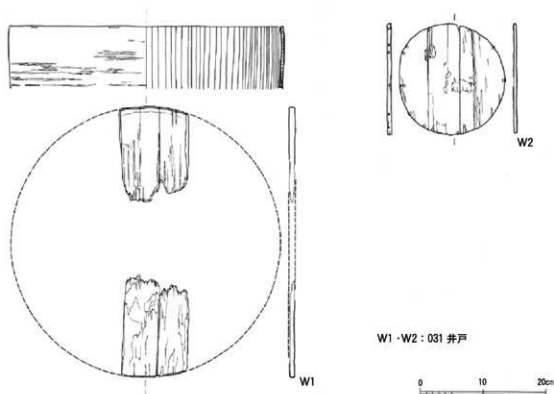


図 16 1 区 031 井戸出土木製品（木①）

042 井戸

1 区中央で検出された径約 2 m の井戸。40 は瀬戸の折縁皿。41・42 は反時計回りの三巴文軒丸瓦。巴の尾は長い。41 は珠点 が 16 個まわり、058 と同范と見られるが、范傷が多い。

051 焼土坑

1 区南端に位置し、径 0.6 m、深さ 0.3 m で壁面が被熱して赤変する。土坑内からは赤褐色の焼土塊がまとまって出土し、土坑中央の焼土上から播鉢の底部が出土した。051 土坑の用途は不明であるが、周辺の近世遺物包含層は炭粒・焼土を含み、周辺に位置する土坑も炭を含むものが多く、051 土坑と同時期と考える。43 は結晶片岩片を含む地元産とみられる土師器の播鉢。クシ目は少ない。

060 ビット

1 区南西部で検出したビット。瓦質の大甕の口縁部とみられる土器片（44）を検出した。

069 土坑

1 区南西部で検出した土坑。太い管状土鍾（45）が出土している。

(2) 江戸時代の遺構

江戸時代の遺構は東西小溝のほか、多数の土坑が検出されている。

025 東西小溝

1 区中央東側で検出した東西方向の小溝である。溝の幅は 0.4 m。染付碗（46）・蓋（47）と身（48）が出土した。

056 土坑

1 区南側で検出した土坑。50 は染付の丸碗。51 は白磁製の小碗。52 は肥前系陶器のハケメ鉢

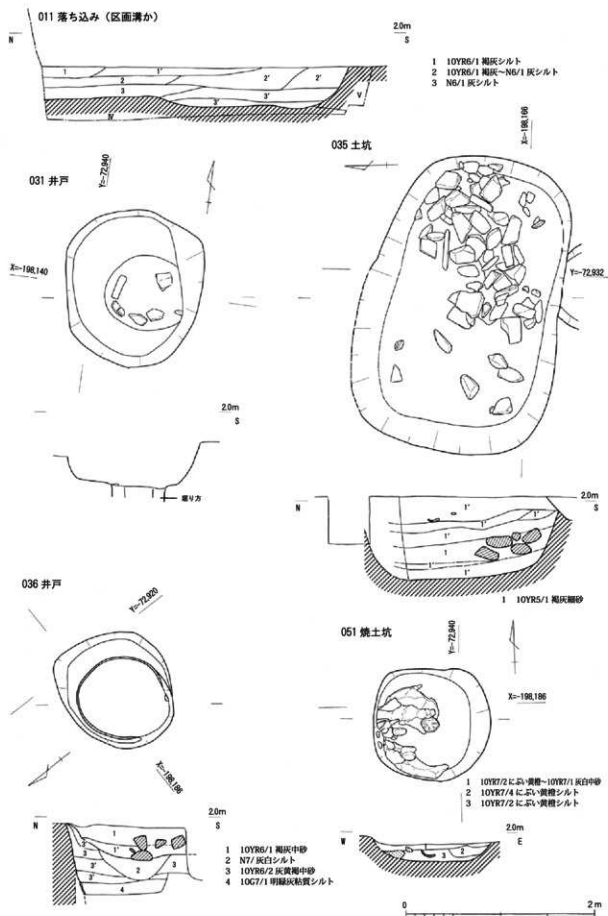


図 17 1 区 古代末期~近世の遺構 (S=1:40)

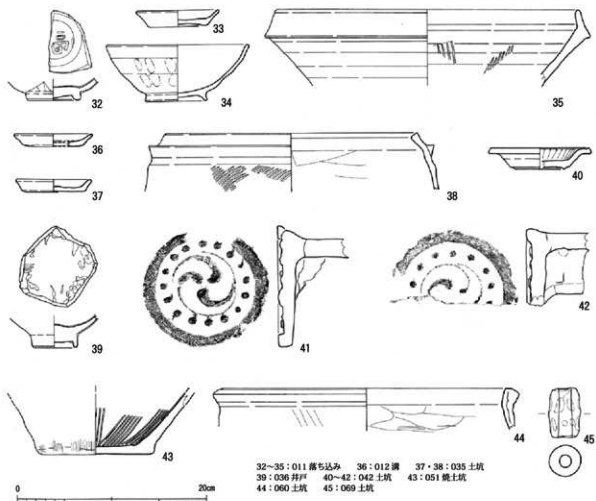


図18 1区 中世の遺構出土土器・瓦

とみられ、底部に高台が確認される。

058 土坑

1区南東部で検出した土坑。54は土師器の焙烙。55・56は染付の皿と碗とみられる。57は肥前系陶器のハケメ碗。58は三巴文軒丸瓦。41と同范。

065 ビット

1区南西部で検出したビット。59は三巴文軒丸瓦で、他の軒丸瓦と巴の向きが逆転する。60は唐草文軒平瓦。61は鬼瓦の破片の一部であろう。

5 古代末～近世の石製品・木製品

1区では、石製品は近世、木製品は古代末から中世初頭の遺物が出土している。

石製品は2点出土している（図20）。S1は056土坑で出土した硯。長さ12.3cm、幅6.2cm、厚さ2.0cmで、中央が若干窪み、墨を擦った跡とみられる擦痕が確認される。S2

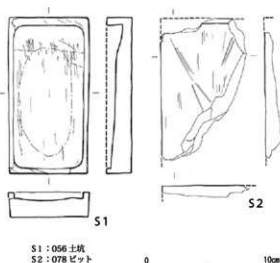


図19 1区 近世の石製品（石①）

は078ビットで出土した砥石。方形の砥石の一部で、擦痕が確認できるが、大きさ等は不明である。

木製品は2点出土している（図16）。W1は大型の曲げ物の破片。復元径43cmの底板破片と、高さ9.9cm分の側板片が出土しており、出土状況から031井戸で、井戸の底に据えたものと推定される。W2は小型の曲げ物の蓋か底板。径約17.6cm、厚さ0.5cmで、3枚ないし4枚の板を合わせて円盤形にする。縁には側板を取り付けた跡が確認できる。

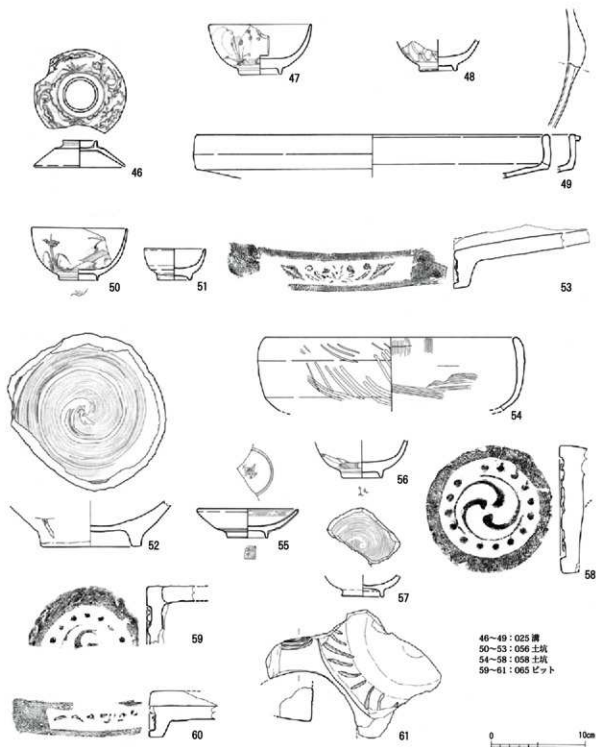


図20 1区 中世末期～近世の遺構出土土器・瓦

第2節 2区の調査

1 概要

2区は調査対象地の中央やや北側にあたる調査区である。東西幅約23m、南北長約35mで、調査面積585㎡であり、南西部分は未調査である。2区より北は小規模な住宅地となり、南側は水田となっている。

2区では弥生時代前期～古墳時代前期の溝と土坑、中世の東西方向の区画溝、江戸時代の井戸・土坑を確認した。出土遺物は計35箱分で、弥生土器・土師器のほか、瓦器・陶磁器・瓦が出土している。201溝から出土した弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物が多数を占める。

第V層をベースとして、弥生時代から古墳時代にかけての溝が形成されており、部分的に近世の包含層が覆っている。

2 弥生～古墳時代の遺構・遺物

弥生時代前期の土坑1基、前期～中期前葉の南北方向の溝5条、それに重複する後期の溝、井戸状遺構2基、土坑墓1基などがあり、それぞれ土器が多く出土した。

(1) 弥生時代～古墳時代の溝群

5条の溝は南北方向であり、微高地上を縦断する状況や埋土の堆積状況から、1区の溝と同様に人為的に管理された溝と考えられる。溝は北北東から南南西へ緩やかに傾斜しており、溝1(201・202溝)、溝2(207溝)、溝3(205溝)、溝4(206溝)、溝5(203溝)として把握できる。

201・202溝(溝1)

2区中央を北北東から南南西方向に縦断する溝で、幅3.0m前後、検出面からの深さ0.7mである。断面形は台形状であり、砂礫などの自然の流水堆積はみられず、下層には腐食質を多く含む暗褐色～黒褐色シルト層が堆積する。埋土の堆積から少なくとも2時期の変遷が認められ、出土土器もⅠ～Ⅲ様式とⅤ様式～布留式期の2種がある。弥生時代前期～中期中葉の溝に弥生時代後期～古墳時代前期の溝が重複していると考えられる。土器はいずれも残存状態がよく、庄内期の完形に近い土器が多数みられる。

2区北半では201溝と202溝の流路の中心が東西に分かれるが、2区南半では201溝が上層、202溝が下層となり重複している。どちらの溝でも弥生時代前期から古墳時代前期までの遺物が出土しているが、弥生時代中期中葉から後期末の間の土器はみられない。ここでは、201溝、201溝と202溝の混在地点、202溝の順に、遺物について記載する。

遺物は溝全体で出土しているが、特に南北2か所に残存状態の良い土器が多い。溝の北部では77・83・91・93・97・98・101・102・109が出土しており庄内式期の遺物と考えられる。そこから南西約3mにある西側肩部の土坑付近には、弥生時代後期後半の甕と鉢が出土している。

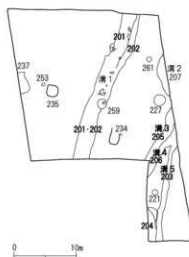


図21 2区
弥生～古墳時代の遺構分布状況

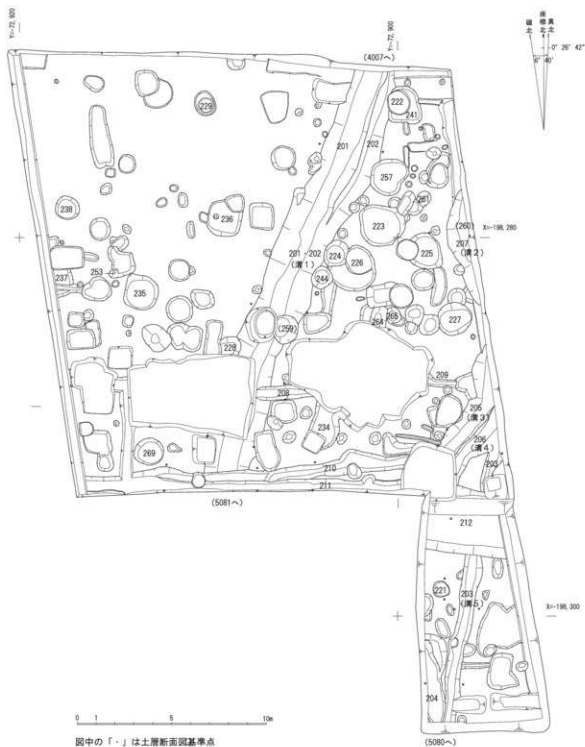


図 22 2区平面図 (S=1 : 200)

2区 東壁

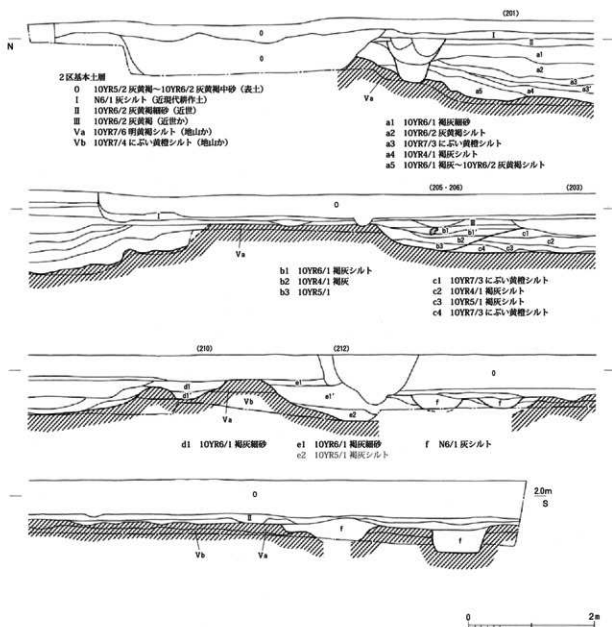


図 23 2区 壁面土層図 (S=1:60)

土器の出土傾向をみると、201 溝の南部では 64・66・81・82・85・86・88・107 が出土しており、庄内期前後の土器が多いが、弥生時代前期の土器もある。201 溝南部の土坑状に窪んだ付近からは 89・100・108・121～123 が出土している。古墳時代前期の土器である。

201 溝の出土土器は図 26 の 62 から図 29 の 110 まで図示した。うち 62～76 は弥生時代前期～中期の弥生土器である。62～66 は壺。62・63 は体部がやや張り、ヘラ描き沈線文を施す。64 は体部を穿孔する広口壺で、口縁部と頸部にヘラ描きで施文する。65 は厚手の広口壺で、頸部を櫛描き文で施文する。66 は櫛描直線文で飾る直口壺。67・68 は甕。紀伊型甕の口縁部片である。69～71 は鉢。70・71 は直口鉢で、70 は口縁部に小さな把手をもつ。72～76 は壺・甕・鉢類の底部。安定した平底を呈する。

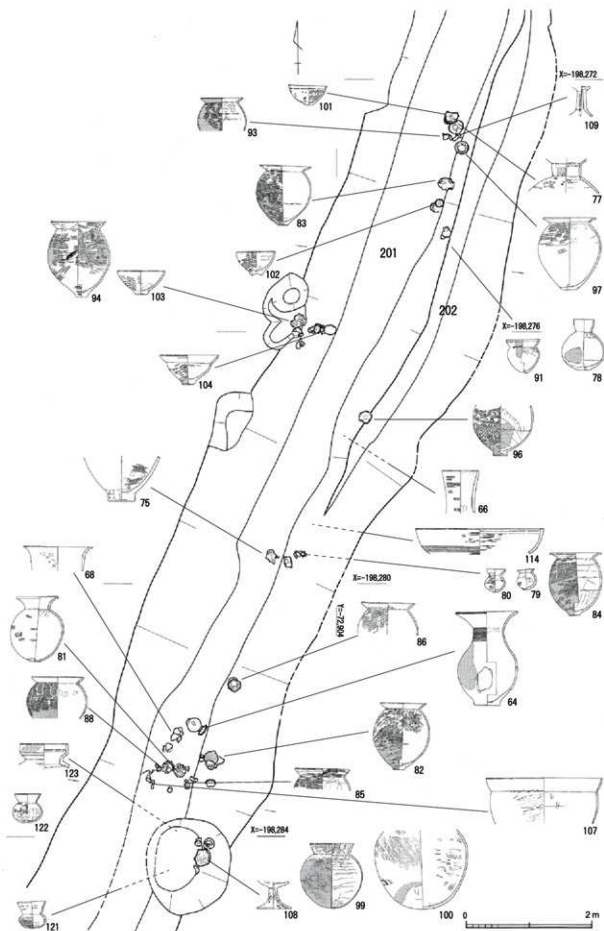


図 24 2 区 201・202 溝 (溝 1) 遺物出土状況 (S=1:60)

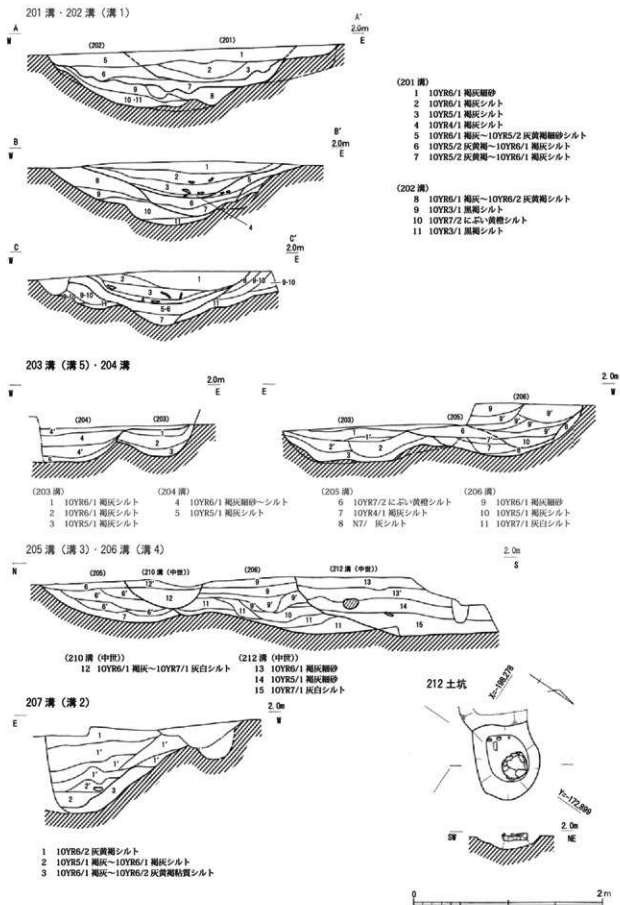


図 25 2 区 弥生～古墳時代の遺構 (S=1:40)

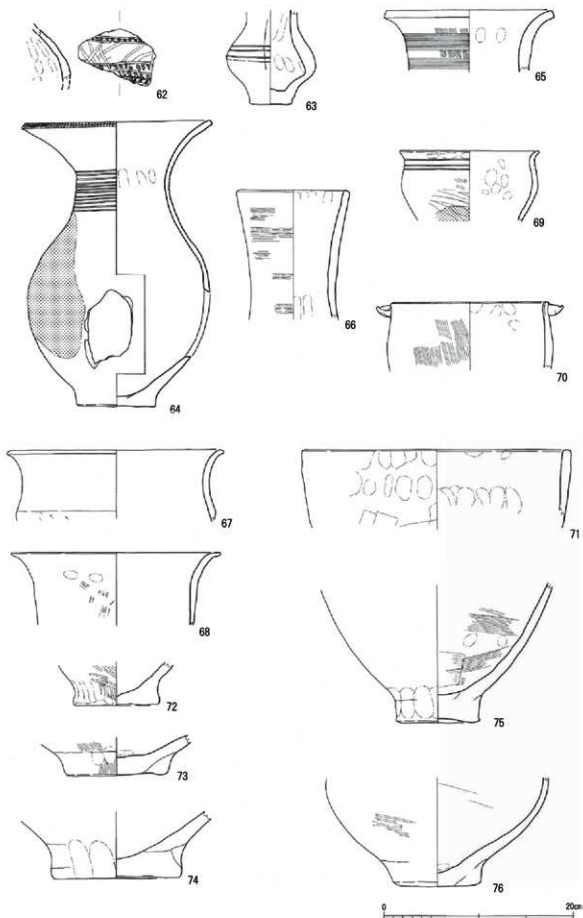


图 26 2区 201 溝 (溝 1) 出土土器①

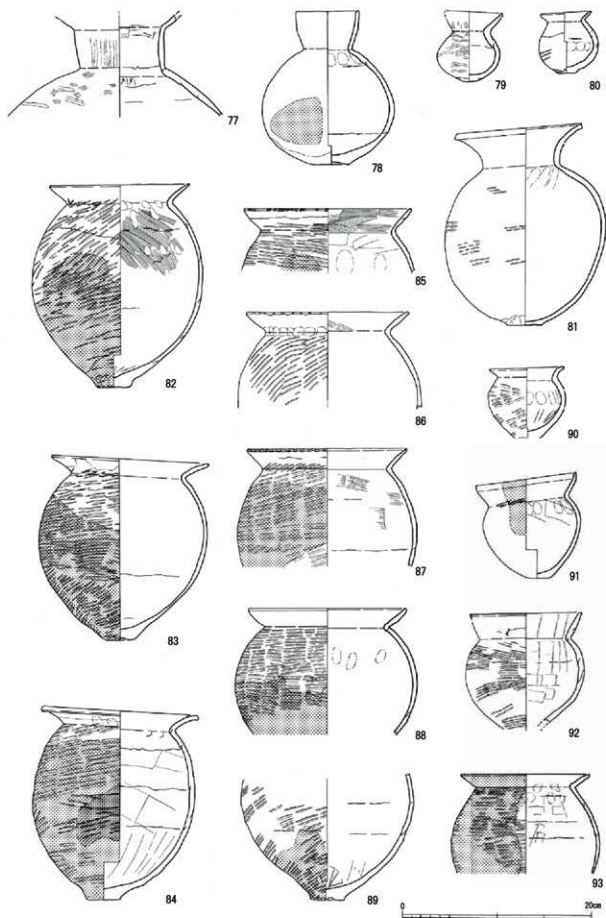


图 27 2区 201 溝 (溝 1) 出土土器②

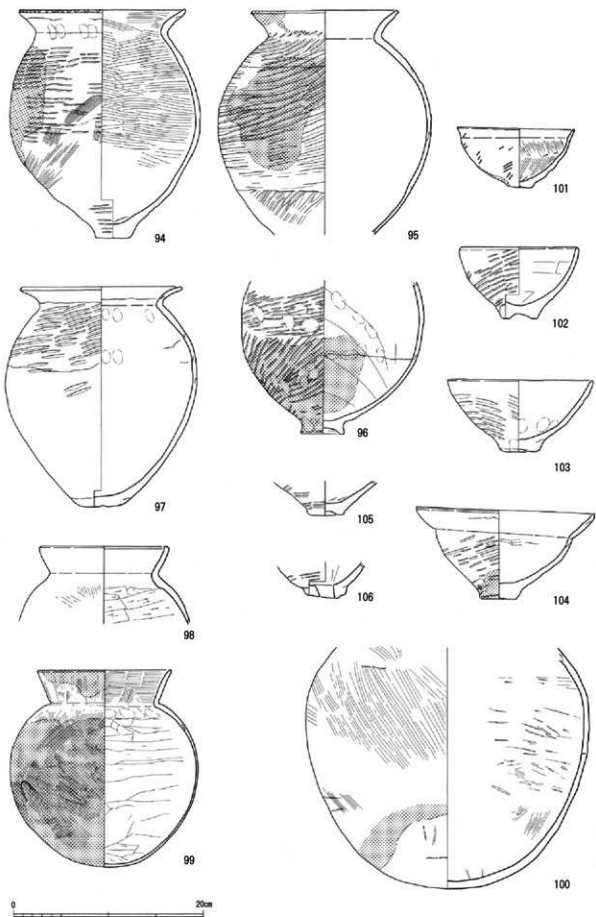


图 28 2 区 201 溝 (溝 1) 出土土器③

77～110は弥生時代後期後半以降、古墳時代前期以前の土器である。77・78は壺。77は二重口縁壺等の頸部、78はやや小型の直口壺である。79～81は壺あるいは甕で、79・80は小型品。80・81はタタキ調整。82～97は弥生V様式系のタタキ甕。口縁部は大きく屈曲し、端部は丸め、端部に刻み目状に施文するものが散見される。底部は中央がくぼむドーナツ底状のものが多く、不安定である。94は外面にハケ調整を併用し、97の底部は丸みを帯びる。98～100はいわゆる布留式甕。外面ハケ調整で丸底であり、内面をヘラケズリ、器壁は非常に薄い。98は口縁端部が内側に肥厚する。

101～107は鉢ほか。101～104は小型鉢。外面はタタキ調整で、直口鉢と口縁部が屈曲するものがある。105・106は甕・鉢類の底部。106は有孔の底部で、甕として使用されたものと考えられる。107は大型の鉢。外面タタキ調整で、口縁部は屈曲する。

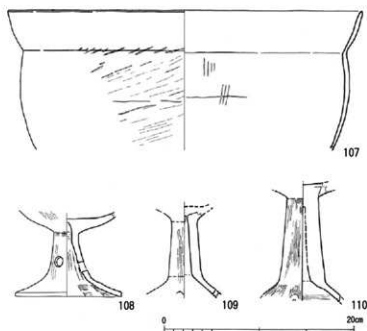


図29 2区 201溝(溝1)出土土器④

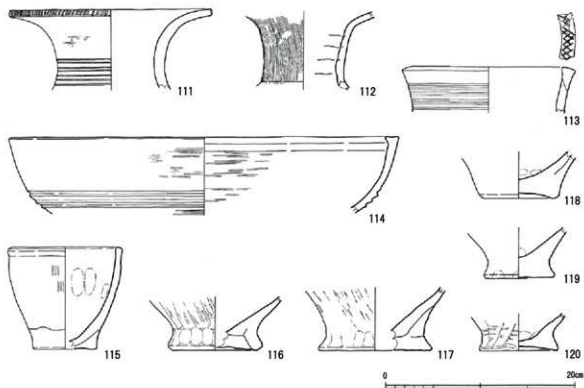


図30 2区 201・202溝(溝1)出土土器①

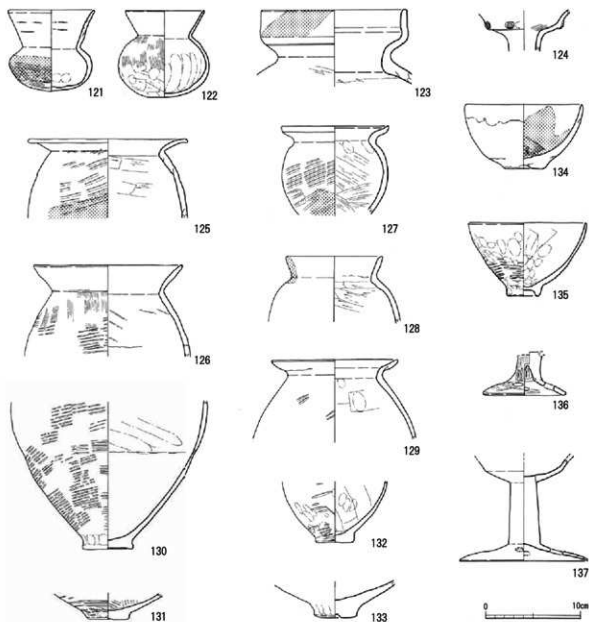


図 31 2区 201・202溝(溝1)出土土器②

108～110は高坏。脚部は中空で透かしをもち、外面はヘラミガキ調整。

201溝・202溝が混在する地点からは、図30・31の111～137が出土した。

111～120は弥生時代前～中期の土器。111・112は弥生土器広口壺。113は中期前葉の直口壺、114・115は鉢。114は凹縁文を施す大型の鉢で、当該時期の遺物は少ない。摩耗が著しい。115は小型の直口鉢。116～120は壺・甕・鉢類の底部。

121～137は弥生時代後期後半～古墳時代中期の土器。121・122は小型丸底壺。123は受口状口縁の壺。3世紀後半の北四国産土器と推定される。124は二重口縁壺の頸部。125～133はタタキ甕。口縁部形状のばらつきが大きい。134・135は直口鉢。134は外面ナデ調整。136・137は高坏の脚部。136は短脚、137は長脚で中実。

202溝からは、図32の138～140が出土した。いずれも弥生土器の底部で、140では底部付近

に若干タタキ痕が残る。

203～206溝（溝2～5）

それぞれ、調査区南東で検出された溝である。それぞれ幅0.7～1.0m、残存する深さ0.5mである。

141～146は203溝出土の弥生土器。141・142は広口壺口縁部。143・144はへら描き沈線を施す壺。145は蓋。146は口縁部及び突帯に刻み目を施す無頸壺。

147～149は205溝出土の弥生土器。147は広口壺。203溝よりやや新しい様相をしめす。

150～152は207溝出土の弥生土器。151は楕描文を施す直口壺。152は紀伊型甕。

なお、203～206溝共通の上層部から、弥生時代末の土器（164・165）も出土している。

(2) 弥生時代前・中期の各種遺構

237・253・260・261土坑

237土坑は2区西端で検出された。片岩を含む在地の胎土で作られた播磨付近の影響を受けた

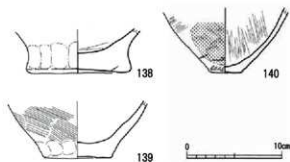
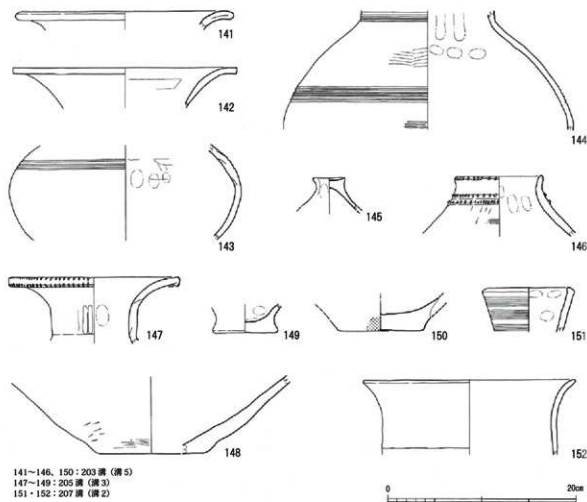


図32 2区 202溝（溝1）出土土器



141～146、150：203溝（溝5）
147～149：205溝（溝3）
151・152：207溝（溝2）

図33 2区 203溝（溝5）・205溝（溝3）・207溝（溝2）出土土器

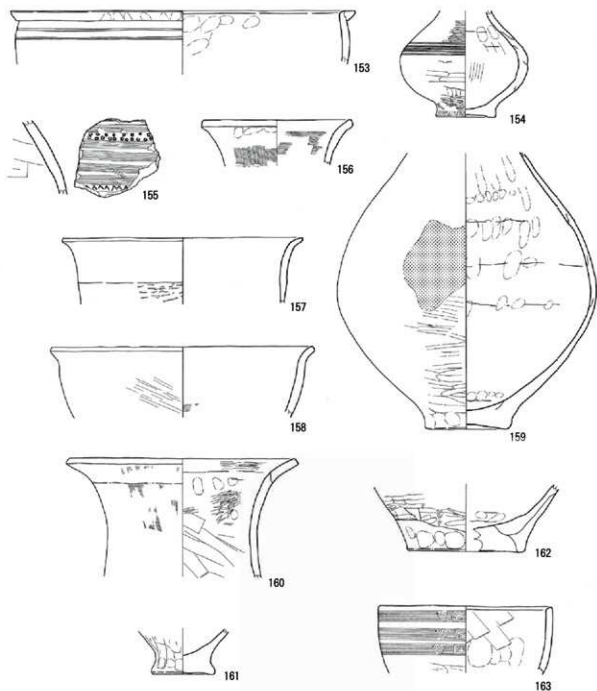
逆L字状口縁の鉢（153）が出土している。

253 土坑は2区西側で検出された土坑である。遠賀川系の壺（154）が出土した。

260 土坑は207 溝上層で検出された。155～158 が出土した。

261 土坑は径0.5 m、深さ0.3 mの土坑で、弥生土器壺の胴部下半（159）が斜位で出土した。壺の上半は後世の削平を受けて欠損する。

160～163 は2区の調査区側溝及び包含層から出土した。



153 : 237 土坑 154 : 253 土坑 155～158 : 260 土坑 159 : 261 土坑
160～162 側溝 163 : 包含層

図 34 2区 弥生時代の遺構出土土器

(4) 弥生時代の遺構出土石器

S3・S4は緑色片岩製の石包丁。半月形に成形し、刃部は直線的である。刃部と平坦部には擦痕があり、平坦部の両端には敲打痕がみられる。S3は土坑260（207溝上層の可能性あり）から、S4は包含層から出土している。S4には孔内敲打痕がみられる。

S5はサヌカイト製の打製石器である。台形様の形状をしているが、スクレイパーの可能性を考えている。

S6は緑色片岩製の石錘とみられる製品。扁平な棒状品の両側面にくびれ部が削り出されている。約80%残存しており、重量は213g。

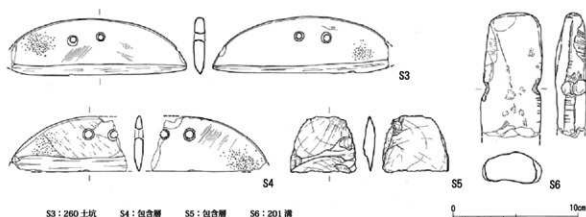


図35 2区 石包丁・スクレイパー・石錘（石②）

(5) 弥生時代後期後半～古墳時代の土坑と出土遺物

164・165は前述したとおり、203～206溝の混在する地点で出土している。

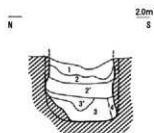
221・227土坑

221土坑は203溝の西に位置する径0.5m、深さ0.7mの不整形形の土坑。口縁端部が肥厚し、竹管文を押した円形浮文で飾る広口壺（166）が出土した。

227土坑は207溝の南西にある径0.9m、深さ0.8mの円形の土坑。167～169が出土した。167・168は小型丸底壺、169は甕の底部を穿孔しており甕とみられる。

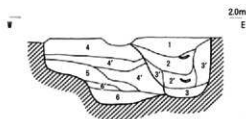
221土坑・227土坑はいずれも通水層にまでは達せず、溜水程度の機能を有するものとみられる。下層には腐食質を含む黒褐色シルト層が互層状に堆積する。

221 井戸



- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1 10YR6/1 褐灰中砂 | 3 10YR5/4 に近い黄褐シルト |
| 2 10YR6/1 褐灰シルト | 4 10YR7/1 灰白シルト |

227 井戸



- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 1 10YR4/2 灰黄褐粘質シルト | 4 10YR5/1 褐灰シルト |
| 2 10YR4/1 褐灰粘質シルト | 5 10YR6/6 明黄褐（黒褐土粒混）シルト |
| 3 10YR4/2 灰黄褐粘質シルト | 6 10YR6/6 明黄褐（褐灰土粒混）シルト |

図36 2区 古墳時代の遺構（S=1：40）

234・235 土坑

234 土坑は 2 区南部で検出された土坑である。東西約 1.2 m、南北残存長 1.7 m の楕円形をしている。高坏片 (170) とともに、円筒形で突帯を有し、表面が平滑な瓦質焼成の土器 (171) が出土した。突帯付近で内側に屈曲しており、内面には指頭圧痕が残存する。

235 土坑は調査区西側で検出した径約 1.5 m の土坑。弥生 V 様式系甕の口縁部片 (172) が出土している。

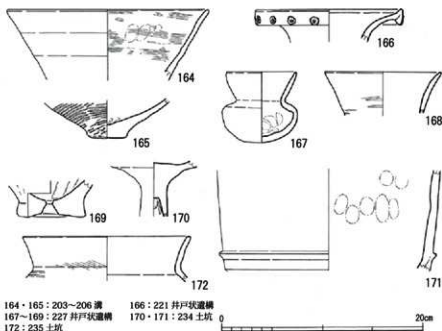


図 37 2 区 弥生～古墳時代の遺構出土土器

3 中世～近世初頭の遺構・遺物

中世の遺物が出土する溝と、中世末から近世初頭までの遺物が出土する井戸・土坑を確認した。

208・210・212 溝

これらの溝は調査区南側で、東西方向に平行して流れている。

208 溝は調査区中央を走る幅 0.7 m、深さ 0.2 m の東西溝である。大きな攪乱坑に削平を受けて分かりづらいが、210 溝の北側約 4 m を平行して流れている。

210 溝は、幅 0.6 ～ 0.8 m、深さ 0.2 ～ 0.3 m の東西方

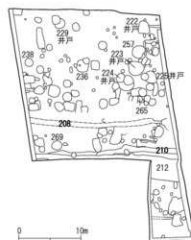
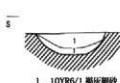


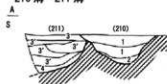
図 38 2 区 中・近世の遺構分布状況

208 溝

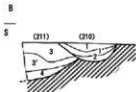


- (210 溝)
1 10YR6/2 灰黄細砂
2 10YR6/1 黒灰シルト
(211 溝)
3 10YR6/2 灰黄細砂
4 10YR6/1 黒灰シルト

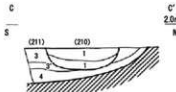
210 溝・211 溝



A' 2.0m N



B' 2.0m N



C' 2.0m N

図 39 2 区 中世の遺構 (S=1:40)

向の溝で、現在の地割の位置とも重なるため、集落の区画を示す溝と推定される。調査前の状況ではこの地割から南側は水田となっていた。瓦器埴（173・174）と土師質土器小皿が出土しており、12～13世紀を中心とする遺構と考えられる。

210 溝の南に並行して 212 溝があるが、大部分が調査区外にかかるため全容は不明である。検出した部分では幅 3.0 m、深さ 0.6 m である。

223 井戸

2 区北東側で検出した径 2.2 m の円形井戸で、中世末から近世初頭にかけての遺物が含まれる。175 は同時期の鬼瓦と考えられ、立体的で、縄を用いて文様をつけている。

265 土坑

2 区東側で検出した径 0.8～1.2 m の土坑。備前焼鉢（176）と砂目のある唐津焼碗（177）が出土しており、17 世紀前半の遺構と考えられる。

4 近世後期の遺構と遺物

中世から近世初頭までの遺構が多数見られたのに対して、17 世紀後半から 18 世紀前半の遺構・遺物は少ない。18 世紀後半～19 世紀の遺物が出土する遺構は多数検出されており、屋敷地の検出された 3 区と同様の傾向がうかがえる。

222 井戸

2 区北東部で検出された平瓦を縦方向に積んで井戸側とする井戸。平面形は径 0.6 m の正円形であり、平瓦 9 枚で構成する。平瓦の長さは約 40 cm で、深さは平瓦 4 段分（約 1.6 m）を確認したが、安全上の理由から調査が困難と判断し井戸底の確認は見送っている。使用されている平瓦はやや正方形に近く、彎曲も少なく平滑である（178・179）。

236 土坑

2 区中央で検出した隅丸方形の土坑。東西約 2.0 m、南北約 1.5 m。土師質土器小皿（180）と焙烙（181）が出土した。

238 土坑

2 区西で検出した径約 1.2 m の円形土坑。出土した焙烙（182）は口縁部がやや短く、底部への

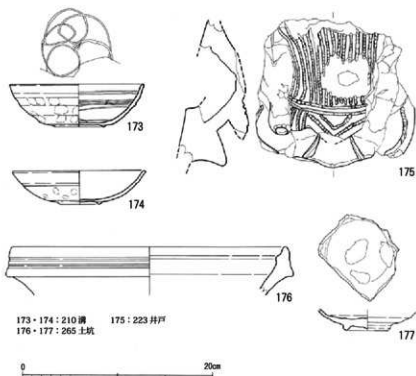


図 40 2 区 中世遺構出土土器・瓦

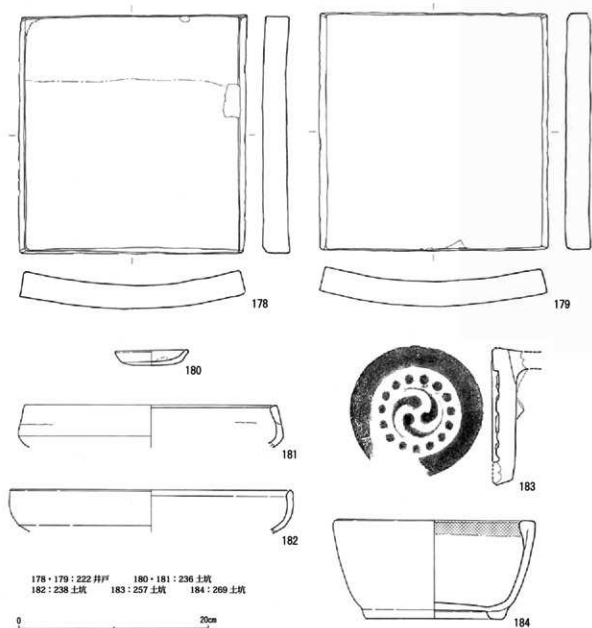


図 41 2区 近世遺構出土土器・瓦

屈曲は緩い。

257 土坑

調査区北東で検出した径 0.5 m の不整形土坑。出土した巴文軒丸瓦 (183) は周縁が広く、江戸時代後期のものと考えられる。

269 土坑

2 区南西で検出した径約 1.0 m の円形土坑。184 は土師質土器の火鉢で、高台が付き、口縁部は肥厚する。口縁部内側上面が黒色化する。

第3節 3区の調査

1 概要

(1) 調査区概要

3区は調査対象地北側の1区と2区の間、現状で集落の一角を占める位置にある。中央は、宅地造成に伴い財団法人和歌山市都市整備公社により約220㎡の範囲で調査が行われており(市1次調査)、今回の調査区と重複する。調査区北西には、独立丘陵が存在し、調査区の一部にその裾がかかる。また、調査区西では、江戸時代に造成されたと考えられる石垣が検出され、約0.7㎡土地が高くなり西側に続く。3区では、弥生時代中期初頭の溝、弥生時代終末期の溝・土坑、古墳時代のピット、平安時代の溝・井戸、室町時代の井戸・土坑・溝・甕ピット、江戸時代の井戸・石垣・溜樹・埋桶・土坑・土取り穴などを検出している。東西幅約25m、南北長約80mで、調査面積1,459㎡であり、北西部分が突出する形状である。

3区では弥生時代前期～平安時代の溝が少数と、中世末～近世の屋敷地に関連する遺構が多数検出されている。出土遺物は計87箱分で、弥生土器・土師器は少なく、陶磁器と瓦が多量に出土している。

(2) 基本土層と包含層出土遺物

V層上面の弥生時代の溝に始まり、I～III層の上面にもそれぞれ遺構が形成される。弥生時代から中世までの遺構は少なく、近世の遺構が多数を占める。地山直上のIV層からは弥生時代前期新段階～中期前葉頃の壺・甕(185・186)や弥生時代後期末の甕(187)が出土した。3区北西部では、地山上面に備前焼大甕の破片が10m以上の範囲に散乱していた。調査区外にある小丘陵の裾を平に整地した際に、散乱したものとみられる。備前焼片はIII層から出土したものと考えられるが、III層からはその他に土師器皿(190・191)、瓦器碗(192・193)、唐津焼小皿(194)が出土している。II層は鎌倉時代～安土桃山時代の遺物包含層とみられ、194が下限年代を示すものと推定される。I層からは染付の碗・仏飯器(195・196)、備前焼油德利(197)、瓦猿(198)が出土しており、江戸時代後半の遺物包含層とみられる。

(3) 溝の名称

3区では中世から近世にかけての屋敷地に関連する遺構が多いが、調査区全体にそれに先行する時期の溝があり、溝1～5として把握されている。各溝からは、弥生土器のほか、土師器・須恵器・黒色土器等が出土しており、遺構の形成年代を明確に把握するのは難しい。溝は、調査区の北端から南東に向かうものと、南西に向かうものに分かれている。南東に向かう溝1・2と南西に向かう溝3・4では弥生土器が多いが、庄内期や古墳時代中期の土器等も少量含まれている。1区の溝1～5のいずれかに対応するものと考えられる。溝5では平安時代の土器が圧倒的に多く、1区の008溝に対応する可能性が高い。

2 弥生～古墳時代の遺構・遺物

(1) 弥生時代の溝

3033 溝(溝1)

調査区北から南東方向へ流れる溝である。溝の北端は1区溝4(010溝)延長部付近にあたる

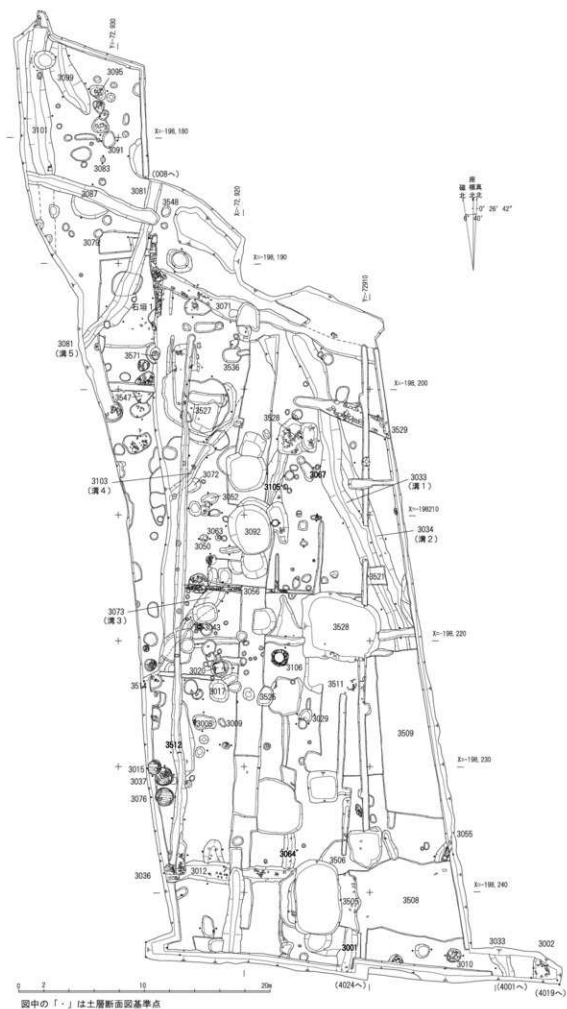


図 42 3区平面図 (S=1 : 300)

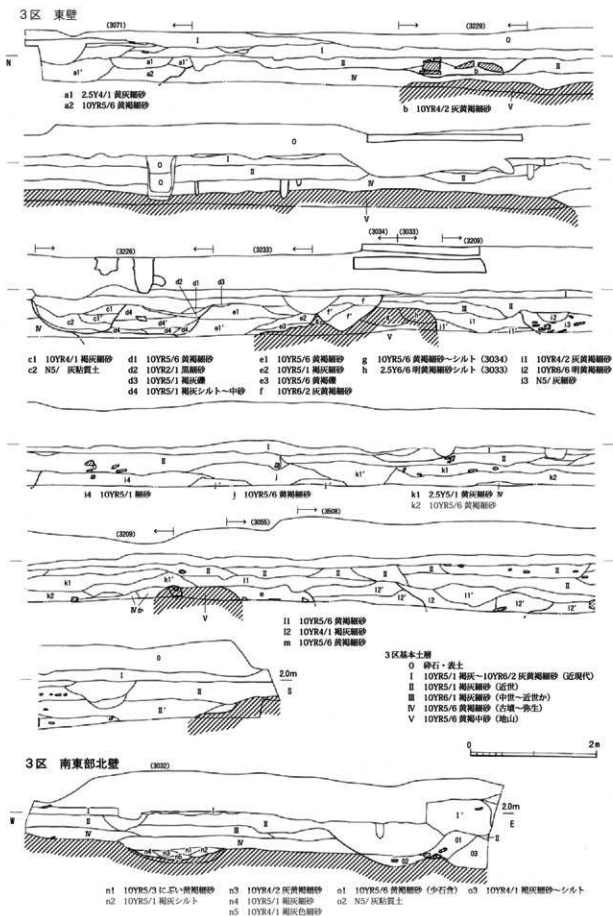


図 43 3区 壁面土層図 (S=1 : 60)

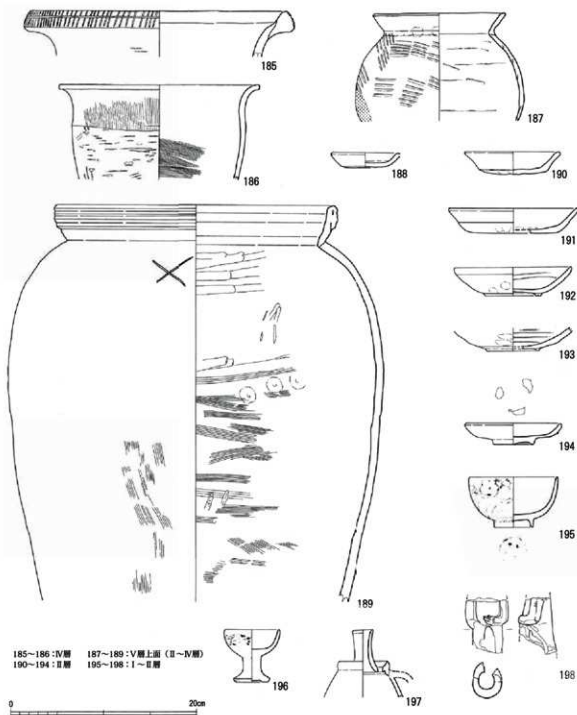


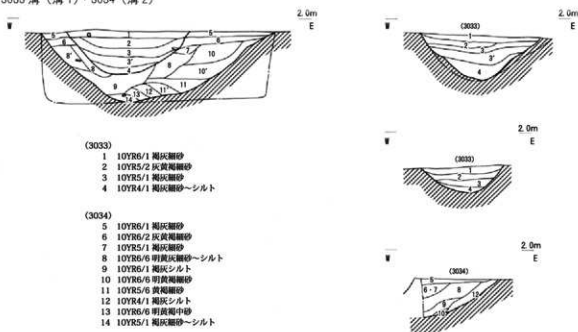
図 44 3区 遺物包含層出土土器

が、方位と年代を考慮すると 013 溝と 006 溝の延長にあたる弥生時代の溝である可能性も考えられる。なお、和歌山市 1 次調査の中央北東部で確認されている弥生時代の溝 3 に相当するものと考えられる。3034 溝と共に 3 区東の中央付近で調査区東外へと伸びるが、いずれかの溝の延長が調査区南東隅の 3034 溝（溝 2）であると推定される。溝の幅約 1.3 m、深さ約 0.5 m で、溝は緩い断面 V 字を呈する。溝の埋土は水平に堆積しており、比較的緩やかな流れであったと考えられる。埋土からは、弥生時代中期の土器が出土しており、甕は紀伊型甕（201・202）と紀伊型以外（199・200）が確認される。

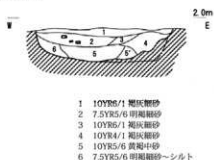
3034 溝（溝 2）

調査区北から南東方向へ流れる溝で、3033 溝（溝 1）と重複する。溝の幅は溝 1 と重複する

3033 溝 (溝 1)・3034 (溝 2)



3073 溝 (溝 3)



3103 溝 (溝 4)



3105 溝 (溝 3)

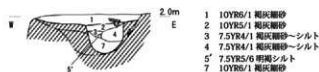


図 45 3 区 弥生時代の溝 (S=1:40)

ため不明箇所も存在するが、幅 2.5 ～ 3.0 m、深さ 0.8 ～ 1.0 m と比較的大きい。市第 1 次調査で谷状地形とされたものに相当する。埋土はベースとなる第 5 層とほぼ同じ色調を呈し区分が難しい。溝下層から弥生時代中期初頭の土器が出土している。205 は付加条沈線をもつ櫛描き文で飾る広口壺。206 は外面ハケ調整の平底部片。

3073 溝 (溝 3)

調査区中央を北から南西方向に弧を描いて流れる溝で、室町時代以降の遺構と重複し全容は不明であるが、幅は 1.5 m、深さは 0.7 m。この溝の上流は 3105 溝及び、1 区の 020 溝 (溝 1) ないし 021 溝 (溝 2) と推定される。弥生土器片が出土しているが、遺構の明確な時期は不明である。210 は 3073 直上の包含層から出土した広口壺。

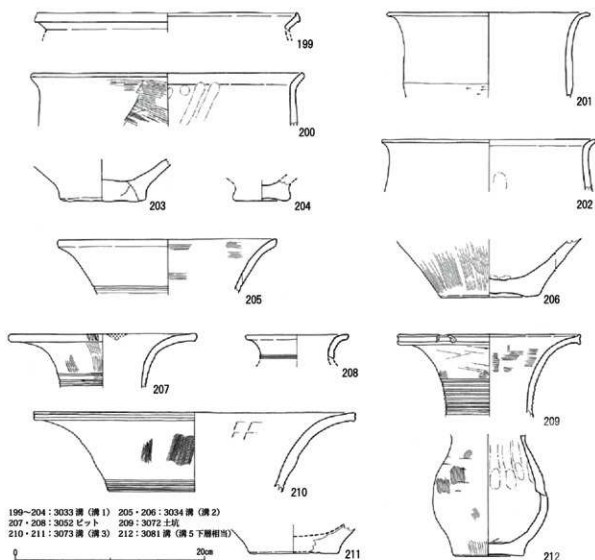


図 46 3 区 弥生時代前～中期の遺構出土土器

3103 溝（溝 4）

3103 溝も、3073 溝と同様の方向に流れる。幅は 1.0 m、深さは 0.5 m。この溝の上流は 1 区の 021 溝（溝 2）ないし 022・023 溝（溝 3）と推定される。溝下層から弥生時代中期初頭の土器片が出土している。

(2) 弥生時代～古墳時代の遺構（溝以外）

3052 土坑・3072 土坑

3 区中央の 3103 溝南東側で検出した土坑。3052 は東西 1.4 m、南北 0.8 m の土坑。ヘラ描き沈線を施す広口壺 (207) と遠賀川式の壺の口縁部 (208) が出土した。

3072 土坑は東西 1.0 m 以上、南北 1.0 m の土坑で、北西部を 3103 溝に削られている。前期新段階の広口壺後頸部が出土した。

212 は 3081 溝（溝 5）から出土した弥生土器である。3081 溝は下層が平安時代の溝、上層が江戸時代の溝と推定される。3 区は弥生土器の出土量が少ないが、この溝からは一定量出土しており注目される。

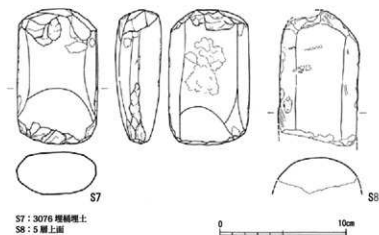


図 47 3区 石斧(石③)

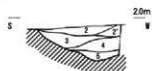
3052 ビット



3063 ビット



3099 溝状遺構



3067 ビット

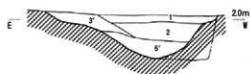
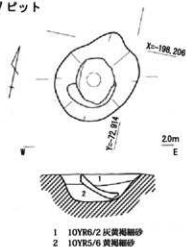


図 48 3区 弥生〜古墳時代の遺構 (S=1:20, S=1:40)

3052・3063・3067 ビット

3052は径0.8m、深さ0.3mのビット。3063は径0.9m、深さ0.5mのビットで、底に直口鉢

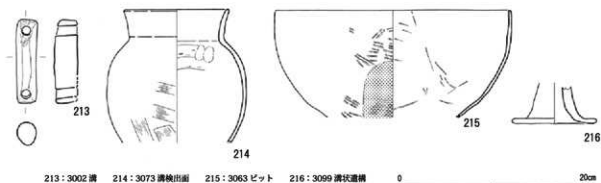


図 49 3区 古墳時代頃の出土土器・土鍾

(215) が据えられている。

3067 は径 0.9m のビット。弥生土器底部が据えられた状態で出土した。

3073 上層溝・3099 溝

3073 上層溝は幅 1.0m、深さ 0.1m、土師器甕 (214) が出土している。

3099 溝は幅 1.8m、深さ 0.5m、土師器高坏脚部 (216) が出土している。

(3) 弥生時代の石器

弥生時代の石器は、磨製石斧が 2 点出土している。図 47 の S 7 は江戸時代の遺構に混入していた。長さ 10.3 cm、最大幅 6.1、厚さ 3.6 cm と短い。両端部が広く打ち欠かれた状態となっている。S 8 は長さ 10.3 cm 以上、幅 6.2 cm 以上の棒状製品片で、刃部が欠損しているが磨製石斧と推定される。

3 古代の遺構・遺物

古代の遺構は少ないが、調査区中央付近で 3009 土坑と 3020 溝、調査区の北西部で 3081 溝が確認されている。

3009 土坑

調査区南方で検出した土坑である。3020 井戸の南側にあり、平安時代と推定される土師器皿 (217) が出土した。

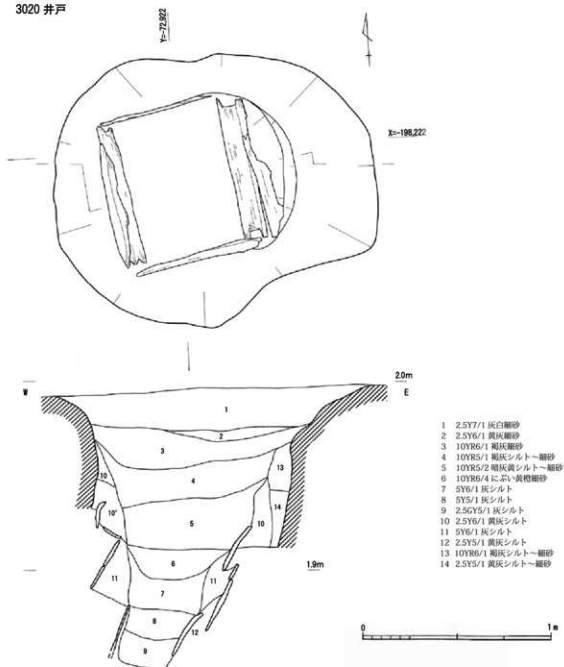
3020 井戸

3020 井戸は、調査区中央で検出した南北 1.5 m、東西 1.6 m の掘り方をもつ井戸である。木製の井戸側が残存しており、横板を方形に組み井戸側としている。井戸側は残存状況が悪く、西側へ倒壊した状態で検出された。井戸内からは平安時代前期の土師器坏・埵、黒色土器埵が出土している。218 は平坦な底から口頸部が斜めに立ち上がる。219 は連続してヨコナデを施す土器片。220 は土師器埵高台部。221 は黒色土器埵高台部である。高台は断面三角形を呈する。

3081 溝

3081 溝は調査区北西で検出された溝で、北東から南西に流れる。幅約 1.4 m、深さ約 0.7 m あるが、上層溝として近世の溝が重複しているものと考えられる。下層溝は弥生土器を少量含むが、出土遺物は平安時代の土器が圧倒的に多い。222 ～ 225 は土師器小型埵。径 9.7 ～ 10.6 cm、高さ 2.9 ～ 3.4 cm。226 ～ 228 は土師器埵口径 17 cm 前後で 226 は内面にミガキ、外面に指頭圧痕、

3020 井戸



3081 溝

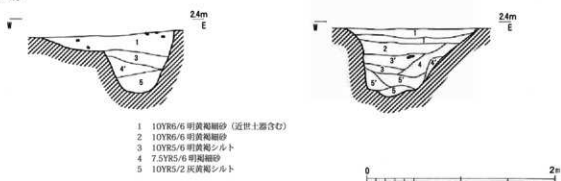


図 50 3区 古代の遺構 (3020 井戸・3081 溝)

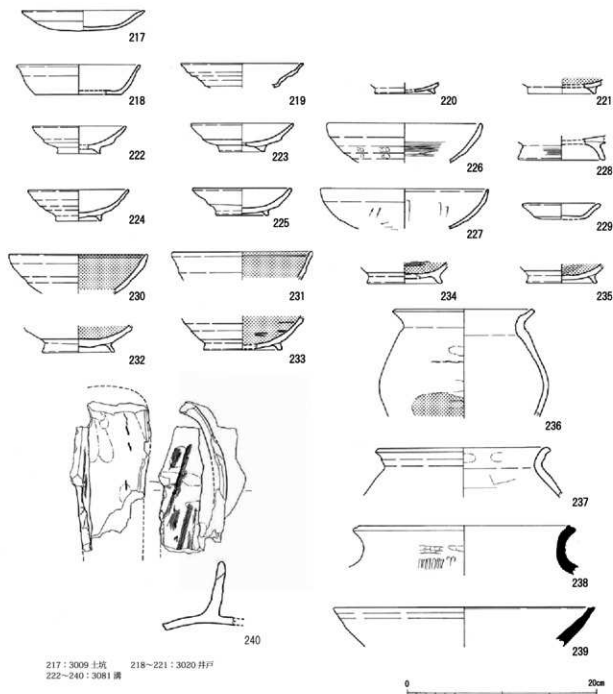


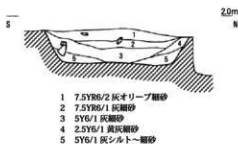
図 51 3 区 古代の遺構出土土器

227 はへら状工具によるナデを施す。228 は高台の高さが 8 mm あり、土師器碗か台付皿と考えられる。229 は土師器小皿。230 ～ 233 は黒色土師碗。口径約 14.5 cm で、端部内面に沈線をもつ。高台はやや高く外側に踏ん張り、径約 7.2 ～ 8.2 cm。236・237 は土師器甕。238 は須恵器壺甕類。平行叩きを行う。239 は須恵器鉢。240 は土師器移動式竈の罌部付近の破片である。

4 中世～近世の遺構・遺物

室町時代から江戸時代までの遺構は、屋敷地に伴う遺構とみられ、区画溝・井戸・埋桶・暗渠等が確認できる。遺構・遺物は大きく室町時代～江戸時代初頭のもの、江戸時代後期を主体とするものに分かれる傾向がある。

3012 東西溝



3017 土坑



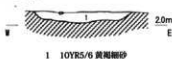
3050 ビット



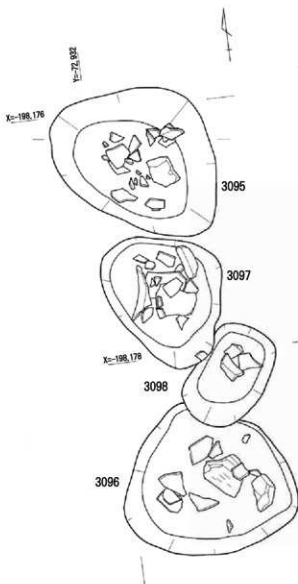
3083 ビット



3091 土坑



3101 南北溝



3095 土坑

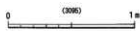
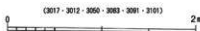


図 52 3区 中世末～近世初頭の遺構① (S=1:40、S=1:30)

3106 井戸

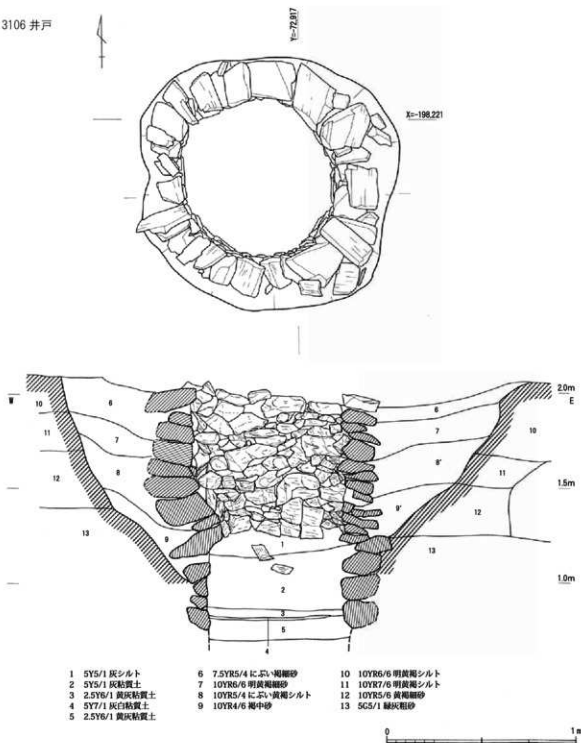


図 53 3 区 中世～近世初頭の遺構②(3106 井戸) (S=1:20)

(1) 室町時代～江戸時代初頭の遺構・遺物

調査区の北西と南に区画溝・土坑があり、調査区中央部に井戸・ピットが検出された。

3012 東西溝

3 区南側で検出した幅 1.0 ～ 1.5 m、深さ 0.4 m の溝。底が平坦で、土器・瓦が多数出土した。

241 ～ 247 が出土し、242 は胎土目のある肥前陶器で 1600 年前後、245 は備前焼の播鉢で 17 世

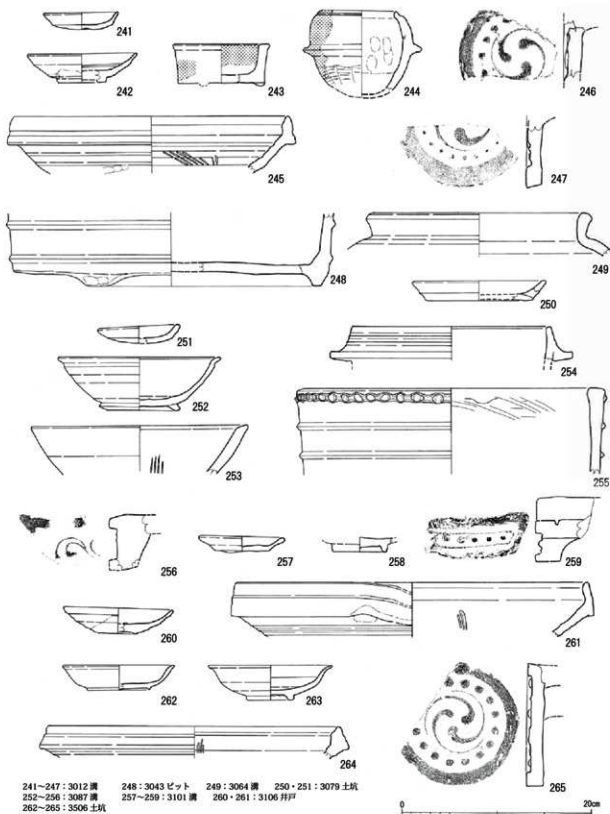


図 54 3 区 中世末～近世初頭の遺構出土土器・瓦

紀初頭の遺物と考えられる。243・244 は煤が付着している。246・247 の巴文軒丸瓦は瓦当面に離れ砂を用いたものと考えられる。

3043 ビット

3 区中央で検出した径 0.5 ～ 0.6 m のビット。瓦質土器の 3 足の火鉢 (248) が出土した。

3064 南北溝

3064 は南北溝と考えられている遺構で、備前焼大甕の口縁部 (249) が出土した。

3079 土坑・3083 ビット・3091 土坑

調査区北西部で確認された土坑・ビット。3079 土坑からは土師質の皿 (250)・小皿 (251) が出土している。3083 ビット・3091 土坑からは瓦器・陶器・土釜の破片が出土した。

3087 溝

3 区北西部で検出された幅約 1 m の溝状遺構で、西北西から東南東に伸びる。13 世紀代の山茶碗 (252) のほか、瓦質土器の播鉢 (253)・羽釜 (254)・火鉢 (255) が出土している。出土地点が離れているが、248 と同一個体である可能性もある。切り合い関係から 3101 溝に後出するが、遺物の年代はあまり遅れない。

3095 ～ 3098 土坑・3101 溝

調査区北西部で確認された溝と土坑。3095 ～ 3098 土坑は南北に並ぶ、径 0.6 ～ 1.3 m の不整形土坑で、3095 のみ深い。3101 溝は幅約 2 m、深さ約 0.3 m の南北溝で、3095 ～ 3098 土坑の西側約 3 m に位置する。これらの遺構埋土及び周辺径 10 m の範囲の包含層からは同一個体となる備前焼大甕 (189) の上半部の破片が多数出土している。3095 は甕を据え置いた土坑があった可能性もあるが、底部の破片は全く出土していないため判然としない。3101 溝を埋め立てた整地土に入っており、その後、3087 溝が形成された可能性が高い。3101 溝からは、土師質小皿 (257)、青磁碗 (258)、連珠文軒平瓦 (259) が出土した。

3106 井戸

3106 井戸は、直径 1.4 m の円形石組井戸。石積みは、結晶片岩の板石を小口積みにして直立気味に積み上げられる。井戸廃棄の段階で、井戸内に直径 20 ～ 30 cm 大の礫を投棄している。井戸内からは唐津焼小皿 (259)、備前焼播鉢 (260) が出土し、16 世紀後半～17 世紀初頭のものと考えられる。断ち割り調査を行ったところ逆円錐形に掘り方を掘り、板石を積み上げていった状況を示していた。

3506 土坑

3 区南東部、3012 溝の東側で検出された土坑。261 は志野焼で、胎土目が残る。1610 年代の遺物と考えられる。262 は肥前系陶器で、1620 年代の遺物と考えられる。263 は備前焼播鉢の口縁部片、264 は巴文軒丸瓦。17 世紀初頭の遺構と考えられる。

(2) 江戸時代後期を主体とする遺構

調査区全域で、屋敷地に伴うものとみられる暗渠・埋桶・土坑等を確認した。

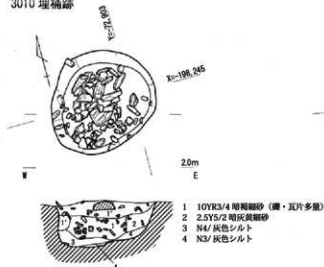
3001 溝

3 区南端で検出した南北溝。付近では巴文軒平瓦 (266) が出土している。近世初頭の遺構の可能性もあるが、判然としない。

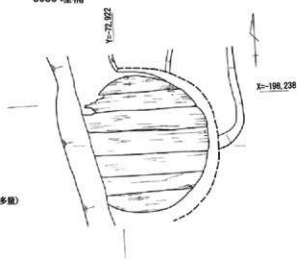
3010・3015・3028・3036・3037・3076 他 埋桶

3 区中央西側及び南東部に集中的に分布する。木製の桶が残存するものと、痕跡のみが残るものがある。3010・3028 は径 1.1 m の円形土坑で、桶の残存状況が悪い。3015 は径 1.0 ～ 1.1 m と比較的小型の桶が残存する。3036・3037・3076 は、7 ～ 8 枚の板を合わせた底径 1.3 ～ 1.4 m、高さ 0.4 m 以上の桶を、桶とほぼ同じ大きさの掘り方内に埋めている。これらの埋土からは多数

3010 埋桶跡



3036 埋桶



3028 埋桶跡



3015・3037・3076 埋桶

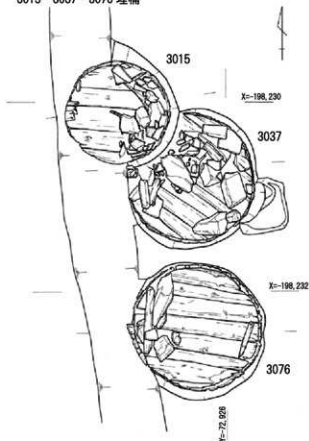


図 55 3 区 近世の遺構①(埋桶) (S=1:40)

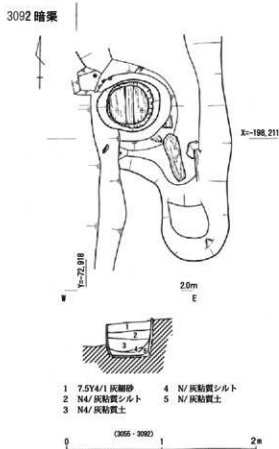
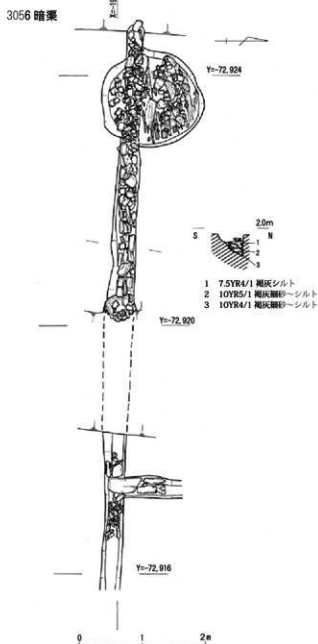
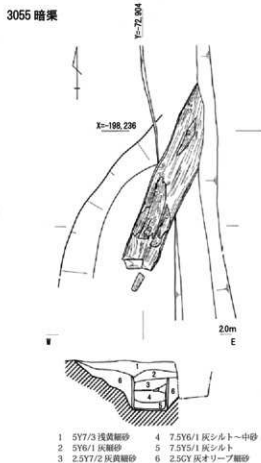
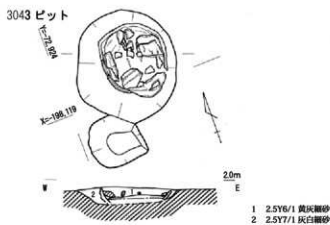
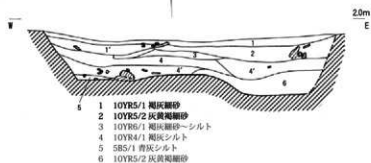
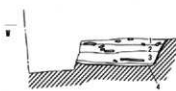


図 56 3 区 近世の遺構②(S=1:20、S=1:40、S=1:60)

3528 土坑



3514 埋桶



- 1 2.5GY6/1 オリーブ灰細砂
- 2 7.5Y5/2 灰オリーブ細砂
- 3 NS/ 灰細砂～シルト
- 4 2.5GY6/1 オリーブ灰シルト+2.5Y6/6 明黄褐細砂

3571 埋桶

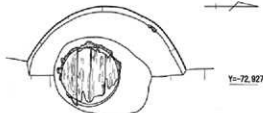


図 57 3 区 近世の遺構③(S=1:40)

の陶磁器・土師質土器・瓦片 (267 ～ 269) が出土しているが、いずれも破片である。269 はいわゆる江戸式の文様をもつ軒平瓦である。

3029 土坑

270 は 3029 土坑で出土した懸軒平瓦。いわゆる大阪式の瓦当文様をもつ。

3055 暗渠

3 区南東で検出した一辺 0.35 m のコの字状の木製暗渠。

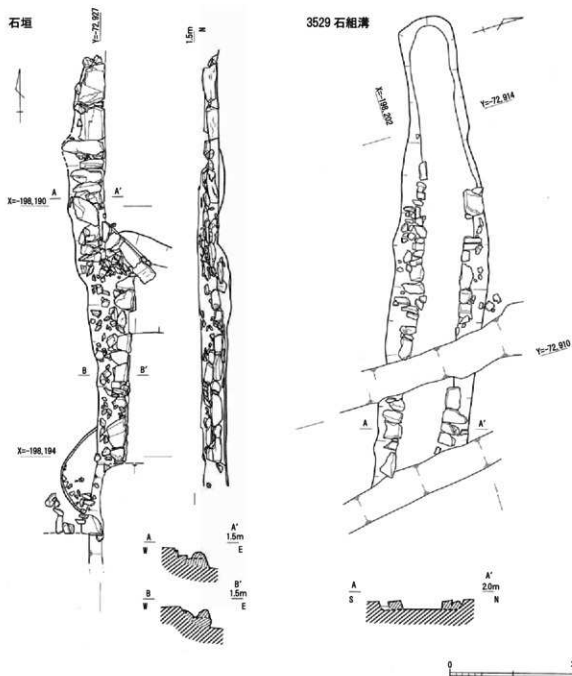


図 58 3区 近世の遺構④(S=1:60)

3056 暗渠

3区中央で検出された東西方向の暗渠。幅、深さは0.3～0.4mで、溝内は石と瓦で充填されている。土師質小皿(271・272)、軒丸瓦(273)、軒平瓦(274～276)が出土した。

3071 溝

3区北を東南東-西北西方向に流れる溝で、現在の地割とほぼ同じ位置に存在する。3071溝は石垣へ向かって伸び、石垣は3071溝より北と南で石積みの方向を変えることから、土地境界、または屋敷地を画する溝であったと考えられる。溝からは肥前系の染付(277～279)、焼塩壺(280)等が出土した。

3092 埋桶

3区中央で検出された、径0.4～0.5mの桶を据え付けた土坑。他の埋桶とは大きさ、検出位

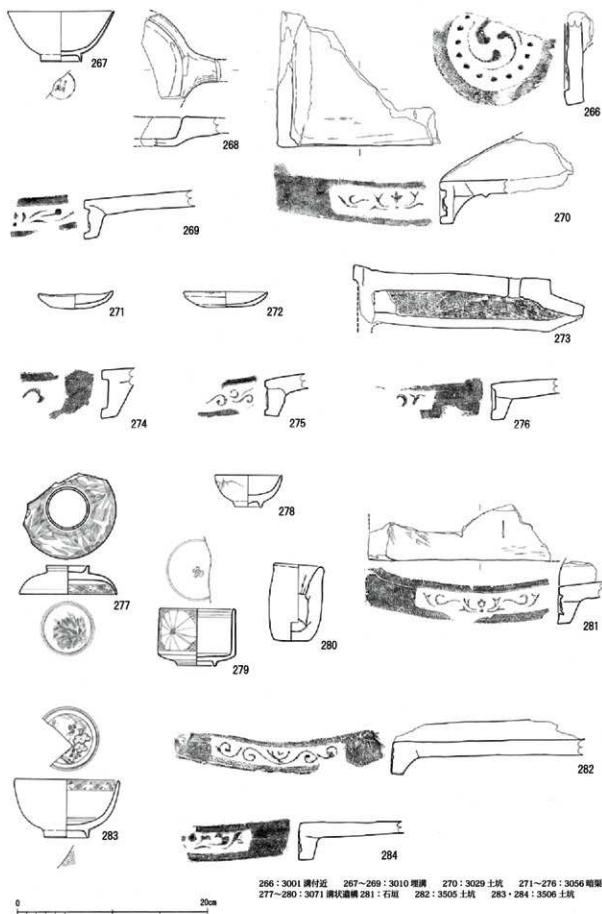


図 59 3 区 近世の遺構出土土器・瓦①

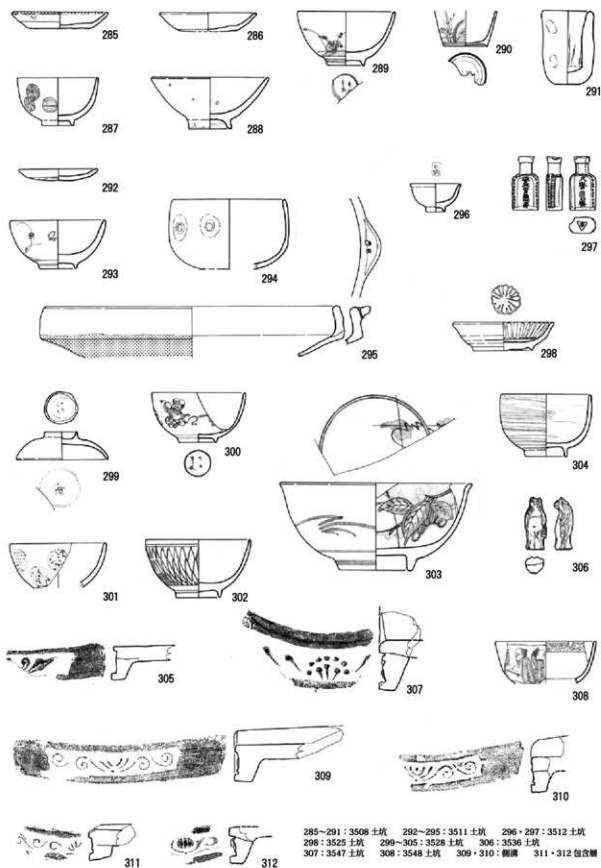


図 60 3 区 近世の遺構出土土器・瓦他②

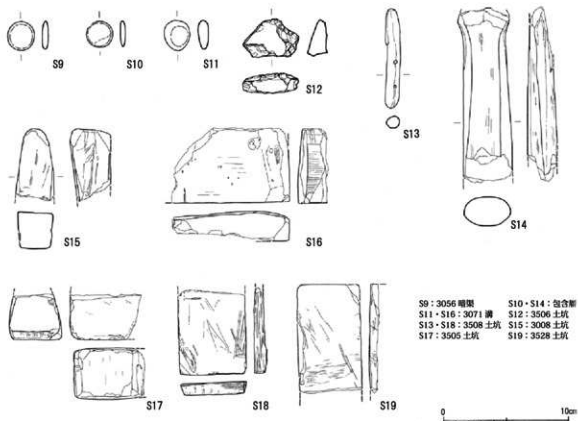


図 61 3 区 中世末期～近世の石器・石製品 (石④)

置が異なり、埋土も他の埋め桶が瓦礫混じりの砂質土ないしシルトであるのに対し、灰色粘質土で埋まっている。周囲の遺構と一連のものとして、南東部に階段状の入口をもつ半地下式の遺構内に据えられている可能性も考えられる。

3134 土坑

3134 土坑は、南北 2.5 m、東西 3 m の大型の土坑である。土坑底部からは江戸時代中期の肥前陶磁器・唐津大皿・瀬戸陶器・土師器皿が出土している。

3508 土坑

3 区南東の大型廃棄土坑。土師質皿 (285・286)、染付 (287・289・290)、灰釉の陶器碗 (288)、焼塩壺 (291) 等が出土した。

3511 土坑

3 区中央南東側で検出した大型廃棄土坑。土師質皿 (292)、染付碗 (293)、黒色釉の陶器 (294)、焙烙 (295) 等が出土した。

3528 土坑

一辺約 3 m の土坑で、東西二つの土坑が繋がったような形状をしている。18 世紀の肥前系染付碗・蓋・鉢 (299～303)、施釉陶器碗 (304)、軒平瓦 (305) 等が出土した。

3514・3571 埋桶

3571 は径 0.6 m と小型の埋桶で、径 1.5 m 以上の大型で浅い窪みの中に据えられている。

石垣 1

近世以降に造成された段の北側長さ 4.0 m、高さ 0.6 m の範囲で検出した遺構である。石材は長さ 50 cm、高さ 30 cm 程の結晶片岩の板石を積み上げているが、依存状況は悪い。石垣付近より

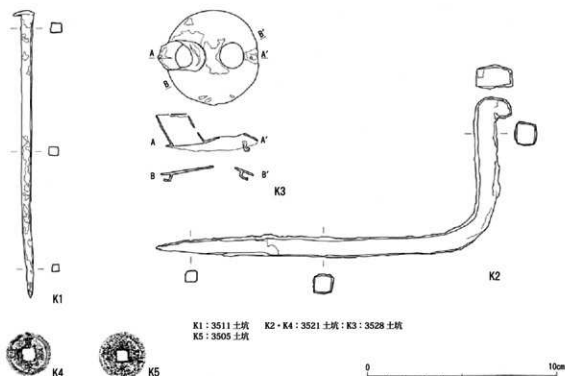


図 62 3 区 中世末期～近世の金属製品・銭貨（金属①）

出土した遺物より、江戸時代後期以前に築かれたと考えられる。造成段の状況から、石垣は段の南側にも続くと考えられる。石垣に並行して 3118 溝が南北方向に流れており、石垣に囲まれた屋敷地の東側を区画する溝と考えられる。石垣に伴い大阪式の懸軒平瓦 (281) が出土している。

3529 石組溝

3071 溝の南側に平行して検出された石組溝。溝幅は 0.6 m、残存する深さは石一段分となる 15 cm 程度である。

このほか、江戸時代の屋敷地が廃絶した際の廃棄土坑とみられる遺構から、16 世紀後半の瀬戸美濃菊皿 (298) から近世末～近代等の遺物 (296・29・306～308) が出土した。このほか、調査区側溝や包含層から軒平瓦片 (309～312) が出土した。

(3) 室町～江戸時代の石器・石製品

S9～S11 は黒い基石。S9・S10 は径 2.1 cm、厚さ 4 mm。S11 はやや不整形である。

S12 はチャート製の石器で、稜線上に敲打痕が残る。火打石と推定している。

S13 は緑色片岩の長さ 7.8 cm、径 5 mm の棒。側面に 2 か所小さな窪みがみられる。

S14 は一方が薄く幅広くなる、棒状製品。

S15～S19 は砥石。きめがあまり細くない方形・棒状のもの (S15～17) と、きめ細かく、剥離もしているが、板状を呈しているもの (S18・19) が確認される。

S9 は 3056 暗渠、S11・16 は 3071 溝、S15 は 3008 土坑、S12 は 3506 土坑、S13・18 は 3508 土坑、S17 は 3505 土坑、S19 は 3528 土坑から出土した。

(4) 室町時代～江戸時代の金属製品

K1・K2 は和釘。K1 は 3511 土坑から出土した。K2 は途中で 90 度に曲ったもので、3521 土坑で出土した。

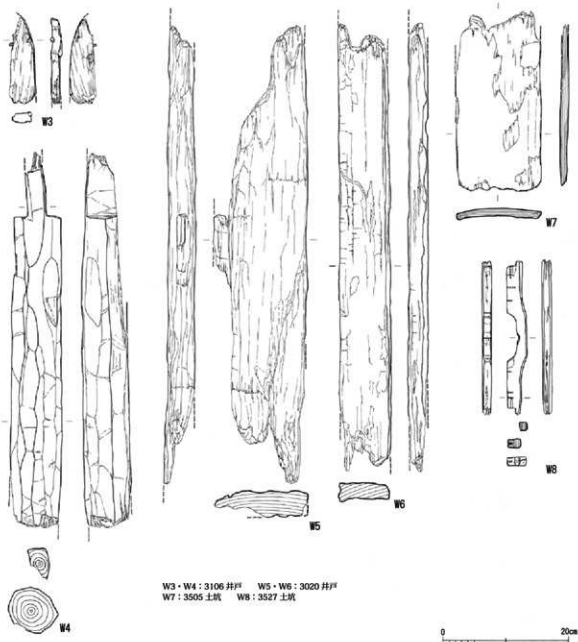


図 63 3 区 中世末期～近世の木製品（木②）

K3 は銅製品の破片。筒型製品の注ぎ口と推定される。

K4・K5 は寛永通宝。

(5) 室町時代～江戸時代の木製品

W3・W4 は 3106 井戸から出土した木製品。W3 は板状の製品破片、W4 は面取りした棒状製品で、少なくとも一方に突出部をもつ。

W5・W6 は 3020 井戸から出土した板状製品。長さ 0.7 m 以上、幅 14 cm と 8 cm。

W7 は 3505 土坑から出土した板状製品。

W8 は把手状製品片

第4節 4区の調査

1 概要

4区は調査対象地のやや北寄り、2区の北側、3区の南側にあたる調査区である。調査区は東西幅約23m、南北幅18～20m、調査面積443㎡であるが、やや平行四辺形気味の形状をしており、北東部に若干の突出部を設定している。

4区では、東端部で弥生時代～古墳時代の溝、中央で竪穴状遺構を確認したほか、近世とみられる石組井戸・埋桶、土坑・溝・ピットを検出した。出土遺物は計18箱分である。

2 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

(1) 弥生時代の竪穴状遺構

4021 竪穴状遺構

4区中央で検出した、東西約3.8m、南北4.3m以上の竪穴状遺構。関連する可能性のある遺構として、4090～4094ピット・土坑が検出された。埋土からは317～320が出土しており、318はヘラ描き沈線で木の葉文を描いており、遠賀川式の壺片の可能性がある。

(2) 弥生～古墳時代の遺構・遺物

4001 溝

4区北西端で検出した溝。4019溝に先行し、2時期の別の溝に区分できる。西側にある上層溝は4005溝と同一溝、東側の下層溝は3区の3032の延長部と推定される。

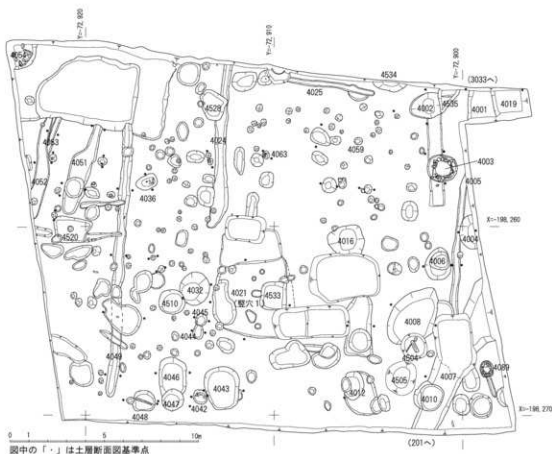


図64 4区平面図 (S=1:200)

4021 (竪穴状遺構 1)

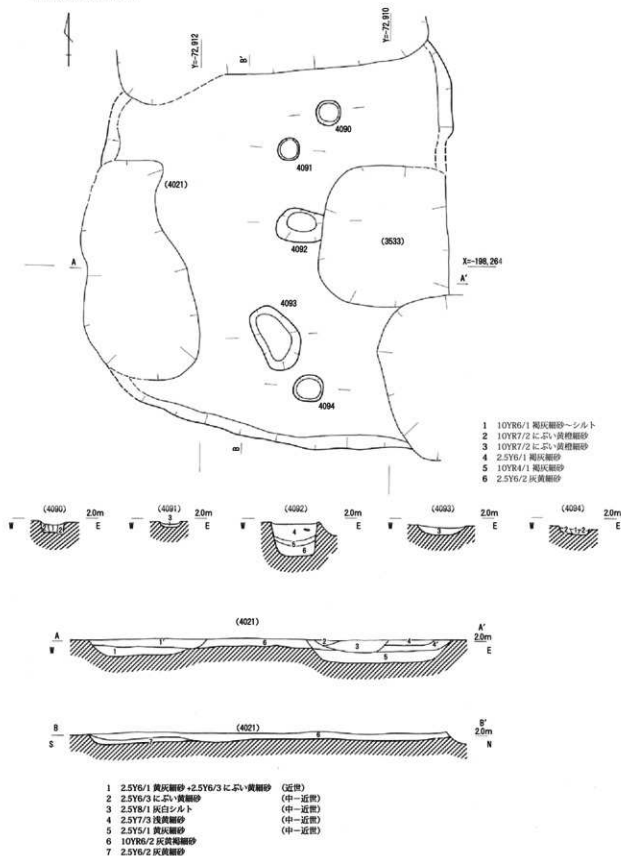
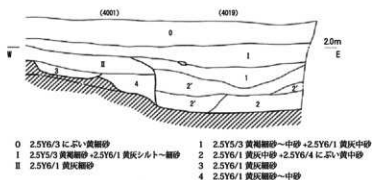


図 65 4 区 弥生～古墳時代の遺構①(竪穴状遺構 1) (S=1:40)

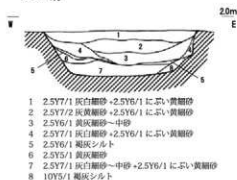
4001 溝



4005 溝



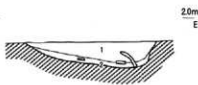
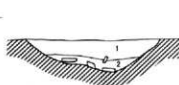
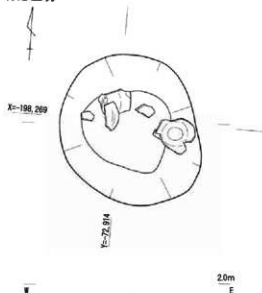
4007 溝



4036 土坑



4012 土坑



4052 ビット



4053 ビット



4063 柱穴

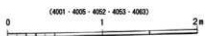


図 66 4 区 弥生~古墳時代の遺構② (S=1:40、1:20)

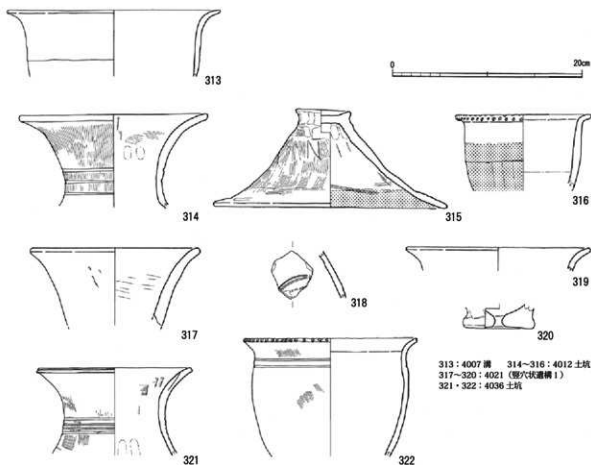


図 67 4区 弥生時代の遺構出土土器

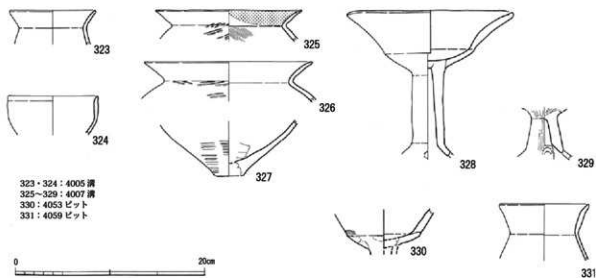


図 68 4区 古墳時代の遺構出土土器

4005 溝

4区東部で検出された幅0.4m、深さ0.1mの小溝。小型の甕(323)、小型の埴形(324)等が出土している。

4007 溝

4区南東部で検出した、南西向きに流れる溝。幅1.6m、深さ0.5mで、下層から弥生時代中期の紀伊型甕(313)が



図 69 4区 双孔円盤(石⑤)

4003 井戸

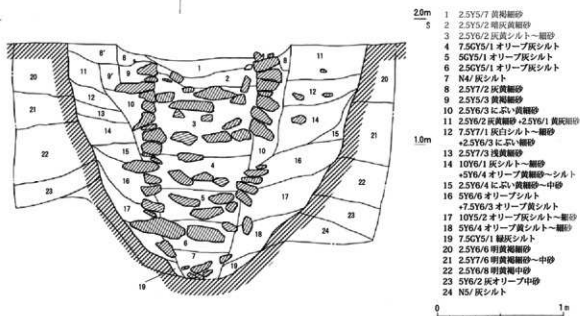
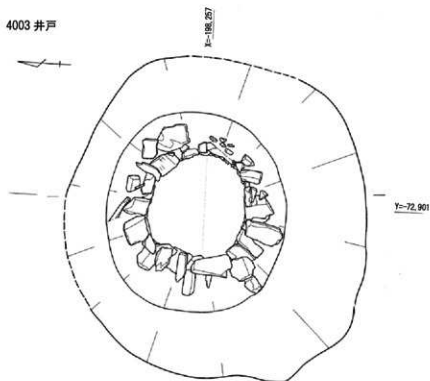


図 70 4 区 近世の遺構①(4003 井戸) (S=1 : 30)

出土したほか、後期のタタキ甕 (325～327)、高坏 (328・329) が出土している。

4012 土坑

4 区南東部で検出した土坑。314 は頸部に三条のヘラ描き沈線文を施す広口壺である。315 は底径 24.4 cm、高さ 10.2 cm、紀伊形甕に伴う蓋とみられる土器である。316 は弥生時代中期の紀伊型甕であるが、口縁端部に上下から指頭圧痕を施す。

4036 土坑

4 区北西部で検出した東西 1.15 m、南北 0.75 m の土坑。頸部に 4 条のヘラ描き沈線を施す広

4047 埋桶跡



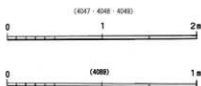
4049 溝



4048 埋桶



4089 埋桶



(4089)

- 1 2.5Y6/1 黄灰細砂 + 2.5Y6/2 灰黄中砂混
- 2 2.5Y6/3 にぶい黄細砂～中砂
- 3 2.5Y5/1 黄灰細砂
- 4 2.5Y5/3 黄褐中砂
- 5 10YR6/1 褐灰シルト + 10YR5/2 灰黄褐細砂混
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐～10YR6/1 褐灰細砂混
- 7 10YR5/1 褐灰シルト + 中砂
- 8 10YR6/6 明黄褐シルト + 中砂
- 9 2.5Y5/6 黄褐シルト + 中砂
- 10 10BG5/1 青灰色中砂

図 71 4区 近世の遺構②(S=1:40、1:20)

口壺 (321) と、肩部に2条のヘラ描き沈線を施す甕 (322) である。

4042 土坑

4区南西部で検出した径約0.8mの土坑。

4052・4053 溝

4区西側で検出した小溝。4052溝は幅0.8m、4053溝は幅0.3mで、残存する深さは10cm以下である。高坏の破片(330)が出土した。

(3) 古墳時代の石製品

S 20は4区北東にある近世～近代の4535土坑埋土から出土した滑石製双孔円盤。径約3cm、厚さ2mm。

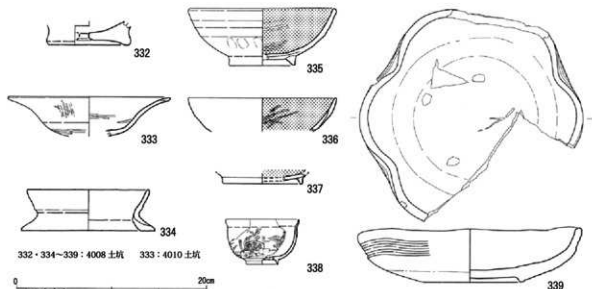


図 72 4 区 近世の遺構出土土器①(各時代の遺物混在)

3 古代の遺構・遺物

古代の遺構は非常に希薄である。

4063 柱穴

4 区中央北側で検出した礎板をもつ柱穴。土師器碗破片とみられる土器が出土しており、古代末の遺構の可能性が考えられる。

4 近世の遺構・遺物

(1) 近世の遺構・遺物

近世の遺構は多く、調査区全域に井戸・埋桶・土坑が散在している。東西・南北方向に走る小溝は多様な年代の土器が微量入るが、江戸時代の遺物が入るものが多い。

4003 石組井戸

4 区北東で検出した検出面の径約 0.8 m、深さ 1.8 m 以上の石組井戸。石組は崩れている部分も多く、井戸内の埋土には多数の石が入っている。掘り方は約 2.5 m で逆円錐形を呈する。底は緑灰シルトの湧水層とみられる層まで掘削している。丸瓦・平瓦片 (340～342) が出土したが、形成・廃絶年代は判然としない。

4008 土坑

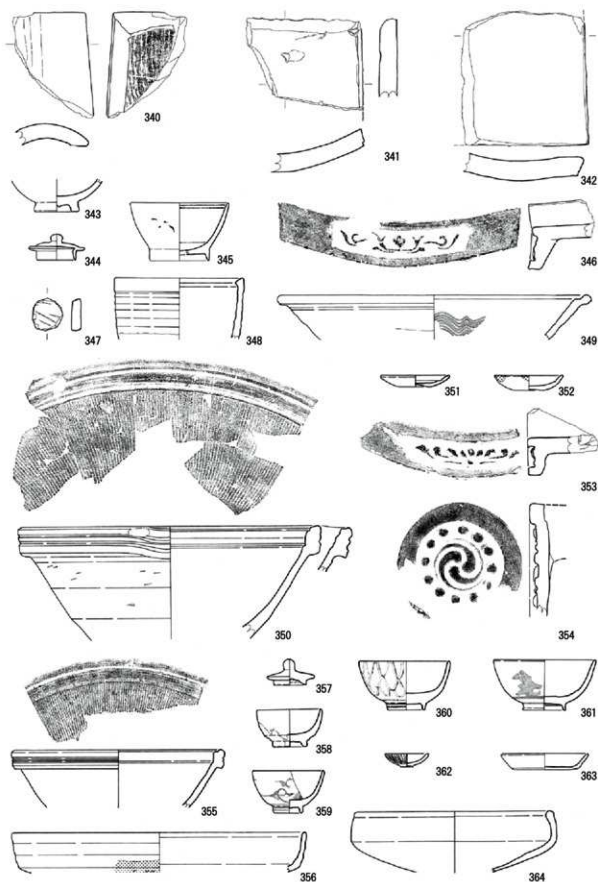
4 区南東部で検出した近世の土坑であるが、様々な年代の遺物が混入する。332 は弥生土器の平底底部で中央に穿孔する。333 は高坏の坏部で、縦・横方向のヘラミガキを施す。334 は器台と考えられる。335～337 は内面の黒い黒色土器碗。335 は復元径 15.2 cm、高さ 6.0 cm。338 は染付碗、339 は瀬戸美濃と考えられる陶器の六花形浅鉢。

4019 溝

4 区北東突出部で検出された江戸時代の溝。施釉陶器碗 (343) が出土した。3 区の 3002 溝と同一遺構と考えられる。

4046 土坑

4 区南西部で検出した土坑。344 は京信楽系水注の蓋。4046 は肥前系染付の広底碗。19 世紀



340~342: 4003 井戸 343: 4019 溝 344・345: 4046 土坑 346: 4047 埋輪 347: 4048 土坑 348・349: 4089 埋輪
 350: 4504 土坑 351・352: 4505 土坑 353・354: 4510 土坑 355~361: 4520 土坑 362: 4528 土坑 363: 4533 土坑 364: 4534 土坑

図 73 4区 近世の遺構出土土器・瓦②

前半の遺構と考えられる。

4047・4048 埋桶

4区南西部で検出した埋甕。4047は掘り方の径1.4m、埋桶相当部分が径1.0mである。大阪式文様の懸軒平瓦が出土した。4048は径1.1m以上の埋桶跡である。347は陶器製の泥面子。

4049 溝

4区西側で検出した0.5m、深さ0.2mの南北方向の小溝。

4089 埋桶

4区南西部で検出した径0.6m、復元高約1mの埋桶を据えた土坑で、上面に板石を巡らせている。

4504・4505・4510・4520・4528・4533・4534・4535

土坑

検出時には攪乱と推定されるものであったが、江戸時代の陶磁器他が出土するので遺構として認識している。調査区全域に多数みられ、江戸時代から明治時代への変遷に伴う廃棄土坑が含まれるものと考えられる。350は4504土坑出土の播鉢、351・352は

4505土坑出土の土師質土器小皿で、352は灯明皿として使用された痕が残る。353・354は4510土坑出土の軒瓦、355～361は4520土坑出土の陶磁器で、355は小型の播鉢、356は焙烙、357・358は小型の陶器蓋・碗、359～361は肥前系染付碗。362は4528土坑出土の紅皿。363は4533土坑出土の土師質皿、364は4534土坑出土の焙烙。小さな破片から復元しているが、底が平坦なものと考えた方がいいかもしれない。

(2) 近世の石製品

S 21は4区北西端で検出した4054土坑出土の硯の破片である。長方形の硯の3cmほどの破片で、縁がやや折れ曲っている。

(3) 近世の木製品

W 9は4区南東部で検出した4505土坑出土の木製品である。木製品は一辺11cm、高さ3.5cmの方形の台状を呈する。上面とみられる面は平滑で、三箇所均等に小さな長方形の穴があけられている。裏面には幅2cm、深さ0.5cmほどの溝が通る。



図 74 4区 硯(石⑥)

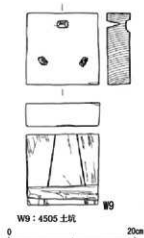


図 75 4区 近世の木製品(木③)

第5節 5区の調査

1 概要

(1) 調査区の概要

5区は調査対象地のやや南寄り、2区の南側、6区の北西側、7・8区の北側にあたる。神前の集落の南東を画する琴平社の西に位置する調査区である。調査区は東西幅約30～32m、南北長約114m、面積2,296㎡。

調査は、農機進入路・U字溝の関係から5-1区から5-5区に分け調査を行った。現況は水田であったことから、遺構面の遺存状態は良好で弥生時代から古墳時代の遺構を中心に検出した。調査区内には、弥生時代から古墳時代の溝が北東から南西に流れる。溝はいずれも並行して流れており、合計14本以上を数える。

また、5区中央にはこれらの下層遺構として、北東から南西へ伸びる谷状地形があり、最下層は無遺物の流路群、下層は弥生時代前期の遺物を含む下層流路群(5040)で埋没していく。溝状遺構や不整形土坑は5040埋土の一部を形成する遺構とも考えられ、谷状地形は幅10～15mほどに及んだものと考えられる。弥生時代中期の溝群は5040の上面に形成されており、地形の低いところを通る排水用の溝ないし自然流路を浸濫した溝として評価できる。庄内期及び古墳時代中期の遺物を含む溝や土坑は5040上面以外の場所にも検出されることから、このころには平坦な場所が広がっていたことがうかがえる。

古代・中世・近世の遺構は少なく、長期にわたり水田であったものとみられる。

5区の主な遺構は、弥生時代前期から中期の溝、庄内期から古墳時代中期の溝・土坑・ピット等を検出した。遺物は弥生土器が圧倒的に多く、総数172箱分の遺物が出土している。

なお、5区で検出された弥生時代中期～古墳時代後期の溝は、2010年度の調査での続き番号で管理されており、溝6(5081)、溝7(5080・5227)、溝8(5096・5206)、溝9(5093・5205)、溝10(5012・5118・5187)、溝11(5014・5182)、溝12(5016・5169・5180)、溝13(5019・5144)、溝14(5001・5142)、溝15(5002・5140)と対応する。

このうち溝7～11は弥生時代中期の溝、溝12・15は庄内期～古墳時代中期の溝、溝6・13・14はこれらの時期の遺物が混在する自然流路を利用した溝と考えられる遺構である。

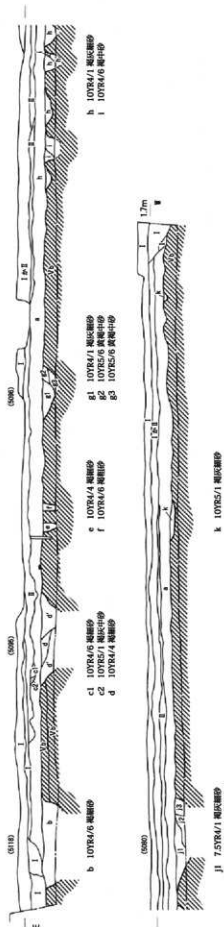
(2) 土層と包含層出土遺物

5区は、現代耕作土と床土のⅠ層、近世の遺物が見られる整地土のⅡ層がある。古代以降の遺物はほとんど出土せず、水田化されているものと考えられ、Ⅲ・Ⅳ層の年代把握は難しい。Ⅴ層は地山と推定される褐色系のシルト～細砂(Ⅴa・Ⅴb層)と灰色系の粗砂ないし中砂(Ⅴc層)から成る。Ⅴa・Ⅴb層とほぼ同色系の土層で弥生時代前期の5040に対応する年代の遺物包含層が堆積する場所もあるものとみられる。

図79は包含層及び側溝から出土した土器である。365～368はⅤ層上面、369～371はⅢ層上面、372はⅡ層、373は調査区側溝から出土した。367は調査時にⅣ層の遺物と認識されたもので古墳時代中期の土器で、甗の牛角状把手と推定される。368は調査時にⅡ層の遺物と認識された陶器製の円盤で、371の染付の仏飯器とともにⅡ層が近世の遺物包含層であることを示す遺物とみられる。



5-1区 南壁



5-1区 南北セクション東壁

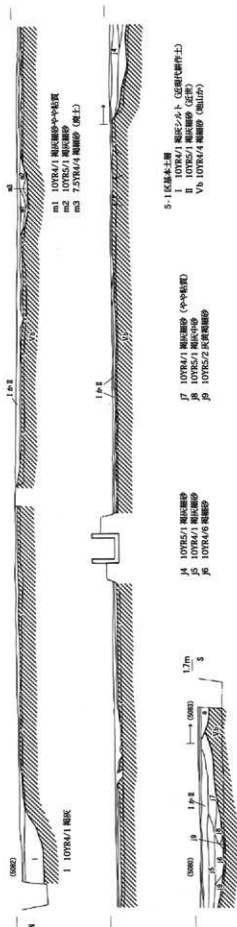
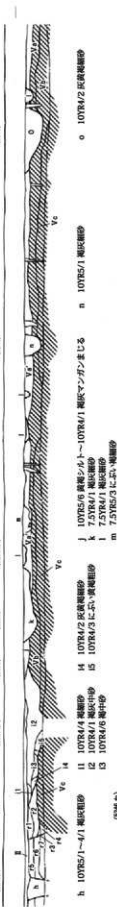
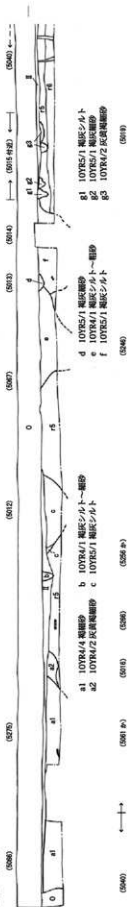


図 77 5-1区 壁面土層図 (S=1:60)

5-2区 北壁



5-2区 南壁

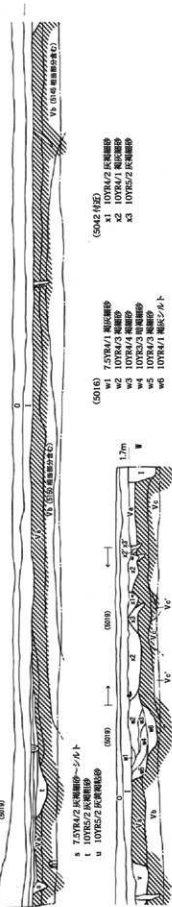


図 78 5-2区 壁面土層図 (S=1:60)

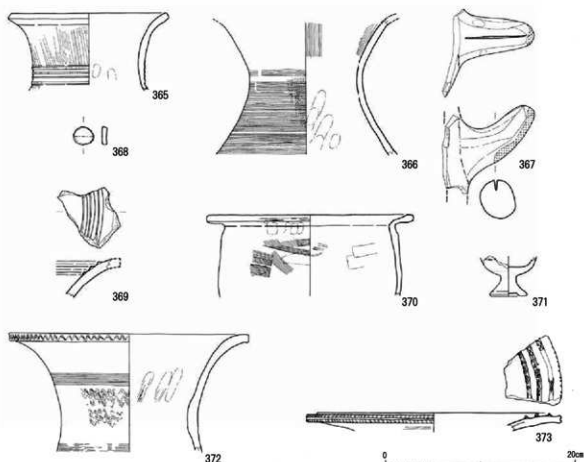


図 79 5区 遺物包含層出土土器

2 弥生時代期～古墳時代の遺構・遺物

(1) 弥生時代前期の流路 (5040) とその出土遺物

調査は弥生時代中期～古墳時代中期の溝群の検出面を対象としており、下層の 5040 流路については部分的な確認調査にとどめている。5-4 区南区でトレンチを設定し、検出面での幅約 14 m、深さ 0.7 m 以上の範囲に、複数の溝が折り重なるように堆積していく状況が観察された。東の肩部付近は無遺物とみられる堆積で埋まっており、東西の上層は幅 2～3 m のやや粗い砂による溝状堆積で埋没する。中央にあたる図 80 の 24・28・34 層は土器が多量に含まれる粘質のシルトであり（下層）、弥生時代前期の土器が多数投棄されたものとみられる。確認トレンチより南側を中心に遺物の取上げを行っている。上層は遺物が少なく、シルト～細砂で埋まっている。

374～492 は 5040 流路出土土器で、そのうち 374～457 は下層から出土した。

374・375 は突帯文土器の壺の口縁部とみられる破片。374 は口縁部のやや下に三角形の突帯を貼り付け、刻みを施す。375 は口縁部から下へ伸びる扁平な突帯を貼り、下端部に刻みを施す。深鉢の可能性も考えられる。これらは和歌山では弥生時代前期中段階の土器との共伴が確認される土器である。このほか突帯文土器は深鉢 420・425・427、鉢 434 が出土している。

376～413 は弥生土器の壺で、無文のもの、削り出し突帯・貼り付け突帯をもつもの、ヘラ描き沈線をもつもののほか、櫛描き文を施すものが若干確認される。

376～378 は広口壺の口縁部で、施文の有無は不明。

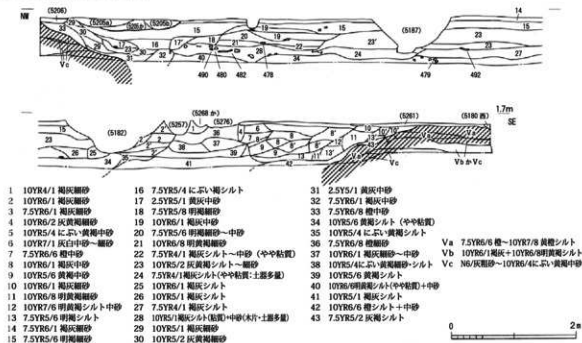


図 80 5-4 区 5040 流路土層断面図 (S:1=60)

378～380 は削り出し突帯をもつ遠賀川系の広口壺。頸部と肩部の削り出し突帯を境に段があり、突帯上を沈線で二つに区分する。379 は外面に若干赤色顔料が付着しており、胎土に片岩を含む。380 は胎土分析により片岩類を含まないことが確認されており、搬入品と考えられる。

381～383 は無文の広口壺。外面調整はハケ及びミガキ。381・382 は頸部が短く、肩の張りが大きい。器壁は厚い。381 は口径 10.6 センチ、体部径 17.0 cm、器高 19.0 cm。382 は口径 12.6 cm、体部径 21.0 cm、器高 22.2 cm である。383 は頸部が長く肩の張りが緩やかになる。口径 16.4 cm、体部径 21.4 cm、器高 30.4 cm である。384 は肩部に沈線をもつ。385 は無文の広口壺で、外面ハケ調整。器壁が厚い。

386～388 は貼り付け突帯をもつ広口壺。貼り付け突帯上には刻み目を施している。386 は大型で頸部に 4 条以上の突帯をもつ。387 は頸部に 1 条、388 は頸部と肩部に 1 条ずつ突帯をもつ。

389・390 は無文の小型壺。389 は体部が張り、底部中央が高台状を呈する。390 は大きな平底の直口壺。

391 は 7 条以上の連続する突帯上に細かい刻みを施す。縦に 2 列の円形浮文を貼りつけている。胎土分析で片岩が含まれず、播磨を中心とする東部瀬戸内地域からの搬入品と考えられる。

392～414 はヘラ描き沈線をもつ壺と蓋。

392 は壺の蓋と考えられる土器片。上端部に隣接する二孔を有し、ヘラ描き沈線で飾る。

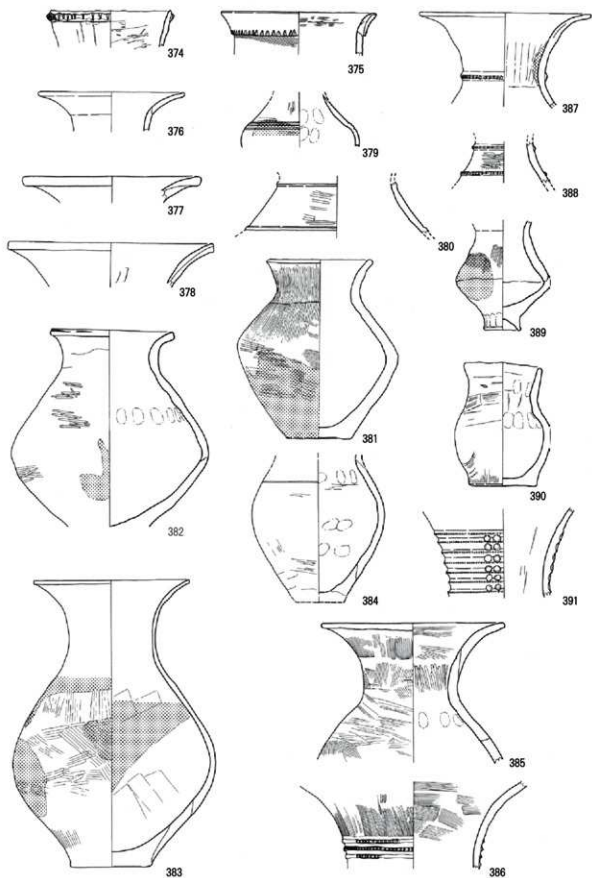
393～405 はヘラ描き沈線を頸部あるいは頸部と肩部に施す壺である。

393 は体部がやや張る小型の広口壺。肩部に 4 条のヘラ描き沈線を施す。

394～396 は広口壺の口頸部、397・398 は頸部～底部。397 は胎土分析を行っている。

399 は太頸広口壺。口縁底部に刻み、頸部に 5 条のヘラ描き沈線を施す。復元口径 36.1 cm。

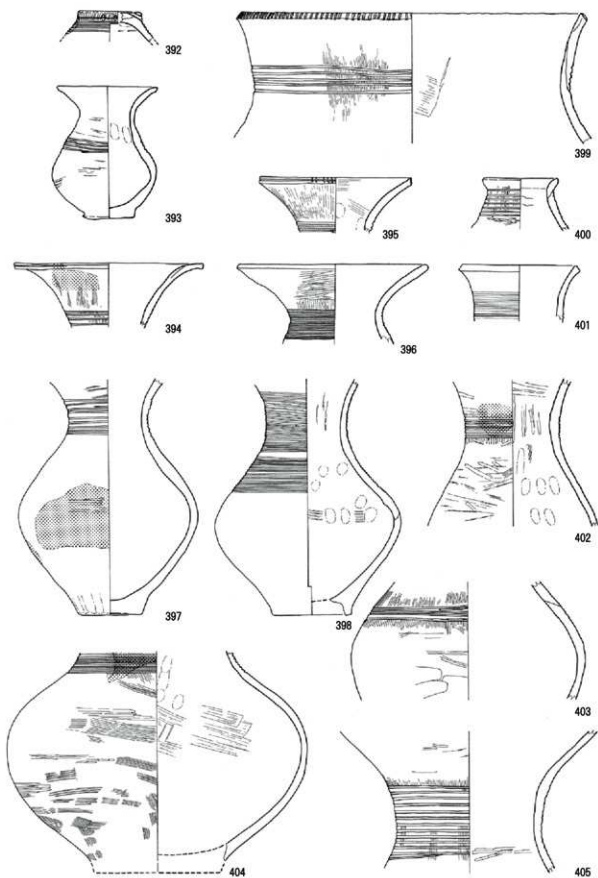
400 は口頸部の極端に短い壺。401 はヘラ描きないし櫛描きを施す壺。



374~391 : 5040 下層

0 20cm

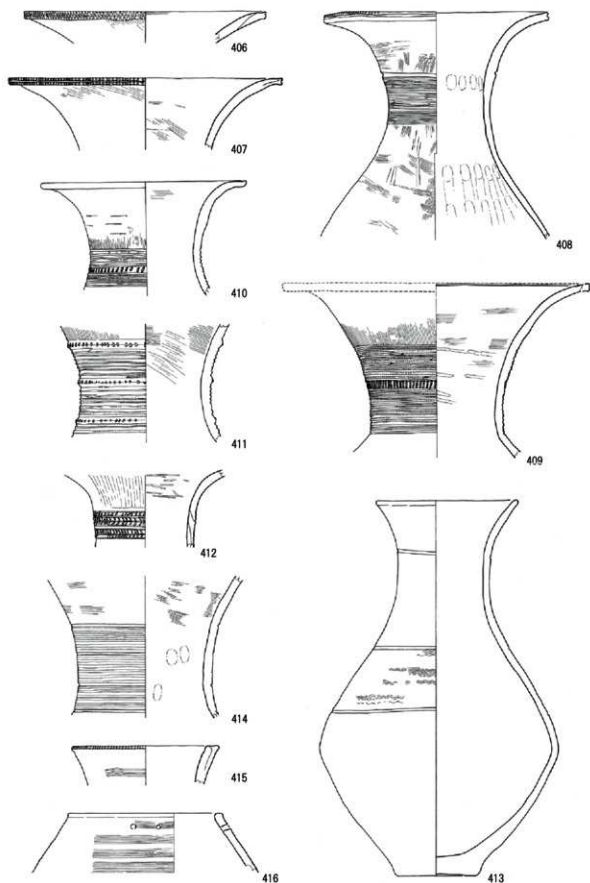
图 81 5 区 5040 流路出土土器①



392~405: 5040 下册

0 20cm

图 82 5 区 5040 流路出土土器②



406~416: 5040 下層

0 20cm

图 83 5 区 5040 流路出土土器③

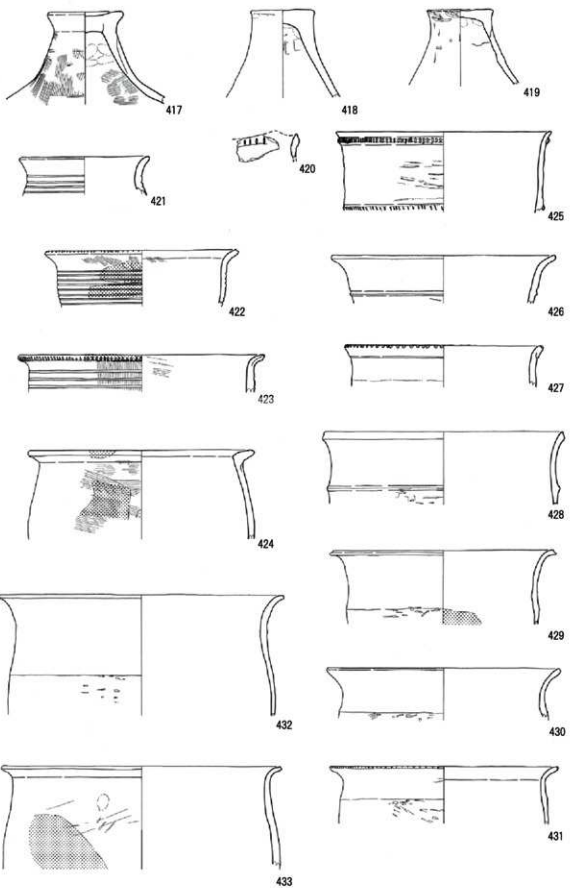


図 84 5 区 5040 流路出土土器④

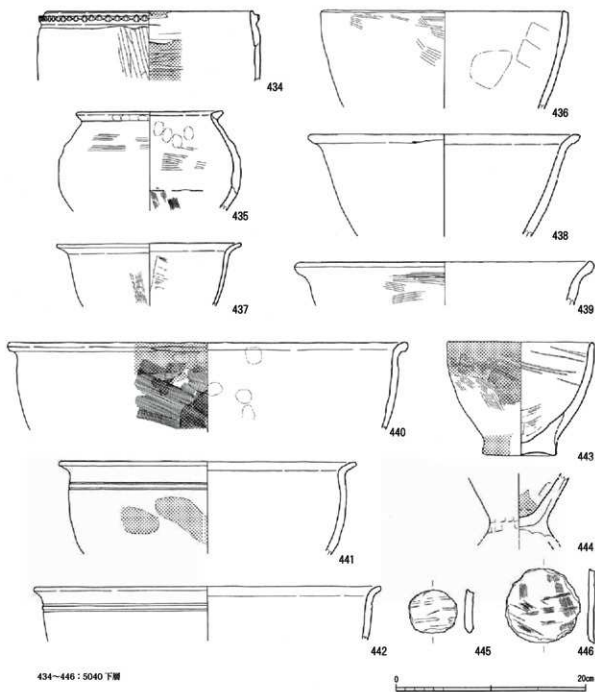


図 85 5区 5040 流路出土土器⑤

402～405は頸部ないし肩部にヘラ描き沈線を施す壺の体部片。

406・407は口縁端部にヘラ描き沈線及び刻みを施す広口壺。

408は頸部に多条のヘラ描き沈線を施し、上端に付加条沈線をもつ広口壺。口縁部中央にヘラ描き沈線をまわし、その上端部を3分の1周分だけ刻む。

409・410は頸部に多条のヘラ描き沈線を施し、中央にあけた隙間に刻みを施す。

411・412は壺の頸部片。411は細かい刻みを施した貼り付け突帯で仕切られた間をヘラ描き沈線で充填する。412はやや間隔をあけたヘラ描き沈線の間に綾杉状の刻みを配する。

413は付加条沈線の間に櫛描き波状文が確認できる広口長頸壺。摩耗が激しい。414は付加条沈線の間をヘラを束ねたような櫛描き文で充填する。415・416は櫛描き直線文のみられる細頸

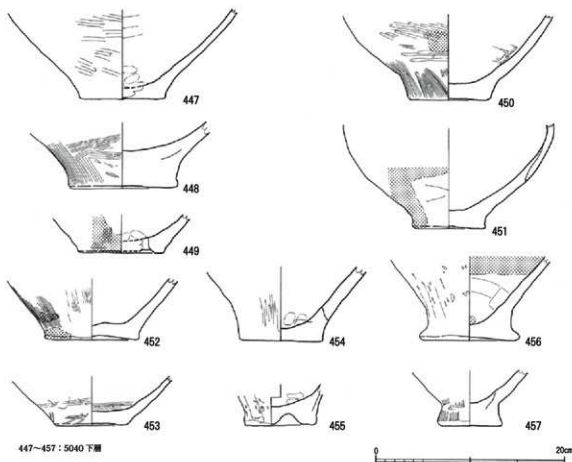


図 86 5 区 5040 流路出土土器⑥

壺と無頸壺。5040 の埋土は一樣に埋まっていないことから、一概に上層溝群より古いとは言い難いが、5040 の下層から出土した土器として注意が必要である。

417 ～ 419 は甕の蓋。

420 ・ 425 ・ 427 は突帯文土器の深鉢に相当する土器とみられる。425 は口縁端部の下と肩部に断面三角形の突帯を貼り付け、刻みを施す。427 は口縁端部の外側に扁平な突帯を貼り付け、刻みを施す。

421 ～ 423 は肩部にヘラ描き沈線を施す甕ないし鉢。422 ・ 423 は口縁端部を刻む。

424 は逆 L 字状の口縁をもつ甕ないし鉢。

426 ・ 428 は初期段階の紀伊型甕とみられ、口縁部あるいは肩部が突帯状を呈する。体部はケズリ調整。429 ～ 433 は紀伊型甕で、肩の稜線は様々な状態のものがみられる。

434 は突帯文土器の鉢。口縁部のやや下に突帯を貼り付け、刻みを施す。胎土分析により生駒西麓産からの搬入品と考えられ、器壁には種子圧痕が認められる。但し、同様の胎土の土器はほとんど出土していない。

435 は逆 L 字状口縁をもつ鉢で、胎土は乳白色系を呈する。胎土分析で片岩を含まず、堆積岩と火山ガラスを含むことが確認されており、瀬戸内系の搬入品と考えられる。

436 は無文の直口鉢。

437 ～ 442 は外反口縁鉢で無文のものと、肩に 2 条のヘラ描き沈線をもつものがある。

443 ・ 444 は小型の直口鉢。443 は胎土分析を実施した。

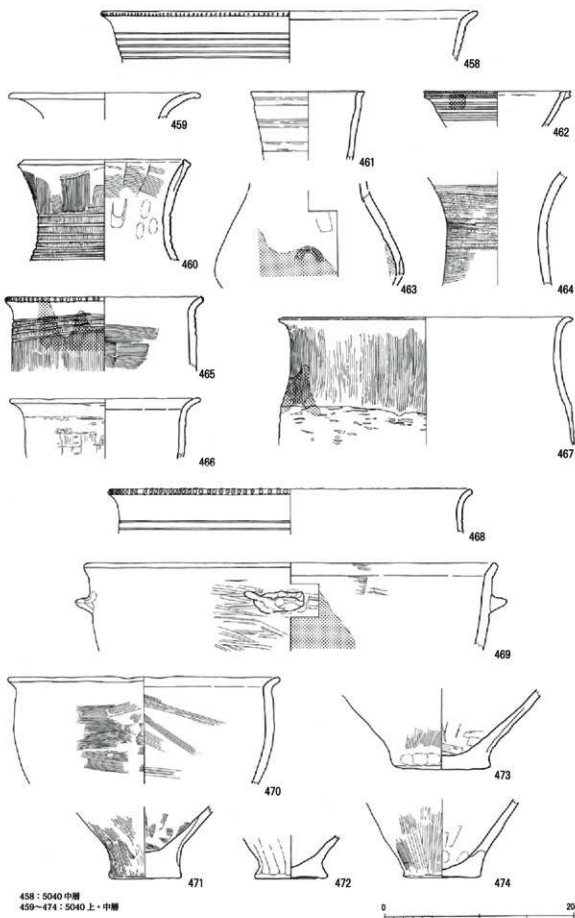


図 87 5 区 5040 流路出土土器⑦

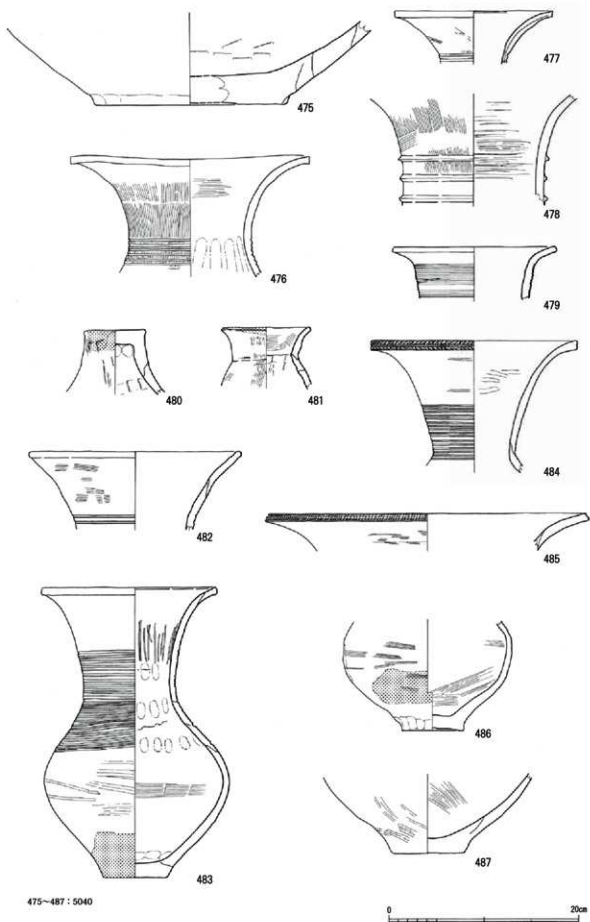


图 88 5区 5040 流路出土土器⑧

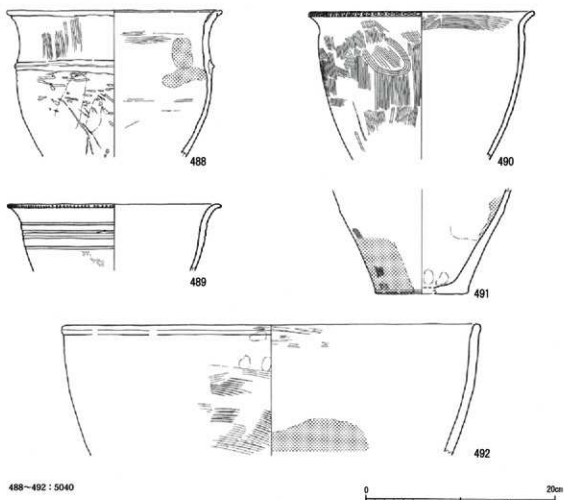


図 89 5区 5040 流路出土土器⑨

445・446は土器片を用いた円盤状土製品。

447～457は壺・甕・鉢の底部。455は穿孔途中品と考えられる。

458は5040中層出土の外反口縁鉢とみられる土器片。

459～474は中・上層出土土器。461は櫛描き文のみられる直口壺。463は体部に櫛描きで半円形を描く。甕・鉢は下層出土土器と同様の土器片が出土している。

475～492はトレンチ壁面の土器と他の遺構との境界出土土器である。

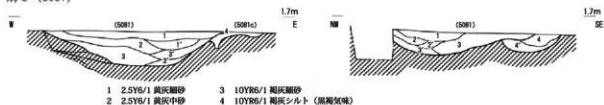
図80のトレンチ壁面にかかった土器は478～480・482・490・492で、下層遺物に相当するものと考えられる。壺は貼り付け突帯をもつ広口壺(478)、ヘラ描き沈線をもつ広口壺(479・482)、蓋(480)、ハケ調整の鉢(490)、ハケ調整の直口鉢(492)が認められる。多条のヘラ描き文を施す479が最も下層から出土しており、土器を含んだ土の再堆積も考える必要がある。

475・476・484・488は5040流路ないし5066溝状遺構の遺物。486は5040流路ないし5010溝状遺構の遺物である。

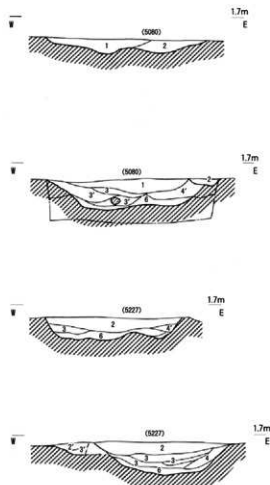
483は5040流路の土器で、堆積岩・深成岩類を主体とし海水種の珪藻類と骨針化石を含む胎土をもつ、広口長頸壺。

5040流路の土器が多量に出土した層は、中央部に広く堆積する粘質のシルトで、前期の土器が多量に含まれる。ただ、5040の東屑にみられる図80の3～13層のように水平堆積で埋まら

溝6 (5081)



溝7 (5080・5227)



溝8 (5096・5206)

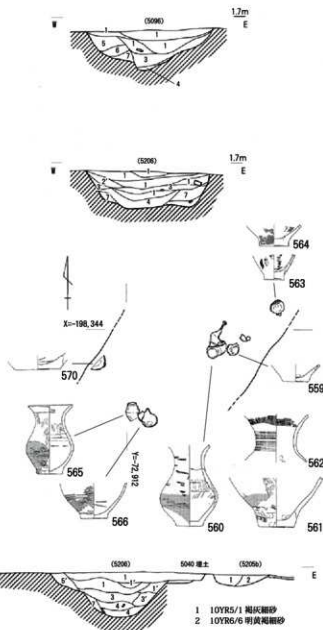


図90 5区 弥生時代 溝6 (5081)・溝7 (5080・5227)・溝8 (5096・5206) (S=1:40)

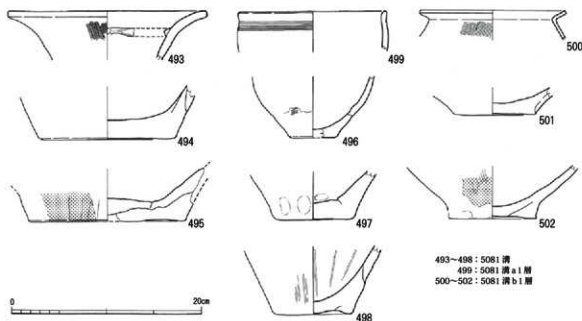


図 91 5 区 溝 6 (5081) 出土土器

ない、埋め立てたような堆積を示す部分もあり、中期の溝群と同時期ないし新しい年代の土器は、このような場所から出土した遺物であることも考えられる。

(2) 弥生～古墳時代の溝

5 区では北東から南西へ流れる溝が 10 条検出された。調査区北端部では溝 6 が検出されており、庄内期を中心とする 2 区の 201 溝の延長部にあたる。5 区中央部では下層流路 5040 上で弥生時代中期の溝 7～11 と古墳時代中期の溝 12 を検出した。5 区南部では溝 13～15 が検出されており、弥生時代中期から古墳時代中期の溝が確認される。

これらの溝が集まる場所が谷状地形で、その間が微高地状になることがうかがえるが、微高地状の部分では弥生時代の遺構は検出されておらず、比較的起伏が大きかった可能性がある。これらの溝はいずれも上端部を削平されており、断面 U 字形を呈している。溝の残存幅は 1～2 m 前後、深さは 0.3～1.2 m である。断面形や分岐する場所があることから溝として認識してよいものと思われるが、自然流路を凌駕して利用した可能性も考えられる。

溝 6 (5081 溝 (5-1 区))

5 区の北西で検出した溝で、北東から南西へ流れる。溝の幅は 2.3 m、深さ 1.2 m で、断面形は緩い U 字形を呈する。溝肩部は不整形な落ち込みが存在し、南端部では 5081 a～c の三時期の流路の埋土に分けられる。2 区の 201・202 溝の延長部に相当するが、庄内式併行期（以下庄内期とする）の遺物は破片しかなく、弥生時代前期～中期の遺物が多く出土した。

493～498 は溝 6 出土土器。493 は口縁部内面突帯をもつ広口壺。494～498 は弥生土器の底部片。499 は 5081 a から出土した頸部に 3 条のヘラ描き沈線を施す鉢。500～502 は 5081 b から出土した。500 は土師器のハケ甕である。

溝 7 (5080 溝 (5-1 区))・5227 溝 (5-4 区)・5279 (5-4 区))

5 区中央の溝群の中で一番北側に位置する溝である。北から南西へ若干弧を描いて流れる。溝の肩部で重複 (5227 b 溝・c 溝、5279 溝) が認められることから、複数時期に渡って溝の再掘削、利用が行われていたものと思われる。溝は幅 1.4～1.8 m、深さ 0.15～0.35 m で、断面は浅い

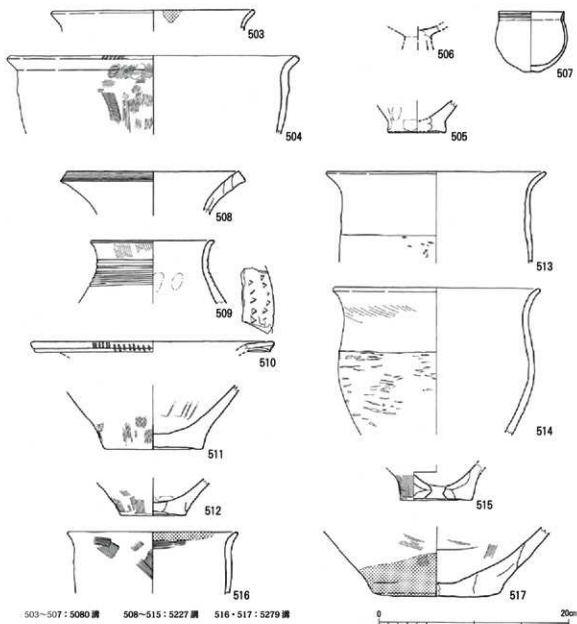


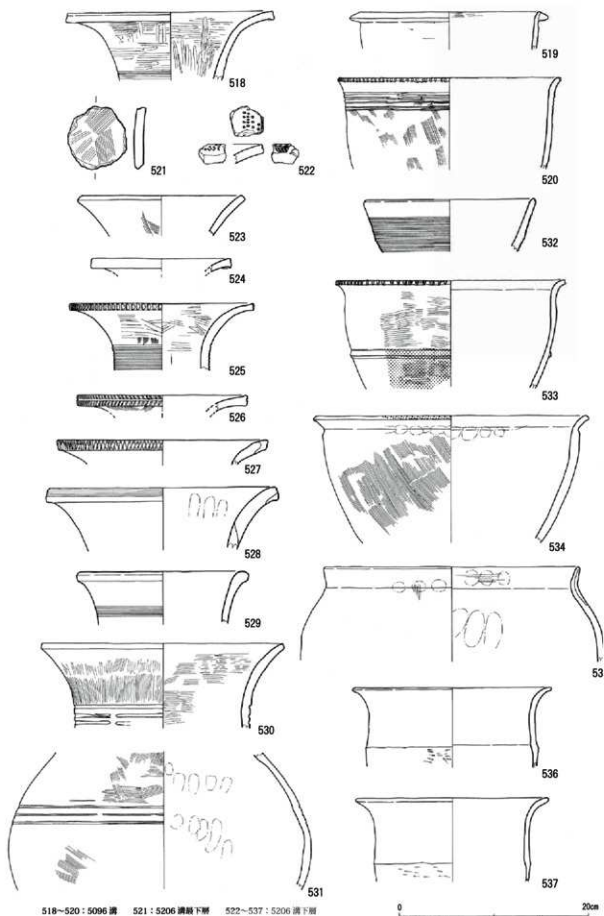
図 92 5 区 溝 7 (5080・5227・5279) 出土土器

U字形を呈する。他の溝よりやや砂混じりの土で埋まり、遺物は破片で出土量は少ない。

503～517は溝 7 出土土器。503～507は溝 7 北半 (5080 溝) で出土した。506は高坏片としたが、壺甕鉢類の底部片の可能性もある。507は口縁部にヘラ描き沈線をもつ小型の鉢で、溝の検出面で出土した。508～515は溝 7 の南半で出土した土器である。510は口縁部内面に連続する山形文が押されている。513・514は紀伊型甕で、肩部の稜線はあまい。516・517は5227 溝の肩部の堆積 (5279) から出土した。溝 7 出土土器は、弥生時代前期新段階から中期前葉の遺物と考えられる。

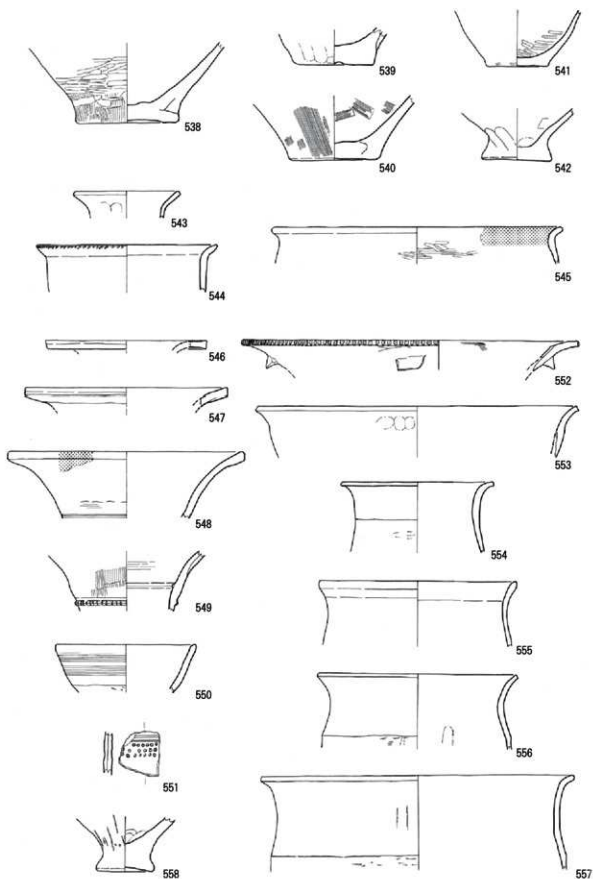
溝 8 (5096 溝 (5-1 区)・5206 溝 (5-4 区))

溝 8は5040 下層流路上面の北西肩部で検出した溝で、部分的に溝 9 の上層を直線的に流れている。検出面でおよそ幅 1.3 m、深さ 0.5 m であり、断面形状はU字ないしV字形を呈する。5-1 区南西付近において南東方向に伸びる 5093 溝が分岐しており、溝 8 の水流を南東へ流す溝



518~520 : 5096 溝 521 : 5206 溝前下層 522~537 : 5206 溝下層

図 93 5 区 溝 8 (5096・5206) 出土土器①



538~542 : 5206 溝下層 543~545 : 5206 溝中・下層 546~557 : 5206 溝上層

0 20cm

図 94 5 区 溝 8 (5206) 出土土器②

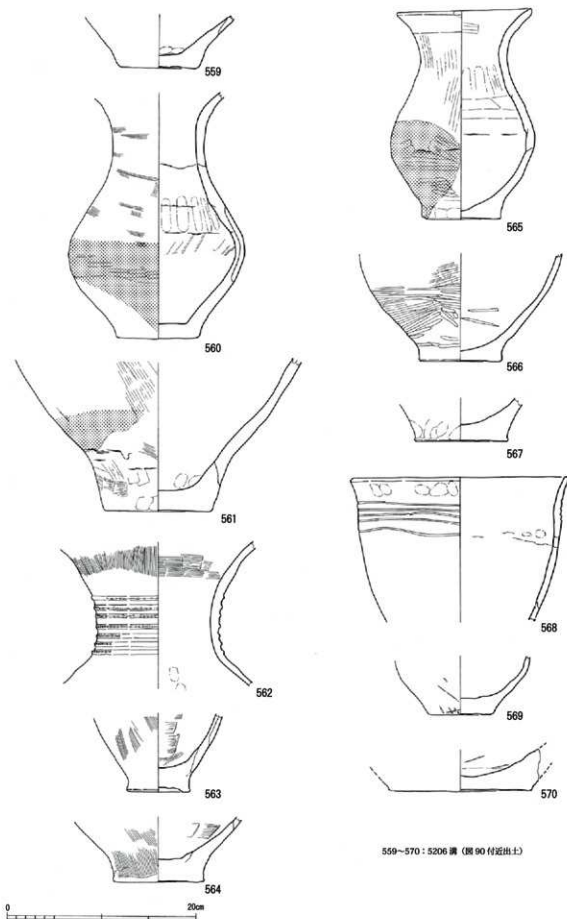


图 95 5 区 溝 8 (5206) 出土土器③

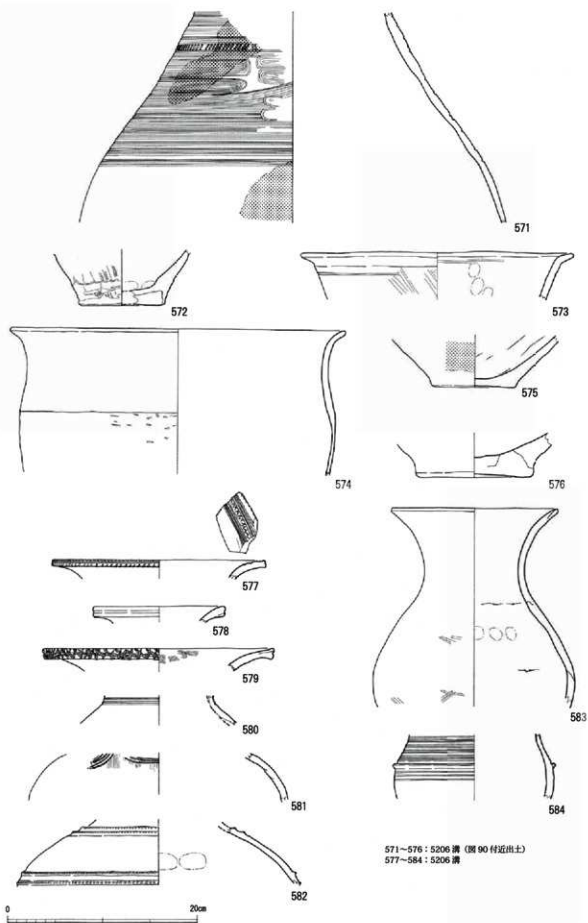


図 96 5 区 溝 8 (5206) 出土土器④

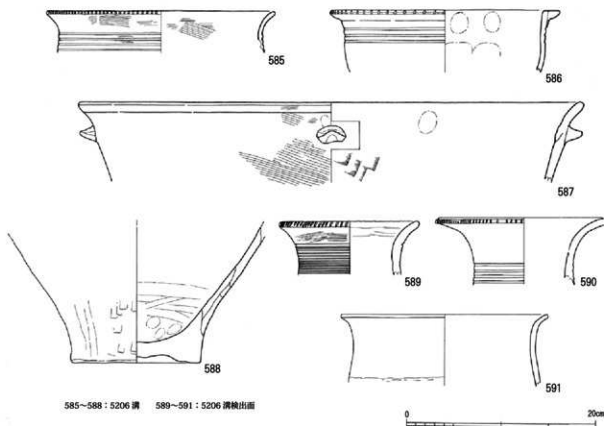


図 97 5区 溝 8 (5206) 出土土器⑤

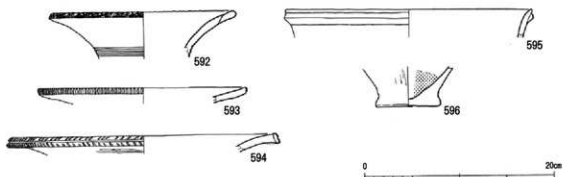
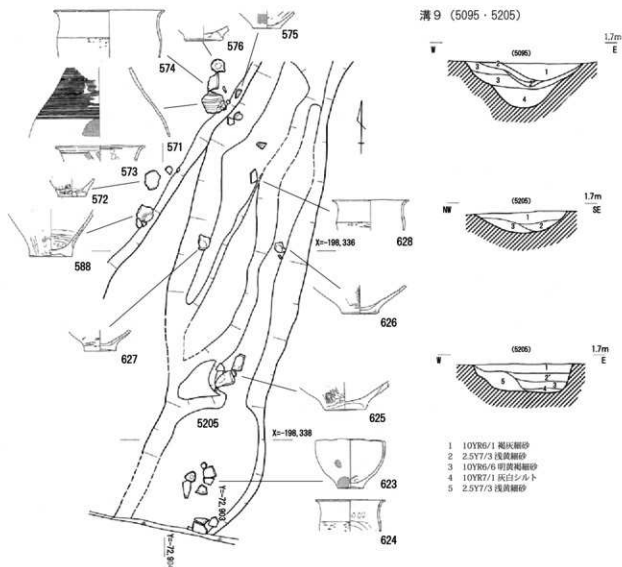


図 98 5区 溝 8 分流 (5093) 出土土器

と考えられる。図 90・99 の遺物出土状況図のとおり弥生時代前期の土器の出土量が多いが、中期中葉までの土器が混在する点に注意される。

518 ～ 591 は溝 8 から出土した。518 ～ 520 は溝 8 北半 (5096 溝) から出土した土器であるが、溝 8 南半に対して出土量は極端に少ない。518・520 はヘラ描き沈線を施した広口壺と甕。519 は瀬戸内系の逆し字状口縁をもつ甕ないし鉢であり、胎土分析を行っている。なお 589 ～ 591 は 5096 溝の検出面で出土した土器である。

521 ～ 588 は溝 8 南半 (5206) 出土土器である。521 は最下層から出土した土製円盤。522 ～ 531 は下層出土の広口壺。522 は口縁部内面に竹管文を施す。530 と 531 は同一個体の可能性がある。520 ～ 535 は下層出土の鉢ないし甕。533 は胴部に突帯をもつ。536・537 は紀伊型甕。肩



溝 10 (5118・5187・5012)

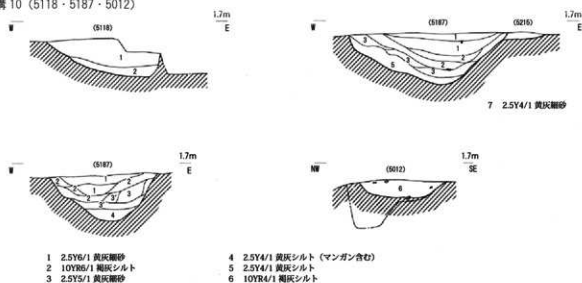


図99 5区 弥生時代 溝9(5095・5205)・溝10(5118・5187・5012)(S=1:40)

部の稜は溝6よりも明確である。538～542は壺・甕・鉢の底部。

543～545は中・下層出土土器。

546～549は広口壺の口縁部。549は頸部内外面に突帯をもつ。550は櫛描き文、551は竹管文を施す。552・553は大型の鉢で、552は口縁部に把手状の部分貼りつける。554～557は紀伊型甕。

559～566・570は図90の出土状況図の位置で集中して出土した広口長頸壺。溝8の南端部、溝9と合流する付近にあたる。無文でハケ・ヘラミガキ調整のみられるものが多く、1点だけ貼り付け突帯をもつ。

571～576・588は図99の出土状況図の位置で集中して出土した。溝8の中央部にあたる。571は付加条沈線をもつ櫛描き直線文の間に流水文と刻み目を組み合わせて頸部を飾る大型の壺。574は紀伊型甕で、肩部には稜がみられる。

577～587は出土層位が不明な土器である。577は口縁部内面にヘラ描き沈線と連続山形文を押す。581は肩部にヘラで木の葉文を描いた壺片。584は肩部に突帯を貼り、その上下をヘラ描き沈線で充填している。586は逆L字状口縁の上を刻み、肩部にはヘラ描き沈線を3条施す甕ないし鉢。587は口縁部付近に把手をつけた大型外反口縁鉢。

592～596は溝8の分流にあたる5093溝から出土した。592～594は口縁端部にヘラで装飾する広口壺片。595は口縁端部付近に三角形の突帯を貼りつける。596は底部の薄い甕の底部。

溝8は前期新段階から中期前葉の溝と考えられる。

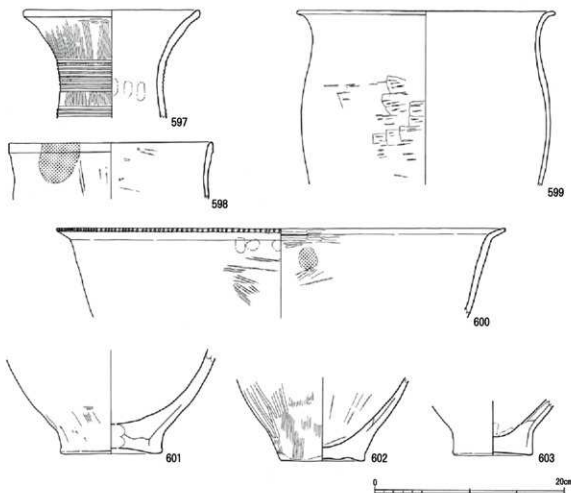


図100 5区 溝9 (5095) 出土土器①

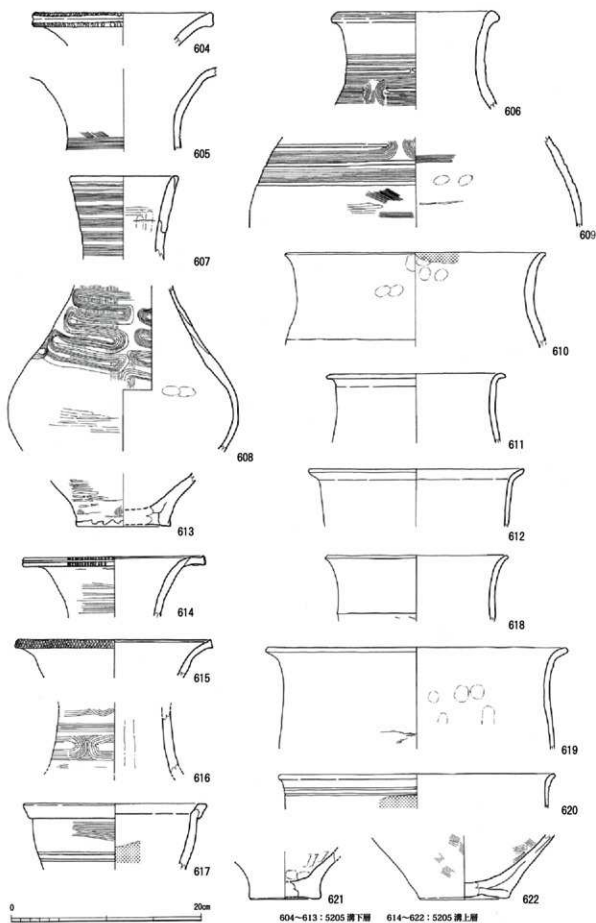
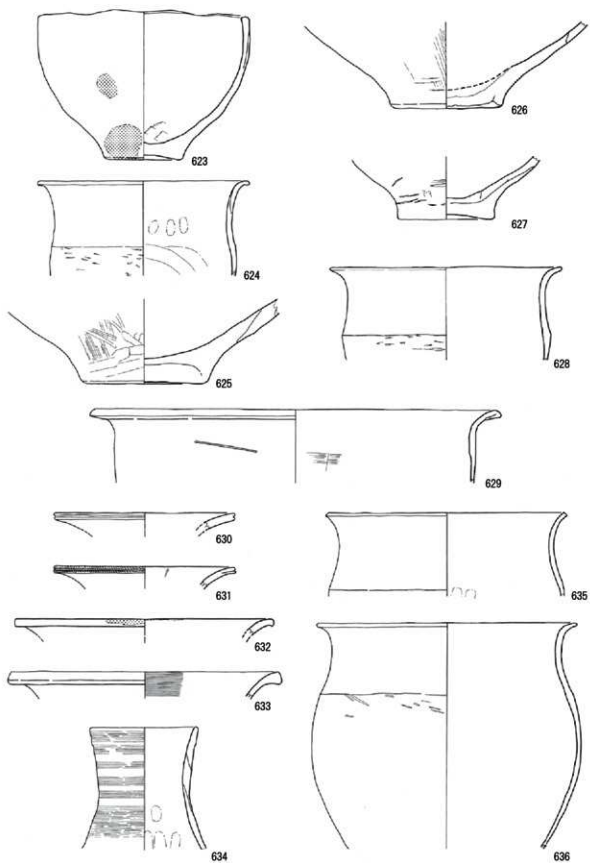


図 101 5区 溝9 (5205) 出土土器②



623~629 : 5205 溝 (圖 99) 付近 630~636 : 5205 溝



図 102 5 区 溝 9 (5205) 出土土器③

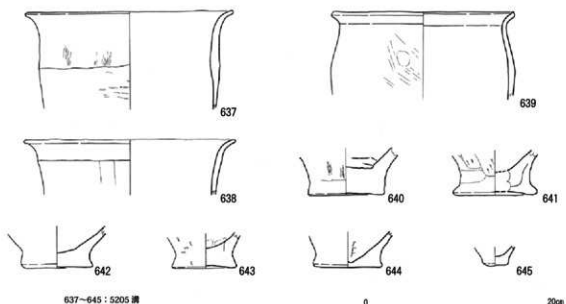


图 103 5区 溝9 (5205) 出土土器④

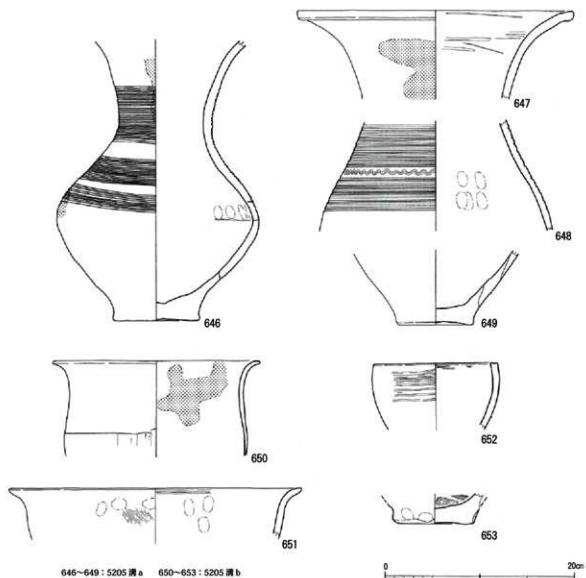


图 104 5区 溝9 (5205) 出土土器⑤

溝 9 (5095 溝 (5-1 区)・5205 溝 (5-4 区))

溝 9 は弥生時代中期の溝群の中央をやや蛇行しながら流れる溝あるいは流路で、5040 流路の上層に位置し、溝 8 に先行する。平均的に幅 1.0 ～ 1.2 m、深さ 0.3 ～ 0.5 m 程度であるが、溝の底では段差が検出されており、複数の時期の溝が重なっていることがうかがえる。溝の南側 (5205 溝) では、上層西溝 (5205 a 溝) と上層東溝 (5205 b 溝) の遺物を別々に取上げて調査が行われた。これらの溝からは、前期新段階から中期前葉の土器が出土している。

597 ～ 653 は弥生土器。597 ～ 603 は溝 9 の北側で出土している。2 段に分かれるヘラ描き沈線で頸部を飾る広口長頸壺 (597)、紀伊型甕 (599) である。

604 ～ 645 は溝 9 の中央部で出土した土器である。604 ～ 612 は下層出土土器。605 ～ 609 は櫛描き文で飾る壺で、606 ～ 613 は頸部を流水文ないし擬似流水文で飾る。608 は胎土分析実施資料。610 ～ 612 が紀伊型甕の破片とみられる。614 ～ 622 は上層出土土器。616 は頸部に櫛描きで擬似流水文を施す。617 は口縁部を粘土貼り付けで拡張した鉢で、腰部に 2 条のヘラ描き沈線を施す。618・619 は紀伊型甕。

623 ～ 628 は図 99 の遺物出土状況の位置で集中して出土しており、5205 中央部で出土した土器である。623 は無文の直口鉢。624・628 は紀伊型甕で、肩部に稜がみられる。624 は胎土分析対象資料である。

630 ～ 633 は広口壺の口縁部。634 は長頸の直口壺で、櫛描き文で飾る。635 ～ 638 は紀伊型甕で、肩の稜はやや甘い。639 は頸部のくびれる甕で、口縁端部が上方へ肥厚する。640 ～ 645 は甕の底部とみられる破片。

646 ～ 649 は 5205a 溝から出土した。646 は頸部と肩部に多条の沈線があるが、ヘラ描きか櫛描きか、摩耗が激しく判然としない。648 は付加条沈線の間をヘラのように太く深い沈線が走る櫛描き文で、直線文と波状文を施す。

650 ～ 653 は 5205 b から出土した。650 は紀伊型甕、652 はヘラ描き沈線を施す小型直口鉢。651 は外反口縁鉢。

溝 10 (5118 (5-1 区)・5187 (5-4 区)・5012 溝 (5-2 区))

溝 10 は 5040 流路の上面にあり、溝 8・溝 9 から不整形土坑を多数挟んだ東側で確認された。幅は 0.9 ～ 1.7 m、残存する深さは 0.2 ～ 0.5 m で、溝の断面形状は V 字形に近い。5215 溝の

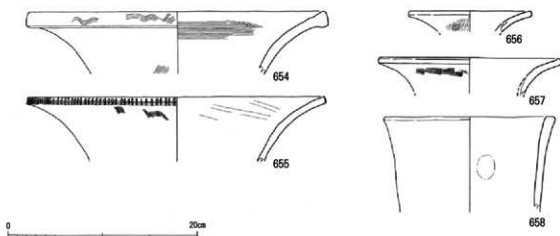


図 105 5 区 溝 10 (5118) 出土土器①

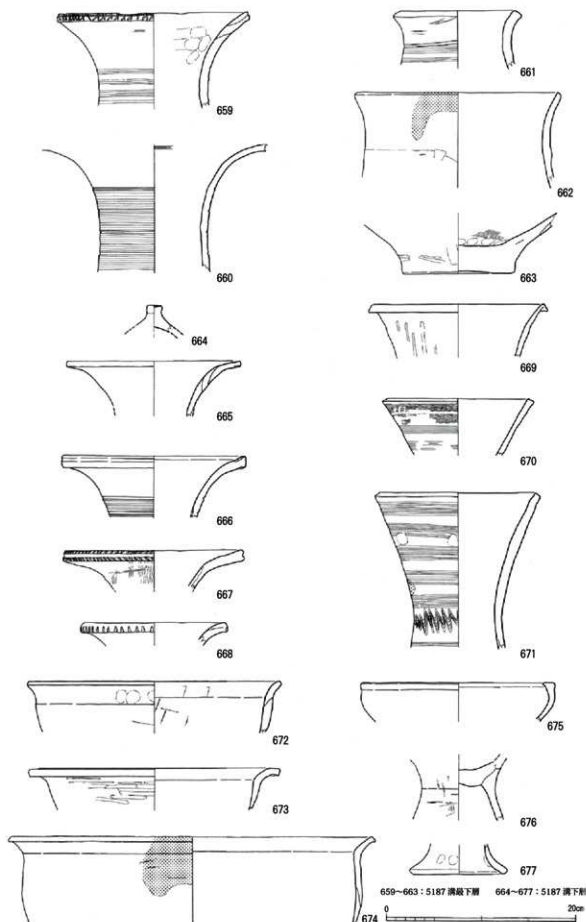


図 106 5区 溝 10 (5187) 出土土器②

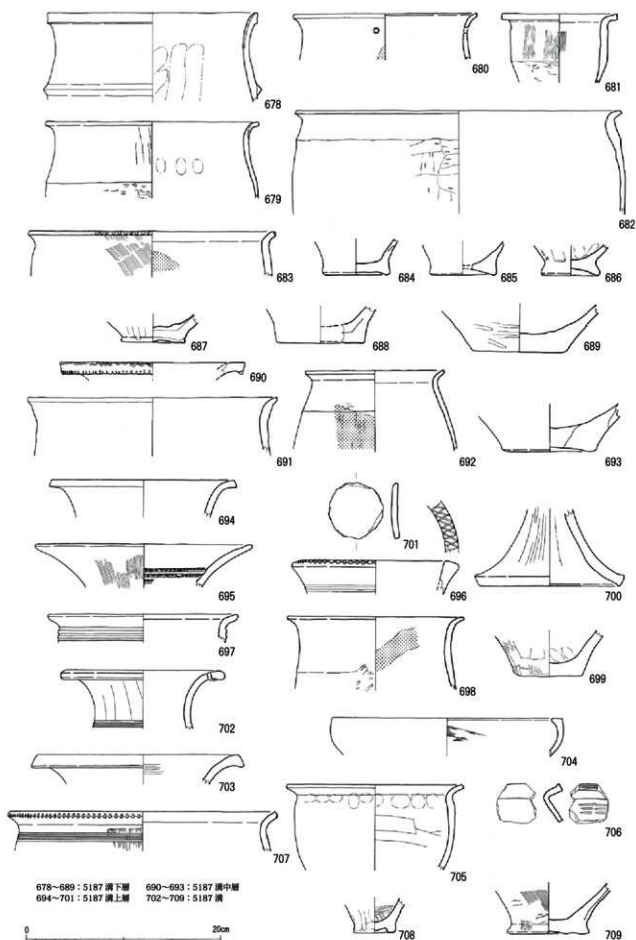


图 107 5 区 溝 10 (5187) 出土土器③

ように、先行する溝の堆積が肩の一部に残る。弥生時代中期中葉の溝と考えられる。

654～718は溝10及び関連遺構出土の弥生土器である。

654～658は溝10北部(5118溝)から出土した広口壺と直口壺の口縁部。654では拡張した口縁部の端面に、櫛描き波状文を施している。

659～714は、溝10中央部(5187溝)から出土した土器で、最下層・下層・中層・上層の土器に分けられる。659～663は最下層出土土器。壺の頸部は櫛描き文で飾り、広口長頸壺や紀伊型甕がみられる。664～689は下層出土土器。664は壺の蓋。665～668は広口壺の口縁部。669～671は長頸の直口壺。無文で口縁端部を三角形状に肥厚するもの(669)と、頸部全体を櫛描きの直線文と波状文で埋めるもの(671)が出土している。672～274は外反口縁鉢。675～677は高坏ないし鉢。675は胎土分析を行っている。678～683は甕で、紀伊型が多い。678は突帯文土器の影響が残るものとみられ、680は頸部に孔をもつ。681は小型品、682は大型品である。684～689は甕・壺の底部。690～693は中層出土土器。694～701は上層出土土器。695は口縁部内面突帯をもち、696は口縁端部が肥厚する直口壺で、頸部に櫛描き文がみられる。698は胎

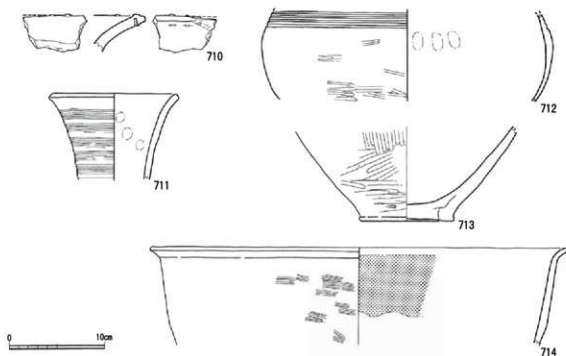


図 108 5区 溝10 (5012) 出土土器④

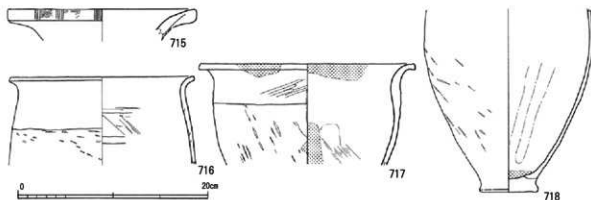


図 109 5区 溝10 分注 (5215) 出土土器

土分析資料である。702～709は上層から下層までの一括取り上げ資料である。

710～714は溝10南部(5012)から出土した土器である。710は口縁部下方から強く刺突された壺片。711は櫛描き直線文で飾る長頸壺。その他、壺(712・713)、外反口縁鉢(714)等が出土した。

溝10の肩部では先行する溝の堆積5215が残されており、715～718が出土した。715は厚手の広口壺口縁部で、端部を櫛描き直線文と波状文で飾る。

溝11(5182溝・5014溝・5183溝(分流))

溝11は5区中央の溝群の中で一番南側を流れる溝である。5040流路の上面で検出されており、北側では5183流路が合流している。検出面での幅1.1～1.4m、深さ0.2～0.6mで、上流側の断面形はU字形で浅く、下流側はV字形で深くなる。土器はヘラ描き沈線文をもつ弥生時代前期中～新段階の土器群と、多数の櫛描き文と少量の凹線文がみられる中期中葉を中心とする土器群に分かれる。前者は図110の遺物集中地点で出土しており(753～758・762)、後者は溝の上層の遺物(740～752)である。溝の下層遺物(719～739)はこれらが混在して出土していることが分かる。出土状況を勘案すると、溝11は中期中葉の溝であり、前期の下層遺構を削って流れているものと考えられる。下層遺構の候補として、図80の5040流路土層断面図で溝11の東側下層に検出されている溝(5040流路の2層に相当)などが考えられる。

719～802は溝11出土弥生土器等。

719～762は溝11北半(5182溝)から出土しており、最下層・下層・上層及び遺物集中地点の土器に分けられる。

719は5182溝の最下層出土、720～739は5182溝の下層出土。720～725は何れも広口壺であるが、施文方法は様々である。722は口縁端部に近い内面に連続する突帯を貼りつける。725は口縁端部とみられる部分を格子状に刻む壺の口縁部片。726は端部が若干垂下する。727は口縁が直口気味の壺で、櫛描き文を施す。728は櫛描き波状文の上下に凹線が入る。729・730は甕。紀伊型の特徴はなく、瀬戸内の影響を受けたものと考えられる。731は鉢ないし高杯。732は大型鉢で、口縁端部に指頭圧痕が並ぶ。733～739は平底の底部片で、小型化したものが多い。ハケ調整の甕底部が見受けられる。720～724・732は前期新段階の土器、726～731は中期中葉の土器であろう。

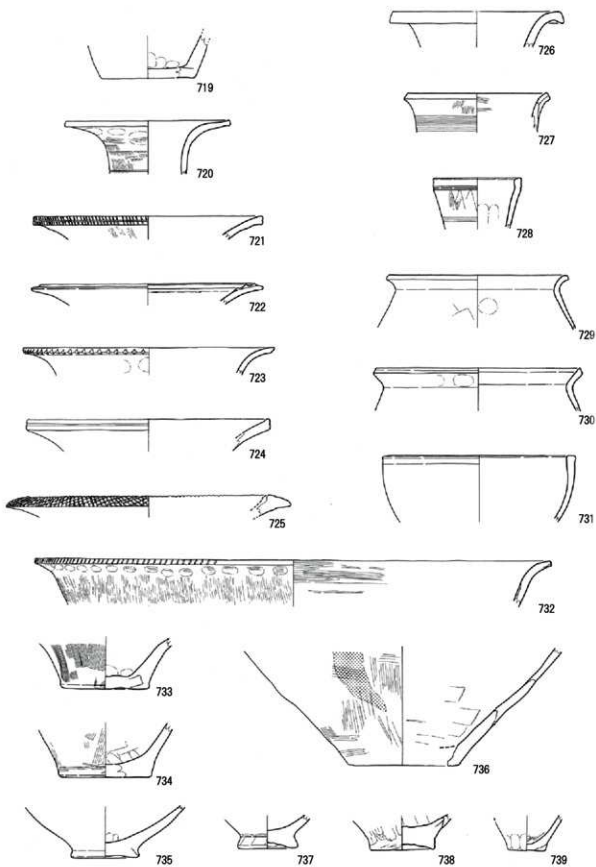
740～752は5182溝上層で出土した中期中葉の土器。740～744・747は頸部を櫛描き文で飾る壺。745は口縁部内外面に凹線をもつ。748・749は紀伊型甕で、口縁部が屈曲し、端部に面を有する。

750はタタキ甕の底部。752は、てづくね土器。

753～758・762は5182溝中央の遺物集中地点(図110参照)で出土した弥生時代前期中～新段階の土器である。755・756は口縁部内面突帯をもつ広口壺。瀬戸内の阿方式の影響を受けた土器と考えられるが、胎土は片岩を含む在地の土を使う。758は遠賀川系の形状を示す壺。762は頸部に3条のヘラ描き沈線を施す鉢。その他、753・757など底部片が出土している。

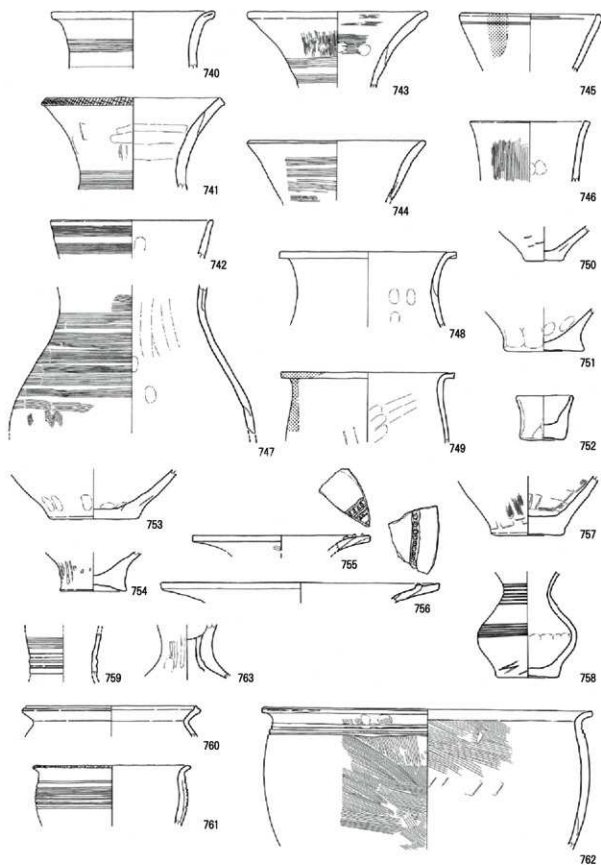
このほか前期の土器(761)と中期の土器(759～760)が出土している。

766～802は溝11の南側(5014溝)で出土した弥生土器である。764～774が下層、775～783が上層、784～802は層の区分なく出土した土器である。溝11北側(5182溝)の上層と同じ傾向をもつ土器が出土しているものと考えられる。



719 : 5182 溝段下層 720~739 : 5182 溝下層

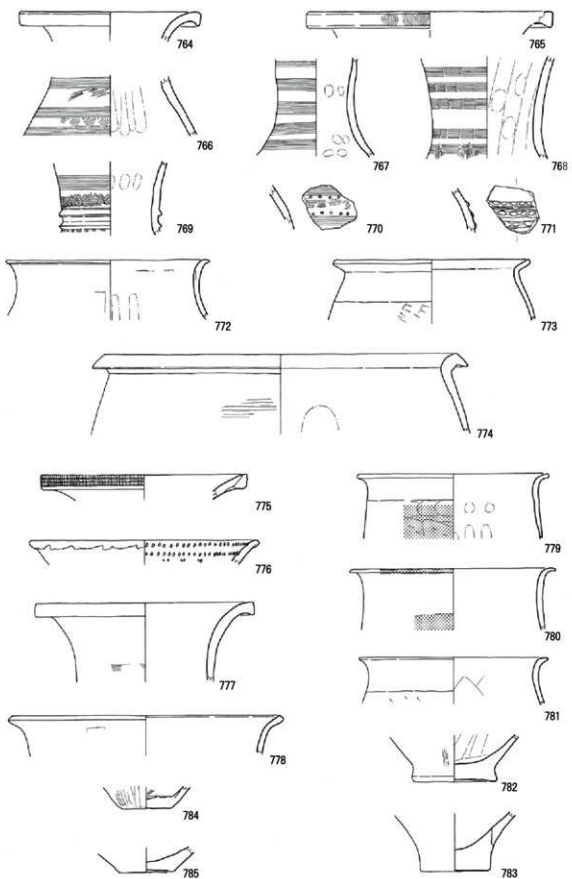
図 111 5 区 溝 11 (5182) 出土土器①



740~752: 5182 溝上層 753~762: 5182 溝

0 20cm

図 112 5区 溝 11 (5182) 出土土器②



764~774 : 5014 溝下層 775~785 : 5014 溝上層

0 20cm

図 113 5区 溝 11 (5014) 出土土器③

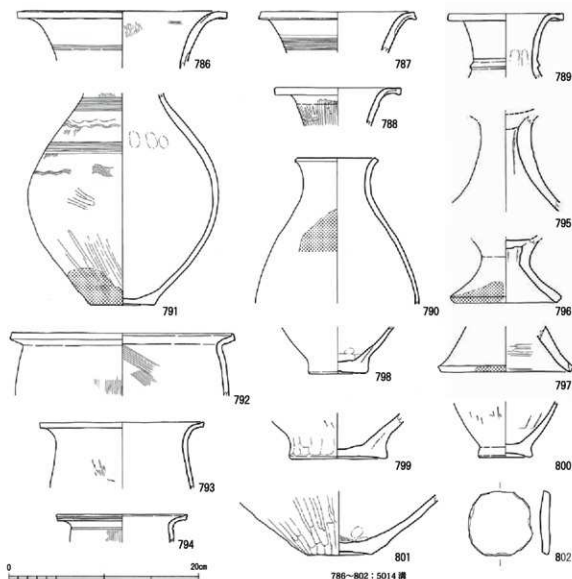


図 114 5区 溝 11 (5014) 出土土器④

764～774は下層の土器。764・765は壺の口縁部が拡張する。766～770は壺の頭部から肩部にかけての破片で、櫛描きの直線・波状・簾状・扇形文のほか、突帯・刺突で装飾する。772は紀伊型甕、774は口縁部が下方に折れ曲がる甕。773はその中間的な形状を示す。775～783は上層の土器。775～777は口縁端部を高く起こし、ヘラや櫛・列点で装飾する。779～781は紀伊型甕。782～785は平底の土器底部。

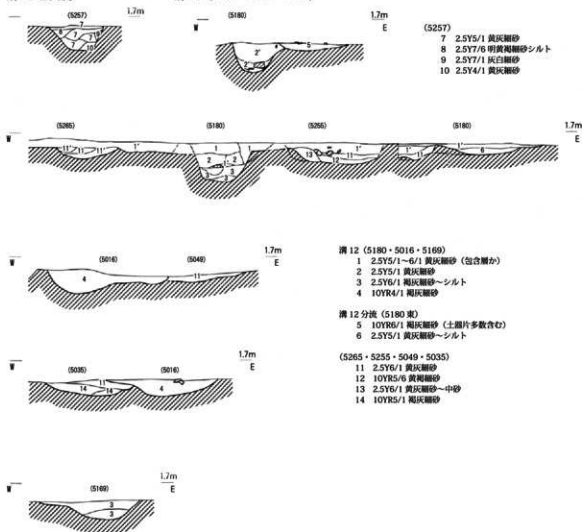
786～789は口縁部が屈曲し、端部に面をもつ壺。789は胎土分析を行っており、片岩が多量に含まれる在地の土器である。791も胎土分析を行っており、肩部は櫛描き文で飾る。792は頸部が屈曲するハケ甕。795は高坏片。796・797は脚部片。798～801は壺甕類の底部で、薄手となる。802は土器片を利用した円盤状土製品。

溝 12 (5180 溝 (5-4 区)・5016 溝 (5-2 区)・5169 (5-5 区))

溝 12 は、5 区中央部で確認された古墳時代の溝である。弥生時代前期の 5040 流路や弥生時代中期の溝群より約 5 m 南側の地山上を、北東から南西に平行して流れている。溝は北半で幅 0.6 m、深さ 0.4 m、南半は幅 1.3 m、深さは 0.2 m となる。北半では、5180 の東に分かれる溝状

溝 12 北支流

溝 12 (5180・5016・5169)



- (5257)
- 7 2.5Y5/1 黄灰細砂
 - 8 2.5Y7/6 明黄褐細砂シルト
 - 9 2.5Y7/1 灰白細砂
 - 10 2.5Y4/1 黄灰細砂

- 溝 12 (5180・5016・5169)
- 1 2.5Y5/1-6/1 黄灰細砂 (包含層か)
 - 2 2.5Y5/1 黄灰細砂
 - 3 2.5Y6/1 褐灰細砂～シルト
 - 4 10YR4/1 褐灰細砂

- 溝 12 分岐 (5180 東)
- 5 10YR6/1 褐灰細砂 (土層片多数含む)
 - 6 2.5Y5/1 黄灰細砂～シルト

- (5265・5255・5049・5035)
- 11 2.5Y6/1 黄灰細砂
 - 12 10YR5/6 黄褐細砂
 - 13 2.5Y6/1 黄灰細砂～中砂
 - 14 10YR5/1 褐灰細砂

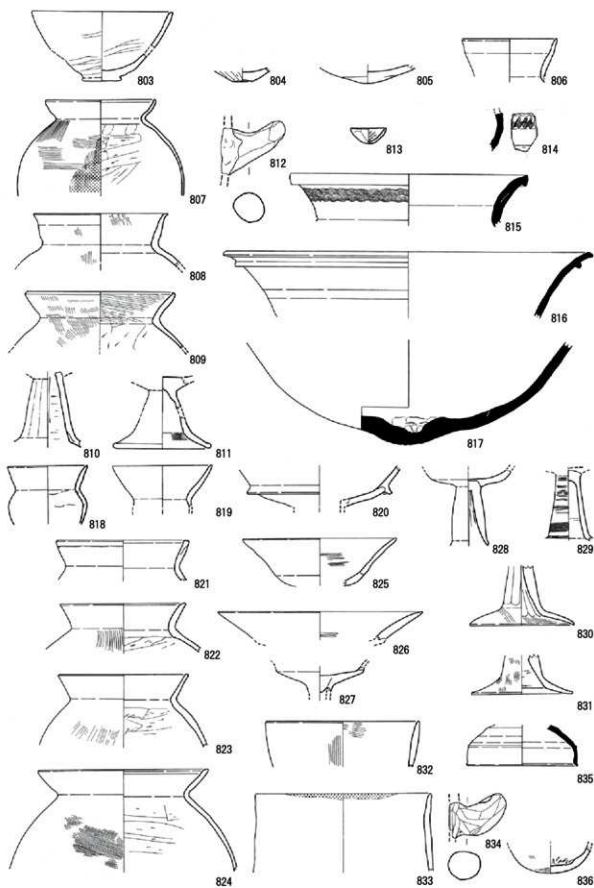
- 溝 13 (5019・5144)
- 15 10YR4/2 灰黄褐細砂
 - 16 7.5YR6/6 橙細砂～シルト
 - 17 10YR6/1 褐灰シルト

- 溝 14 (5142)
- 18 7.5YR5/1 褐灰細砂～シルト
 - 19 7.5YR4/1 褐灰細砂～シルト
 - 20 10YR5/4 に近い黄褐細砂～シルト

- 5024 溝
- 21 10YR4/1 褐灰細砂

- 5143 溝
- 22 10YR6/1 褐灰細砂
 - 23 10YR6/6 明黄褐シルト

図115 5区 古墳時代 溝12(5180・5016)・溝13(5019・5144)・溝14(5142)(S=1:40)



803~817: 5180 溝 818~835: 5016 溝 836: 5169 溝

0 20cm

图 116 5 区 溝 12 (5180 · 5016 · 5169) 出土土器

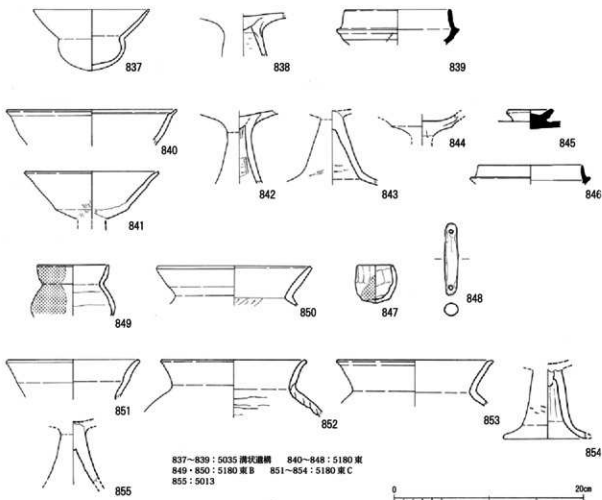


図 117 5区 溝 12 関連遺構出土土器

遺構と、やや西向きに分かれる 5257 溝 (= 5013 溝) が検出されている。二つの溝・溝状遺構と溝 12 が接するあたり一帯は、古墳時代前期～中期の多数の不整形土坑に覆われた不安定な状態となっている。

803～836 は溝 12 出土の土師器と須恵器。803～817 は溝 12 北半 (5180) から出土した。803～809 は古墳時代前期と考えられる土師器。803 は弥生 V 様式系の鉢であるが、タキ痕が残らない。805 は尖底の甕片。806 は二重口縁壺の口縁部。807～809 は布留式の甕。807 は口縁端部が上方に肥厚し、頸部内側には段をもつ。外面はハケ調整、内面はケズリ調整で、器壁は薄い。810～813 は古墳時代中期の土師器。813 はミニチュアの製塩土器状を呈す。814～817 は初期須恵器。816 は口縁部下方に突帯をもち、817 は底部が尖底で内面に絞り痕をもつ。818～835 は溝 12 南側 (5016 溝) から出土した。819・820・824・829 は古墳時代前期、その他は古墳時代中期の土器と考えられる。甕と高坏が多数、小型丸底土器と鉢・甕類が少数ある。須恵器は微量出土する。836 は溝 12 南端部 (5169) で出土した丸底土器の底部片。

837～839 は溝 12 南部の西屑にある 5035 溝状遺構で出土した。837 は前期の小型丸底鉢、839 は中期の須恵器坏身。

840～846・849・850 は 5180 東出土。840 は有段口縁鉢。841～844 は土師器高坏、845 は須恵器の摘み、846 は坏身。847・848 は 5180 東 B 出土甕。851～855 は 5180 東 C 出土土師器。

溝 13 (5019 溝 (5-2 区)・5144 溝 (5-5 区))

溝 13 は 5 区南部で検出した北東から南西に流れる溝群の中で、一番北に位置する溝である。

溝の北半 (5019 溝) で幅 2～3 m、深さ 0.2 m、南半 (5144 溝) で 0.5 m、深さ 0.1～0.2 m である。

溝の北部 (5019 溝) は浅く広がって途切れており、下層に先行する 5024 溝がやや東側に流れていく状況が確認される。溝の南部 (5144) では、溝 15 の下層を流れていることが確認できる。弥生時代中期～後期の弥生土器片 (856・857) のほか、土師質の土器片が微量出土した。

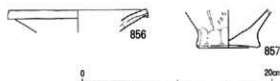


図 118 5 区 溝 13 (5019) 出土土器

溝 14 (5142 溝 (5-5 区)・5001 溝 (5-3 区))

溝 14 は 5 区南部の溝群の中央を流れる溝である。溝 14 の北部 (5142 溝) で幅 1.2 m、深さ 0.2 m、南部 (5001 溝) で幅 0.8～1.0 m、深さ 0.2 m である。弥生土器片と土師器片が混在する。

858～865 は溝 14 出土の弥生土器と土師器。弥生土器は弥生時代中期頃の蓋 (858)、壺 (859) のほか、図 119 の出土状況図の位置から、櫛描き文で飾る広口長頸壺 (859) が出土している。土

溝 14 (5001)・溝 15 (5002・5140・5006)

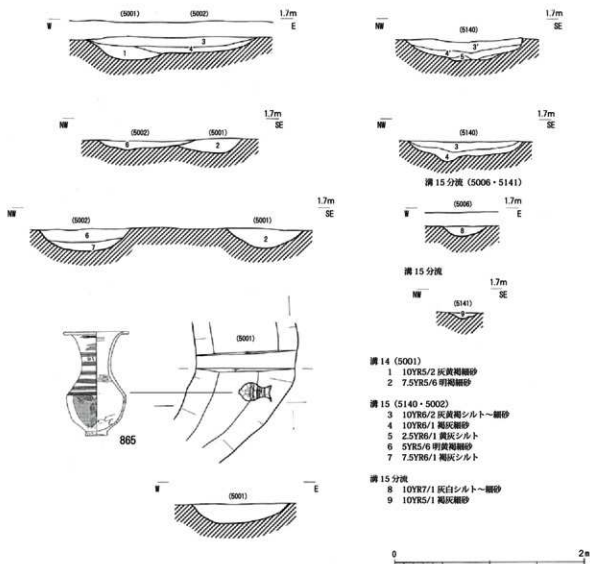


図 119 5 区 弥生～古墳時代 溝 14 (5001)・溝 15 (5140・5002) (S=1:40)

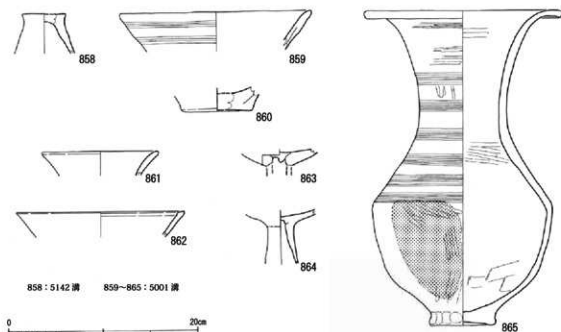


図 120 5区 溝 14 (5142・5001) 出土土器

師器は甕の口縁部 (861・862)、高坏接合部 (863・864) が出土している。

溝 14 の北側に平行して 5143 溝が流れており、弥生土器片が出土する。これらの溝はともに溝 15 に先行する溝である。これらの 2 本の溝の北側延長上付近に 5020 溝・5027 溝があり、弥生土器片と土師器・須恵器が少量ずつ出土している。

溝 15 (5140 溝 (5-5 区)・5002 溝 (5-3 区))

溝 15 は 5 区南部の溝群のなかで南側を流れる古墳時代中期の溝である。幅 1.0 ～ 1.2 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m。5140 溝上層からは青銅製の鈴 (K6) が出土している。

866 ～ 871 は 5140 溝の土師器・須恵器。866・867 は 5140 溝下層出土の土師器高坏と須恵器坏である。868 ～ 871 は上層出土の土師器把手 (868)、高坏 (872)、須恵器坏蓋 (869・870)、須恵器坏身 (871) である。

なお、溝 15 の北端付近から幅約 0.4 m の細い溝 (5141 溝・5006 溝) が分岐しており、土師器・須恵器片が出土している。

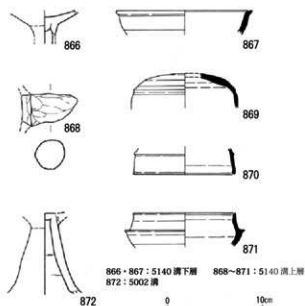


図 121 5区 溝 15 (5140・5002) 出土土器

(3) 5040 流路上面の遺構群

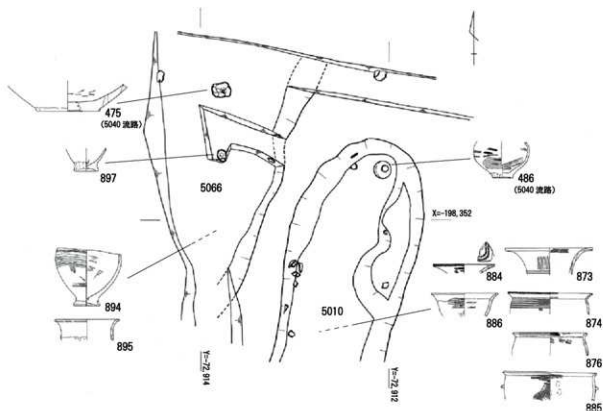
5 区中央を北東から南西に流れる 5040

流路の上面で、中期の溝群に前後する時期に形成された遺構が集中して検出された。5040 流路の埋土としての性格が強く、溝状遺構・不整形土坑・土坑・ピットが確認されている。

5010・5066 溝状遺構

5-4 区南西から 5-2 区北西にかけて検出された溝状の堆積である。切り合い関係から中期の溝

5010、5066 溝状遺構 (5-2 区)



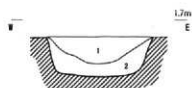
5066 溝状遺構



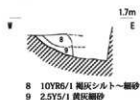
(5010 溝状遺構)
1 10YR5/1 褐灰細砂～シルト
2 10YR5/1 褐灰細砂～シルト

(5066 溝状遺構)
3 10YR4/1 褐灰細砂

5010 溝状遺構

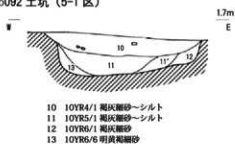


5077 溝 (5-1 区)



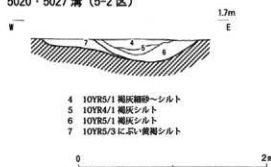
8 10YR5/1 褐灰シルト～細砂
9 2.5Y5/1 黄灰細砂

5092 土坑 (5-1 区)



10 10YR4/1 褐灰細砂～シルト
11 10YR5/1 褐灰細砂～シルト
12 10YR5/1 褐灰細砂
13 10YR5/6 明灰褐細砂

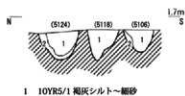
5020・5027 溝 (5-2 区)



4 10YR5/1 褐灰細砂～シルト
5 10YR4/1 褐灰シルト
6 10YR5/1 褐灰シルト
7 10YR5/3 に近い黄褐シルト

図 122 5 区 弥生時代の各種遺構①

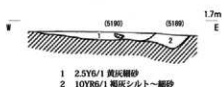
ビット列 (5-1 区)



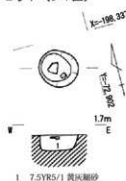
ビット列 (5-1 区)



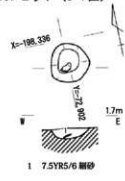
5189, 5190 不整形土坑 (5-4 区)



5193 ビット (5-4 区)



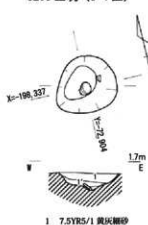
5197 ビット (5-4 区)



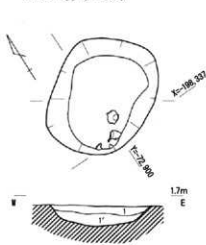
5199 土坑 (5-4 区)



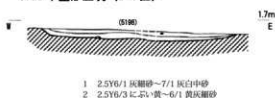
5203 土坑 (5-4 区)



5196 土坑 (5-4 区)



5198 不整形土坑 (5-4 区)



(5196 土坑)

1 2.5Y6/1 黄灰細砂

(5199 土坑)

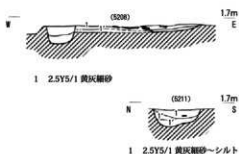
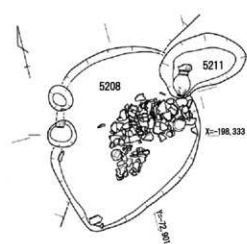
1 2.5Y6/1 黄灰細砂

2 2.5Y6/3 にふい黄～6/1 黄灰細砂

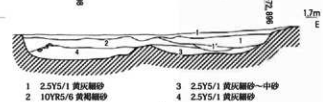
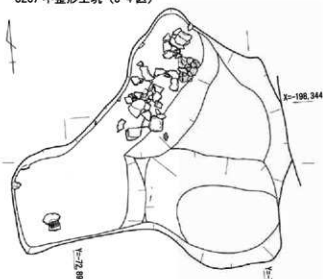


図 123 5 区 弥生時代の各種遺構②(S=1 : 40)

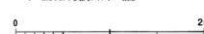
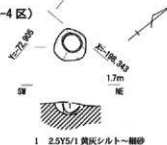
5208、5211 土坑 (5-4 区)



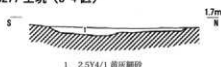
5267 不整形土坑 (5-4 区)



5284 ビット (5-4 区)



5277 土坑 (5-4 区)



1 2.5Y4/1 黄灰細砂

図 124 5 区 弥生時代の各種遺構③(S=1:40)

群に先行する遺構で、5066 は溝 9 の下層溝に相当する可能性がある。879 ～ 882 は 5010 溝状遺構の上層で出土したヘラ描き沈線文で飾る壺・甕類。884 ～ 890 は 5010 溝状遺構の下層 (5040 流路相当層) から出土した土器で、口縁部内面に突帯をもつ壺や外反口縁鉢等がある。5066 溝状遺構からは多条のヘラ描き沈線をもつ直口鉢や紀伊型甕等 (894 ～ 898) が出土している。

5048・5188・5189・5196・5198・5275 不整形土坑等 (5-2 区・5-4 区)

中期の溝群と前後する時期の土坑等である。浅い堆積の中に土器が多量に含まれている。5-2 区の 5048 土坑から穿孔土器 (893)、5-4 区の 5188・5189 不整形土坑から壺甕類 (907 ～ 910)、5196 土坑から広口壺類 (913 ～ 917)、5198 不整形土坑から甕類 (919 ～ 921) が出土している。

5092・5185・5208・5211・5277 土坑 (5-1 区・5-4 区)

中期の溝群の上層に形成された土坑である。5-1 区の 5092 土坑は円形の土坑で、紀伊型甕や付加条沈線をもつ櫛描き文の直口壺片が出土している。5-4 区の 5185 土坑・5208 土坑からは紀伊型甕 (906、929 ～ 931)、5211 土坑は長径 0.8 m、短径 0.3 m、深さ 0.4 m を測る長楕円形の土坑で、長頸気味の広口壺 (932)、5277 土坑からは直口壺 (945) が出土している。前期新段階か

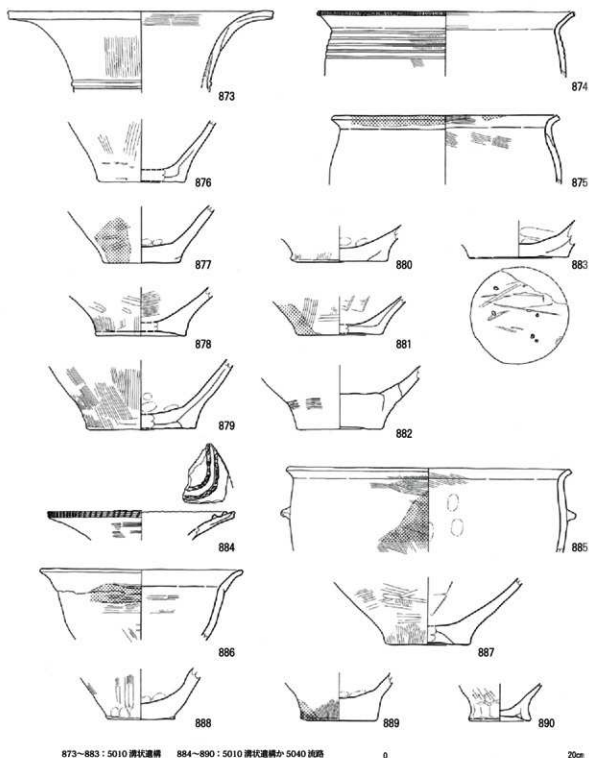


図 125 5 区 弥生時代の各種遺構出土土器①

ら中期中葉頃の遺構と推定される。

5191・5193・5197・5284 ビット (5-4 区)

中期の溝群と前後する時期のビットである。甕底部 (912)、紀伊型甕 (918)、壺胴部 (946) 等が出土しており、中期前葉から中葉頃の遺構と推定される。

5203・5204 ビット (5-4 区)

中期の溝群のうち溝 9 の上層で検出されたビットである。926～928 が出土しており、紀伊型

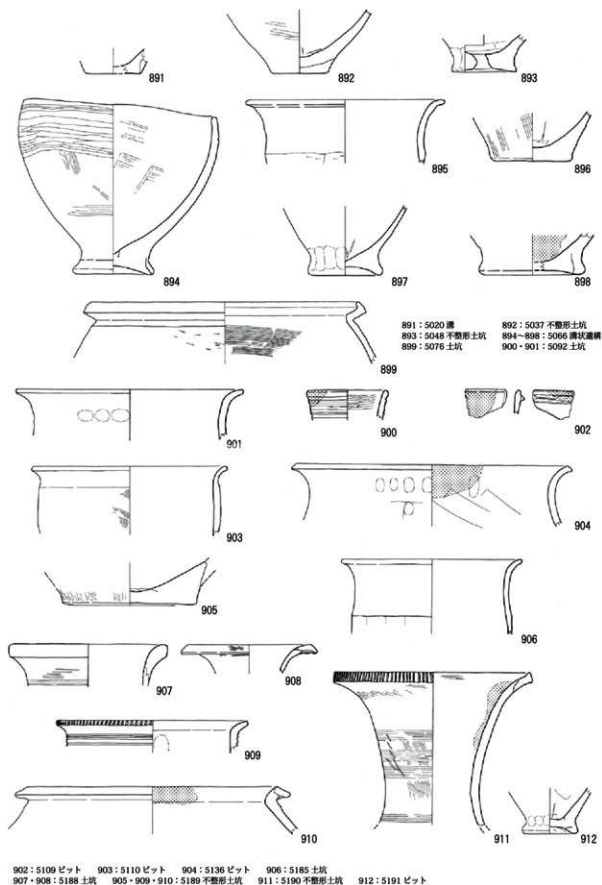
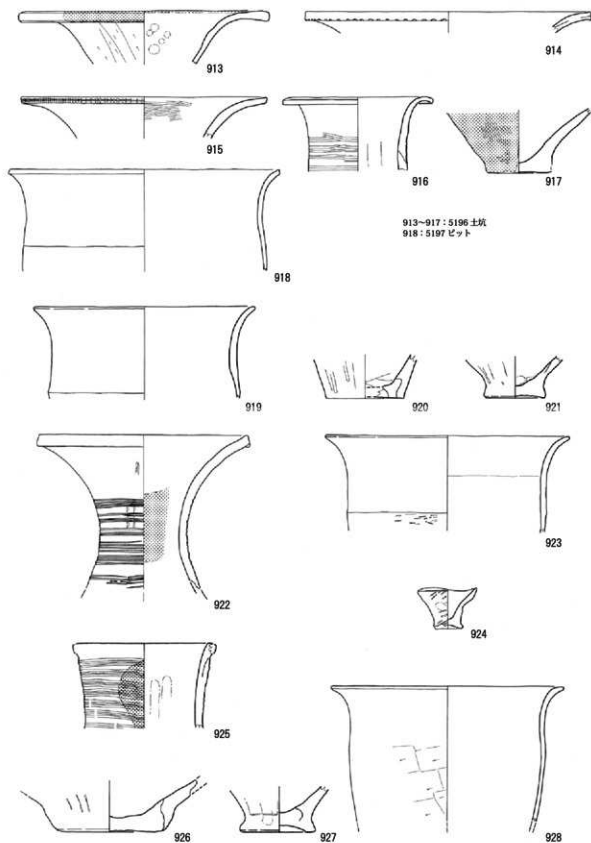


図 126 5 区 弥生時代の各種遺構出土土器②



919~921 : 5198 土坑 922~924 : 5199 土坑
925~927 : 5203 ビット 928 : 5204 ビット

0 20cm

図 127 5 区 弥生時代の各種遺構出土土器③

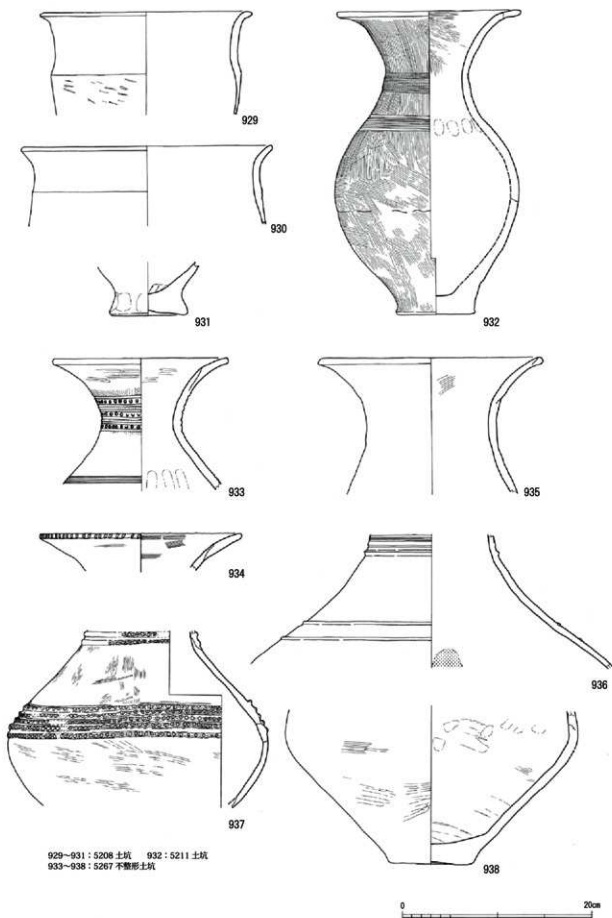


図 128 5 区 弥生時代の各種遺構出土土器④

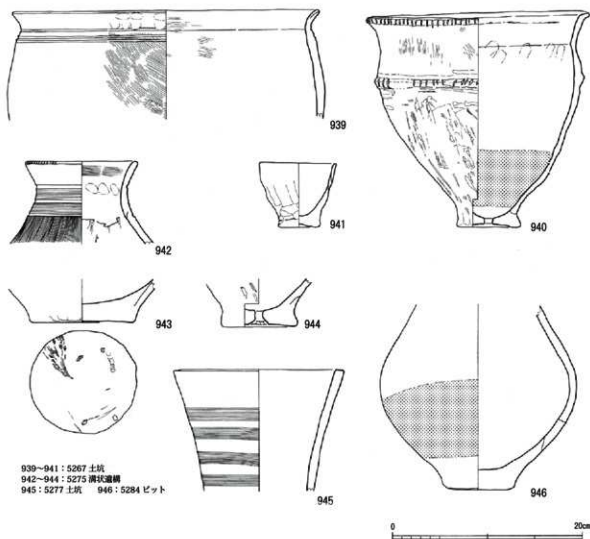


図 129 5 区 弥生時代の各種遺構出土土器⑤

甕は肩の稜線が曖昧である。

5267 不整形土坑 (5-4 区)

5040 流路の南東側の肩部付近に形成された不整形の堆積で、溝 11 に先行する。933 ~ 941 が出土し、広口壺 (933 ~ 936) は口縁部に丸みがあり、胴の張った形態を呈する。933 は頸部と肩部にヘラ描き沈線を施し、頸部では竹管文と組み合わせて装飾する。936・937 は頸部と肩部に突帯を貼り付け、937 は突帯上に刻む。938 は体部下半をミガキ調整する。939 は頸部に 3 条の沈線を施す、大型の甕なし鉢である。940 は突帯文系土器の影響を残す紀伊型甕で、口縁部と肩部突帯上に刻む。底部を穿孔し、甕として転用した可能性がある。941 は小型鉢。

5275 溝状遺構 (5-4 区)

5011 溝状遺構と 5066 溝状遺構の間で検出された溝状遺構で、遺構の切り合い関係は不明。942 は付加条沈線をもつ壺で、口縁部の一部に刻みを施す。943 は稲穂の圧痕がある壺底部で、944 は底部穿孔土器。

(4) その他の弥生時代の遺構

5020 溝・5027 溝 (5-2 区)

5-2 区東端で検出した溝である。5020 溝は東側の溝で、5027 溝は西側の溝である。5020 溝は

2 時期の堆積があり、その下層を 5027 溝が流れる。5020 溝は幅 1.1 m、深さ 0.2 m で、5027 溝は幅 1.0 m 以上、深さ 0.2 m である。5020 溝からは弥生土器・土師器・須恵器が微量出土しており、すくなくとも 5020 溝の上層溝は古墳時代中期とみられる。

5076 土坑 (5-1 区)

5-1 区の溝 6 (5081 溝) の東側にある径約 1 m の土坑。899 はハネあげ口縁が顕著で、胴部の張りの大きい瀬戸内系甕。5076 は中期中葉を中心とする時期の遺構と推定される。

5077 溝 (5-1 区)

溝 7 の北側延長部の可能性のある溝。5-1 区北西で検出した。

ピット群 (5109・5110・5136 ピット他：建物跡か) (5-1 区)

5-1 区南側で、径約 10 m の円形の範囲内に 50 ～ 60 基のピット・土坑が集中して分布する。ピットは径 0.2 ～ 0.4 m で、深さ 0.2 ～ 0.4 m のものが多く、黄灰シルト～細砂の埋土からなる。このうち、南西部の 5106 や 5123・5124 を含むピット列は、掘立柱建物などの構造物が存在した可能性が高いとみられている。ピット群の中央を溝 7 が縦断しており、溝 7 に先行する時期の遺構であると考えられる。

902 ～ 904 はピット群から出土した弥生時代前期の土器。902 は突帯文系土器と考えられる壺か甕の破片。903 は外反口縁鉢。904 は紀伊型甕。

なお、御坊市の堅田遺跡を始めとする弥生時代前期の和歌山県沿岸部の遺跡では、床面が硬化・変色するだけで堅穴を伴わず、中央土坑がなく柱穴が円形にまわる平地式住居が確認されており、この遺構もそれにあたる可能性がある。

5175 ピット (5-5 区)

5-5 区の北西端部で検出したピット。外面ハケ調整の弥生土器壺底部を検出した。

(5) 庄内式期～古墳時代中期の各種遺構

庄内式期から古墳時代中期には、5 区の北側に溝 6、5 区南半に溝 12 と関連遺構、溝 13 ～ 15 と関連遺構が分布する。溝については先述したので、その他の遺構について記述する。

溝 12 沿いのピット群 (5036・5047・5053・5059・5179・5259・5281・5282 ピット) (5-2・5-4・5-5 区)

古墳時代前期頃のピットとみられ、溝 12 に沿って南北 1 ～ 2 m の位置に分布する。ピットは径 0.4 ～ 0.6 m、深さ 0.4 ～ 0.6 m で、埋土に土師器や板状の片岩が含まれるものが多く、須恵器は含まれない。5-2 区の 5036 ピットでは上層で多数の土師器片が出土し、5047 ピットでは上層に片岩、下層に土師器小型器台 (947・948) が埋められていた。5-5 区の 5179 ピットでは穴の下部に片岩が据えられた状態で出土しており、弥生 V 様式系の甕の口縁部片が出土している。5281 ピットでは上層に布留式の甕が 2 点埋められており、底部穿孔等はみられない。5282 ピットは 5181 ピットに隣接し、弥生 V 様式系の甕片が出土している。

5078・5079 土坑 (5-1 区)

5-1 区の溝 6 の上で認識された土坑で、5078 土坑は 0.5 × 0.8 m、5079 土坑は 0.7 × 1.3 m、深さはともに 0.1 m 以下である。5079 土坑からは 949 ～ 951 が一括で出土していることから、庄内期の弥生 V 様式系の甕と高坏片と考えられる。2 区の 201 溝では弥生土器から古墳時代前期までの土器が混在して出土しており、5 区の溝 6 では弥生時代前～中期の土器しか出土していないので、当該資料は溝 6 の上層埋土を形成する窪みの残存部分にあたる土坑と考えられる。

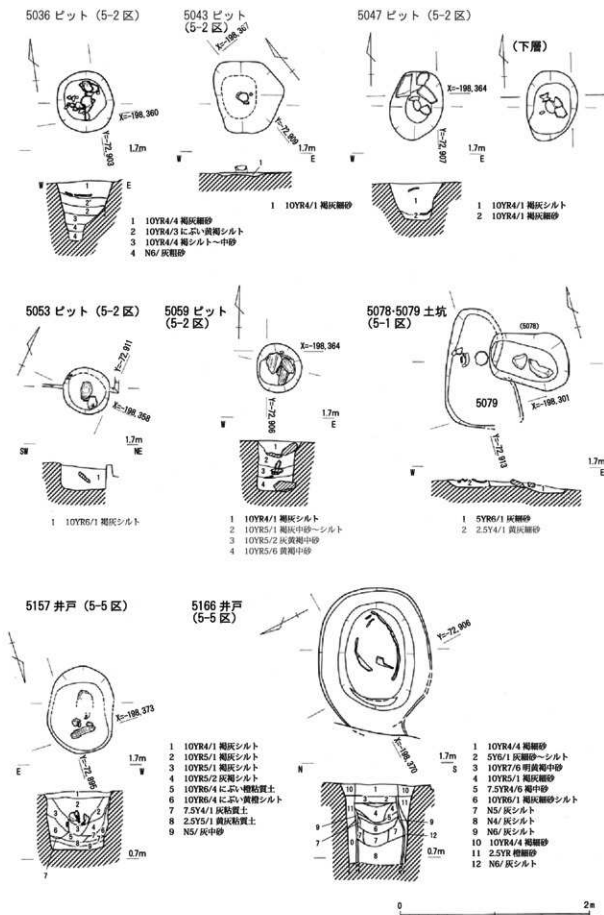


図 130 5 区 古墳時代の各種遺構①(S=1:40)

5171 柱穴 (5-5 区) 5172 柱穴 (5-5 区) 5173 柱穴 (5-5 区) 5174 柱穴 (5-5 区) 5179 ビット (5-5 区)

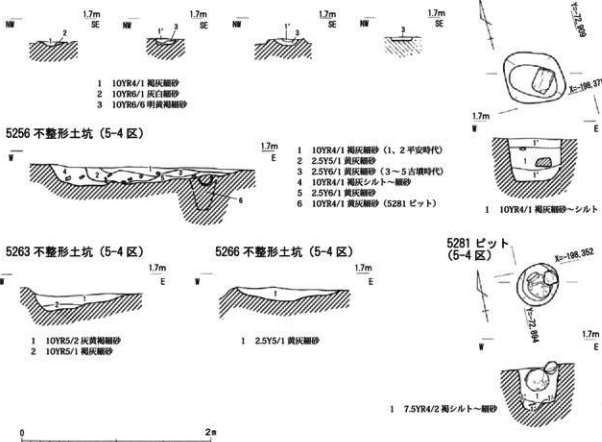


図 131 5 区 古墳時代の各種遺構②(S=1 : 40)

5088 土坑 (5-1 区)

溝 7 の西側にある径 0.7 m ほどの土坑。口縁部が若干屈曲する土師器壺の口縁部 (952) が出土した。5086・5087 土坑も同時期の可能性がある。

5157 井戸 (5-5 区)

5-5 区北東部で検出した素掘りの井戸である。直径 0.5 m、深さ 1.2 m で、上層は灰白色の細砂、にぶい黄色の細砂、下層は黄灰色シルトで埋まる。埋土の中層付近で古墳時代前期の土器が出土した。

953・954 は小型丸底土器の壺と鉢で、完形品。その他、小型丸底土器の胴部 (955)、高坏脚部 (956)、甕口縁部 (957) が出土した。

5166 井戸 (5-5 区)

5-5 区北西部で検出した、長径 0.8 m、短径 0.6 m の楕円形の井戸。井戸底面では削り抜ききの井戸側材が残存している。井戸の裏込め土からは土師器片、井戸内下層からは古墳時代中期の土師器・須恵器片が出土している。

ビット群 (建物推定遺構 : 5171 ~ 5174 柱穴) (5-5 区)

5-5 区北部で検出した方形に並ぶビットで、1 間×1 間の建物の柱穴と推定される。柱穴は径 0.2 m、深さ 0.1 m 未満で、方位は溝等の地形に沿った向きに方形に並ぶ。柱間距離は 2.2 ~ 3.0 m とややいびつであり、周囲に堅穴の痕跡は確認できない。土師器とみられる土器片が 1 点出土したのみで、年代は不詳である。

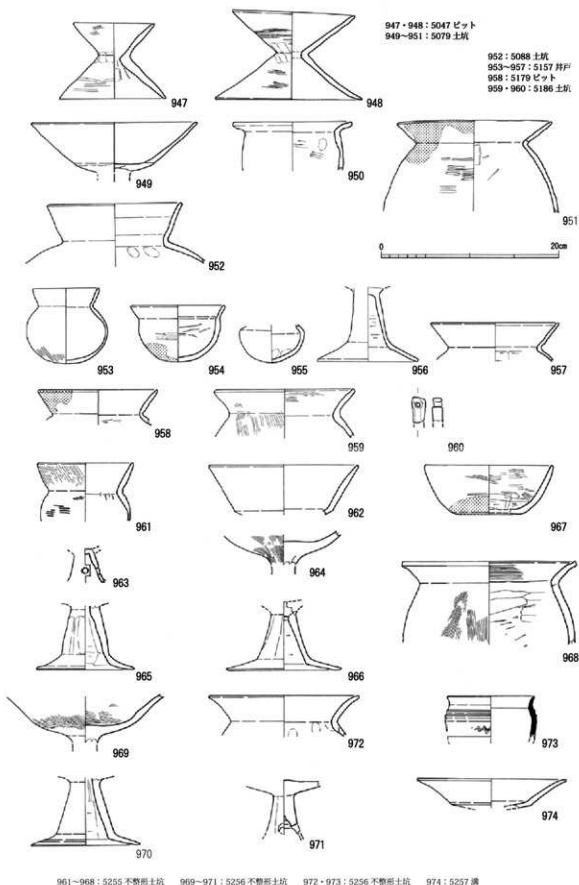


図 132 5区 庄内式期～古墳時代の各種遺構出土土器①

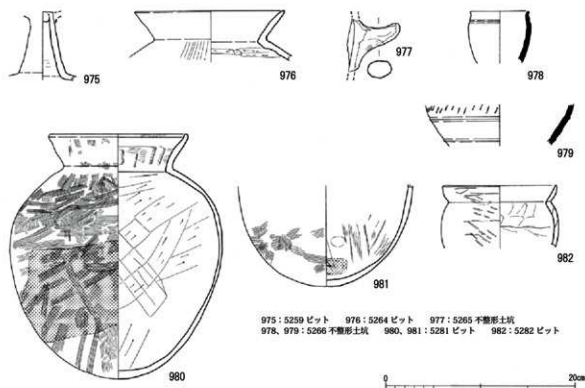


図 133 5 区 庄内期～古墳時代の各種遺構出土土器②

溝 12 沿いの不整形土坑群 (5186・5255・5256・5263・5264・5265・5266 不整形土坑) (5-4 区)

溝 12 北半 (5180 溝) と 5257 溝の接するあたりには、古墳時代前期～中期の土器を含む不整形土坑が多数分布している。これらは不安定な地にあった多数の窪みとして認識される。5180 溝と 5180 東溝状遺構の間にある 5255 不整形土坑には土器が多量に含まれており、5256 不整形土坑は上層に平安時代の遺物が混じっている。

959～974、976～979 はこれらの不整形土坑出土遺物で、古墳時代前期から中期にかけての土師器・初期須恵器・土鍾が含まれている。甕は外面にタキ痕を残すもの (961)、外面ハケ調整で、口縁端部を引き上げるもの (959・968)、外面調整が不明で口縁端部は丸めるもの (972・976) がある。高坏の坏部は大きく立ち上がる有稜のもの (962) やハケ調整で稜が曖昧なもの (964・969) があり、脚部は内面ケズリ調整で屈曲して開くもの (965・966・970) や、内面に絞り痕があり透かしをもつもの (963・971) がある。これに伴いコップ形の初期須恵器片 (973・978) と、器形不明の須恵器片が出土している。973・978 は白味を帯びた胎土の在地産初期須恵器とみられるが、979 は陶質土器の可能性もある。

(6) 弥生～古墳時代の石器・石製品

5 区ではサヌカイト製の石器は S22～S30 及び剥片が計 112 点、計 1,084 g 分出土している。

S22 は打製石剣。両端部付近に原礫面が残る、未成品と考えられる。長さ 17.6 cm、幅 5.2 cm、厚さ 2.3 cm、213 g。5040 流路で出土した。S23 は尖頭器と推定される破片。幅 5.0 cm、厚さ 1.4 cm。原礫面が残る。溝 10 (5187 溝) から出土した。S24 は石核。多数の剥離痕があり、風化が進んでいる。大きさは 9.9×5.8×3.0 cm で、重量 180 g。5267 不整形土坑から出土した。S25 は一端が長く尖っており、石錐と推定される石器である。長さ 4.2 cm。

S26～S28 は剥片石器で、スクレイパーとしての用途が推定される。S26 は長 3.8～4.4 cm で、

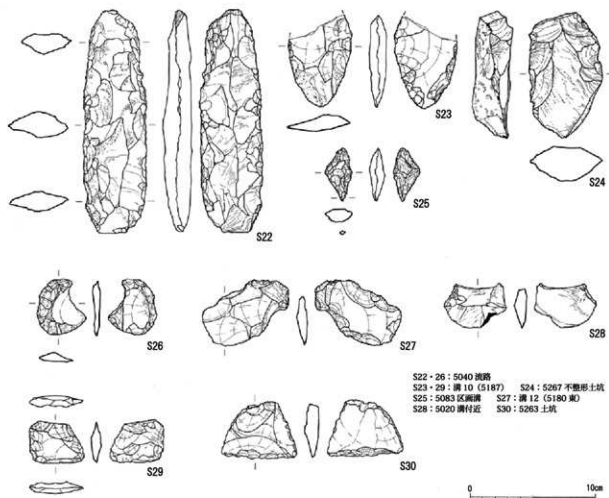


図 134 5区 打製石器 (石⑦)

厚さ 0.7 cm、5040 流路から出土している。S27 は石匙状の形状をしている。S28 は剥片。S29・S30 は楔形の形状をしている両極石器。S29 は 4.3×3.3 cm で、厚さ 0.8 cm、重量 15 g。溝 10 (5187 溝) から出土している。S30 は 6.0×4.5 cm、厚さ 1.1 cm、重量 31 g。

S31 ~ S41 は緑色片岩製の石包丁。盤状剥離により、原礫面が露呈しているものが多く、石材としては割れやすいものを使用している。石英とみられる透明～白色の結晶が析出しているものも見受けられる。S31 ~ S34 は 5040 流路で出土した弥生時代前期の石包丁。形状にばらつきがあるが、すべて外湾刃隅丸長方形としてくることができる。S31 は短く、幅広の形態を示す。S32・S33 は杏仁形に近い形状を示すもの。S32 は刃部が曖昧で穿孔前の製作途中品の可能性がある。S33 は孔内に敲打痕がみられる。S34 はやや細長い長方形を呈し、孔内のほか、身の先端近くに多数の敲打痕がみられる。

S35 ~ S39 は弥生時代中期の溝群から出土した石包丁。S35 は溝 8、S36 は溝 9、S37・S41 は溝 10、S38 は溝 11・S39 は溝 7 検出面から出土した。S37 は外湾刃杏仁形を呈し、S41 も同様の形の石包丁の破片と推定される。S39 は直線刃半月形で、刃部の幅は狭い。刃部と反対の面で、孔から背に向かう紐ずれ痕とみられる線状痕が残る。身部の孔より外側に、敲打痕が確認される。S40 は庄内期の遺構から出土した石包丁片であるが、直線刃半月形を呈する。

S42 ~ S44 は緑色片岩製の大型石包丁。S42 は外湾刃扇形で、一方の面に刃部をつけ、他方の

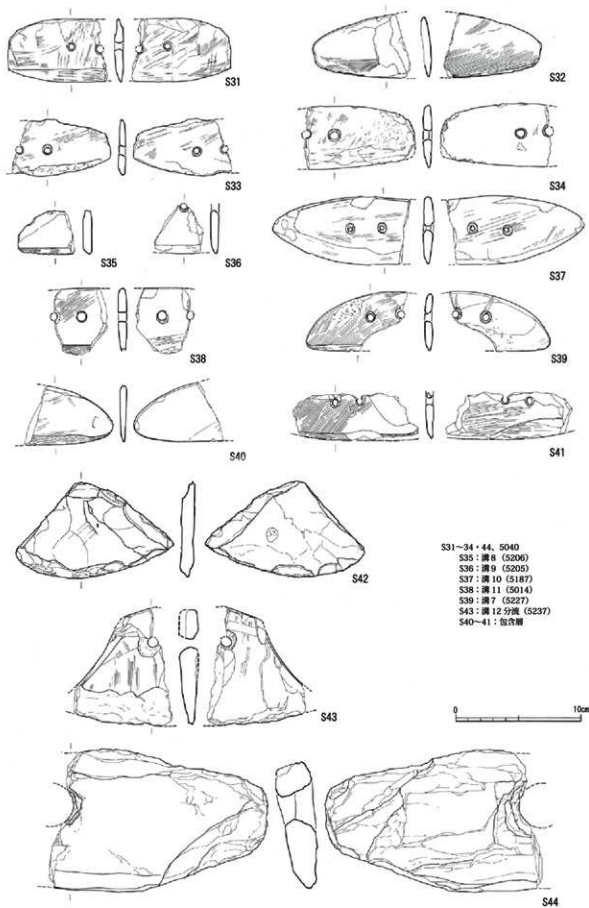


図 135 5 区 石包丁・大型石包丁 (石⑧)

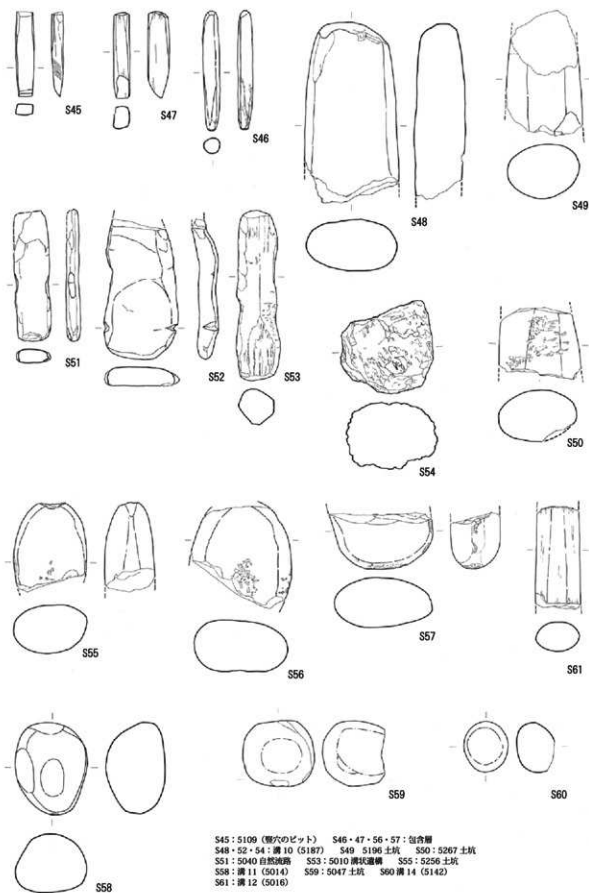


図 136 5 区 石斧・石錘・礫石器他 (石⑨)

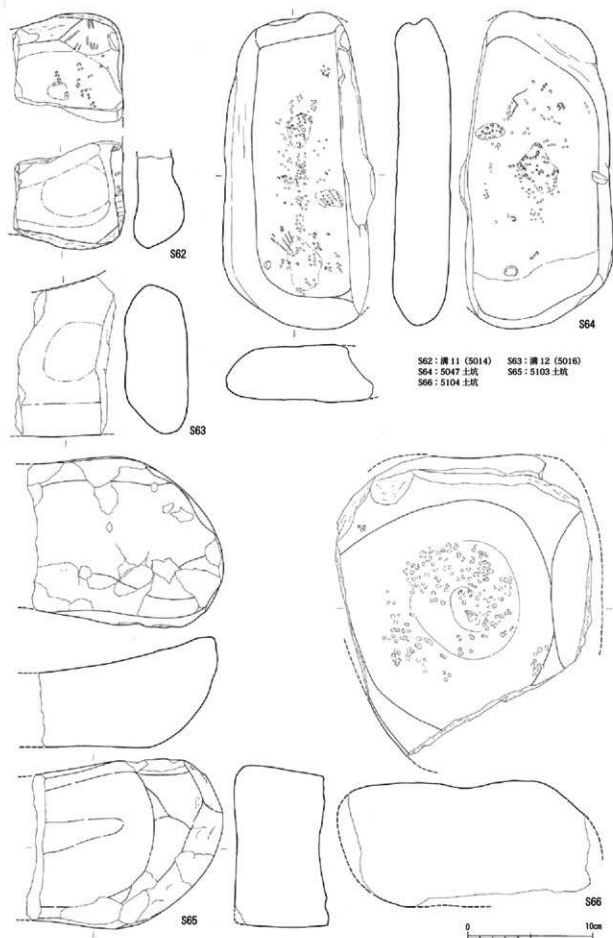


图 137 5 区 石皿・台石 (石⑩)

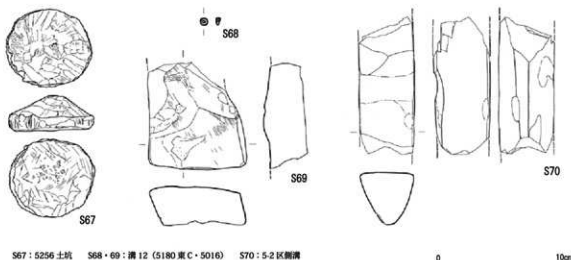


図 138 5 区 紡錘車・白玉・砥石 (石①)

面に穿孔を始めた状態の製作途中品である。長さ 12.6 cm、幅 7.6 cm、厚さ 1.2 cm で重量は 130 g。溝 8 から出土した。S43 は外湾刃で鉞形を呈する大型石包丁である。幅広の片刃をつけ、穿孔するが破損しており、孔数は不明である。残存幅 9.3 cm、厚さ 1.5 cm。長さとは重量は約半分となっているが、それぞれ 7.8 cm、113 g である。5257 溝から出土したが、弥生時代中期の遺物と推定している。S44 は外湾刃隅丸方形の大型石包丁。片面に刃部をつけ、穿孔する。5040 流路で出土する他の石包丁と同じ特徴を明確に意識して作られているが、何らかの実用性をもったのか、祭祀的なものかは不明である。半分以上を欠失した破損品であるが、残存長 17.3 cm、幅 10.3 cm、重量 880 g。弥生時代前期の遺物である。

S45・46 は小型の柱状片刃石斧。S45 は残存長 6.7 cm、幅 1.4 cm、厚さ 0.9 cm で重量 19 g。5109 ビットから出土した。石材は白みの強い緑色で、シルト質片岩製と推定される。S46 は長さ 6.8 cm、幅 1.3 cm、厚さ 1.8 cm、重量 32 g。石材は結晶片岩と推定される。

S47 は緑色片岩製の小型棒状製品。長さ 9.5 cm、径 1.3 cm、重量 29 g。一部に擦痕が残る。V 層上面で出土した。

S48 ～ 50 は弥生時代中期の遺構から出土した磨製石斧。すべて破片で、刃部はない。緑色凝灰岩製とみられる石材を用いる。S48 は溝 10、S49 は 5196 土坑、S50 は 5267 不整形土坑から出土している。

S51・52 は切目石錘。S51 は結晶片岩製の扁平な石錘で、長辺側面の中央部に切り込みを入れている。長さ 10.3 cm、幅 2.8 cm、厚さ 1.2 cm で、重量は 51 g。5040 流路の下層から出土した。S52 は砂岩風の扁平な石材の長辺側面の一端に切り込みを入れた石錘で、もう一端は欠失している。残存長 11.1 cm、幅 5.9 cm、厚さ 2.2 cm、重量 186 g。溝 10 の最下層から出土した。

S53 はくびれのある棒状の石製品。石錘やすり石として利用可能な形状をしている。5010 溝状遺構から出土した。

S54 は溝 10 の下層から出土した丸みを帯びた軽石で、浮子の可能性を考えている。

S55 ～ 57 はすり石・凹石。楕円形で扁平な砂岩の中央の凹みと側面に敲打痕を残す。S55 は 5256 不整形土坑、S56・57 は包含層中から出土した。

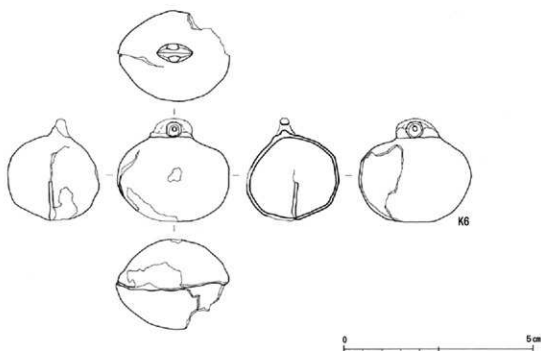


図 139 5 区 溝 15 (5140) 出土銅鈴 (金②)

S58～S60は石器かどうか不明な円礫。S58は溝 11、S59は 5047 ビット、S60は溝 14から出土した。S58は若干の敲打痕とやや平坦な面をもつ。S59は敲打により窪みのある円形に仕上げられている。S60は 57 g の円礫で投弾の可能性も考えられる。

S61は紅麻片岩製の石棒片。平滑に仕上げられている。

S62～66は石皿・台石。S62は敲打痕の残るやや小型品で、溝 11 で出土した。S63は溝 12 出土。S64は上下面に敲打痕をもち、割れ面に石英が析出している。土器・片岩・S59とともに、5047 ビットから出土した。S65・66は 5-1 区のビット集中地点の 5103・5104 ビット出土。S65は上面が平滑になり、S66は多数の敲打痕をもつ。

S67は滑石製紡錘車の未成品。5256 不整形土坑から出土した。S 68は滑石製の白玉。5180 東 C から出土した。

S69・70は砥石の破片と考えられる。S69は古墳時代前期から中期の溝 12 から出土した。S70は断面三角形で、一面にくびれ部をもつ。

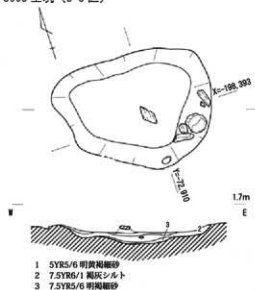
(7) 古墳時代の銅製鈴

5 区では銅製の鈴が出土している。

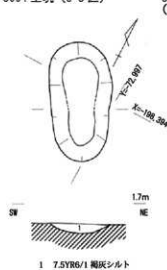
K6は青銅製の鈴で、長さ 3.0 cm、幅 2.4 cm、高さ 2.7 cm、残存重量 10.2 g。上部に紐、下部に溝があり、溝の周りを一部欠失している。

鈴は 5140 溝の底面の上部から出土した。溝からは須恵器・土師器の破片が出土しており、5140 溝は田辺編年 TK23～47 型式期の遺構と考えられる。鈴は脆弱で粉化していたため、保存処理として脱塩処理及び銅安定化処理を行ったうえで樹脂をコーティングし、外気を遮断した。鈴の下部は一部破損しており、内部には石製の丸は確認されなかった。なお、周辺には井辺前山古墳群や和田古墳群、竈山神社古墳など多数の古墳が分布している。

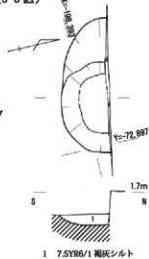
5003 土坑 (5-3 区)



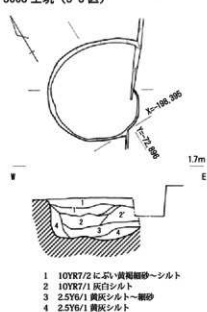
5004 土坑 (5-3 区)



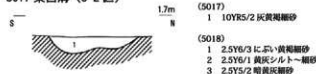
5005 土坑
(5-3 区)



5008 土坑 (5-3 区)



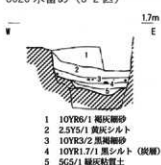
5017 東西溝 (5-2 区)



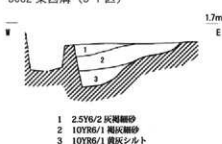
5018 東西溝 (5-2 区)



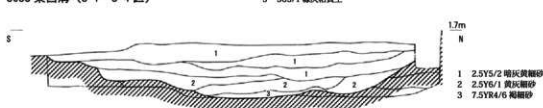
5026 水留め (5-2 区)



5082 東西溝 (5-1 区)



5083 東西溝 (5-1・5-4 区)



5218 東西溝 (5-4 区)



図 140 5 区 古代末期～近世の遺構 (S=1:40)

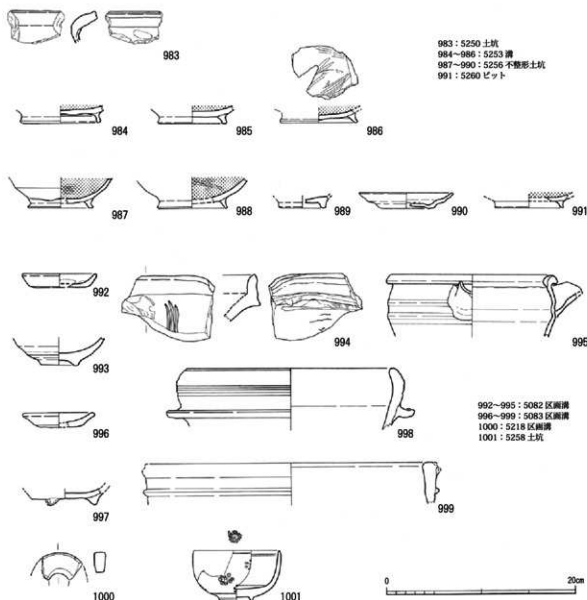


図 141 5 区 古代・中世・近世の遺構出土土器他

3 古代～近世の遺構・遺物

(1) 古代末期～中世前半の遺構・遺物

5003 土坑 (5-3 区)

5-3 区西部にある径 1.3 ～ 1.7 m、深さ 0.2 m の土坑。礫とともに瓦器片等が出土している。鎌倉時代の遺構と推定される。

5004・5005 土坑 (5-3 区)

5-3 区東部で確認された長軸 1.2 ～ 1.4 m、短軸 0.6 m ほどの楕円形土坑。遺物が出土しないため年代は定かではないが、5003 土坑や 5008 土坑と近い年代の遺構と推定している。

5008 土坑 (5-3 区)

径 1 m 程度、深さ 0.4 m の円形土坑。瓦器片等が出土する。

5017・5018 東西区画溝 (5-2 区)

中世初頭とみられる土器片が微量含まれる東西区画溝である。

5138 土坑 (5-1 区)

5-1 区南部で検出した径 0.9 m の土坑。瓦器片が出土する。

5250・5253・5256・5260 土坑・ピット (5-4 区)

5-4 区の不整形土坑やピットにおいて平安時代後期の黒色土器・土師器が出土する。遺構内には圧倒的に弥生土器・土師器が多く、遺構上面の窪みに平安時代の遺物が入っている可能性が考えられる。土師質の土釜・埴・皿 (983・989・990) と黒色土器埴 (984～988、991) が出土している。

(2) 中世後半～近世の遺構・遺物

5026 (5-2 区)

5-2 区東壁面で検出した江戸時代の井戸。陶器片が出土している。

5082・5083 東西区画溝 (5-1・5-4 区)

5082 溝は 5-1 区北辺、5083 溝は 5-1 区と 5-4 区の間を区画する東西溝。5082 溝は幅 1.6 m 以上、深さ 0.4 m 以上で、土師器小皿 (992)、陶器碗 (993)、備前焼播鉢 (994)、陶器注口付土器 (995) が出土している。5083 溝は幅 4 m、深さ 0.6 m で、土師器小皿 (996)、土師器三足付き小皿 (997)、土釜 (998)、瓦質土器火鉢 (999) が出土している。これらの区画溝からは中世から近世初頭までの遺物が多数出土するが、995 のような近世後期の遺物も見受けられる。

5218・5245 東西区画溝状遺構 (5-4 区)

5083 東西区画溝に沿って形成された溝状遺構で、磁器製の戸車 (1000) 等が出土した。

5246 東西区画溝状遺構 (5-4 区)

染付片が含まれる近世の東西溝状遺構。

5258 土坑 (5-4 区)

5-4 区南部で検出した円形土坑。染付碗 (1001) が出土した。

第6節 6区の調査

1 概要

6区は調査対象地の南東部付近にあたる調査区である。東西幅16～23m、南北長さ約37mで、調査区面積446㎡である。新溝水路を挟んで5区の南東側にあたり、北半を6-1区、南半を6-2区に細分して調査を行った。

6区では5区同様に北東から南西に流れる弥生時代の溝が確認された。その他、中世の掘立柱建物と同時期の東西区画溝等を検出している、出土遺物は計12箱分で、弥生土器のほか、瓦器が散見される。

地山面の標高は6-1区北部で標高1.6m、6-1区南部で1.4～1.5m、6-2区南部で1.3mである。調査区中央では弥生時代の落ち込み、調査区西側では近世の落ち込みが確認された。

2 弥生時代の遺構・遺物

(1) 弥生時代前期の流路と溝群

調査区の北東から南西に流れる弥生時代前期の溝と下層遺構を確認した。

6050 落ち込み・下層流路・井戸

6-2区南壁沿いのトレンチで確認した、6011溝・6039溝の下層遺構である。弥生土器が含まれる深さ0.3mほどの浅い落ち込みは東西幅7～13mに達し、調査区を北東から南西へ流れる流路状を呈し、7区の7001落ち込みへと続いている。その中央部に断面U字形の明確な輪郭をもつ幅約3m、深さ0.6mの堆積があり、上部は薄い水平堆積で埋没している。(図143)。これらは7000下層流路や7166井戸に対応する遺構の可能性がある。

1025～1027は広口壺の口縁部片。1026は頸部をヘラ描き沈線文で飾り、口縁端部を刻む。弥生時代前期の遺物である。

なお、6050流路の幅で浅い堆積は、7区の7000流路に対応している。7000溝では弥生時代前期から中期中葉ないし後葉の土器群が出土しており、6050の土層断面上に現れる複数単位の流路に対応するものと推定される。

6011 溝(溝16)

6区の北東から南西に流れる溝で、幅1.0～1.5m、深さ0.5m。6050落ち込み・下層流路上にあり、6039溝と流路が重なって検出されている。

6011溝内からは1004～1016が出土した。広口壺と甕のほか高坏等の脚部とみられる破片が出土している。口縁部は無文のものと刻み目を施すもの、突帯を貼りつけるものがある。頸部は多条のヘラ描き沈線文で飾るものが多数みられる。1006は遠賀川系の壺頸部。1011は口縁部に縁を付けた形状を呈する。1012は瀬戸内系の逆L字状口縁をもち、口縁端部を刻む。これらは弥生時代前期新段階の遺物と考えられる。

6011溝は7区の7004溝あるいは7001溝の上流部に位置する溝であるが、出土遺物の年代が一致しないため、本来は下層にある6050の遺物が溝内に入っているものと推定される。

6006 溝(6-1区)・6039 溝(溝17)(6-2区)

6-2区南部の6011溝西側で確認された溝である。幅1.0m、深さ0.3mで、断面V字形を呈する。

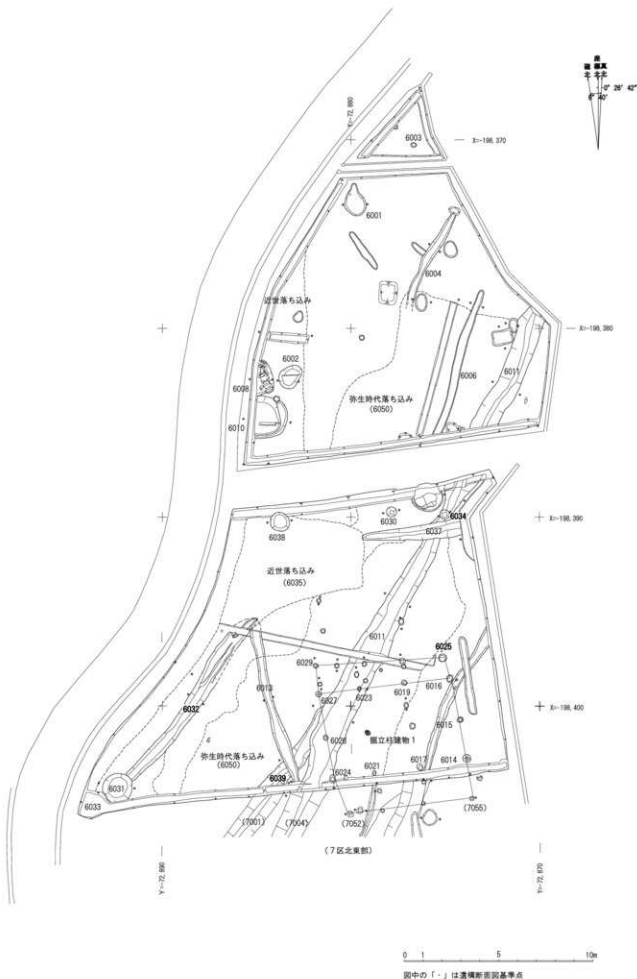
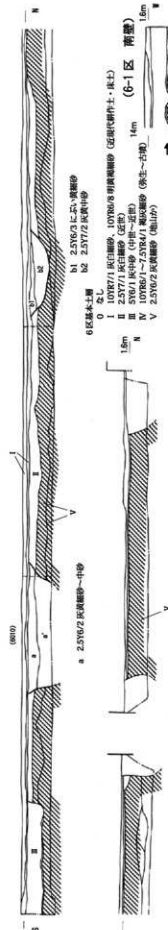
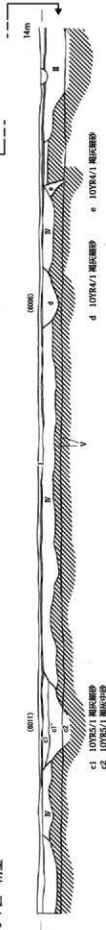


図 142 6区平面図 (S=1:200)

6-1 区 西壁



6-1 区 南壁



6-2 区 南壁

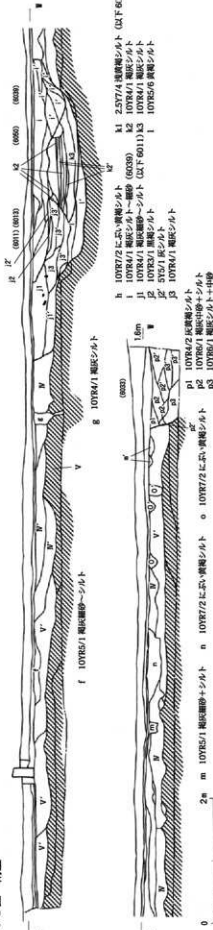


図 143 6 区 壁面土層図 (S=1:60)

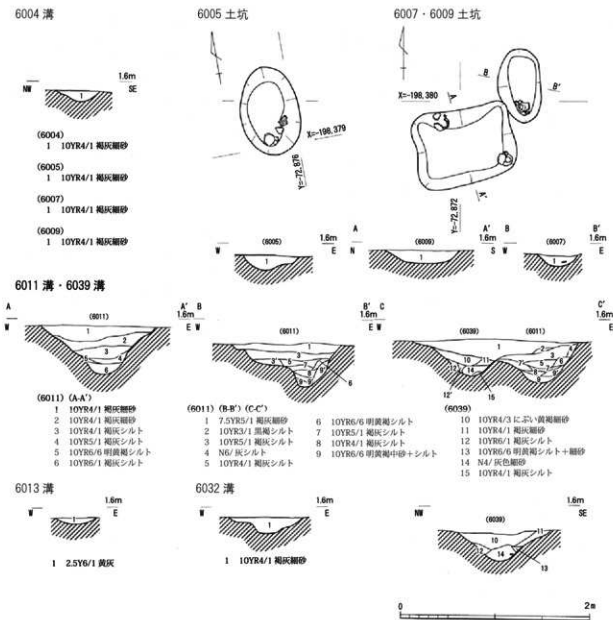


図 144 6 区 弥生～古墳時代の遺構 (S=1:40)

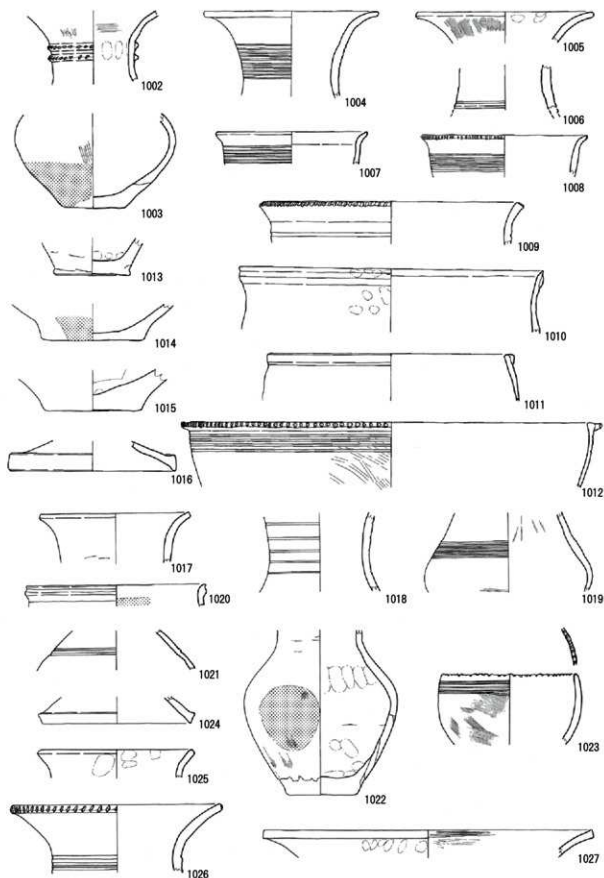
6-1 区の 6011 溝西側で検出されている 6006 溝に繋がる可能性もある。

1021 は遠賀川式土器の壺肩部と考えられる破片。1022 は無文の壺、1023 はヘラ描き沈線文の鉢。1024 は脚部と推定される破片である。

6004 溝 (6-1 区)・6032 溝 (6-2 区)

6-1 区北半で確認された 6004 溝は幅 0.5 m の溝である。その下流側にあたる 6-2 区には 6032 溝があり、幅 0.7 ～ 1.0 m である。二つの溝は北東から南西方向へと流れており、その中央にある包含層状堆積 (6035) 中では弥生土器が出土している。

1017 ～ 1020 は 6035 堆積土から出土したが、6004 溝・6032 溝に由来するものと推定される。1017 は無文の壺の口縁部、1018 は頸部に間隔の広いヘラ描き沈線文を施す壺。1019 は遠賀川系の壺であるが、肩部の沈線は多条である。1020 は口縁部下に突帯をもつ甕。



1002：6007 土坑 1003：6009 土坑 1004～1016：6011 溝 1017～1020：6035（6032 溝覆土）
 1021～1024：6039 溝 1025～1027：6050 溝（6039 の下層遺構）

図 145 6 区 弥生時代の遺構出土土器

(2) 弥生時代の土坑

6005 土坑 (6-1 区)

6-1 区中央で確認した土坑である。土坑の形状は、南北約 1m、東西 0.8m の楕円形で、深さ 0.25m である。弥生土器の破片が出土している。

6007・6009 土坑 (6-1 区)

6-1 区東側で検出した土坑。6007 土坑は長さ 1.0m、幅 0.8m の長方形の土坑で、頸部に刻み目を施した 2 条の突帯を貼りつける広口壺 (1002) が出土した。

6009 土坑は長さ 0.8m、幅 0.45m の楕円形の土坑である。壺の胴部 (1003) が出土した。

(3) 弥生時代の石器

S71 はサマカイト製の平基式の石鏃である。長さ 2.2cm、幅 1.3cm、厚さ 0.4cm、重量 0.8g で、微妙に欠けた部分がある。

掘立柱建物の柱穴から出土しているが、本来はその下層にある弥生時代前期の流路内に由来する遺物と考えられる。



図 146 6 区 石鏃 (石⑩)

3 中世の遺構・遺物

6-2 区で、鎌倉時代の掘立柱建物 1 が確認される。その北側では 6037 区画溝と並列する 6030・6034 ビット、掘立柱建物の西にある 6013 溝は同時代の遺構と考えられることから、屋敷地を形成する一連の遺構である可能性が考えられる。

掘立柱建物 1

6-2 区南東側で、南北 2 間以上、東西 3 間で、北側に 1 間の底をもつ掘立柱建物 1 を検出した。建物は地形でなく、条理型地割と同様の方位を意識して建てられている。7 区の北端で検出されている掘立柱建物に繋がるものと考えられるため、南北 3 間で北側に底をもつ建物として復元できる。建物規模は東西約 7m、南北約 8m になるものとみられる。

柱穴の底には根石があり、柱痕が残るもの (6021) も見られた。柱穴間の距離は、東西方向では 2.25m から最大 2.51m で、南北方向では 2.08m から最大 2.37m である。

6023 柱穴と 6024 柱穴から瓦器塊、6027 柱穴から土師質小皿が出土した。瓦器塊は 12 世紀後半から 13 世紀にかけてのものと推定される。

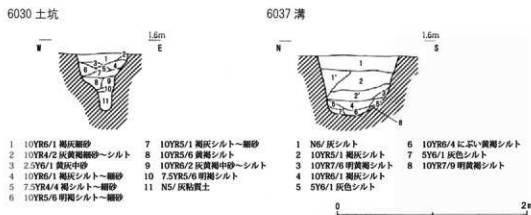


図 147 6 区 中世の遺構①(S=1:40)

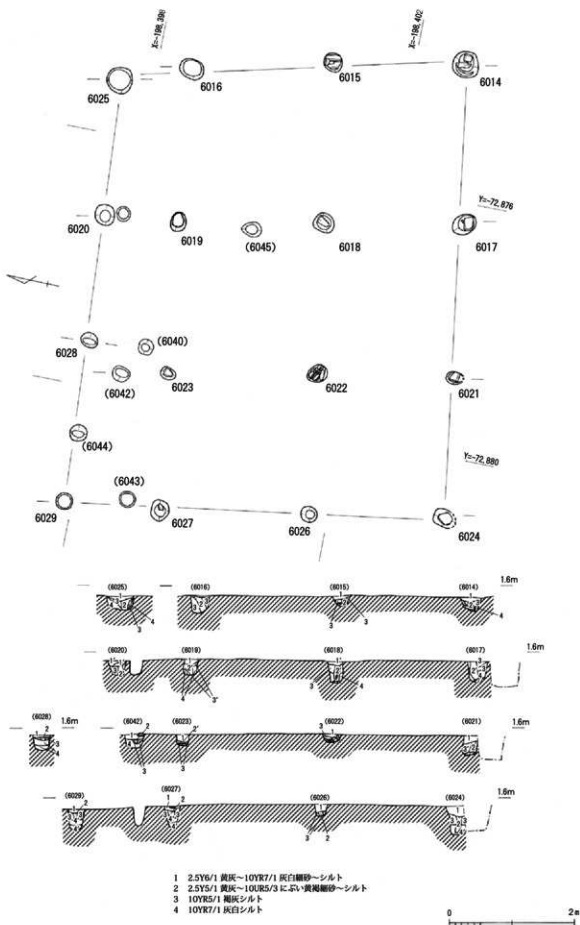


図 148 6 区 中世の遺構②(掘立柱建物 1) (S=1:60)

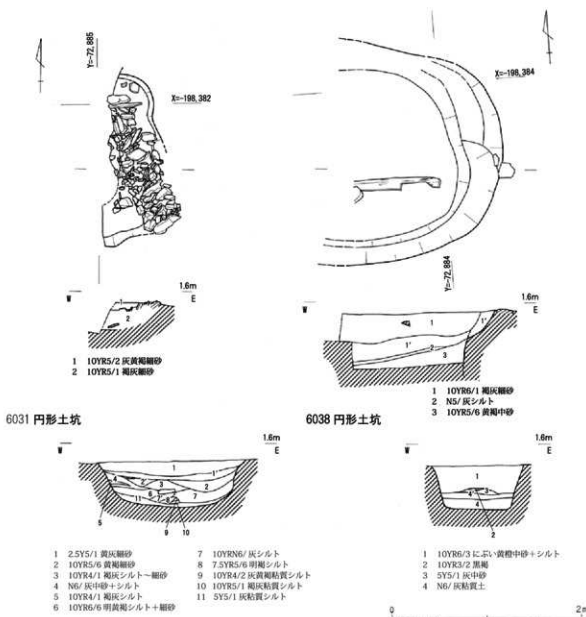


図 149 6 区 近世の遺構 (S=1:40)

6030・6034 土坑

6-2 区北東部、6037 溝北側で検出した径約 0.5 m の 2 基のビットである。ビット間の芯々距離は 2.7 ～ 2.8 m で、6037 溝のすぐ北側に並んでいるようにみえる遺構であり、出土遺物の年代も同年代といえる。

6037 溝

6-2 区北東部で検出した東西方向の区画溝。現行の土地区画のほか、掘立柱建物 1 とも方位が一致する。西側は弥生～近世の遺物を含む堆積によって途切れている。同様の溝として 6013 南北溝があり、掘立柱建物 1 の北と西を区画する形で検出された。

1031 ～ 1036 は 6037 溝から出土した土器である。1031 ～ 1033 は瓦器埴。1031 は口径 13.8 cm、器高 4.0 cm で高台が機能しており、12 世紀後半から 13 世紀前半頃の遺物と考えられる。1032 は埴形から坏のような形状に若干変わっており、13 世紀の遺物と考えられる。1033 は器高 2.6 cm

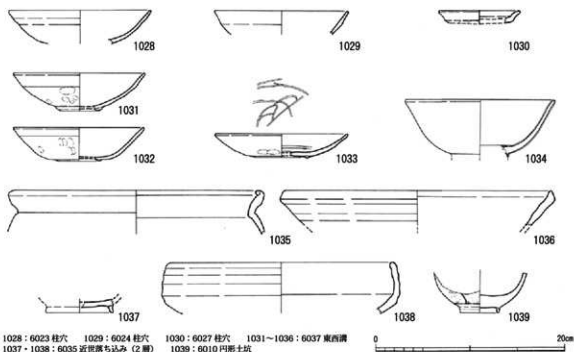


図 150 6 区 中世・近世の遺構出土土器

の皿状を呈する瓦器塚であるが高台が残る。紀ノ川下流域の特徴的な退化傾向が現れた遺物であり、13 世紀後半から 14 世紀前半の遺物と考えられる。1034 は青磁碗。1035 は土師質の土釜類。1036 は東播系須恵器の鉢。

4 近世の遺構・遺物

6 区西側の水路沿いに土坑・埋桶が分布している。これらの遺構は遺物包含層上に形成されている。包含層からは土師器塚 (1037) や焙烙 (1038) などが出土している。

6008 土坑

6-2 区南西で検出された土坑である。土坑内には、約 20 cm の片岩と瓦が組み上げられているが、用途は不明である。

6010 井戸

6008 土坑の南側で検出された径約 2 m の井戸である。出土遺物は染付碗 (1039) のほか、木製品、瓦、土師器片などがある。

6031・6038 円形土坑

6031 土坑は 6-2 区南西で検出した径 1.6 m、深さ 0.5 m の土坑である。6038 土坑は 6-2 区北西で検出した径約 1.0 m、深さ約 0.5 m の土坑である。水溜め用の埋桶の跡であった可能性が考えられる。

第7節 7区の調査

1 概要

7区は、8区とともに調査対象地の南部にあたる調査区である。7・8区は平成22年度の調査で、同時併行で掘削を行っている。7区は東西幅約23～24m、南北長約38mで、調査区面積1,549㎡である。

調査前現況は水田と工場の跡地で、水田はN-6.5°-Wの方位軸線をとる河南条里の条里痕跡を良好にとどめている。調査地周辺の水は北東から南西にかけて緩やかに傾斜する状況が明確にみとれる。県教育委員会の試掘調査では、調査区の南には青灰色の砂土や灰色のグライ化土壌が堆積する低湿地が広がる状況が確認されており、和田川を越えて再び微高地状になる場所に和田遺跡が形成されている。7区と8区の間には、紀ノ川左岸水利組合が管理する現有水路である宮井用水中溝水路が南北方向に流れ、周辺の水田及び、安原盆地を灌漑している。

調査では近現代の水田耕作土、床土（Ⅰ層）を機械掘削し、Ⅱ層以下を人力掘削して遺構を検出した。地山とみられる遺構検出面には上位層の水田耕作の影響でマンガンが多く沈着しており、遺構の検出が困難であったため、黄褐色シルト層を1層分掘り下げて遺構検出を行った。

調査区北半部分には、6区6050流路から続く幅約10mほどの7000落ち込み・流路が存在する。その上面に弥生時代中期中葉の溝2条等が掘削されていることから、上面遺構の完掘後、落ち込みを掘り下げ、落ち込みの下面において遺構検出を行った。この落ち込みの上面で検出した遺構面を上層遺構面、落ち込みの下面で検出した遺構面を下層遺構面として区別して調査を行っている。落ち込み上面の遺構は弥生時代中期以降であり、下層遺構面の遺構は弥生時代前期新段階の時期を示す。

古墳時代の溝はやや不規則に流れており、その後、宮井用水中溝水路の下層で水路の前身と考えられる溝が成立している。出土遺物は計45箱分で、弥生土器・土師器のほか、少量の中近世の陶磁器が出土した。

2 弥生時代の遺構・遺物

(1) 弥生時代前期の流路と溝群（下層遺構面の遺構）

調査区の北部に流れる弥生時代前期の7002溝と7000流路及び井戸状遺構等を確認した。7000流路は複数時期に渡る堆積をもつものとみられ、上層の落ち込みに前期から中期にかけての遺物が含まれているものと考えられる。

7000落ち込み・流路（＝6050落ち込み、8000落ち込み・流路）

7区北で検出した遺構で下層は流路、上層は落ち込み状を呈する遺構である。西壁では深さ0.6m以上の流路となっており、南端部に一時期古い年代の溝状堆積が確認できる。北東方向から南西方向へ延びており、自然流路の埋没後に、再び形成された流路状の落ち込みに土器が多数投棄されたものと考えられる。落ち込み内では、井戸3基を検出しており、地形の低い地点を利用し掘削されたものとみられる。落ち込みは検出長約36.0m以上、幅約11.5m、深さ0.2～0.4mで、緩やかな流路状を呈する。埋土は複数に分層できるが、上層は褐灰色シルト、中層は炭化物を含む淡黄色シルト及び黄灰色シルトが互層に堆積し、下層は灰白色～黄灰色シルトが堆積する。

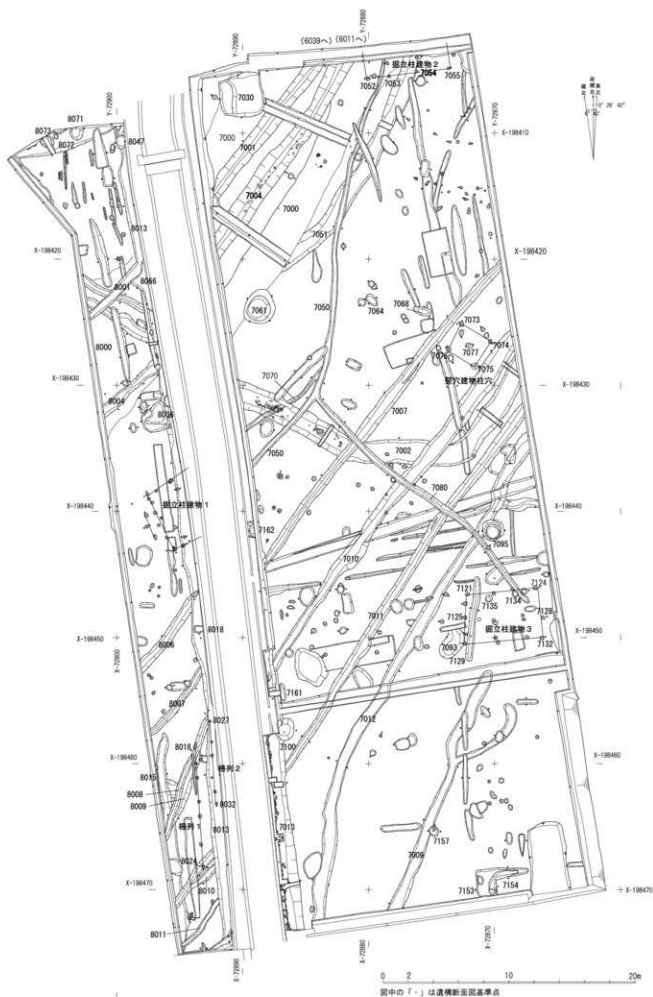


図 151 7・8区平面図 (S=1:300)

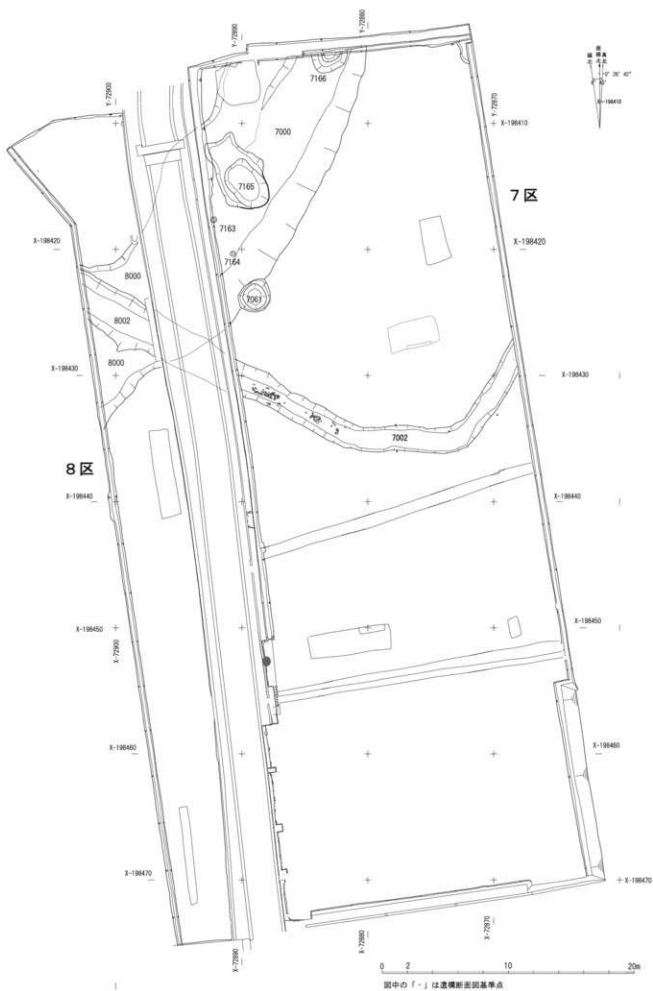
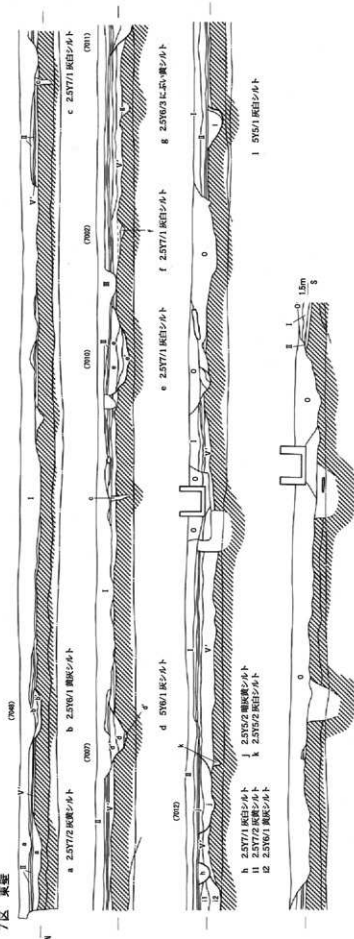


図152 7・8区下層遺構平面図 (S=1:300)

7区 東壁



7区 西壁

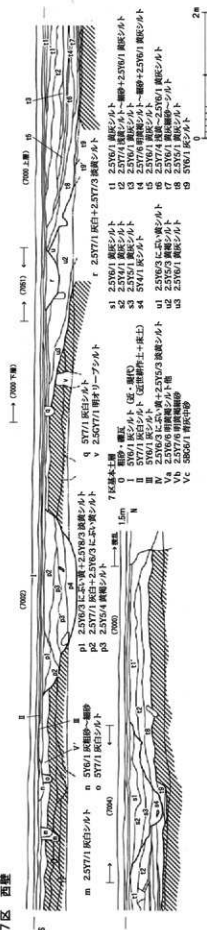


図 153 7区 壁面土層図 (S=1:60)

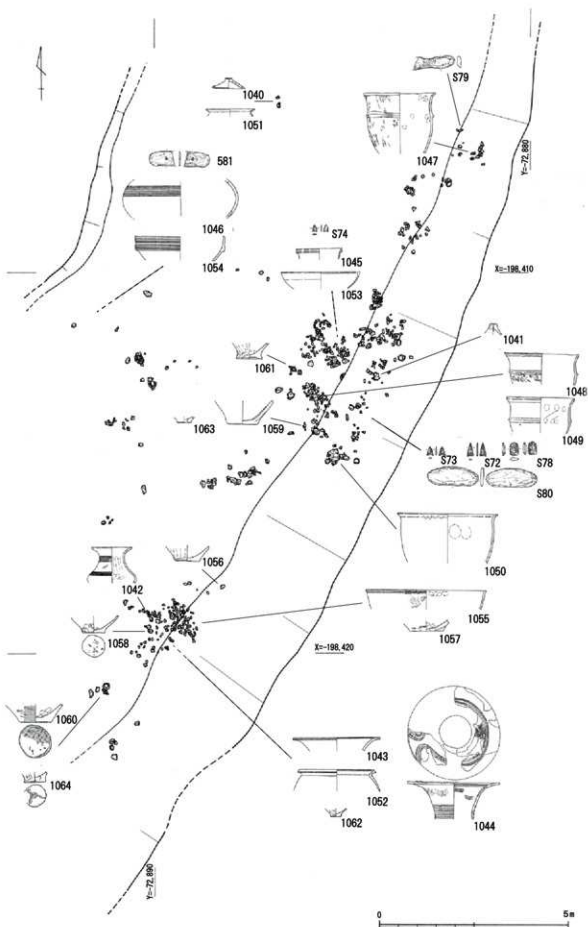


図 154 7 区 7000 流路遺物出土状況 (S=1 : 100)

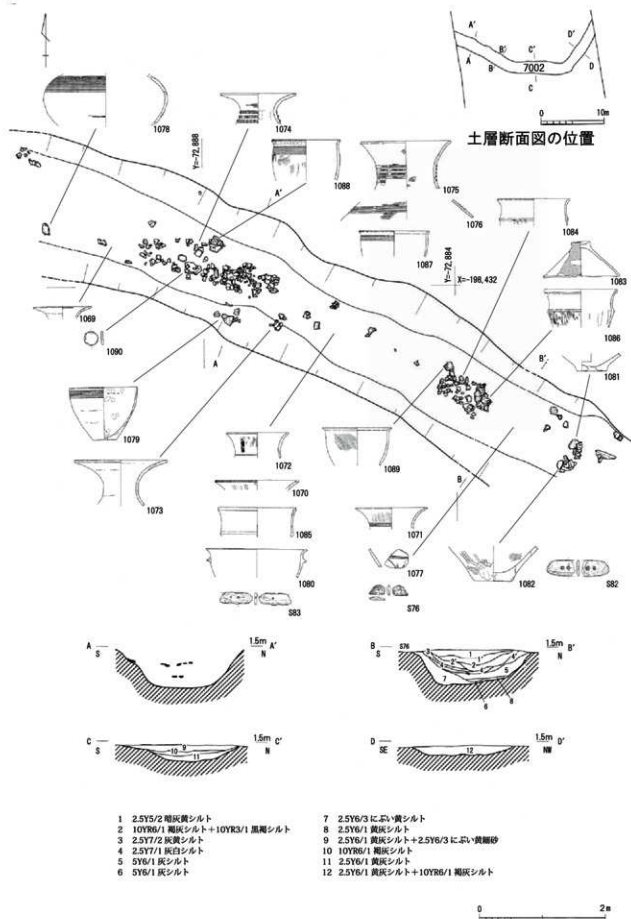


図 155 7 区 7002 溝遺物出土状況 (S=1:60)

図より上流（北東）側で出土

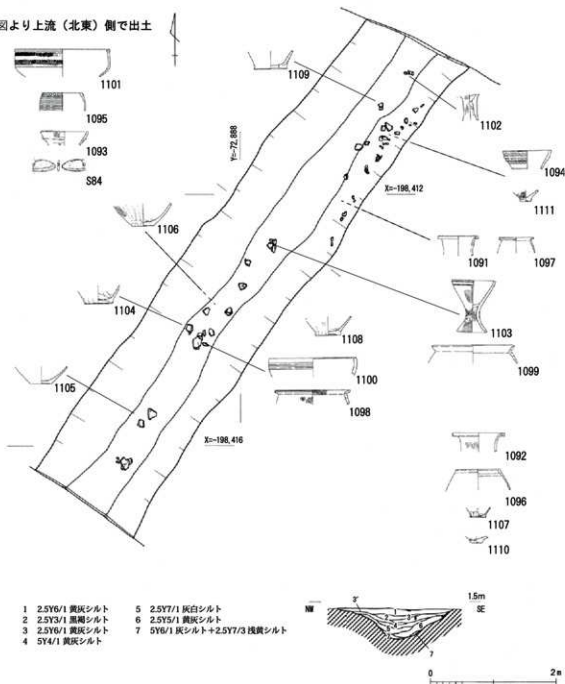


図 156 7 区 7004 溝遺物出土状況 (S=1 : 60)

遺物は落ち込み東側の肩部から集中して出土し、土器集中地点が複数存在する（図 154）。落ち込み埋没の際に土器の投棄が行われたと考えられ、完形に復元可能な土器が、投棄され押しつぶされた状態で出土している。出土遺物にはやや年代幅があり、複数時期の堆積に対応する可能性も考えられる。

7000 下層流路は、図 153 の 7 区西壁の土層断面で u1 ~ u3 層、上層落ち込みは t1 ~ t9 層に相当する。下層流路を埋没させた堆積はそのまま 7 区全面に薄く堆積し、その上面に自然地形に逆らうように流れる弥生時代前期の 7002 溝と、自然地形に沿った 7000 上層流路が形成されている。なお、図 153 の地山ラインは 7000 下層流路に対応したものであるが、7002 溝に先行する堆

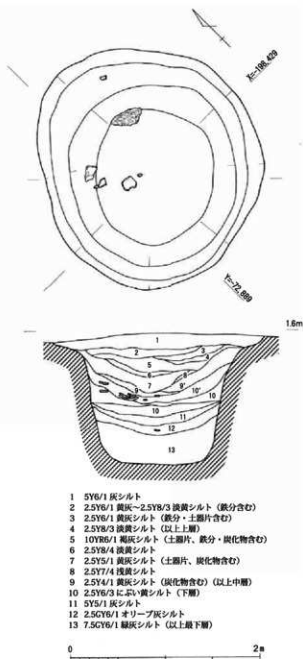


図 157 7 区 7061 土坑 (S=1:40)

7002 溝 (= 8002 溝)

7 区の中央やや北寄りで検出した溝である。切り合い関係から弥生時代の他の溝より古く、今回検出した遺構の中では最も古い段階の遺構と認識される。7002 溝は北東から流れてきて、屈折して北西へと延びており、他の溝の流れとは異なる方向に流れている。溝の規模は、7 区東では幅約 1.6 m、深さ約 0.15 m と浅い U 字形を呈するのに対し、7 区中央で深くなり、幅約 1.9 m、深さ約 0.55 m の U 字形を呈する。8 区では、さらに幅が広がり、幅約 3.1 m、深さ約 0.4 m となる。埋土は大きく上層・中層・下層・最下層に分けられ、上層は主に黄灰色～暗灰黄色シルトを呈し、溝が深くなる部分では炭化物を含む暗灰黄色シルトが堆積する。中層では炭化物・遺物を多く含む褐灰色シルト層が、下層では黄灰色～灰色シルト層が、最下層では灰色シルト層及び基盤層と分別しにくいに近い黄シルト層が堆積し、いずれもレンズ状堆積を示す。

積は無遺物層の可能性も高い。弥生時代前期頃に谷や低地が埋没しており、その途中の層から土器が多量に出土している状況がうかがえる。

1040～1064 は 7000 落ち込み出土の弥生土器。7000 落ち込みでは上層と下層に分けて遺物を取り上げているが、これは先述した上層落ち込み・下層流路に対応するものではない。弥生時代前期の遺物が多いが、上層で取上げた遺物には弥生時代中期中葉の遺物が混じる。

1040・1041 は壺類の蓋。1042～1044 は広口壺で、遠賀川系の壺 (1042) や、口縁部内面に沈線をもつ壺 (1043)、瀬戸内西部の影響を受けたとみられる口縁部内面突帯をもつ壺 (1044) が確認される。1045 は口縁部下方に突帯を貼りつける直口壺。1046 はヘラ描き沈線文をもつ壺体部。1047～1052 は甕。1047～1049 は紀伊型甕で、口縁部や肩部に突帯を貼りつける古いタイプのものである。1050 は無文の甕。1051・1052 は口縁部が折れ曲がる甕で、1051 は小型、1052 は口縁端部が上方に肥厚する。1053 は高坏の坏部、1054 は凹線文をもつ鉢と考えられる。1055 は大型の鉢。1056～1064 は平底の底部片であるが、なかには種子圧痕のあるもの (1058・1060) や穿孔しかけたもの (1064) が確認される。

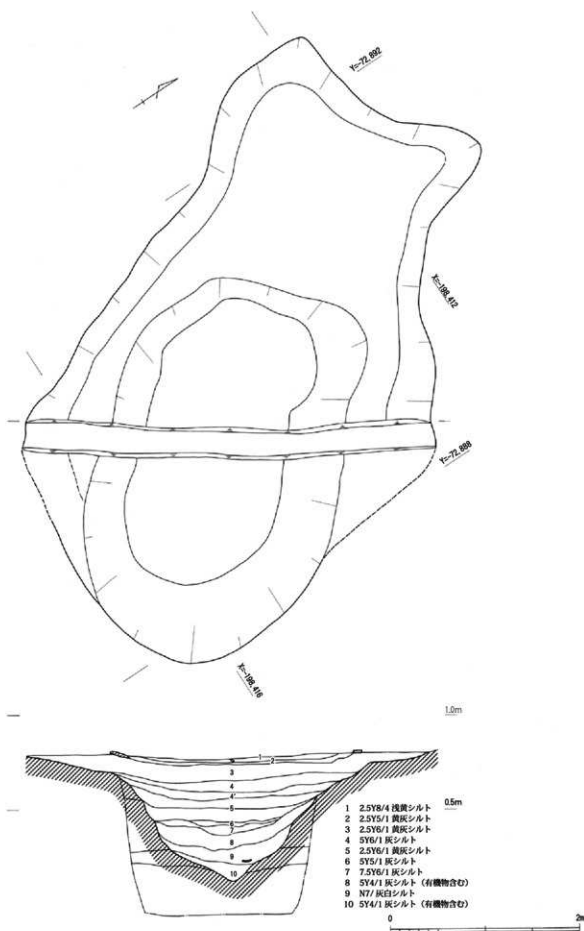
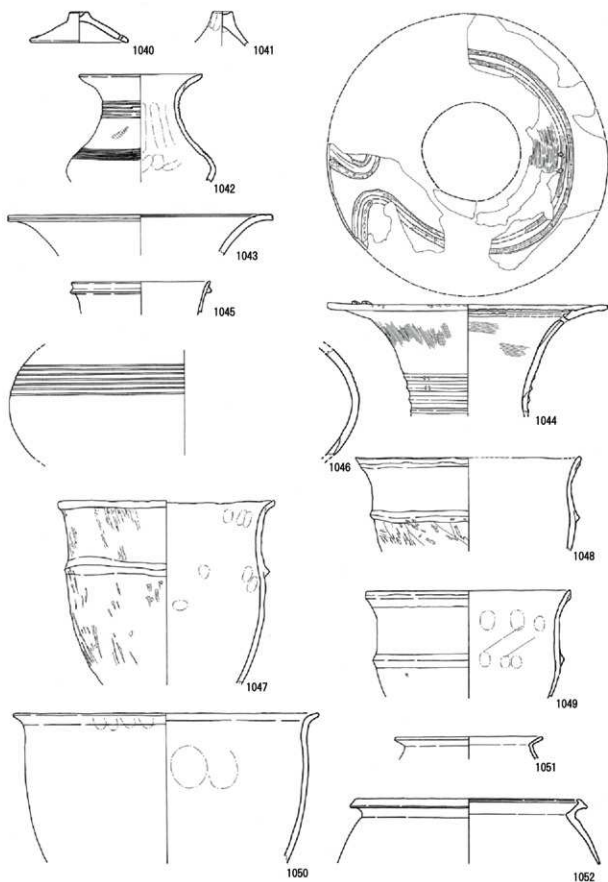


図 158 7区 7165 土坑 (S=1 : 40)



1040・1043：7000 落ち込み下層 1041・1042 1044～1052：7000 落ち込み上層

図 159 7 区 7000 落ち込み出土土器①

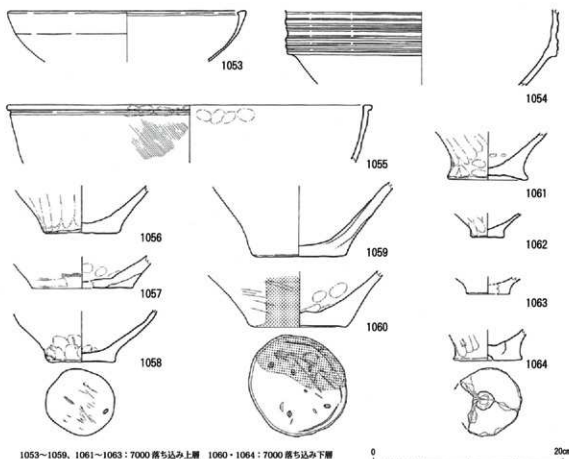


図 160 7 区 7000 落ち込み出土土器②

遺物の多くは中層及び下層で出土した。溝からは比較的良好な形で弥生土器が出土しており、出土遺物から遺構の時期は、弥生時代前期後葉とみられ、一部下層の遺物が弥生時代前期中葉にさかのぼる可能性が残る。

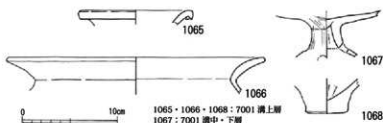
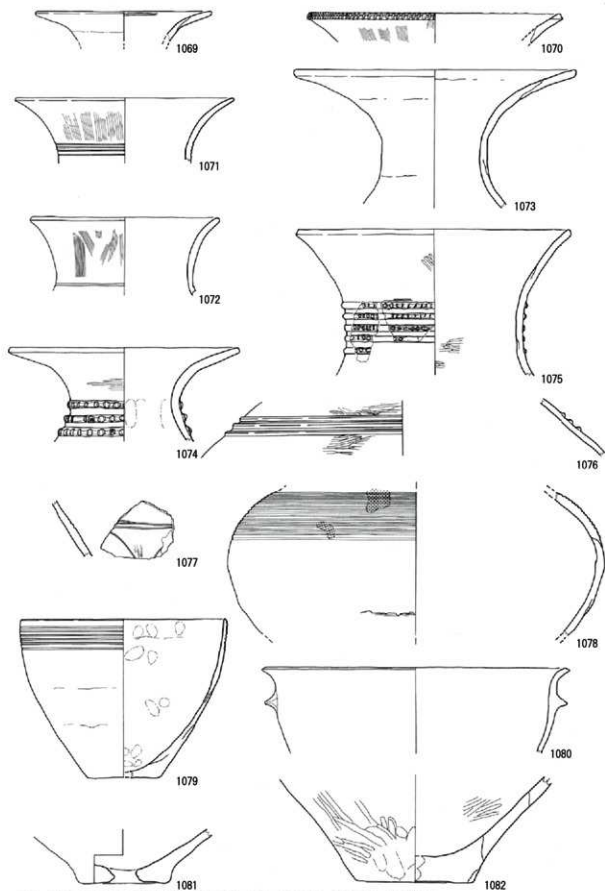


図 161 7 区 7001 溝出土土器

1069～1090は7002溝で出土した弥生土器。貼り付け突帯とヘラ描き沈線で飾り、刻み目をつける土器群である。1069～1074は広口壺の口縁部。口縁端部を丸めるものが多いが、1070は端部が平坦でヘラ描き沈線と刻み目を施す。頭部は屈曲が緩いもの(1072・1075)があるのに対して、折れ曲がるように大きく湾曲するもの(1069・1073・1074)がある。1076～1078は壺胴部で、1077は木の葉文とみられる線刻をもつ。1079は6条のヘラ描き沈線で飾る直口鉢、1080は把手付きの外反口縁鉢。1081・1082は平底の底部で、1081は穿孔する。1083は甕の蓋。笠形で上面が窪む。1084～1086は紀伊型甕で突帯文系土器の影響を残す。1086は口縁部と肩部に断面三角形の高い貼り付け突帯を施し、肩の突帯より下を縦方向に粗くけずる。1087・1088は如意形口縁をもつ倒鐘形の甕で、口縁端部に刻み、肩部にヘラ描き沈線を施す。1089は外反口縁の甕ないし鉢で、外面ハケ調整を施す。1090は土器片を利用した円盤。



1069・1070・1074・1082：7002 溝竪下層 1071・1073・1075・1076・1078・1079・1081：7002 溝下層
1072・1077・1080：7002 溝上層

図 162 7 区 7002 溝出土土器①

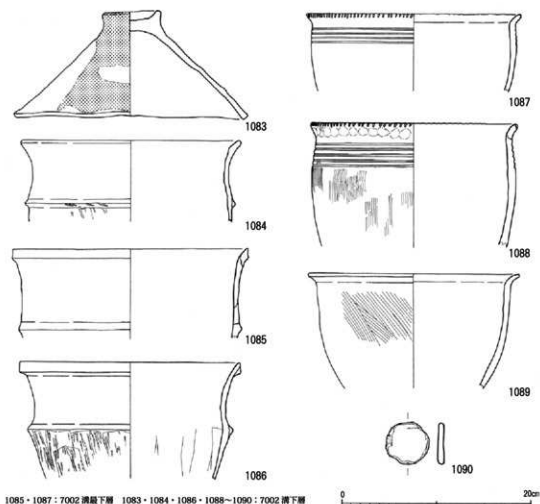


図 163 7区 7002 溝出土土器②

(2) 弥生時代前～中期の井戸

7061 井戸

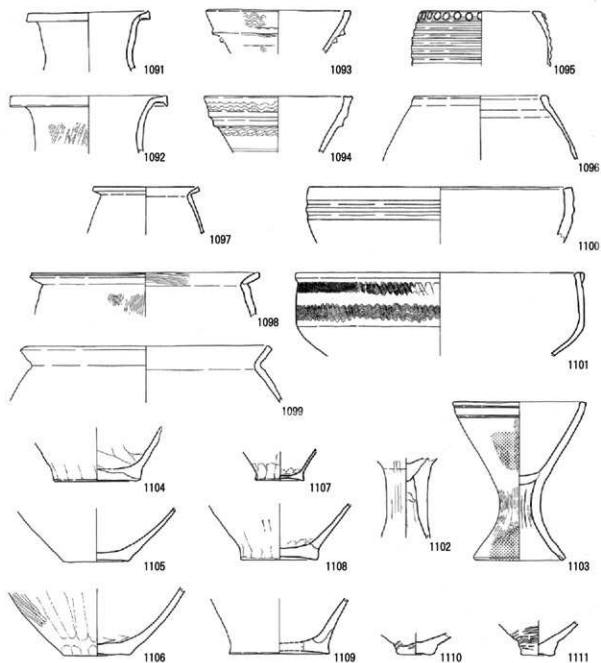
7区北の7000落ち込み内で検出した井戸である。井戸東側をV層上面で検出し、西側を7000落ち込み内で検出した。

7061井戸は直径約2.2m、深さ1.4mで、平面形はおおよそ円形を呈する。断面形は、上面は緩やかな段を持つが、そこから底面まで円筒形に下がる。素掘り井戸とみられ、埋土は大きく4層に区分できる。上層は黄灰色系のシルト、中層は炭化物を含む淡黄色系のシルト、下層は灰シルト、最下層はオリーブ灰色～緑灰色系のシルトを呈する。遺物は主に中層下位の炭化物層から出土している。最下層の下部では、灰色シルト層及び灰色中砂層が互層に堆積した湧水層を確認している。最下層では、自然木の破片を検出しているが井戸に伴うものではなく、落ち込み下層に存在する自然流路に伴うものと考えられる。弥生時代前期の遺構と考えられる。

1112は7061井戸出土の無頸壺。5条の低い貼り付け突帯上に細かい刻み目を施している。

7165 井戸

7区北、7000落ち込み中央の底で検出した井戸である。井戸上面には、長径約7m、短径約4mの緩やかな落ちが存在し、井戸は長径約4m、短径約3m、深さ1.3mで、平面形は楕円形を呈する。断面形はすり鉢状を呈し、埋土は上層・下層・最下層に大きく分けられる。出土遺物の多くは、上層の緩やかな落ちである炭化物を含む黄灰色シルト層と、下層の有機物を含む灰白色



1091～1093、1097～1105、1107～1109：7004 溝下層 1094～1096：7004 溝中層
1106：7004 溝中・下層 1110・1111：7004 溝上層



図 164 7 区 7004 溝出土土器

シルト層から出土した。最下層の下部壁面では、灰色シルト層及び灰色中砂層が互層に堆積した、湧水層を確認している。弥生時代前期の遺構と考えられる。

1114～1127 は 7165 井戸から出土した弥生土器。1114・1115 は広口壺、1114 は口縁部に穴をあける。1115 は外面に明瞭なハケ調整を残し、頸部にヘラ描き沈線を施す。1116・1117 は外反口縁をもち、肩部に 3 条のヘラ描き沈線を施す。1118・1119 は平底の底部で、1118 は外面にハケ調整を残し、1119 は底部を穿孔する。1115 は下層、1118 は中層、その他は上層から出土している。

7166 井戸 (=遺構 6050 の一部か)

7 区北端、7000 流路内で検出した井戸である。6 区壁面で確認された遺構 6050 中央部上層の堆積に対応するものと推定される。7166 井戸は直径約 1.5 m、深さ約 0.6 m で、平面形は不整形、断面形はすり鉢状を呈する。遺物は上層部分から出土しており、井戸埋没の最終段階に投棄されたものとみられる。弥生時代前期新段階の遺構と考えられる。

1120 ～ 1127 は 7166 井戸から出土した弥生土器。1120 ～ 1126 は壺で、ヘラ描き沈線及び貼り付け突帯文で飾る。1120 は口縁端部が平坦で、沈線と刻み目を施す。1121 は頸部が長く、間隔のあいた 5 条の沈線を施す。1122 は頸部に低い貼り付け突帯を施し、口縁部が大きく屈曲して開く。1124 は真つすぐ開く口縁部に 2 条の貼り付け突帯を付ける破片。1126 は頸部と肩部に間隔の開いた 4 条のヘラ描き沈線をほどこし、1125 は頸部に低い 6 条以上の突帯をもつ。1127 は蓋。頂部は平坦で外面にハケ調整を施す。

(3) 弥生時代中期～庄内式期の溝・土坑

7000 落ち込み上に 2 条、7 区中央から南側に数条の溝が、北東から南西に向かって直線的に流れている。7004 溝以外は出土遺物が少なく、詳細な年代は判然としないものが多い。

7001 溝 (= 6039 溝、8001 溝)

7001 溝は 7000 落ち込みの上面で検出された幅約 1.2 m、深さ約 0.3 ～ 0.35 m の溝である。断面形は緩やかな V 字形を呈し、埋土は上層・中層・下層として区分して調査した。上層と中層は、炭化物を含む黄灰色シルト層である。下層に一定量の遺物がみられ、庄内期の遺構と推定される。上流は 6 区の 6039 溝、下流は 8 区の 8001 溝に繋がる。この溝は弥生時代中期中葉の 7004 溝の西側に形成されている。

1065 ～ 1068 は 7001 溝から出土した土器。1065 は広口壺で、口縁端部が垂下する。1066 は頸部が屈曲する甕。1067 は脚部の短い高坏で、ミガキが施される。1068 は甕・鉢類の底部で、タタキ痕は確認できない。

7004 溝

7004 溝は 7000 落ち込みの上面で検出された、幅約 1.9 m、深さ約 0.5 m の溝である。断面形は緩やかな V 字を呈する。埋土は炭化物を含む黄灰色～黒褐色シルト及び、灰色～灰白色シルトからなり、両者が互層に堆積する。上層・中層・下層に分かれ、下層の底面よりやや上から多くの土器が出土している。おそらく、溝が埋没開始した段階で土器が投棄されたものと考えられる。弥生時代中期中葉～後期の遺構と考えられる。

1091 ～ 1111 は 7004 溝から出土した弥生土器。1091・1092 は広口壺で、口縁端部を上下に肥厚させる。1093・1094 は直口壺で、開きぎみの口縁部の下方に突帯を貼り付け、櫛書き波状文で飾る。1095 は細頸壺で、内湾する口縁部に凹線を施し、口縁端部直下に円形浮文を貼りつける。1096 は無頸壺。1097 ～ 1099 は甕で、1097 は小型品。1098 は外面ハケ調整である。1100・1101・1103 は鉢で 1100 は凹線文、1101 は櫛描き波状文で飾る。1103 は小型の台付き鉢で、口縁部に 2 条の細い凹線を施す。胎土は乳白色を呈している。1102 は高坏の脚部と推定され破片。1104 ～ 1109 は平底の底部で、1107 ～ 1109 は突出する底部が薄手に仕上げられている。1110・1111 はタタキ甕の底部であり、この 2 点だけが上層出土遺物である。上層の埋没年代は弥生時代後期ないし庄内式期の可能性が考えられる。

7009 溝

7009 溝は 7 区南部で検出した長さ約 20.0 m、幅約 0.8 m、深さ約 0.1 m の溝。断面形は緩やかな皿状を呈する。隣接する他の溝と平行するが、北側で 2 方向に分岐し、途切れている。溝の上面に弥生時代末期の 7157 土坑があることから、弥生時代の溝と判断される。

7007・7010・7011 溝 (= 8007 溝)

7 区中央で検出した溝群のうち北にある 3 条の溝で、7 区北東から 7 区南西へ N-45-E に傾いて流れる。溝の規模や方位が合っており、同時併存しない場合でも、近い年代の遺構と推定される。遺構の切り合いから弥生時代前期の 7002 溝よりも新しく、年代不詳の 7080 溝より古い年代の遺構といえる。溝からは弥生土器や土師質の土器片が微量出土している。

7007 溝は検出長約 30 m、幅約 1.1 m、深さ約 0.25 m。断面形は緩やかな U 字形を呈し、埋土は 4 層に分層でき、黄灰色シルト及び灰白色シルトが交互に堆積する。下層では、灰黄色シルトが堆積する。

7010 溝は検出長約 33 m、幅約 1.1 ~ 1.4 m、深さ 0.3 m。断面形は不整形な逆台形を呈し、埋土は 4 層に分層され、下層は炭化物を含む黄灰シルト層が堆積する。

7011 溝は検出長約 36 m、幅約 0.7 ~ 0.8 m。断面形は U 字形を呈し、他の溝よりも幅が狭く、深い特徴がある。埋土は 3 層に分層でき、上層は灰黄色 ~ 灰白色シルト、下層は炭化物を含む黄灰色シルトが堆積する。

竪穴建物 1 柱穴 (7073 ~ 7077)

7 区西中央で検出した竪穴建物と推定される遺構である。柱穴が並び中央に炉があることから認識したもので、建物の竪穴は検出されておらず、平地式建物の可能性も考えられる。柱穴掘方は直径約 0.3 m、深さ約 0.3 ~ 0.4 m である。埋土は、いずれも 2 層から 4 層に分層でき、柱痕跡と考えられる黄灰色シルト層が確認できた。建物の構造は方形 4 本柱、柱穴の間隔は約 2.6 m である。柱穴に隣接して、小穴が存在しており、貯蔵穴と考えられる。炉は 4 本柱の中央で検出しており、直径約 0.4 m、深さ約 0.15 m。埋土は単層で、黒褐色の炭化物層に黄灰シルトが混じる。炉埋土については、サンプルとして持ち帰っている。柱穴から弥生土器小片が出土していることと、四本柱の小型竪穴建物の検出例の多さから、庄内式期前後の遺構と推定している。

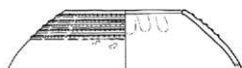
7068 土坑

7 区中央で検出した土坑で、竪穴建物 1 のすぐ北西側にある。長径約 1.8 m、短径約 0.6 m、深さ約 0.3 m で、平面形は長楕円形を呈する。埋土は 3 層に分層でき、中層は炭化物を含み、下層は焼土層が混じり底面が固く締まる。出土遺物から弥生時代後期の遺構とみられる。

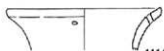
7157 土坑

7 区南で検出した土坑で、7009 溝の上面に作られている。直径約 0.75 m、深さ約 0.3 m で、平面形は円形を呈する。埋土は 3 層に分層でき、上層・中層には完形の土器を多く出土し、下層は炭化物を含む。遺物は、古式土師器壺・高杯・甕・鉢が出土しており、土坑廃絶に際して一括投棄されたものとみられる。出土遺物から庄内式期前半の遺構とみられる。

1128 ~ 1131 は 7157 土坑から出土した土師器である。1128 は広口壺で、胴が張り、底部は小さい平底である。1129 はタタキ甕で、頸部内面の屈曲がややあまい。1130 は埴形の鉢、1131 は円形透かしをもつ脚台部。



1112



1114



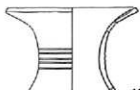
1115



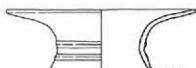
1118



1120



1121



1122



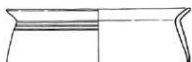
1123



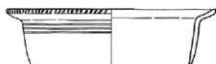
1124



1113



1116



1117



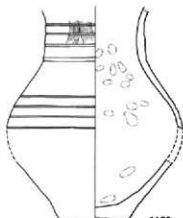
1119



1127



1125



1126

1112: 7061 土坑 1113: 7068 土坑 1114・1116・1117・1119: 7165 土坑上層
1118・7165 土坑中層 1115: 7165 土坑下層 1120~1127: 7166 土坑

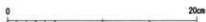


図 165 7 区 弥生時代の遺構出土土器

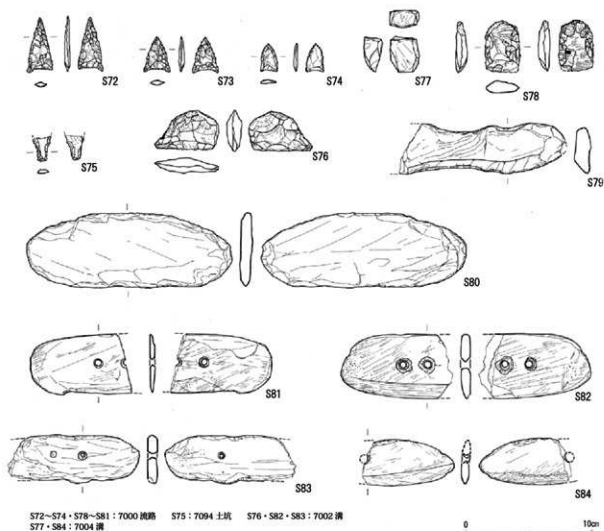


図 166 7 区 打製石器・石包丁 (石⑬)

(4) 弥生時代の石器

7 区からは弥生時代の石器が多数 (S72～S84) 出土した。図示したものを含め、サヌカイト製品・剥片が計 93 点、計 851 g、チャート片が 3 点、7.7 g 出土している。

S72～S74 は石鏃。S72・S73 はサヌカイト製であるが、S74 はサヌカイト以外の石材とみられる。S72 は尖頭器とも考えられる縦長のもの、S73 は平均的なもの、S74 は平坦で薄く、各重量は 3.3 g・1.9 g・0.9 g。これらの石鏃は 7000 落ち込みで出土した。

S75 はサヌカイト製の石錐。先端が尖り、基部は欠失している。7094 土坑で出土した。

S76 はサヌカイト製のスクレイパー。5.0 × 3.1 cm で、厚さ 1.2 cm。7002 溝で出土した。

S77 はサヌカイトの石核。他の剥片より風化が進んでいる。重量 12.6 g。

S78 はサヌカイト製の小型扁平片刃石斧。打製で成形され、部分的に磨製となっている。長さ 4.0 cm、幅 2.8 cm、厚さ 1.0 cm、重量 14.7 g。7000 落ち込みから出土している。

S79～S84 は緑色片岩製の石包丁。S79 は孔がなく細長い、刃部が付く。S80 は粗割り段階の未成品。16.2 × 5.9 × 0.9 cm、189.2 g。S81 は隅丸方形で、平面が薄く剥離し刃部も欠ける。S82・S83 は孔の位置をみると、S82 は短く幅広で、S83 は細長い形状とみられる。S83 は穿孔途中の未成品である。S84 は外湾刃杏仁形を呈する。

3 古墳時代から古代にかけての遺構

遺構の切り合い関係から弥生時代前期以降、鎌倉時代以前と判断されるが、出土遺物が微量であり詳細な年代は不明である。

7012 溝

7012 溝は検出長約 45 m、幅約 0.8～1.0 m、深さ約 0.1 m。緩やかな U 字形を呈し、平行する他の溝よりも浅く、緩やかに蛇行する。埋土も平行する他の溝と異なり、暗灰黄色シルトの単層である。出土遺物は微量であるが古代・中世頃の土器・陶器片が含まれており、宮井用水中溝水路との切り合い関係は不明であるが、その成立に伴い廃絶した溝の可能性も考えられる。

7050・7070・7080 溝

7 区中央で検出した分岐する小溝である。7 区北から中央部分へと流れ、7050 溝・7070 溝・7080 溝の 3 本に分岐する。いずれもその延長は検出されておらず、途中で途切れている。遺構の切り合い関係から、弥生時代の溝群より新しく、7013 溝・7032～7039 溝状遺構より古い遺構である。遺物には、精良な胎土の土器質の土器片が数点含まれることから、古墳時代以降、平安時代以前の遺構と考えられる。

7050 溝は 7 区北から流れ、7 区西で調査区外へと延びる。溝の検出長約 36 m、幅約 0.5 m、深さ約 0.1～0.15 m で、溝の断面形は緩やかな U 字形となる。

7070 溝は途中、7050 溝より分岐し、7 区西で調査区外へと延びる。溝の幅約 0.4 m、深さ 0.1 m である。7050 溝・7070 溝はともに浅く、7 区から 8 区にかけては高低差が存在することから、一部、床下げにより削平を受けた可能性がある。

7080 溝は 7050 溝から分岐し、ほぼ直角に向きを変え 7

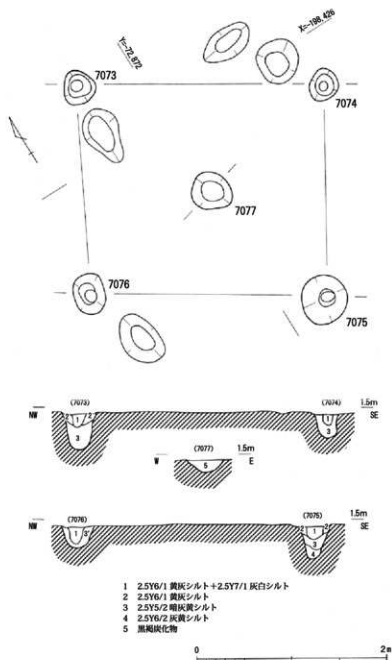


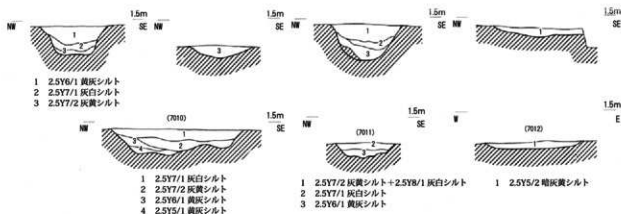
図 167 7 区 竪穴建物 1 の柱穴 (S=1:40)

7007 溝

7010 溝

7011 溝

7012 溝



7009

7050・7080 溝

7157 土坑

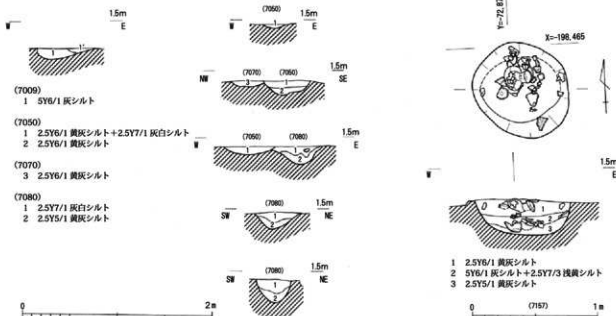


図 168 7 区 古墳時代頃の遺構 (S=1:30、1:40)

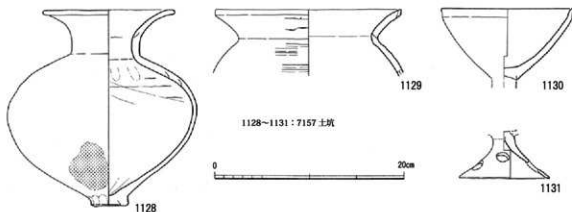
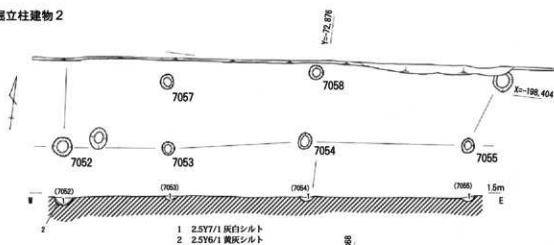


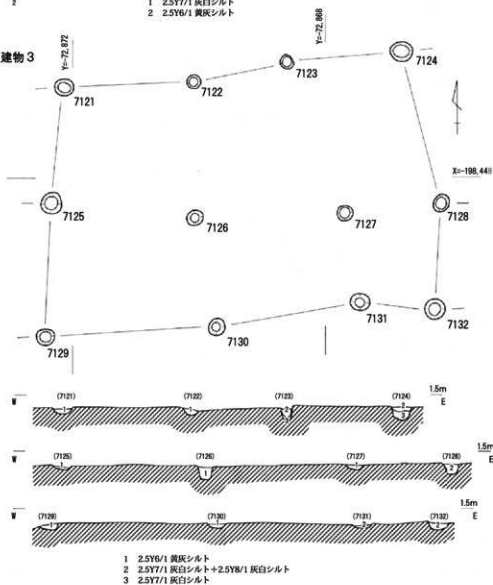
図 169 7 区 7157 土坑出土土器

区東へと流れる。途中、溝は途切れて無くなる。溝の検出長約 24 m、幅約 0.6 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m で、断面形は緩やかな V 字または U 字形を呈する溝である。

掘立柱建物 2



掘立柱建物 3



柱列 1

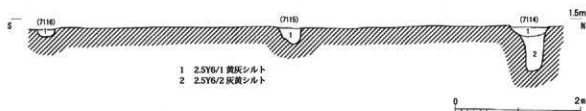


図 170 7区 掘立柱建物 2・3 他 (S=1:60)

4 中世～近世の遺構・遺物

(1) 中世の遺構・遺物

7013 溝 (= 8013 溝)

7013 溝は宮井用水中溝水路の下層で検出される先行溝の東肩部で、近世の陶磁器 (1133 ～ 1135) とともに、瓦器碗の破片 (1132) が出土している。より下層の状況が分かる 8 区の 8013 溝の項でまとめて説明するので参照されたい。

掘立柱建物 1 (7052 ～ 7058)

7 区北東部で検出した掘立柱建物で、6 区で検出した掘立柱建物 1 の南側部分に相当するものと考えられる。今回検出した柱穴はいずれも浅く、柱穴掘形は、直径約 0.2 m、深さ約 0.2 m で、建物の南辺部分と思われる。今回検出した延長部分から、建物の構造は、桁行 3 間、梁行 2 間、北面に廂が取りつく。建物の規模は、東西約 7.0 m、南北約 4.5 m、廂を含めると南北約 8.6 m となる。東西棟であり建物の主軸は北から 5 度、西へ傾く。建物の時期は 6 区の柱穴出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

掘立柱建物 3 (7122 ～ 7132)

7 区西中央で検出した掘立柱建物である。柱穴掘形は、直径約 0.3 m、深さ約 0.1 ～ 0.15 m を測り、やや浅い。埋土は黄灰色シルト～灰白シルトを呈し、浅い柱穴で 1 層、深い柱穴で 2 層に分層できた。建物の構造は、桁行 3 間、梁行 2 間に復元できるが、柱間間隔は約 2.0 ～ 1.6 m とまとまりがなく、柱通も不整形である。建物の規模は、東西約 5.4 m、南北約 3.9 m を測り、東西棟である。建物主軸はやや西へ傾くもののほぼ正方位である。柱穴が溝 7080 の上で検出されていることから、掘立柱建物 1 と同様に鎌倉時代の建物跡と考えると妥当であろう。

7133・7134・7135 土坑

7 区南の掘立柱建物 3 付近で集中して確認された土坑で、7134 と 7135 は 7080 溝の上面に作られている。

いずれも直径約 0.4 ～ 0.5 m で、7133 土坑は深さ 0.15 m である。

7134・7135 土坑は深さ 0.55 m あり、土坑壁面は直立気味に立ち上がる。7135 土坑の下層は炭化物・有機物を含み、ほぼ完形の瓦器碗が出土した (1138)。12 世紀後半の遺物と考えられる。いずれの土坑も同規模で近接し

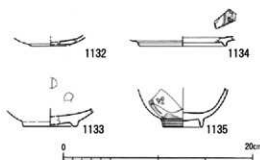


図 171 7 区 7013 溝出土土器

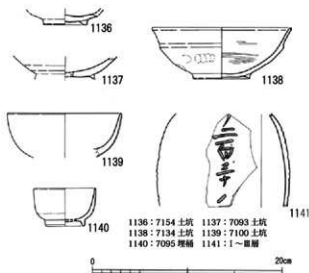


図 172 7 区 中世・近世の遺構他出土土器

て存在しており、掘立柱建物3を含めて関連する遺構と推定される。

7153・7154 土坑

7区南端で検出したL字形に屈曲する土坑で、東西約4.5m、南北約2.0m以上。土坑底面では、L字形に一段深く掘り込まれた7154土坑が存在する。土師器坑(1136)が出土しており、平安時代末ないしそれに近い年代の遺構と考えられる。

(2) 近世の遺構・遺物

7095 埋桶

7区西中央で検出した埋桶と考えられる遺構で、底面に結桶が残存する。直径約1.6m、深さ約0.55mで、平面形は円形を呈する。埋土は灰黄色シルト～灰白色シルトからなり、ブロック状に混じりあう。明黄褐色シルトを側面に貼り付け掘形を埋め、その後、結桶を据え付けたものとみられる。近世末の施釉陶器小坑(1140)が出土している。

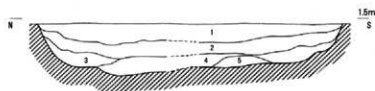
7100 井戸

7区南西で検出した井戸で、7013溝上面に作られている。遺構の規模は、直径約1.4m、深さ約0.4mで、平面形は円形を呈する。埋土は浅黄色シルト～灰白色シルトからなる。出土遺物から、江戸時代のものと思われる。

7030 土坑

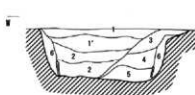
7区北端で検出した大型の土坑で、7000落ち込み上面に掘られている。南北約3.2m、東西約3.4mで、平面形は不整形な隅丸方形を呈する。土坑断面形は西側が緩やかに立ち上がり、東側は直立する。埋土はおおむね3層に分層され、にぶい黄色細砂、灰黄色細砂、暗灰黄色細砂からなる。いずれの層にも、直径5～10cm大の黄灰色または灰白シルトブロック、マンガンをも

7030 土坑



- 1 2.5Y6/4 にぶい黄細砂
- 2 2.5Y6/2 灰黄細砂
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄細砂
- 4 2.5Y7/2 灰黄細砂
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄細砂

- 1 2.5Y7/2 灰黄シルト
- 2 2.5Y6/2 灰黄シルト
- 3 2.5Y8/1 灰白シルト
- 4 5Y6/1 灰シルト
- 5 2.5Y7/1 灰白シルト
- 6 2.5Y7/6 明黄褐シルト



7095 埋桶

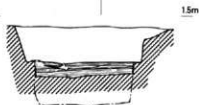
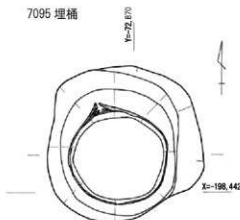


図 173 7区 近世の遺構 (S=1:40)

く含む。これらのシルトブロックは、土坑掘削時のもので、落ち込み埋土を起源とし、比較的短期間に埋没したものとみられる。土坑の性格については不明であるが土取り穴の可能性もある。出土遺物には弥生土器片が多く存在するがこれらは落ち込みの遺物が混入したと思われる。出土した近世陶磁器より江戸時代の遺構と考えられる。

溝状遺構 1 (7032 ~ 7039)

7区北から南にかけて、途切れながらも調査区を縦断するように検出した。いずれの溝状遺構も検出長約 6.0 ~ 8.0 m、幅約 0.3 m、深さ約 0.2 m の溝状の遺構で、埋土が特徴的な灰白色シルト~粘土であるため一連の溝と考えられる。6区でその延長部分を検出しており、溝状遺構の方向は、水田区画に残る条里型地割に対応する。調査前現況で確認できた水田境界に対応する位置に存在することから、境界溝または、坪境溝と考えられる。遺物等の出土は皆無であるが、中世以降の遺構と考えられる。

(4) 近世の木製品

W10 は 7100 溝、ないし下層の 7013 溝から出土した杭であるが、上層から打ち込まれたような状態で出土しており、遺構に伴うものではなく、新しいものの可能性が強い。7100 溝の現在の状態に縮小された時期と関連する可能性もあるので、参考までに掲載する。

W11 は 7095 溝から出土した結桶の側板である。高さ 14.3 cm、幅 7.7 cm で、厚さ 1.8 cm。板の中央に孔をあけている。

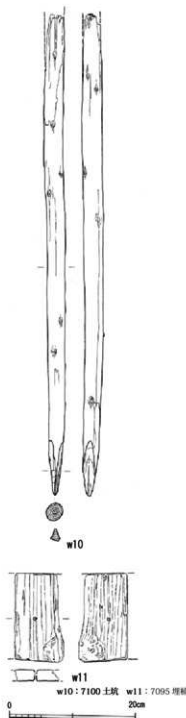


図 174 7区 近世の木製品 (木③)

第8節 8区の調査

1 概要

8区は、調査対象地の南端のうち宮井用水中溝水路を挟んだ西側にあたる。東西幅5～9m、南北長さ約66mで、調査区面積372㎡である。

調査前は水田である。調査は7区と同時に、両地区に渡る溝が多数検出されている。これらの溝については7区に詳しいが、宮井用水中溝水路の下層溝(7013-8013溝)については、8区の方が若干下層に近い部分を掘削し、溝の成立期とみられる遺物が出土しているため8013溝に詳述した。

8区では7区同様、弥生時代から近世まで多数の溝が流れている。これらの溝や掘立柱建物跡、柵などでは、出土遺物も少なく、年代は判然としない。出土遺物は計11箱で、弥生土器のほか、陶磁器片が散見される。

2 弥生時代の遺構・遺物

(1) 弥生時代前期～中期の流路・溝・落ち込み

8区では、7区から続く落ち込みと流路が検出された。8区の8000落ち込みと7区の7000落ち込み、8区の8001・8002・8004溝と7区の7001・7002・7004溝が同一の遺構と考えられる。8区の8006～8011溝と7区の7007・7009～7011溝の対応関係はやや曖昧である。

8000落ち込み・下層流路(7000・8000)

8000落ち込み・流路は、下層流路と上層の落ち込みの2時期に分けられる遺構である。

8000下層流路として認識されるものは、図175の8区西壁土層の⑤・⑥層にあたる幅10m前後の流路であり、深さ約0.3mの場所と、そこから深く落ちる幅5mほどの部分から成っている。8000下層流路を埋める堆積は8区全体に堆積するものとみられ(V'層)、当調査後に隣接する井辺遺跡で縄文時代晩期の遺構が初めて確認されたことから、今後注意が必要な堆積である。

明確に土器が出土している8000落ち込みは①～④層にあたるもので、8000下層流路の上に形成される落ち込みとして評価される。下層に灰色礫混じり粗砂と黄灰色シルトが堆積しており、8区中央で、8000落ち込みの下を8002溝が通過する状況を確認した。

出土遺物は一定量あるが、摩耗の著しい弥生土器小片ばかりである。7000落ち込みで出土した土器の細片とみなして問題ない。

8001溝(=7001溝)

8区北部を北東から南西方向に流れる幅0.7m、深さ0.2mの溝である。8000落ち込みの上で検出しており、上流部は7区の7001溝にあたるものと考えられる。

出土遺物は少ないが、壺の口縁部ないし脚部と考えられる弥生土器片(1156)が出土しており、7001溝同様に弥生時代中期中葉の溝と考えられる。

8002溝(=7002溝)

8区中央で検出した北西から南東に流れる幅約3.1m、深さ約0.4mの溝である。上流部は7区の7002溝にあたるものと考えられる。出土土器は弥生時代前期新段階とみられ、最下層の遺物の一部は前期中段階にさかのぼる可能性がある。溝の中からは木製品(W12)が出土したほか、8区東壁の土層断面では埋土中に粘土ブロックが多数確認されている。地形に逆って流れる大

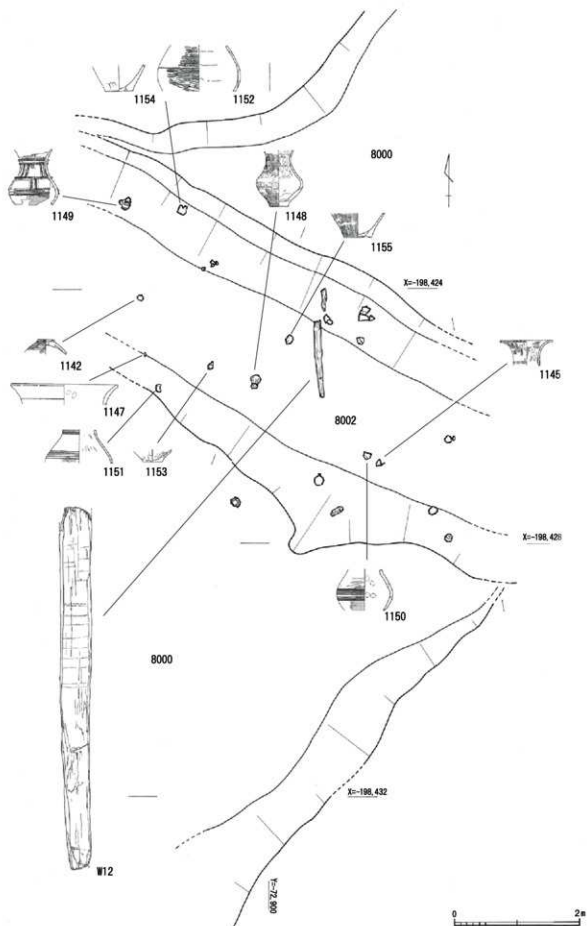


図 176 8区 8000 落ち込み・8002 溝遺物出土状況 (S=1:60)

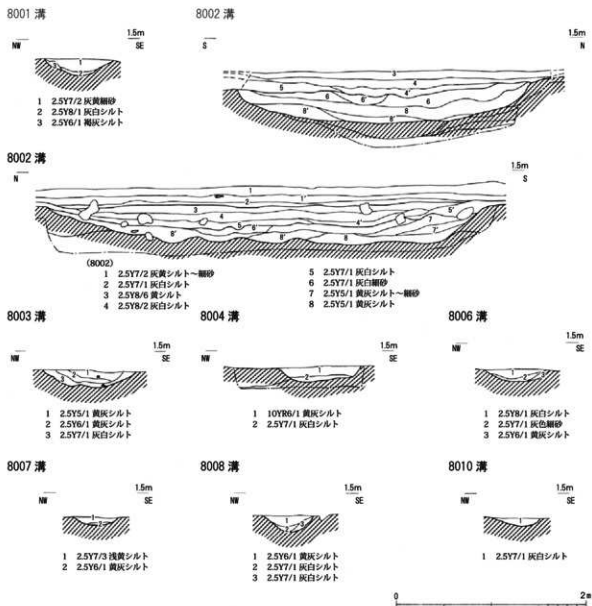


図 177 8 区 弥生～古墳時代の溝 (S=1:40)

型の溝であることから、この地を潤した基幹的な用水路である可能性がある。

1144～1155 は 8002 溝から出土した弥生土器である。1142 は壺の蓋。外面にミガキ調整を行う。1143～1147 は広口壺の口縁部。1143 は無文で、1144 は口縁内側に突帯を貼り付けて刻む。頸部には 2 条の沈線を施す。1145 は口縁部上を刻み、頸部に低い突帯をもつ。1146 は口縁部内面に 2 条の低い突帯を貼り付け、その内側に粘土を円錐形の粘土を貼りつけている。1147 は厚手の口縁部の破片。

1148～1152 は壺の体部。1148・1149 の体部は扁球形で、頸部下半がやや直線的に伸びて狭まり、若干頸部の長い広口壺となる。1148 は外面ハケ調整で、口縁部は意図的に打ち欠いた可能性もある。1149 は頸部から体部にかけて、刻み目を施した隆帯（突帯）を縦横に貼り付け、2 段に区画する。隆帯のはがれた場所では隆帯位置の下書き線とみられるへら描き沈線が確認される。なお隆帯は基本的に 2 本一対であるが、1 本になっている場所が散見される。胎土分析では片岩が含まれており、他地域の影響のみられる在地生産品と考えられる。1150 は体部最大径付

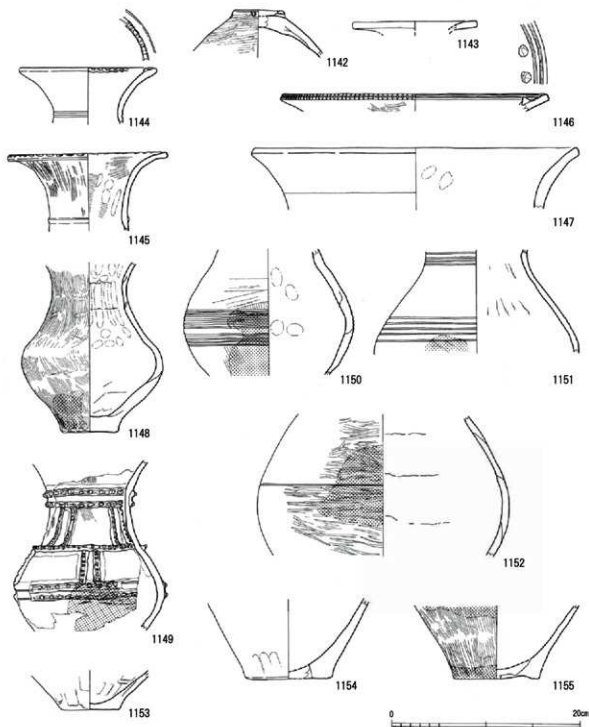


図 178 8 区 8002 溝出土土器

近に、多条のヘラ描き沈線を施す。1151 は頸部と肩部に 4 ～ 5 条程度の間隔のあいたヘラ描き沈線を施す。1152 は外面ミガキ調整で、肩部をヘラ描き沈線で区切る。1153 ～ 1155 は平底の底部。1142・1145・1146・1148・1152・1153 が最下層、その他が下層から出土している。

8004 溝 (= 7004 溝か)

8 区北部で検出した幅 0.4 ～ 1.0 m、深さ 0.10 ～ 0.2 m の溝である。溝の東側は不安定で曲っているが、上流部は 7004 溝と推定される。出土遺物は微量であるが、弥生時代のタタキ甕片が出土しており、7004 溝と同様に弥生時代後期ないしは庄内式期の遺構と考えられる。

(2) 弥生時代の木製品

W12は8002溝から出土した木製品。残存長117cm、幅10cm、厚5.7cm。厚手で、片面を粗く平坦に加工している。流路内から単独で出土しているため、流路幅の狭い場所にかけられた橋であった可能性などが考えられる。

(3) 条理制施行前の遺構

遺構の切り合い関係から弥生時代中期の溝群より新しく、鎌倉時代の宮井用水下層溝(8013溝)より古い年代の溝などが多数検出されている。出土遺物はほとんどなく、詳細な年代は不詳である。

8006 溝

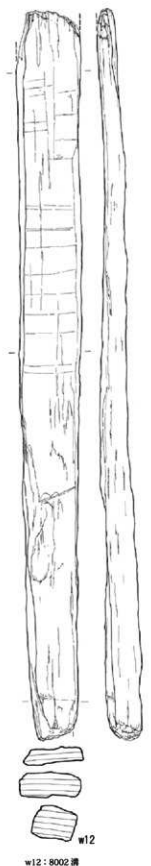
8区中央部、8007～8011溝より北をほぼ平行して流れる溝である。幅0.7m、深さ0.15mで、瓦器片が出土する。溝の東端は宮井用水先行溝(8013溝)に切られており、条理型地割に沿った用水路が整備される直前期の溝と推定される。上流部は7区掘立柱建物3の北側約6mを東西に流れる溝に対応する可能性が考えられる。溝の廃絶年代は13世紀で、8013溝の成立年代と同時期と推定される。

8007～8011 溝

8区南半で検出した北東から南西へ流れる溝群である。溝からの出土遺物は少なく、遺物の年代も様々であり、遺構の年代特定は難しい。これらの溝は幅0.4～0.5m、深さ0.1～0.2mで黄灰～灰白シルトで埋まる。7区の溝との対応は、8007溝と7007溝、8008・8009溝と7010溝、8010・8011溝と7011溝と推定される。8008溝からは弥生時代中期の櫛描き扇形文のある土器片が出土し、8011からは弥生時代後期から庄内式期のものと考えられるタタキ甕片が出土している。

柵列2(8027～8032 柱穴)

8区南、8013溝の底面で検出した柵列である。ピットは直径0.2m、深さ0.15～0.2mである。埋土は灰白色シルトからなり、中央部分には、やや粘性のある灰白シルトが存在し、杭痕跡とみられる。柵列の規模は南北約6.6mである。ピットの間隔は芯々で約1.0～1.6mを測る。出土遺物は見られないが8013溝に先行し、鎌倉時代以前の遺構とみられる。



W12: 8002 溝

0 20cm

図 179 8 区 8002 溝出土木製品(木④)

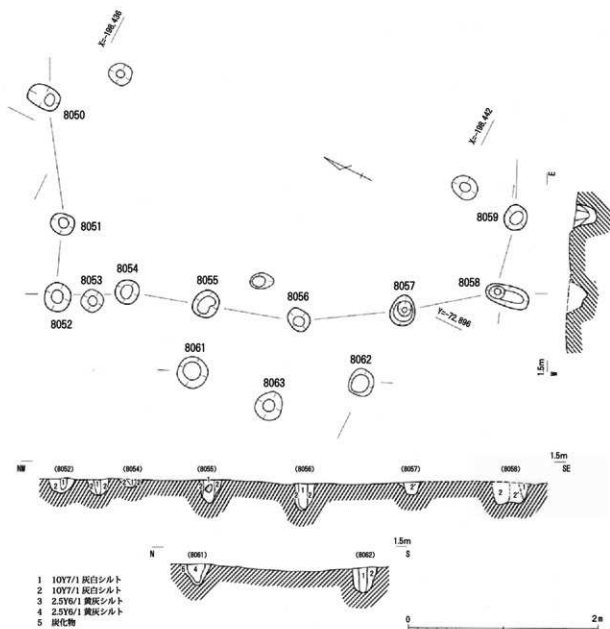


図 180 8 区 掘立柱建物 1 (S=1:40)

8048 土坑

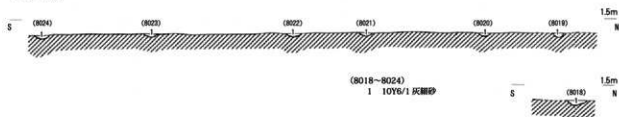
8 区中央、8013 溝の底面で検出した。方形土坑の南辺に突出部があり、中央には柱痕跡と思われるビットが存在する。掘立柱建物の柱穴と考えられるが、このほかに対応する柱穴は存在しない。

掘立柱建物 2 (8050 ~ 8063 柱穴)

8 区中央で検出した掘立柱建物で、東半部は調査区外となる。8013 溝に先行する。柱穴は、直径約 0.26 ~ 0.28 m、深さ約 0.3 m。建物の構造は南北 5 間、東西 2 間以上に復元できるが、柱間間隔は芯々で約 1.0 m と狭く、柱通も不整形である。建物の規模は、南北約 4.75 m、東西約 2.0 m 以上である。掘立柱建物 2 の西側には、建物に並行して並ぶ柱穴 2 基と、炭化物が充填されたビットが存在し、建物に付属するものと思われる。側柱建物で、地形に沿って建てられており、他の掘立柱建物とは異なる傾向をもつ。出土遺物はほとんどないが、精良な土師質の土器片が確認され古墳時代頃の建物と推定される。



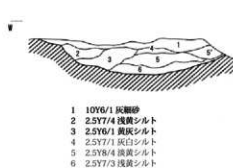
ビット列



柱列



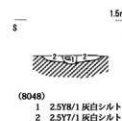
8036 土坑



8047 土坑



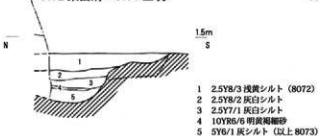
8048 柱穴



柱列 (礎石が礎板あり)



8072 東西溝・8073 土坑



8074 土坑

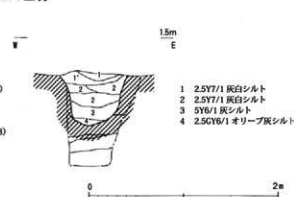
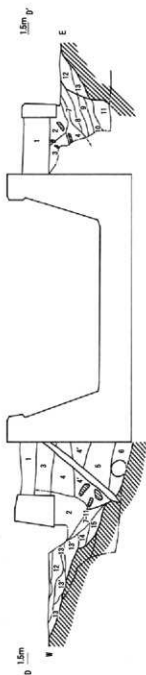


図 181 8 区 中世～近世の遺構 (S=1:40)

8区 8013溝



7区 7013溝



※7013・8013は大水の山崩層と想定される遺層である。
※C・C'、D・D'では、近くの溝の断面図を合成している。

図 182 7・8区 7013・8013 南北溝断面模式図 (S=1:40)

柱列 (8067 ~ 8069 柱穴)

8 区中央東側、8013 溝の底で検出した柱穴列。8067 柱穴と 8068 柱穴内には礎石か礎板とみられる石が据えられている。

8073・8074 井戸

8 区北端を流れる宮井用水中溝水路先行溝の分流とみられる 8072 東西溝の底で検出した径 0.7 m の井戸、または水溜めと考えられる遺構である。

8073 井戸は深さ約 0.35 m とやや浅い。

8074 は深さ約 0.6 m で、上層は灰白色シルト、中層は灰白色及び明黄褐色シルト、下層は灰色～オリーブ灰シルトで埋まる。下層部分にはオリーブ灰シルトの湧水層が存在する。鎌倉時代以前に埋没した遺構として評価できる。

4 中世～近世の遺構・遺物

8013 溝 (= 7013 溝、宮井用水「中溝水路」の下層溝)

8013 溝は 8 区東壁に沿って検出された溝で、南北溝の西肩部である。7 区の 7013 溝は南北溝東肩部の遺構であり、方位・埋土・出土遺物年代に共通点があることから、二つの溝は 7・8 区の間を流れる現在の宮井用水中溝水路の下層にある南北方向の大溝の両肩部に相当しているものと考えられる。7013-8013 溝は幅約 1.0 ~ 1.2 m の範囲で検出されており、検出長約 66.0

m、深さ約 0.25 ~ 0.3 m を掘削した。弥生時代・古墳時代の溝のほか、瓦器片を含む 8006 溝を縦断して流れており、溝肩部の上面には江戸時代末期とみられる 8047 井戸が作られている。

中溝水路は図 182 の通りの構造をしているものと考えられる。現行水路に対して先行する下層溝は 3 時期の遺構に分けられる。下層溝 1 は 14・15 層、下層溝 2 は 12・13 層、下層溝 3 は 7 ~ 11 層に相当する。下層溝 1 は推定幅 4.6 m 程で、下層溝 2 は幅 6.0 ~ 6.3 m、下層溝 3 は幅 4.9 m である。7013 溝と 8013 溝で出土した遺物から、下層溝 1 が鎌倉時代前期の 13 世紀代に成立し、下層溝 3 が江戸時代後期末に廃絶する遺構と考えられる。

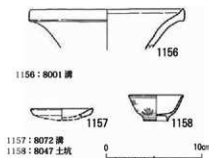


図 183 8 区 各種遺構出土土器

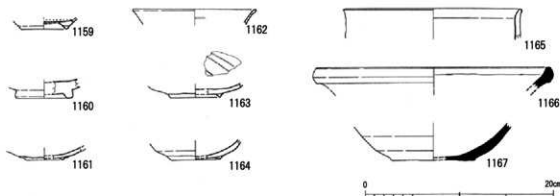


図 184 8 区 8013 南北溝出土土器

8013 溝は河南条里の方位軸線に沿って、ほぼ北から南へと直線的に流れている。一方、今回検出した弥生時代から古墳時代の溝の多くは、地形の傾斜を利用し北東から南西へと流れている。この溝は幅約 6.0 m に復元できる大溝であり、地形に逆らい南側へ水を流す用水路であったと考えられることから、先行する時期の宮井用水として評価することが妥当であろう。

1159 ～ 1167 は 8013 溝から出土した土器。1159 は黒色土器碗の底部細片。1160 は青磁碗底部。1161 ～ 1164 は瓦器碗。13 世紀から 14 世紀前半の遺物とみられる。1165 は土師質土器の鍋とみられる破片。1166・1167 は東播系須恵器鉢。14 世紀後半頃の遺物と考えられる。これらの遺物は 11 世紀から 14 世紀頃の遺物であるが、8013 溝に先行する遺構に瓦器片が入ることと、8013 溝には 12 世紀代の瓦器碗が含まれないことから、13 世紀～ 14 世紀前半の瓦器碗 4 点の時期が溝の成立時期に近いものと推定される。

柵列 1 (8018 ～ 8024 ビット)

8 区南で検出したビット列である。ビットの掘形が小さく建物状に並ばないことから柵列とした。ビット掘形はいずれも深さ約 0.05 m と浅い。柵列の規模は南北約 9.4 m を測り、ビットの間隔は芯々で約 1.0 ～ 2.0 m で均等に並ばない。遺物の出土は見られないが、調査時の埋土の観察では近世以降のものとみられている。

8036 土坑

8 区北で検出した大型の土坑で、8000 落ち込み・8013 溝より新しい遺構である。南北約 2.1 m、東西約 2.0 m を測り、平面形は不整形である。埋土はにぶい黄シルトを呈し、基盤層との区別が難しい。出土遺物から江戸時代の遺構とみられる。

8047 井戸

8 区北端で検出した井戸で、西半部分は調査区外となる。素掘りの井戸とみられ、南北約 1.0 m、東西約 0.7 m 以上、深さ約 0.65 m で、平面形は隅丸方形を呈する。埋土は、上層は灰白色細砂及び灰中砂からなり、下層はオリーブ灰色シルトを含む。下層部分では井戸側と考えられる木材が出土している。染付小坑 (1158) などの江戸時代末期とみられる遺物が出土している。

8072 溝

8 区北端の現行地割に沿って検出した溝である。検出長約 9.0 m、検出幅約 1.3 m、深さ約 0.18 m で、埋土は 8013 溝と同様の淡黄シルトを呈す。宮井用水中溝水路下層の 8013 流路と分岐し、地形に沿って流れる分流と考えられる。溝からは土師質の小皿 (1157) のほか、瓦器片が出土している。

第4章 総括

1 調査概要

神前遺跡では平成21～23年度に4次に渡る発掘調査を実施しており、そのうち3次の調査を和歌山橋本線の調査成果として本書で報告した。調査区数は8区で、調査面積計8,228㎡、出土遺物数は398箱分であった。

各調査区の代表的な成果をまとめると次のとおりである。1区では、弥生時代から古墳時代にかけての蛇行する溝群を検出した。2区では、弥生時代前期から古墳時代前期までの完形の土器が混在する溝(201溝)を確認した。3区では、平安時代の井戸や溝のほか、中世末から近世にかけての屋敷地を確認した。4区では、弥生時代の溝が調査区の東側を通過している様相が確認された。5区では、弥生時代前期から古墳時代中期までの溝が多数確認され、多量の弥生土器が出土した。6区では、鎌倉時代の屋敷地が確認された。7区では、旧流路上に弥生時代中期から庄内式期にかけての落ち込みと溝が形成されていることが確認された。8区では、7区から続く弥生時代前期の溝が確認された。

神前遺跡では、全調査区で確認できる弥生時代前期から古墳時代中期までの溝群と、3区を中心とした屋敷地が特に注目される。

2 神前遺跡の溝・流路・谷について

和歌山平野東部の神前の地には、現在では紀ノ川から取水した宮井用水の「中溝水路」が流れており、一面に田畑が広がっている。しかし、神前遺跡は本来和田川沿いの自然堤防上にあり、海に近く塩害に悩まされた土地であることから、「中溝水路」が整備されるまでに数々の開拓の跡が刻まれていることが予想された。

神前遺跡周辺では、縄文時代の遺跡として丘陵裾部に貝塚が分布することが知られている。平地部の状況は知られていなかったが、2014年になって、井辺遺跡で縄文時代晩期の埋め甕が検出された。神前遺跡においても弥生時代前期の土器とともに突帯文系土器が若干出土しており、縄文時代から弥生時代にかけて周辺に遺跡が成立する状況がうかがえる。

当調査対象地の周辺は発掘された面積は少ないが、和歌山市の確認調査や和歌山県の試掘調査が行われており、神前遺跡と井辺遺跡の間には庄内式期以前の旧流路が想定される谷状地形があり、1区の流路ないし溝群はそこから取水し、弧を描いて5区に流れ込むものと推定されている(前田2008・田中2011)。周辺の様相はこれらの考察にゆずり、ここでは1区から8区の範囲で検出された多数の溝について、その変遷をまとめておく。

1区では東西の丘陵に挟まれた場所を多数の溝が北から南へ抜けていく状況が確認された。遺物は非常に少ないが、二度ないし三度の堆積で埋まる明確な輪郭を持った溝が多数あることから、度々、溝底の土砂をさらえていたことが考えられる。1区では主に3時期の溝群が切り合っているが、まず下層溝とされる溝7は、弥生時代前期頃の溝と推定される。次に溝1・4は南北方向に流れる弥生時代前期から庄内式期までの溝と考えられ、溝の肩付近まで残存している。そして溝2・3・5・6は庄内式期から古墳時代中期までの流路と考えられ、流路の上面は削平されている。これら4本の流路は南西にある丘陵の縁辺部を蛇行しており、年代が新しくなるにつれ谷

が埋まり、丘陵に近づいていったようである。平安時代には浅く直線的な008溝が調査区を縦断しており、ほぼ平坦地であったことがうかがえる。

3・4区では、調査区の東と西で溝を3～4条ずつ確認した。溝は幅が狭く、調査区東側の溝は南南東へ、調査区西側の溝は南南西へ緩やかに分かれていくことから、3区・4区は南北方向になだらかな微高地であったと推定される。平安時代の3081溝は、1区の008溝の延長部にあったが、3区では遺物もやや多く、近くに井戸も掘削されている。

4区より南は地形が北東から南西へ傾斜しており、同方向に流れる流路を多数検出している。多量の土器が出土した2区201・202溝は4区4007溝や5区5081溝と同一の溝である。この溝は底に凹凸があることと、弥生時代前期と庄内式期の完形の土器が隣り合うように混在して出土していることが特徴である。実際には溝というより幅の狭い谷底ないし川底に当たるものと考えられ、弥生時代前期から庄内式期まではほとんど埋まらず、庄内式期になって多量の土器とともに土砂がかぶり埋没していることが注目される。201溝出土土器として取り上げている布留式土器の一群は、出土状況から、溝がほぼ埋没した後に掘られた土坑の一括遺物と考えてよいだろう。

5区中央では幅約14m、深さ0.7m以上の谷状地形を呈する5040流路を確認した。最下層の状況は不明であるが、無遺物の堆積で始まるものと推定される。下層で弥生時代前期の土器が多量に出土しているが、Ⅱ様式の土器がⅠ様式の土器より下の層から出土する逆転現象もみられ、単純に下層から順に堆積した流路ではなく、土器を含んだ土が谷底で再堆積を繰り返しながら次第に埋まっていった様子がうかがえる。その谷は多数の溝状遺構や不整形土坑を形成しながら埋まり、上面には中期前葉から中葉の溝が5条形成されている。それらのうち中期前葉の溝（溝9）は谷上面の中央部を緩やかに蛇行して流れ、溝底に段差があり、自然流路に近い特徴をもつ。また、中期前葉から中葉の溝（溝7・8・10・11）は断面形がU字形ないしV字形で、緩やかな弧を描いて流れており、5093溝や5183溝のような分岐・合流がみられる溝である。これらの溝はすべて谷筋に流れ込んでくる特徴をもつことから、少なくともこの付近では排水機能の強いものといえる。そして、谷筋がほぼ埋まった後、庄内式期から古墳時代中期までの流路（溝12、5013-5257溝）はやや南側に移動し、その周囲には溝状遺構や不整形土坑が形成される。溝12沿いには多数のピットがあり、南東側の流路（溝13・14）までの間には井戸や建物と推定される遺構も分布している。古墳時代中期には5区南端部に溝15が形成され、青銅製の鈴が出土している。

5区の谷と谷の間には、基本的に弥生時代中期以前の遺構が分布しない。例外的に5040流路の北西肩部付近で検出されている溝7とピット群についても、溝の肩部と建物の堅穴部分が削平されている遺構である可能性が高いことを考えると、遺構の検出されない地点はそれ以上の削平を受けたことが予想される。これらのことから、5区は元来起伏に富んだ地形をしていたが、段階的に谷が埋まり、現在の状況にいたったものといえるだろう。

6～8区にも幅が広い谷状地形があり、その下層部（6050-7000-8000下層流路）では遺物が確認されていない。この流路が途中まで埋まった段階で水溜め機能の強い井戸と、隣接する谷筋の溝を集めた後、地形に逆らって流れていく用水路（7002-8002溝）が作られており、和田川沿いの灌漑用水の初現期の状況がうかがわれる。これらの遺構では弥生時代前期中段から新段階とみられる土器群が出土しており、和歌山の土器様相を知る上で重要である。この水路の廃絶後はもとの谷筋に沿った落ち込み状の浅い流路（7000-8000落ち込み）が再度形成され、落ち込

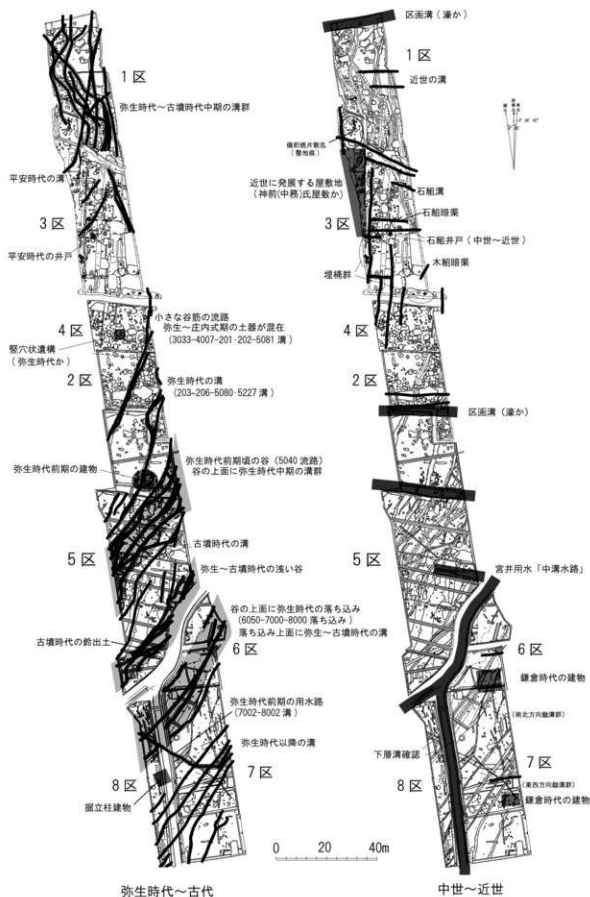


図 185 神前遺跡における流路の変遷

み埋没後は庄内式期までに2条の溝(7001-8001溝、7004-8004溝)が掘削されている。谷筋より南側を平行して流れる溝では、微量ながら弥生土器や土師器のほか、瓦器・陶器片を含むものがあり、多様な時期の溝があるものと推定される。

現在、これらの溝を縦断して宮井用水「中溝水路」が南北に流れており、7・8区ではその下層溝の東西の肩部とみられる遺構(7013溝・8013溝)が確認された。下層溝は幅4.6～6.3mで13世紀の瓦器片を多数含み、上面は江戸時代の遺物を含む土で埋まることから、鎌倉時代に成立した旧宮井用水「中溝水路」の跡と推定される。

これらの溝・流路・谷からは多量の弥生土器のほか、多数の種子圧痕のある土器片や獣骨、石器・石製品類、また古墳時代の青銅製鈴・初期須恵器片が出土している。このうち石包丁は緑色片岩あるいは緑泥片岩と呼ばれる、神前遺跡東側の丘陵部の岩盤を構成している石で製作されているもので、未成品を含み、弥生時代前期から中期にかけて、曲線刀隅丸方形から曲線刀杏仁形・直線刀半月形へと変化する傾向が確認できる。大型石包丁が3点出土しており、前期の大型石包丁に曲線刀隅丸方形を志向するものがあることも注目される。

神前遺跡では、弥生時代前期に起伏に富んだ地形を利用しながら水田耕作が始まり、庄内式期にはほぼ平坦な耕作地になったものと考えられた。鎌倉時代に紀ノ川からの用水路と南北方向の条理型地割が導入され、現在の景観にいたったことが分かった。

3 屋敷地の成立と展開

神前遺跡では、3区と6・7区を中心に屋敷地が確認された。

3区では平安時代の木柵のある井戸と溝が確認でき、溝は北東から南西へ周辺全体の自然地形を踏襲した方向に流れている。鎌倉時代の遺構は和歌山市の第1次調査で石組井戸が確認されている。平安～鎌倉時代の遺構は整地や削平の影響により少ないが、その後の屋敷地に継続するものと推定される。中世には各調査区の境で区画溝状の遺構が成立しており、「中溝水路」の整備とともに周囲一帯に条理型地割が導入されたことが分かる。

中世前半の遺物は少ないが、中世末から近世初頭にかけて遺物量は若干増加する。瓦が多数出土するほか、石組井戸も作られており、3区付近が瓦葺きの建物のある屋敷地に発展したことが分かる。近世初頭以降の屋敷地造成についても3区北西部に整地状況がうかがわれる場所がある。丘陵に近い地を削って整地したものと考えられ、備前焼大甕の上半部破片が12～20mにわたって散乱し、その整地土で3095土坑や3101溝が埋まっているようである。近世になると3区西側では石垣と段状の高まり、3区中央で石組の溝や暗渠、3区南西部・南部では埋桶群が形成されており、瓦や陶磁器の出土量も増加している。以上のとおり、3区の屋敷地は平安時代に出現し、中世末から近世にかけて継続・発展したものと考えられる。

神前の地には雑賀五組のうち杜家郷に属する神前氏がいたことが知られており、『湯川直春起請文』には「神前中務丞」という人物が記載されている。神前中務丞は織田信長が雑賀攻めを行った際に織田方に便宜を図っていることや、3区北西の丘陵が地元で「中務の築山(塚山)」と呼ばれていること、調査地西側にあった屋敷地は明治時代以前は中務氏の所有であったことなどが発掘調査時の聞き取り調査等により判明している。また、家系図によると中務氏は室町時代から続く家系で、江戸時代に神前氏から中務氏に苗字を変更しているという(田中・津村2011)。3

区で検出した屋敷地は神前・中務氏の屋敷地である可能性が高いといえるだろう。

そのほか注目すべき遺物として、近世後期の陶磁器とともに出土した近世前期の焼塩壺2点があげられる。神前遺跡のすぐ南西側にある布引浜の塩田は汽水域のきめ細かい塩が重宝され、大規模に塩作りを行っていた地として有名である。近世後期には和歌山でも堺の壺屋の印を押した焼塩壺が流通しているが、3区の屋敷地で出土した焼塩壺は堺の壺屋の印のない17世紀代の特徴をもった壺である。商品流通網を介せずに、地元の特産品を入手していた可能性も考えられるため、今後類例の増加を待ちたい。

また、6・7区には付近の条型地割に沿った方位をもつ鎌倉時代の掘立柱建物が2棟確認されており、それらを結んで流れる年代不詳の小溝との関係も注目される。北側の建物は柱穴に礎板を据え、底をもつ構造の3×3間の掘立柱建物で、区画溝と2基のビットから成る遺構が伴う屋敷地を構成しているものと考えられる。南側の建物は柱穴の小さい2×3間の掘立柱建物である。これらの建物は宮井用水「中溝水路」成立期のもので、3区の屋敷地のように継続はしない。

<主要参考文献>

- 井場好英・川口修実・北野隆亮 2000「神前遺跡第3次調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報—平成10年度—』和歌山市教育委員会・（財）和歌山市文化体育振興事業団
- 奥村薫 2000「神前遺跡発掘調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報6—平成8（1996）・平成9（1997）年度—』（財）和歌山市文化体育振興事業団
- 海津一朗編 2006『和歌山平野における荘園遺跡の復元研究—中世日宮領の研究—』
- 北野隆亮 2006「神前遺跡第5次確認調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報—平成16年度—』和歌山市教育委員会・（財）和歌山市文化体育振興事業団
- 佐伯和也 2012「神前遺跡の発掘調査（和歌山橋本線）」『公益財団法人和歌山県文化財センター年報2011』
- 田中元浩・津村かおり 2011「神前遺跡の発掘調査」『財団法人和歌山県文化財センター年報2010』
- 田中元浩 2011「神前遺跡出土の青銅製鈴」『財団法人和歌山県文化財センター年報2010』
- 田中元浩 2011「神前遺跡と水路の整備」『和歌山平野の集落遺跡—弥生時代から古墳時代へ—』（財）和歌山県文化財センター
- 土井孝之 1989「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年・近畿編1』木耳社
- 富永里菜 2010「神前遺跡の発掘調査」『財団法人和歌山県文化財センター年報2009』
- 前田敬彦 2008「紀伊における弥生時代遺跡の基礎的研究（2）—和歌山市神前遺跡—」『紀伊考古学研究』11
- 紀伊考古学研究会
- 和歌山県教育委員会 2010「神前遺跡、井辺遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成20年度—』
- 和歌山県教育委員会 2011「井辺遺跡、神前遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成21年度—』
- 和歌山県教育委員会 2012「神前遺跡周辺」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成22年度—』

付章 自然科学分析の成果

1 節 神前遺跡出土土器の胎土分析

藤根 久・米田恭子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の鉱物組成から、砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定するのは容易でない。土器は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料が比較的良質とも思える粘土層から採取されていたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村、2001）。また、粘土自体に珪藻化石やプラント・オパール、放散虫化石が混在している場合があり、材料の粘土が生成された時の環境がわかる。

一方、混和材としての砂粒物は、粘土層から粘土を採取する際に、粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などから採取されたと予想される。東海地域の弥生時代後期の赤彩を施したバレススタイル土器では、3分の1程度の土器に、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている（藤根、1998）。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層由来と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について微化石類およびテフラなどの鉱物を含めて検討する必要がある。

神前遺跡は、和歌山平野南東部の紀ノ川支流の和田川の自然堤防に立地する遺跡である。調査では、弥生時代前期の流路、弥生時代前期～中期前葉の溝、弥生時代後期の溝や井戸状遺構などが検出された。ここでは、弥生時代前期～中期の鉢・壺・甕について薄片の偏光顕微鏡観察による胎土分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、壺または壺と思われる器種が13点、鉢が8点、甕が6点、鉢または高坏が1点、粘土塊が2点の合計30点である（表1）。

これらの土器は、偏光顕微鏡観察用の薄片を作製した。方法は、一部をダイヤモンドカッターで切断した後、エポキシ樹脂で固化処理を行い、精密岩石薄片作製機および研磨フィルムを用いて厚さ20～30 μm の土器薄片を作製した。

薄片観察は、砂粒構成を微化石類（珪藻化石や植物珪酸体化化石）・鉱物・岩石に分けて、粒度区分毎に同定・計測を行った。計測は、メカニカルステージを用いて0.3mm間隔におけるポイント法により中粒シルト以上の粒子200個体について同定・計数した。なお、本方法は、松田ほか（1999）の方法を参考にした。

土器胎土中の粒子を同定または分類する際の各分類群の特徴を示す。

[放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物に含まれる。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百 μm 程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石（海水種、淡水

表1 土器胎土分析を行った土器とその詳細

[illegible]

種) を分類した。

「骨針化石」

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産としても 23 種ほどが知られ、湖や池あるいは川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

〔孢子化石〕

胞子は、直径約10～30 μm 程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

〔植物珪酸体化石〕

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50 μm 前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

〔植物遗体化石〕

木本または草本植物の細胞組織である。

〔石英・長石類〕

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。なお、輝石類を含有する石英を含む。

〔長石類〕

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶を示すものと累帯構造を示すものに細分される。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。

〔輝石類〕

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、

肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。

[ジルコン]

無色の長柱状または錐面に囲まれた形を呈し、屈折率が高い。

[砂岩質・泥岩質・チャート]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。チャートは、微細な結晶の集合体で結晶度の高い岩石である。

[片岩類]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。結晶片岩や粘板岩である。

[深成岩類]

大型の石英や長石から構成され、輝石類や角閃石類あるいは雲母類などを含む完晶質の岩石である。

[凝灰岩]

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直交ニコルで観察した際に全体的に暗い粒子である。

[流紋岩]

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。

[火山岩]

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。

[火山ガラス]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（デフラ）である。

[多結晶石英]

多結晶石英は、石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。

[酸化鉄結核]

赤褐色～褐色を呈する岩石であり、光学的には不透明である。

[不明鉱物および不明岩石]

下方ボーラーのみ、直交ボーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

3. 結果

偏光顕微鏡を用いた薄片ポイント法による計測結果と特徴を表 2-1 ～ 2-6 に示す。また、一部の微化石類を除いてグラフを図 1 ～ 3 に示す。また、砂粒分の粒度組成の結果を図 4 に示す。表 2-1 ～ 2-6 の備考欄には、薄片全体の砂粒組成や微化石類の特徴について示した。また、砂粒組成による分類も示した。

一部の土器胎土中には、粘土材料の堆積環境などの特徴を示す珪藻化石や骨針化石が含まれていた。

4. 考察

偏光顕微鏡による土器薄片のポイント法および観察の結果から、片岩類主体（分類 A1）、片岩類・堆積岩類主体（分類 A2）、片岩類・テフラ主体（分類 A3）、堆積岩類主体（分類 B1）、堆積岩類・深成岩類（分類 B2）、堆積岩類・テフラ主体（分類 B3）、深成岩類の花崗岩質主体（分類 C1）、深成岩類の斑れい岩主体（分類 C2）に分類された。

砂粒組成の特徴から、分類 A1 が 10 試料、分類 A2 が 10 試料、分類 A3 が 2 試料、分類 B1 が 4 試料、分類 B2 が 1 試料、分類 B3 が 1 試料、分類 C1 が 1 試料、分類 C2 が 1 試料であった。

分析 No. 25 と No. 26 の粘土塊は、在地の砂粒組成を示すと思われる試料であり、片岩類主体（分類 A1）および片岩類・堆積岩類主体（分類 A2）である。紀ノ川流域では、中央構造線の南側に三波川帯の泥質片岩などの片岩類が広く分布する（栗本ほか，1998）。分類 A1 や分類 A2 のほか、分類 A3 を含めて片岩類を多く含む組成は、在地的な組成と考えられる。したがって、分類 A1 の 10 試料、分類 A2 の 10 試料、分類 A3 の 2 試料は在地産の可能性が高い。なお、分析 No. 5 の逆 L 字形口縁鉢の胎土中には、小杉（1988）が設定した海水泥質干潟指標種群の *Diploneis smithii* が含まれていた（図版 4-5c）。この土器胎土の粘土材料として干潟成粘土が利用されたことを示す。

分類 B1 とした組成では、分析 No. 2 の逆 L 字形口縁鉢と分析 No. 12 の遠賀川系甕は、片岩類を全く含まない。一方、分析 No. 15 と分析 No. 27 の外反口縁鉢は、少ないものの片岩類を含んでいることから、在地組成を示すと考えられる。

分類 B2 とした分析 No. 17 の広口長頸壺は、僅かに片岩類を含んでいる。

分類 B3 とした分析 No. 4 の広口壺（円形浮文直列）は、片岩類を全く含んでいない。なお、この土器胎土中には、バブル型の火山ガラスを特徴的に含み、淡水種珪藻化石 *Pinnularia* 属を含んでいた。この土器は、粘土材料が淡水成粘土であることを示す。

深成岩類の花崗岩質主体（分類 C1）とした土器（分析 No. 11）は、花崗岩類と思われる砂粒を含み、テフラを含む組成である。紀ノ川上流域では、中央構造線の北側に領家帯の花崗岩類が分布することから（栗本ほか，1998）、紀ノ川上流域や支流の橋本川流域などが考えられる。

深成岩類の斑れい岩主体（分類 C2）とした突帯紋系鉢（分析 No. 13）は、塩基性岩の斑れい岩に近い組成と考えられる。畿内では、生駒西麓産土器あるいは河内の土器と呼ばれる暗褐色～茶褐色を呈する土器群が知られているが、これらの土器材料は、生駒斑れい岩を原岩として形成された断層内物質（断層ガウジ）を材料として作られた土器群であることが知られている（藤根・小坂，1997）。この突帯紋系鉢は、塩基性岩の斑れい岩が分布する地域であることから、非在地材料である。なお、断層内物質（断層ガウジ）の特徴として尖った粒子が特徴的に多いことが挙げられる。なお、紀ノ川中流域に位置する西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡の弥生時代中期の壺や甕においても同様の特徴を示す土器が検出されている（財団法人和歌山県文化財センター，2010）。

その他の特徴として、突帯紋系鉢(分析 No. 13; 断層ガウジ)の外面には、イネ粃や・キビ果実(有ふ果)などの圧痕が観察された。また、分析 No. 3 の受け口縁壺の胎土中には、イネ粃表面に形成される珪酸体化石が含まれていた(図版 4-3c)。こうした観察事例は、稲作の証拠を示す。

分析 No. 2 の逆 L 字形口縁鉢、分析 No. 4 の広口壺(円形浮文直列)、分析 No. 6 の小型鉢または高坏、分析 No. 18 の広口長頸壺?は、淡水種珪藻化石を含んでいたことから、粘土材料が淡水成粘土と考えられる。また、分析 No. 5 の逆 L 字形口縁鉢、分析 No. 17 の広口長頸壺は、海水種珪藻化石を含んでいたことから、粘土材料が海成粘土と考えられる。さらに、分析 No. 3 の受け口縁壺は、骨針化石を含んでいたことから粘土材料が水成粘土と考えられる。なお、周辺域における海成粘土は、大阪層群など限られた地層と考えられる。

5. おわりに

偏光顕微鏡による土器薄片のポイント法および観察の結果、片岩類主体(分類 A1)、片岩類・堆積岩類主体(分類 A2)、片岩類・テフラ主体(分類 A3)、堆積岩類主体(分類 B1)、堆積岩類・深成岩類(分類 B2)、堆積岩類・テフラ主体(分類 B3)、深成岩類の花崗岩質主体(分類 C1)、深成岩類の斑れい岩主体(分類 C2)に分類された。

砂粒組成の特徴から、分類 A1 が 10 試料、分類 A2 が 10 試料、分類 A3 が 2 試料、分類 B1 が 4 試料、分類 B2 が 1 試料、分類 B3 が 1 試料、分類 C1 が 1 試料、分類 C2 が 1 試料であった。このうち、片岩類を特徴的に含む分類 A1、分類 A2、分類 A3 が在地組成と考えられた。なお、分類 B1 の一部土器と分類 B2 では片岩類を僅かに含んでいた。これ以外の分類 B3 や分類 C1 あるいは分類 C2 に分類された土器は非在地組成と推定された。

参考・引用文献

- 安藤一男(1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42 (2), 73-88.
- 藤根 久・小坂和夫(1997) 生駒西麓(東大阪市)産の縄文土器の胎土材料—断層内物質の可能性—。第四紀研究, 36(1), 55-62.
- 藤根 久(1998) 東海地域(伊勢—三河湾周辺)の弥生および古墳土器の材料。第 6 回東海考古学フォーラム岐阜大会, 土器・墓が語る, 108—117.
- 藤根 久・今村美智子(2001) 第 3 節 土器の胎土材料と粘土採取坑対象堆積物の特徴。波志江中宿遺跡, 日本道路公団・伊勢崎市・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, 262-277.
- 小杉正人(1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究, 27, 1-20.
- 栗本史雄・牧本 博・吉田史郎・高橋裕平・駒澤正夫(1998) 20 万分の 1 地質図幅「和歌山」, 地質調査所
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高(1999) 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察。日本文化財科学会第 16 回大会研究発表要旨集, 120-121.
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会編(1992) 日本の地質 6「近畿地方」, 共立出版, 293p.
- 財団法人和歌山県文化財センター(2010)「西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡」一般国道 24 号京奈和自動車道(紀北東道路)改築事業に伴う第 1 次・第 2 次発掘調査報告書。

表 2-1 ポイント法による粒子の同定・計測結果

試料番号	試料名	採取方法	粒子の識別・構成														測定方法	測定結果			
			形状	色	大きさ	比重	屈折率	分散率	偏光性	溶解性	反応性	その他	備考	備考	備考	備考					
1	砂	採取	粒径	5mm (1.1)															100	同定結果	
			形状	5mm (1.1)															100		
			色	5mm (1.1)															100		
			比重	5mm (1.1)															100		
			屈折率	5mm (1.1)															100		
			分散率	5mm (1.1)															100		
			偏光性	5mm (1.1)															100		
			その他	5mm (1.1)															100		
			備考	5mm (1.1)															100		
			備考	5mm (1.1)															100		
2	砂	採取	粒径	5mm (1.1)															100	同定結果	
			形状	5mm (1.1)																	100
			色	5mm (1.1)																	100
			比重	5mm (1.1)																	100
			屈折率	5mm (1.1)																	100
			分散率	5mm (1.1)																	100
			偏光性	5mm (1.1)																	100
			その他	5mm (1.1)																	100
			備考	5mm (1.1)																	100
			備考	5mm (1.1)																	100
3	砂	採取	粒径	5mm (1.1)															100	同定結果	
			形状	5mm (1.1)																	100
			色	5mm (1.1)																	100
			比重	5mm (1.1)																	100
			屈折率	5mm (1.1)																	100
			分散率	5mm (1.1)																	100
			偏光性	5mm (1.1)																	100
			その他	5mm (1.1)																	100
			備考	5mm (1.1)																	100
			備考	5mm (1.1)																	100
4	砂	採取	粒径	5mm (1.1)															100	同定結果	
			形状	5mm (1.1)																	100
			色	5mm (1.1)																	100
			比重	5mm (1.1)																	100
			屈折率	5mm (1.1)																	100
			分散率	5mm (1.1)																	100
			偏光性	5mm (1.1)																	100
			その他	5mm (1.1)																	100
			備考	5mm (1.1)																	100
			備考	5mm (1.1)																	100
5	砂	採取	粒径	5mm (1.1)															100	同定結果	
			形状	5mm (1.1)																	100
			色	5mm (1.1)																	100
			比重	5mm (1.1)																	100
			屈折率	5mm (1.1)																	100
			分散率	5mm (1.1)																	100
			偏光性	5mm (1.1)																	100
			その他	5mm (1.1)																	100
			備考	5mm (1.1)																	100
			備考	5mm (1.1)																	100

表 2-2 ポイント法による粒子の同定・計測結果

[illegible]

[illegible]

項目	項目名	単位	測定方法										備考	測定日																																																																																																																																																																																																																																														
			測定方法	測定方法	測定方法	測定方法	測定方法	測定方法	測定方法	測定方法	測定方法	測定方法																																																																																																																																																																																																																																																
17	17-1	17-1-1	17-1-1-1	17-1-1-2	17-1-1-3	17-1-1-4	17-1-1-5	17-1-1-6	17-1-1-7	17-1-1-8	17-1-1-9	17-1-1-10	17-1-1-11	17-1-1-12	17-1-1-13	17-1-1-14	17-1-1-15	17-1-1-16	17-1-1-17	17-1-1-18	17-1-1-19	17-1-1-20	17-1-1-21	17-1-1-22	17-1-1-23	17-1-1-24	17-1-1-25	17-1-1-26	17-1-1-27	17-1-1-28	17-1-1-29	17-1-1-30	17-1-1-31	17-1-1-32	17-1-1-33	17-1-1-34	17-1-1-35	17-1-1-36	17-1-1-37	17-1-1-38	17-1-1-39	17-1-1-40	17-1-1-41	17-1-1-42	17-1-1-43	17-1-1-44	17-1-1-45	17-1-1-46	17-1-1-47	17-1-1-48	17-1-1-49	17-1-1-50	17-1-1-51	17-1-1-52	17-1-1-53	17-1-1-54	17-1-1-55	17-1-1-56	17-1-1-57	17-1-1-58	17-1-1-59	17-1-1-60	17-1-1-61	17-1-1-62	17-1-1-63	17-1-1-64	17-1-1-65	17-1-1-66	17-1-1-67	17-1-1-68	17-1-1-69	17-1-1-70	17-1-1-71	17-1-1-72	17-1-1-73	17-1-1-74	17-1-1-75	17-1-1-76	17-1-1-77	17-1-1-78	17-1-1-79	17-1-1-80	17-1-1-81	17-1-1-82	17-1-1-83	17-1-1-84	17-1-1-85	17-1-1-86	17-1-1-87	17-1-1-88	17-1-1-89	17-1-1-90	17-1-1-91	17-1-1-92	17-1-1-93	17-1-1-94	17-1-1-95	17-1-1-96	17-1-1-97	17-1-1-98	17-1-1-99	17-1-1-100	17-1-1-101	17-1-1-102	17-1-1-103	17-1-1-104	17-1-1-105	17-1-1-106	17-1-1-107	17-1-1-108	17-1-1-109	17-1-1-110	17-1-1-111	17-1-1-112	17-1-1-113	17-1-1-114	17-1-1-115	17-1-1-116	17-1-1-117	17-1-1-118	17-1-1-119	17-1-1-120	17-1-1-121	17-1-1-122	17-1-1-123	17-1-1-124	17-1-1-125	17-1-1-126	17-1-1-127	17-1-1-128	17-1-1-129	17-1-1-130	17-1-1-131	17-1-1-132	17-1-1-133	17-1-1-134	17-1-1-135	17-1-1-136	17-1-1-137	17-1-1-138	17-1-1-139	17-1-1-140	17-1-1-141	17-1-1-142	17-1-1-143	17-1-1-144	17-1-1-145	17-1-1-146	17-1-1-147	17-1-1-148	17-1-1-149	17-1-1-150	17-1-1-151	17-1-1-152	17-1-1-153	17-1-1-154	17-1-1-155	17-1-1-156	17-1-1-157	17-1-1-158	17-1-1-159	17-1-1-160	17-1-1-161	17-1-1-162	17-1-1-163	17-1-1-164	17-1-1-165	17-1-1-166	17-1-1-167	17-1-1-168	17-1-1-169	17-1-1-170	17-1-1-171	17-1-1-172	17-1-1-173	17-1-1-174	17-1-1-175	17-1-1-176	17-1-1-177	17-1-1-178	17-1-1-179	17-1-1-180	17-1-1-181	17-1-1-182	17-1-1-183	17-1-1-184	17-1-1-185	17-1-1-186	17-1-1-187	17-1-1-188	17-1-1-189	17-1-1-190	17-1-1-191	17-1-1-192	17-1-1-193	17-1-1-194	17-1-1-195	17-1-1-196	17-1-1-197	17-1-1-198	17-1-1-199	17-1-1-200	17-1-1-201	17-1-1-202	17-1-1-203	17-1-1-204	17-1-1-205	17-1-1-206	17-1-1-207	17-1-1-208	17-1-1-209	17-1-1-210	17-1-1-211	17-1-1-212	17-1-1-213	17-1-1-214	17-1-1-215	17-1-1-216	17-1-1-217	17-1-1-218	17-1-1-219	17-1-1-220	17-1-1-221	17-1-1-222	17-1-1-223	17-1-1-224	17-1-1-225	17-1-1-226	17-1-1-227	17-1-1-228	17-1-1-229	17-1-1-230	17-1-1-231	17-1-1-232	17-1-1-233	17-1-1-234	17-1-1-235	17-1-1-236	17-1-1-237	17-1-1-238	17-1-1-239	17-1-1-240	17-1-1-241	17-1-1-242	17-1-1-243	17-1-1-244	17-1-1-245	17-1-1-246	17-1-1-247	17-1-1-248	17-1-1-249	17-1-1-

[illegible][illegible]

设备名称	设备型号	数量	设备技术参数										备注
			设备名称	设备型号	设备数量	设备规格	设备材质	设备颜色	设备尺寸	设备重量	设备功率	设备电压	
1	设备名称	1	设备名称	设备型号	设备数量	设备规格	设备材质	设备颜色	设备尺寸	设备重量	设备功率	设备电压	备注
2	设备名称	1	设备名称	设备型号	设备数量	设备规格	设备材质	设备颜色	设备尺寸	设备重量	设备功率	设备电压	备注
3	设备名称	1	设备名称	设备型号	设备数量	设备规格	设备材质	设备颜色	设备尺寸	设备重量	设备功率	设备电压	备注
4	设备名称	1	设备名称	设备型号	设备数量	设备规格	设备材质	设备颜色	设备尺寸	设备重量	设备功率	设备电压	备注
5	设备名称	1	设备名称	设备型号	设备数量	设备规格	设备材质	设备颜色	设备尺寸	设备重量	设备功率	设备电压	备注
6	设备名称	1	设备名称	设备型号	设备数量	设备规格	设备材质	设备颜色	设备尺寸	设备重量	设备功率	设备电压	备注
7	设备名称	1	设备名称	设备型号	设备数量	设备规格	设备材质	设备颜色	设备尺寸	设备重量	设备功率	设备电压	备注
8	设备名称	1	设备名称	设备型号	设备数量	设备规格	设备材质	设备颜色	设备尺寸	设备重量	设备功率	设备电压	备注
9	设备名称	1	设备名称	设备型号	设备数量	设备规格	设备材质	设备颜色	设备尺寸	设备重量	设备功率	设备电压	备注
10	设备名称	1	设备名称	设备型号	设备数量	设备规格	设备材质	设备颜色	设备尺寸	设备重量	设备功率	设备电压	备注

[illegible]

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

表 2-6 ポイント法による粒子の同定・計測結果

[illegible]

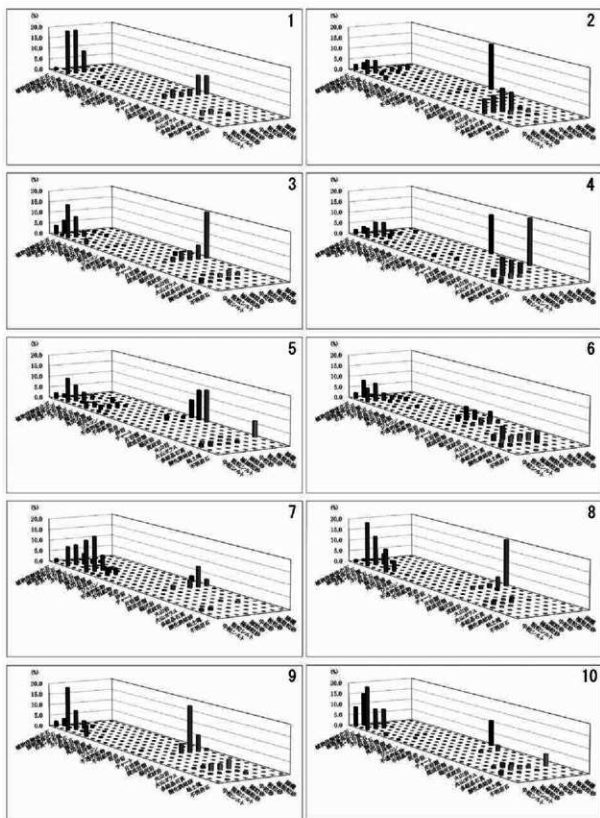


図1 胎土中の各粒度階における微化石類・鉱物・岩石の出現図（分析No. 1～10）

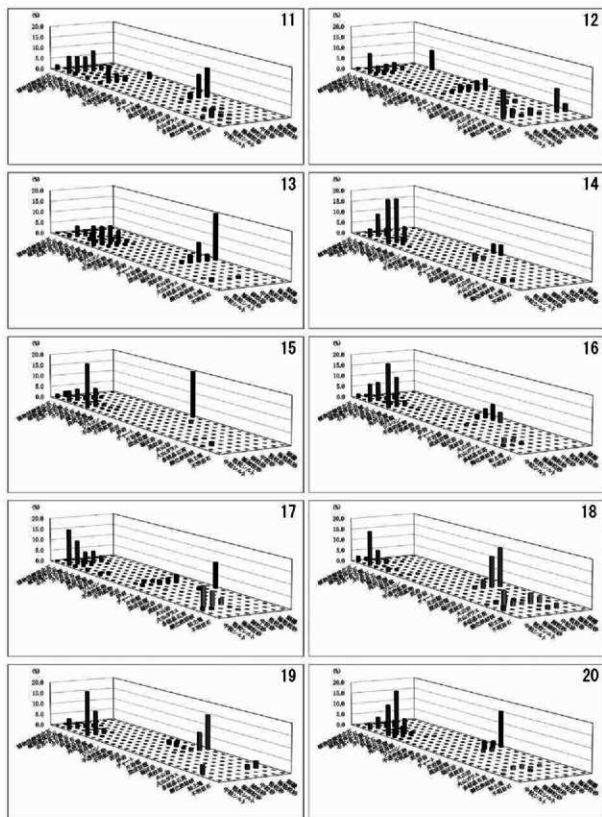
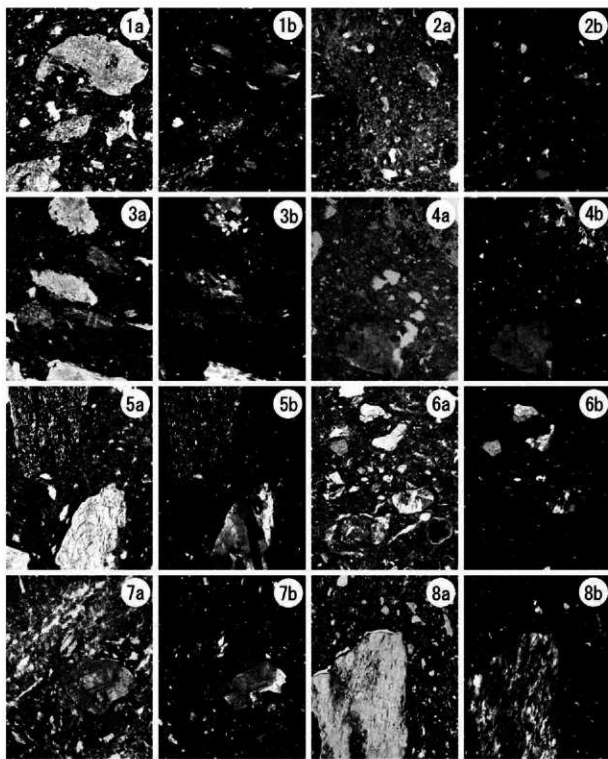


図2 胎土中の各粒度階における微化石類・鉱物・岩石の出現図 (分析No. 11~20)



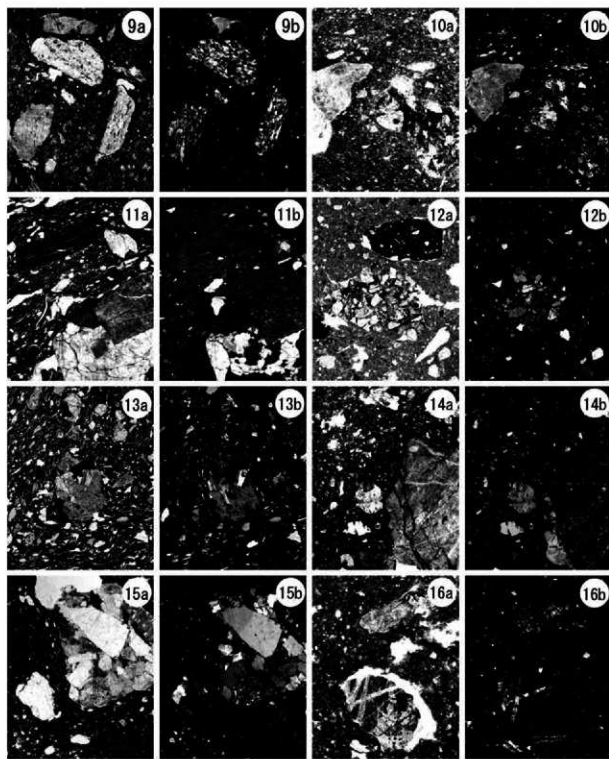
図版1 土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール：500 μ m、a：解放コ#、b：直交コ#）

1a. 分析No.1 1b. 分析No.1 2a. 分析No.2 2b. 分析No.2

3a. 分析No.3 3b. 分析No.3 4a. 分析No.4 4b. 分析No.4

5a. 分析No.5 5b. 分析No.5 6a. 分析No.6 6b. 分析No.6

7a. 分析No.7 7b. 分析No.7 8a. 分析No.8 8b. 分析No.8



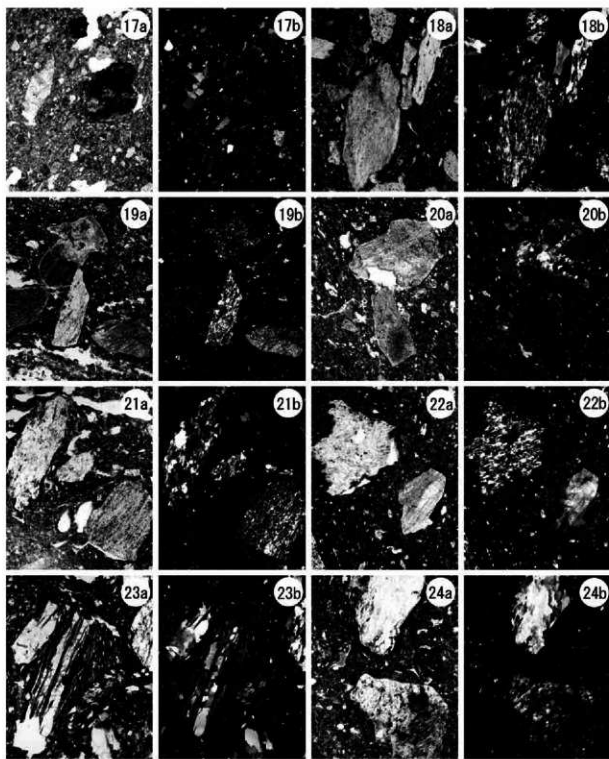
図版2 土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール:500 μ m、a: 解放ニコル、b: 直交ニコル）

9a. 分析Na9 9b. 分析Na9 10a. 分析Na10 10b. 分析Na10

11a. 分析Na11 11b. 分析Na11 12a. 分析Na12 12b. 分析Na12

13a. 分析Na13 13b. 分析Na13 14a. 分析Na14 14b. 分析Na14

15a. 分析Na15 15b. 分析Na15 16a. 分析Na16 16b. 分析Na16



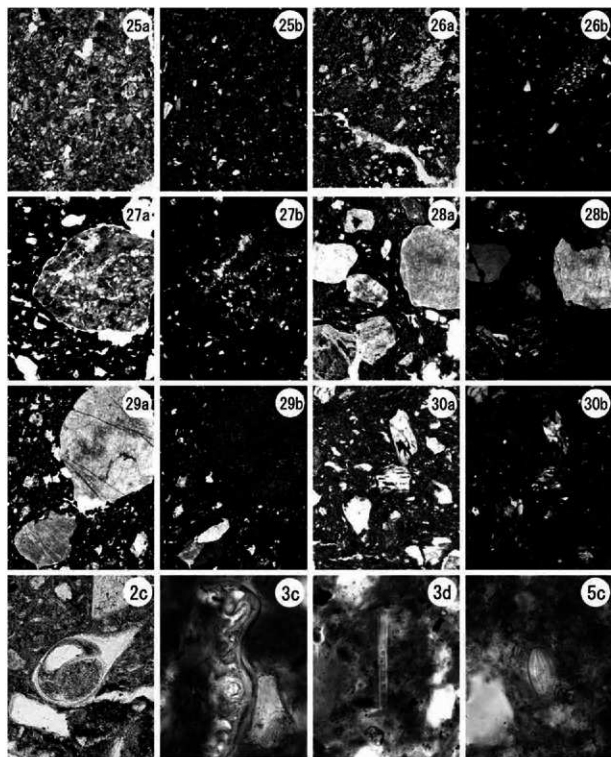
図版3 土器胎土の偏光顕微鏡写真 (スケール: 500 μ m, a: 解放ニコル, b: 直交ニコル)

17a. 分析No.17 17b. 分析No.17 18a. 分析No.18 18b. 分析No.18

19a. 分析No.19 19b. 分析No.19 20a. 分析No.20 20b. 分析No.20

21a. 分析No.21 21b. 分析No.21 22a. 分析No.22 22b. 分析No.22

23a. 分析No.23 23b. 分析No.23 24a. 分析No.24 24b. 分析No.24



図版4 土器胎土の偏光顕微鏡写真 (スケール:500 μ m, a: 解放ニコル, b: 直交ニコル)

25a. 分析No.25 25b. 分析No.25 26a. 分析No.26 26b. 分析No.26

27a. 分析No.27 27b. 分析No.27 28a. 分析No.28 28b. 分析No.28

29a. 分析No.29 29b. 分析No.29 30a. 分析No.30 30b. 分析No.30

2c. バブル型火山ガラス (100 μ m) 3c. イネ類珪酸体 (20 μ m)

3d. 骨針化石 (20 μ m) 5c. 珪藻化石、海水泥質干潟 *Diploneis smithii* (20 μ m)

2 節 レプリカ法による土器の種実圧痕の同定

佐々木由香・米田恭子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

和歌山市神前遺跡は、弥生時代前期から中期の水路とみられる溝などが検出された遺跡である。胎土分析が行われた 30 点の土器のうち、弥生時代前期の土器 1 点には種実の圧痕が複数確認された。ここでは種実圧痕のレプリカを採取して種実の同定を行なった。なお、同一試料で胎土分析も行われている（1 節参照）。

2. 資料と方法

資料は、下層流路（5040）から出土した突帯紋系の鉢の口縁部（胎土分析番号 13、実測番号 10-532）である。種実圧痕は、外面に 1 点（圧痕番号 1）、断面に 1 点（圧痕番号 2）、内面に 1 点（圧痕番号 3）の、計 3 点を確認した。土器の時期は、弥生時代前期（第 1 様式併行期）と考えられている。

圧痕内を筆と流水で水洗し、乾燥条件下でブローアーを用いて付着物を除去した。その後、実体顕微鏡下で観察し、作業前の記録として土器全体と圧痕部分を撮影した。レプリカ法は、丑野・田川（1991）等を参考にして以下の手順で行った。資料の保護のため、バラロイド B72 の 5% アセトン溶液を離型剤にして圧痕内および周囲に含浸させた。印象剤に用いるシリコーン樹脂（JM シリコン レギュラータイプ）を医療用注射器に入れ、圧痕部分ならびに周囲に充填してレプリカを作製した。このレプリカを実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）で観察および写真撮影を行った。なお、採取したレプリカは（株）パレオ・ラボ、土器は公益財団法人和歌山県文化財センターに保管されている。

3. 結果

採取したレプリカを同定した結果、圧痕番号 1 はイネの粳、圧痕番号 2 はキビ有ふ果、圧痕番

表 1 土器種実圧痕の同定結果（単位 mm、括弧は破片値）

胎土分析番号	時期	土器の器種他	遺構番号	登録番号	実測番号	圧痕番号	圧痕位置	分類群	部位	備考	長さ	幅	厚さ (mm)
13	I 併行期か	突帯紋系鉢	5040 (下層流路)	15257	10-532	1	外面	イネ	粳	芒残存	6.39	3.46	(1.92)
						2	断面	キビ	有ふ果		(2.58)	(1.60)	(1.58)
						3	内面	不明	種実		2.12	1.62	(0.66)

号 3 は不明種実であった（表 1）。産出した種実圧痕の記載と図版を掲載し、同定の根拠とする。

(1) イネ *Oryza sativa* L. 粳 イネ科

上面観が楕円形で、側面観は長楕円形。2 条の稜があり、表面には四角形の網目状の隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しくならぶ。果柄は残存していない。先端部に芒が一部分残る。芒の周辺に 100 μ m 以下の短いふ毛が散在する。芒を除く粳の大きさは、長さ 6.39mm、幅 3.46mm、残存厚 1.92mm。

(2) キビ *Panicum miliaceum* L. 有ふ果 イネ科

約半分の残存であるが、完形ならば紡錘形で先端は丸く、内顎側が膨らむ。表面は平滑で長細

胞は観察されなかった。残存長 2.58mm、残存幅 1.60mm、残存厚 1.58mm。

(3) 不明種実 Unknown 種実

側面観はいびつな楕円形で、上面観はやや扁平か。表面には不規則な凹凸がある。短軸の片側中央に臍？がある。長さ 6.39mm、幅 3.46mm、残存厚 1.92mm。

4. 考察

第 1 様式併行と考えられている突帯紋系の鉢に付着していた圧痕は、栽培植物であるイネの籾とキビの有ふ果、科以上の詳細な同定ができなかった不明種実であった。イネ籾は、芒の先端のレプリカが採取できなかったが、芒やふ毛などの残存状況が良かった。また厚みから、籾殻ではなく籾と判断した。キビの有ふ果は、土器の断面に約半分残存していた。

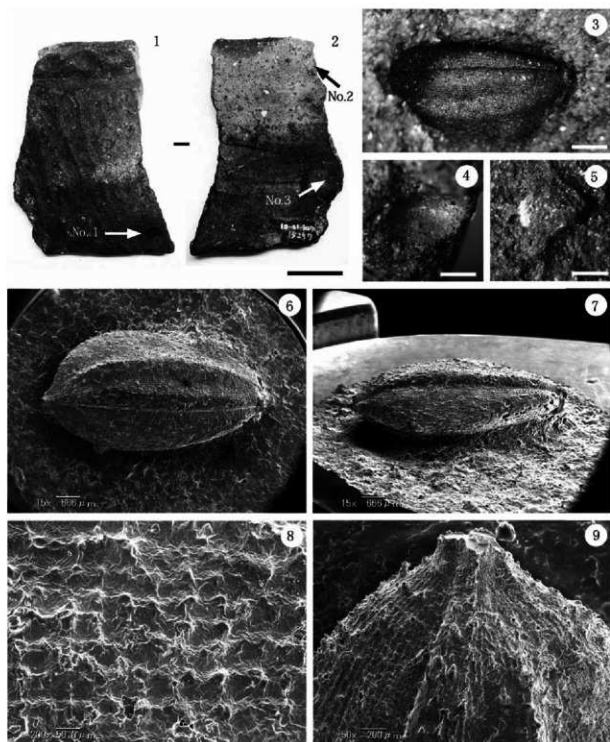
土器づくりの際にこれらの種実が付近にあり偶発的に混ざったか、意図的に混和された可能性がある。またイネ籾の圧痕はオーバーハングしており、キビ有ふ果の圧痕断面から得られた。このため、鉢を成形後に外側から種実を押し付けたのではなく、成形前に意図的に混和したか、偶発的にまざったと考えられる。

土器は、胎土分析によって生駒山西麓産と推定された突帯紋系の鉢に付着しており、そのほかの同時期の他の地域や在地の土器には種実圧痕が検出されなかった（1 節参照）。遺跡内では 16 条以上の溝が検出されており、溝は水路で、農耕稲作の開始に伴い、灌漑用水の整備がなされたと推定されている。目視では胎土分析資料外の土器にも穀類の圧痕が確認されている。したがって、胎土分析に供された以外の在地と推定される土器でも、イネやアワ・キビなどの穀類の有無を検討する必要がある。

本分析は、平成 25 年度科学研究費基盤研究（A）課題番号 25244036「植物・土器・人骨を中心とした日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎的研究」（代表：設楽博己）の一部を使って行った。

引用文献

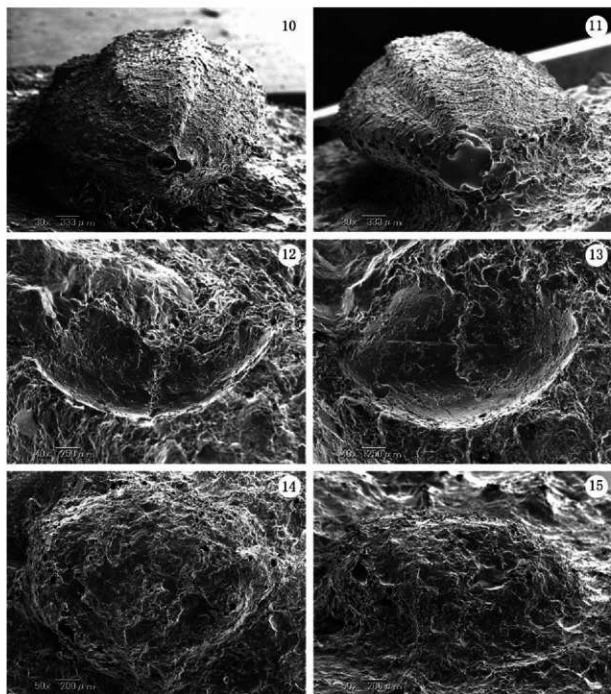
丑野 毅・田川裕美（1991）レプリカ法による土器圧痕の観察，考古学と自然科学，24，13-36，日本文化財科学会。



図版1 神前遺跡出土土器の種実圧痕およびレプリカ (1)

1. 土器 No.13 外面、2. 土器 No.13 内面、3. 圧痕番号 1 の拡大、4. 圧痕番号 2 の拡大、5. 圧痕番号 3 の拡大、6-9. 圧痕番号 1 のレプリカ (6. イネ粉、7. イネ粉 (側面観)、8. イネ粉の顆粒状突起の拡大、9. イネ粉の芒およびふ毛)

圧痕部拡大写真のスケール：1mm、走査型電子顕微鏡写真のスケール：写真上に記載、土器写真内矢印は種実圧痕位置を示す



図版2 神前遺跡出土土器のレプリカ(2)

10・11. 圧痕番号1のレプリカ(10. イネ粃先端側、11. イネ粃護縁側)、12・13. 圧痕番号2のレプリカ(12. キビ有ふ果(内観側)、13. キビ有ふ果(側面観))、14・15. 圧痕番号3のレプリカ(14. 不明種実、15. 不明種実(側面観))スケールは写真上に記載

表 2 十器輯容表

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遺物 番号	発掘 番号	発掘 地	大塚	小塚	遺物 番号	遺物 種類	遺物 位置	遺物 種類	口 径	高さ (cm)	備考	土	色	特徴・備考	
236	49	3361	1.1	12	139.30	3099	遺物	土製	高	—	14.3	30%	赤 1.5mm以下の赤土・赤色 化土	赤 1.5mm以下 内 1.5mm以下	土製高片断群。平つておらず、断面が 見えず。
237	31	3130	1.1	13	17	3099	土製	土製	高	(12.6)	(2.2)	30%	赤 0.5mm以下の赤色化土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代9～10 世紀
238	31	3182	1.1	13	16	3039	土製	土製	高	(12.6)	3.2	30%	赤 1.5mm以下の赤色化土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代9～10 世紀
239	31	3413	1.1	13	16	3039	土製	土製	高	(12.7)	(2.6)	30%	赤 1.5mm以下の赤色化土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	平時代後期
239	31	3367	1.1	13	16	3039	土製	土製	高	—	(3.2)	30%	赤 1.5mm以下の赤色化土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	平時代後期。10～11 世紀。高片をも つ土製。断面が見えず。
240	31	3367	1.1	13	16	3039	土製	土製	高	—	(3.1)	14%	赤 0.5mm以下の赤色化土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	平時代後期。10～11 世紀。内部に赤 土・赤褐色が見える。
221	31	3264	1.1	12	124.25	3091	土製	土製	小	(9.7)	2.9	20%	赤 1.5mm以下の赤色化土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代後期 10c 末～11c 初
221	31	3264	1.1	12	124.25	3091	土製	土製	小	(9.6)	2.9	30%	赤 1.5mm以下の赤色化土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代後期 10c 末～11c 初
221	31	3397	1.1	12	127.1	3091	土製	土製	小	96.5	3.3	40%	赤 1.5mm以下の赤色化土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代後期 10c 末～11c 初
221	31	3397	1.1	12	127.1	3091	土製	土製	小	96.1	3.3	40%	赤 1.5mm以下の赤色化土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代後期 10c 末～11c 初
236	31	3412	1.1	12	121	3091	土製	土製	高	(16.1)	(4.2)	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
227	31	3342	1.1	12	121	3091	土製	土製	高	(17.6)	4.3	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
227	31	3342	1.1	12	121	3091	土製	土製	高	—	(2.6)	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
229	31	3419	1.1	12	121	3091	土製	土製	中	(7.4)	1.7	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
230	31	3318	1.1	12	124	3091	土製	土製	中	(14.5)	(4.2)	10%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代 後期
231	31	3318	1.1	12	124	3091	土製	土製	中	(14.7)	(3.0)	17%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代 後期
232	31	3396	1.1	12	124	3091	土製	土製	中	—	(2.8)	100%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代 後期
233	31	3396	1.1	12	124	3091	土製	土製	中	—	(3.0)	23%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代 後期
234	31	3397	1.1	12	127.1	3091	土製	土製	中	—	2.3	23%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代 後期
235	31	3397	1.1	12	127.1	3091	土製	土製	中	—	(2.0)	23%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	全体に黄褐色らしい。平時代 後期
237	31	3396	1.1	12	124	3091	土製	土製	中	(13.3)	(1.1)	20%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
237	31	3396	1.1	12	124	3091	土製	土製	中	(17.8)	(5.1)	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
238	31	3342	1.1	12	124	3091	土製	土製	中	(21.9)	(5.2)	12%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
238	31	3342	1.1	12	124	3091	土製	土製	中	(27.3)	6.1	100%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
239	31	3342	1.1	12	124	3091	土製	土製	中	—	(15.9)	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
241	31	3418	1.1	13	19	3012	土製	土製	小	7.6	1.9	90%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
242	31	3405	1.1	13	19	3012	土製	土製	小	11.3	3.1	60%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
243	31	3419	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	9.9	4.5	23%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
244	31	3442	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	7.7	8.6	60%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
245	31	3414	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
246	31	3415	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
247	31	3417	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
248	31	3471	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	—	(7.7)	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
249	31	3414	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	—	(4.6)	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
250	31	3318	1.1	12	122	3079	土製	土製	中	(13.7)	2.1	10%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
251	31	3382	1.1	12	122	3087	土製	土製	中	8.6	2.6	90%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
252	31	3414	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	(17.2)	5.7	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
254	31	3382	1.1	12	122	3087	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
254	31	3386	1.1	12	122	3087	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
255	31	3386	1.1	12	122	3087	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
256	31	3390	1.1	12	123.1	3087	土製	土製	中	—	(5.5)	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
257	31	3407	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	8.6	1.7	60%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
258	31	3406	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	—	1.6	75%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
259	31	3406	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	—	4.3	14%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
260	31	3426	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	(11.3)	2.8	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
261	31	3565	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	(27.0)	(5.0)	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
262	31	3131	1.1	13	19	3098	土製	土製	中	(13.6)	2.7	50%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
263	31	3131	1.1	13	19	3098	土製	土製	中	(13.6)	2.7	23%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
264	31	3131	1.1	13	19	3098	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
265	31	3131	1.1	13	19	3098	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
266	31	3131	1.1	13	19	3098	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
267	31	3441	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	(11.3)	3.3	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
268	31	3526	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
269	31	3526	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
270	31	3539	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	—	—	30%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
271	31	3446	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	7.9	2.8	60%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初
272	31	3546	1.1	13	19	3012	土製	土製	中	8.6	1.6	90%	赤 1.5mm以下の赤土・片 状赤土	赤 1.0mm以下 内 1.0mm以下	赤 1.0mm以下。平時代後期 10c 末～11c 初

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

表 3 石器、石製品観察表

[illegible]

調査 年度	調査 地域	地 区	大区域	小区域	調査 年度	調査 年度	所在地	造物種類	器 種	長 さ	幅	厚 さ	重 量	石 材	色 調	備考	備 考	
519	136	5718	中・大区域	31	a+0	1306	上層	1層	磨製石器	磨製石片	(13.0)	(5.3)	4.3	(383.3)	緑色結晶岩	2,306/1	60%	互見は調査しない。
519	136	11293	中・大区域	31	a+1	1287	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(9.0)	(6.6)	4.1	(384.2)	緑色結晶岩	2,396/1	60%	同調面から2層をつくる。
521	136	15285	中・大区域	31	a12.3	3014	地下部	下層	磨製石器	石片	16.3	2.9	3.2	(331.4)	結晶岩	N/1	20%	同調面から2層をつくる。
552	136	13362	中・大区域	31	a+0	1387	上層	最下層	磨製石器	石片	(11.1)	3.9	3.2	(185.4)	砂岩	1893/1	70%	中層から利用したと思われる。中層はくつが、最下層はくつが、最上層はくつがと見られる。
553	136	5106	中・大区域	31	a+1	3019	溝部	下層	磨製石器	石片	12.4	3.4	2.9	221.0	緑色結晶岩	1036/1	100%	くつがの部から自然な利用。
554	136	37019	中・大区域	31	a+0	1387	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(7.3)	(7.3)	(56.1)	砂岩	3701/1	60%	磨製の製品。片断。	
555	136	13015	中・大区域	31	a+4	3186	上層	下層	磨製石器	石片	(7.0)	5.8	3.9	(237.3)	砂岩	3701/1	60%	石片。上層より7層目。
556	136	3631	中・大区域	31	a+0	1387	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(8.1)	8.8	3.1	(324.0)	砂岩	3701/1	100%	同調面は磨製として扱い、部分には磨製と見られる。
557	136	3667	中・大区域	31	a+0	1387	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(4.3)	(5.3)	4.0	(395.7)	砂岩	3616/1	60%	磨製と見られる。
558	136	3611	中・大区域	31	a+0	1387	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(7.2)	(7.2)	4.7	272.0	緑色結晶岩	3616/1	60%	若干の磨製石片。磨製の石片に磨製と見られる。
559	136	32961	中・大区域	31	a+7	3047	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(5.7)	—	4.6	(279.4)	砂岩	3,303/1	90%	磨製石片と見られる。
560	136	3667	中・大区域	31	a+0	1387	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(4.3)	3.9	3.0	57.4	砂岩	3701/1	60%	磨製と見られる。
561	136	3282	中・大区域	31	a+7	3047	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(6.1)	3.8	2.4	(124.4)	紅葉岩	3045/1	90%	磨製と見られる。
562	127	3282	中・大区域	31	a+8	3014	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(8.9)	(8.9)	4.0	(383.1)	砂岩	3277/1	60%	磨製の製品。片断。
563	127	3283	中・大区域	31	a+7	3016	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(12.0)	(7.1)	4.9	(374.4)	砂岩	3,316/1	60%	磨製の製品。片断。
564	127	3029	中・大区域	31	a+7	3016	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(11.3)	11.4	4.5	(276.8)	砂岩	2,377/1	100%	磨製の製品。片断。
567	127	3029	中・大区域	31	a+6	3103	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(13.3)	(13.2)	7.4	(276.8)	緑色結晶岩	2,377/1	100%	磨製の製品。片断。
568	127	3030	中・大区域	31	a+6	3104	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(13.3)	(13.1)	9.8	(668.6)	緑色結晶岩	3616/1	60%	磨製の製品。片断。
569	111	6013	中・大区域	11	a12.18	3186	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(6.7)	—	2.8	146.7	磨6	2,503/1	90%	磨製の製品。片断。
569	111	11223	中・大区域	11	a12	3186	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(6.7)	—	0.3	0.2	磨6	1832/1	100%	磨製の製品。片断。
569	111	6225	中・大区域	11	a+7	3016	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(6.4)	0.4	0.2	129.1	磨6	3701/1	60%	磨製の製品。片断。
570	111	6038	中・大区域	11	a+0	1387	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(10.9)	5.3	4.2	(318.7)	磨6	3045/1	90%	磨製の製品。片断。
573	146	6919	中・大区域	15	a+0	3015	上層	下層	磨製石器	磨製石片	(3.0)	1.3	0.4	0.9	中・大区域	50.0	90%	磨製の製品。片断。
572	146	7119	7区	15	a+1	3000	西側	上層	磨製石器	石片	4.4	2.0	0.4	1.9	サマウラ	5/1	100%	左右半割で、片断は半割のよう。もう半割は半割のよう。
573	146	7123	7区	15	a+1	3000	西側	上層	磨製石器	石片	2.8	2.1	0.4	3.3	サマウラ	5/1	100%	両面式の破片。中・大区域の破片に一致。
574	146	7129	7区	15	a+3	3000	西側	上層	磨製石器	石片	2.2	1.4	0.3	0.9	サマウラ	5/1	100%	両面式の破片。中・大区域の破片に一致。
575	146	7227	7区	15	a+0	2994	西側	上層	磨製石器	石片	2.0	1.5	0.3	1.1	サマウラ	5/1	100%	両面式の破片。中・大区域の破片に一致。
576	146	7233	7区	15	a+0	2992	溝	下層	磨製石器	石片	5.8	3.1	1.2	17.2	サマウラ	5/1	100%	破片と見られる。使用可能な破片である。
577	146	7113	7区	15	a+1	3004	溝	上層	磨製石器	石片	2.8	2.3	0.4	12.8	サマウラ	7,597/1	100%	両面式の破片。中・大区域の破片に一致。
578	146	7432	7区	15	a+1	3000	西側	上層	磨製石器	磨製石片	4.0	2.0	0.4	14.7	サマウラ	5/1	100%	破片と見られる。使用可能な破片である。
579	146	7123	7区	15	a+0	2990	西側	上層	磨製石器	石片	2.1	1.3	0.3	0.8	緑色結晶岩	3067/1	60%	互見。
580	146	7182	7区	15	a+1	3000	西側	上層	磨製石器	石片	16.2	5.9	0.9	100.2	緑色結晶岩	7,507/1	100%	青い面に一致。
581	146	7409	7区	15	a+1	3000	西側	上層	磨製石器	石片	10.49	4.9	0.4	(32.4)	結晶岩	2,306/1	60%	調査員が中に一致。
582	146	7577	7区	15	a+0	3002	溝	最下層	磨製石器	石片	(8.9)	5.1	0.8	(53.9)	緑色結晶岩	2,306/1	60%	調査員が中に一致。
583	146	7241	7区	15	a+0	2992	溝	下層	磨製石器	石片	(10.4)	2.8	0.8	(36.3)	結晶岩	7,507/1	100%	片の破片を調査中。
584	146	7133	7区	15	a+2	3004	溝	下層	磨製石器	石片	(7.2)	3.7	0.8	(28.4)	緑色結晶岩	6267/1	100%	調査員が中に一致。

表4 石器石材の剥片数量

地区	平均値 (°)		標準差 (g)	
	点数	総重量 (g)	点数	総重量 (g)
1区	2	22		
2区	6	52		
3区	5	36		
4区	1	5		
5区	112	1,346	2	4
6区	13	112		
7区	95	800	3	8
8区	2	30		

表5 金属製品観察表

遺物番号	調査番号	登録地	地区	大塚	中塚	遺物番号	遺物種類	所在地	品名	規格 (mm)	重量 (g)	保存率	備考
41	82	2067	3区	35	c-08	2011	土坑	鉄釘	釘	10.1 × 1.1 × 0.55	22.7	90%	鉄釘
42	82	2074	3区	35	a-05	2021	土坑	鉄釘	釘	24.8 × 1.1 × 1.1	110.4	100%	鉄釘、歯肉に歯肉が大型
43	82	2043	3区	35	a-4	2028	土坑	銅製品	笠形鉢口蓋	5.3 × 5.0 × 6.3	11.6	90%	口蓋の下部に歯肉あり、口蓋内側に
44	82	2066	3区	35	a-4	2021	土坑	銅製品	蓋水通	Φ 2.5	1.9	100%	文字不鮮明
45	82	2071	3区	35	a-11	2005	土坑	銅製品	蓋水通	Φ 2.5	5.2	100%	文字不鮮明
46	130	7003	3-5区	14	y-23	5140	(遺13)	銅製品	鈴	2.7 × 3.0 × 6.1	10.2	90%	製品の形、金銀製であったと推定

表6 木製品観察表

遺物番号	調査番号	登録地	地区	大塚	中塚	遺物番号	遺物種類	所在地	品名・部材	規格 (mm)	備考
81	16	62	1区	22	j-11	603	井戸	笠	笠	Φ 43.8 × (高) 直径 Φ 43.8 × 1.6	残存状況不良
82	16	63	1区	22	j-11	603	井戸	笠	笠	Φ 47.4 × 6.5	3～4枚の板を組み合わせた。側面に孔
83	62	2064	3区	31	a-6	2006	井戸	井戸板	井戸板材	13.5 × 6.2 × 1.5	笠の中心に木製品あり
84	62	2064	3区	31	a-6	2006	井戸	井戸板	板	Φ 5.2 × (高) 2.1	はぎ型加工あり
85	62	2062	3区	31	a-6	2029	井戸	井戸板	板材	(73.2) × (34.9) × (4.3)	厚手板の板の板材
86	62	2062	3区	31	a-6	2029	井戸	井戸板	板材	(73.2) × (34.9) × (4.3)	厚手板の板の板材
87	62	2020	3区	31	a-11	2005	土坑	笠	笠	(28.0) × (13.7) × 1.2	板材を使用
88	62	2414	3区	31	a-17	2027	土坑	笠	笠	28.8 × 13.2 × 1.5	笠の中心に木製品あり
89	71	6041	4区	31	a-17	4365	土坑	笠	笠	11.4 × 11.8 × 3.7	2方角の笠の中心に木製品あり
910	174	7452	7区	15	c-13	7100	井戸	井戸板	板材	Φ 3.2 × (77.7)	2013遺2と似た木製品あり。土層から7100より下あたりにあると見られる
911	174	7272	7区	15	c-13	7065	井戸	井戸板	板材	11.3 × 7.2 × 1.8	中央に小孔あり
912	179	8125	8区	15	a-7	8002	道路	井戸板	井戸板	(112.1) × 10.8 × 3.7	笠の中心に木製品あり。笠の中心に木製品をつくる

表7 骸骨製品観察表

遺物番号	調査番号	地区	出土位置	遺物番号	部 位	出土遺物の内容	骨点数	大分類	小分類	部 位	部 分	左右	備考
81	5737	3-4区	34-a9	5187	下顎	骨生中顎の歯	4	哺乳類	イノシシ	下顎骨	結合部・上顎骨(後・前)	左	81-119, 81-115, 39 埋納 81-144, 61-118, 11 埋納
82	5841	3-4区	34-a9	5206	下顎	骨生中顎の歯	1	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	Found
83	5927	3-4区	34-a11-12	5186	上顎	骨生中顎の歯	1	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	左	
84	3968	3-4区	34-a11	5182	下顎	骨生中顎の歯	3 (2)	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
85	11163	3-4区	34-a9	5187	連枝部	骨生中顎の歯	3 (2)	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
86	15211	3-4区	34-a13	5040	下顎	骨生前顎の歯	1	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
87	15221	3-4区	34-a13	5187	下顎	骨生中顎の歯	1	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
88	15282	3-4区	34-a12	5040	下顎	骨生前顎の歯	6	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	イノシシ/シカ、野ウサギ
89	15283	3-4区	34-a12-13	5040	下顎	骨生前顎の歯	2	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	野ウサギ 32-72 埋 19-81 埋 2-70 埋 19-81 埋 2-70 埋 19-81 埋 2-70
910	15289	3-4区	34-a12	5040	下顎	骨生前顎の歯	1	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
911	15291	3-4区	34-a12	5040	下顎	骨生前顎の歯	1	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
912	15292	3-4区	34-a12	5040	下顎	骨生前顎の歯	4 + 破片	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
913	15293	3-4区	34-a12	5040	下顎	骨生前顎の歯	6	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	イノシシ/シカ
914	15296	3-4区	34-a12	5040	下顎	骨生前顎の歯	1	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
915	15296	3-4区	34-a12	5040	下顎	骨生前顎の歯	1	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	81-120, 81-115, 39 埋納 81-144, 61-118, 11 埋納
916	15296	3-4区	34-a12	5040	下顎	骨生前顎の歯	1	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
917	15299	3-4区	34-a12	5040	上・中顎	骨生前顎の歯	2	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	イノシシ/シカ
918	15299	3-4区	34-a12	5040	上・中顎	骨生前顎の歯	2	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	イノシシ/シカ
919	8021	8区	15-a16	8012	上顎	中顎水通下顎歯	4	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
920	8040	8区	15-a16-17	8012	中・下顎	中顎水通下顎歯	8 + 破片	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
921	8042	8区	15-a18	8012	中・下顎	中顎水通下顎歯	4 + 破片	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
922	8047	8区	15-a19	8012	中・下顎	中顎水通下顎歯	4 + 破片	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
923	8052	8区	15-a12	8012	上顎	中顎水通下顎歯	1	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
924	8058	8区	15-a13-103	8008	上顎	中顎水通下顎歯	1	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
925	8088	8区	15-a14	8012	上顎	中顎水通下顎歯	4	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
926	8110	8区	15-a15	8012	上顎	中顎水通下顎歯	3	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
927	8119	8区	15-a12	8008	上顎	中顎水通下顎歯	15 + 破片	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	
928	8128	8区	15-a17	8012	上顎	中顎水通下顎歯	1 (4)	哺乳類	イノシシ	上顎骨	連枝部	右	81-120, 81-115, 39 埋納

写真図版

写真図版1 調査地遠景

1区 西半遠景
(北・上空から)



1区・2区遠景
(南・上空から)



3～5区遠景
(北・上空から)



写真図版2 調査地遠景

3～5区遠景
(南・上空から)



7区・8区遠景
(南西・上空から)



7～8区遠景
(北・上空から)



写真図版3 1区



1区 調査区全景（北から）



1区 北端011東西溝調査風景（南西から）



1区全景（南・上空から）



1区西半全景（北から）

写真図版4 1区



1区西半全景（南から）



1区東半全景（北から）



1区東半全景（南から）

写真図版5 1区



1区西半 中央部 002 溝付近 (南から)



077 土坑 (東から)



002 溝土層断面 (南から)



031 井戸 (南から)



003 溝 (右)、010 溝 (左) (北から)



035 土坑 (北西から)



019 溝土層断面 (南から)



051 土坑 (南から)

写真図版6 2区



2区 調査前全景（北から）



2区 210 溝付近掘前状況（東から）



2区 全景（南・上空から）



2区 全景（北から）

201 溝全景
(北から)



201 溝土器出土状況
(北から)

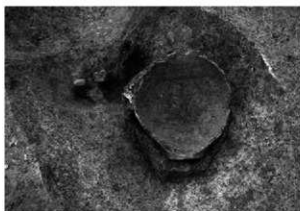


201 溝内の土坑
(北から)





203・205・206 溝重複部周辺（北から）



261 土器棺（北東から）



227 井戸状遺構（西から）



221 井戸状遺構（西から）



222 瓦組井戸（西から）

写真図版9 3区

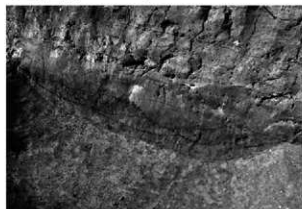


3区全景（北から）

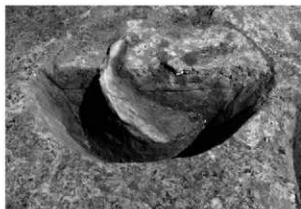


3033・3034 溝（南西から）

写真図版 10 3区



3032 溝土層断面 (南から)



3067 ピット (南から)



3033・3034 土層断面 (南東から)



3081 溝 (北から)



3020 井戸 (南から)



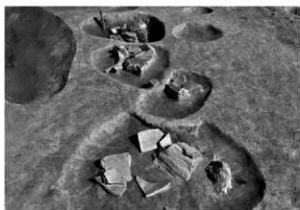
3106 石組井戸（南から）



3区 近世屋敷地跡（東から）



3区 石垣1 (南東から)



3095 ~ 3098 土坑 (南から)



3043 ピット (南から)



3529 石組溝 (西から)



3055 木桶（南から）



3056 暗渠（東から）



3012 溝（東から）



3056 暗渠と下層の埋甕状遺構（東から）



3015・3036・3037 埋桶（南から）

写真図版 14 4区



4区 全景（南から）



4区東側全景（南西から）



4012 土坑（北から）



4021 竪穴状遺構（南から）



4036 土坑（南東から）



4003 井戸半截状況（西から）



4003 井戸検出状況（南東から）



4063 柱穴（東から）



4089 埋桶（南から）



4089 埋桶（南から）



5-1区全景（南・上空から）



5-1区全景（北から）



溝 7 (5080 溝) とビット集中地点 (南から)



溝 6 (5081 溝) (北東から)



溝 10 (5118 溝) (西から)

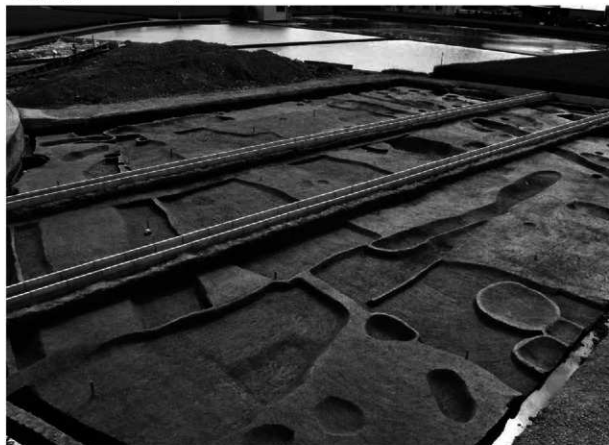


溝 8 (5096 溝) (南から)



5078 土坑 (右)、5079 土坑 (左) (南から)

写真図版 18 5-2区



5-2区全景（北東から）



5-2区西半（北東から）

写真図版 19 5-2区



溝 11 (5014 溝) (南から)



5010 溝状遺構周辺 (南から)



溝 11 (5014 溝) 土層断面 (南西から)



5036 土坑 (南から)



溝 12 (5016 溝) (西から)



5047 土坑 (南から)



5027 溝 (左)・5020 (右) (南から)



5059 土坑 (西から)



5-3区全景（南から）



5-3区全景（東から）



溝14（5001溝）土器出土状況（南から）



溝13～15（5144・5002・5001：左から順に）（南西から）



5003土坑（北から）



5-4区全景（南西から）



5-4区全景（北東から）



5-4区東半（北から）



弥生時代中期の溝群（北東から）



5040 流路確認トレンチ（西から）



溝7（5227溝）（南西から）



溝 8 (5206 溝) (南西から)



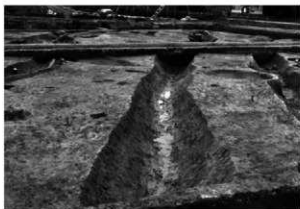
溝 12 (5180 溝) (南西から)



溝 9 (5205 溝) (南西から)



溝 12 分流 (5257 溝) (北東から)



溝 10 (5187 溝) (南西から)



5211 土坑 (西から)



溝 11 (5182 溝) (南西から)



5281 土坑 (南西から)

写真図版 24 5-5区



5-5区全景（北から）



溝 12 (5169 溝) (北東から)



5157 井戸（北から）



溝 13～15 (5140～5144 溝) (北東から)



5166 井戸（南西から）



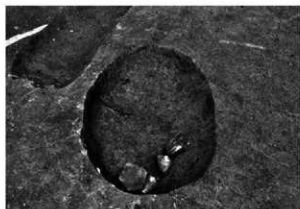
6-1区全景（南から）



溝 16 (6001) (南から)



6008 右列（南から）



6005 土坑・6004 溝（南から）



6009 土坑（南から）



6-2区全景（南西から）



溝 16 (6011)（南西から）

写真図版 27 6-2区



6050 流路 (6039 溝下層) 土層断面 (北から)



6037 東西溝 (西から)



6039 溝土層断面 (南西から)



6区 掘立柱建物1の柱穴6014 (西から)



6区 掘立柱建物1 (南から)

写真図版 28 7区



7区 調査前全景（北から）



7区 西壁（北から）



7区・8区（南・上空から）



7区 全景（南から）



7区・8区全景（北東から）



7061 井戸状遺構（南東から）



7000 流路土層確認トレンチ（南から）



7165 井戸状遺構（南から）



7001・7004 溝と 7000 流路（北東から）



7002 溝 (西から)



7002 溝土層断面 (西から)



7004 溝 (南から)



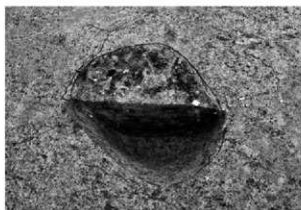
7001 溝土層断面 (南から)



7004 溝土層断面 (南から)



7区 竪穴建物1の柱穴と炉（南西から）



7区 竪穴建物の炉（南から）



7007 溝（南西から）



7157 土坑（西から）



7070 溝（左）と 7050 溝（右）（南から）



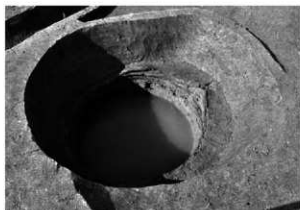
7区 掘立柱建物3（東から）



7030 土坑（西から）



7013-8013 溝（現行水路の両脇、南から）



7095 埋桶（西から）



7013 溝（南東から）



8区 全景（北から）



8区 8002 流路（上層に 8000 流路が重なる、北東から）

写真図版 34 8区



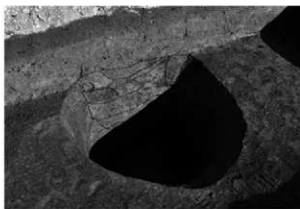
8002 溝土層断面（北西から）



8区 柵列1・2（北東から）



8001 溝（中央）（北東から）



8074 井戸（南から）



8004 溝（北東から）



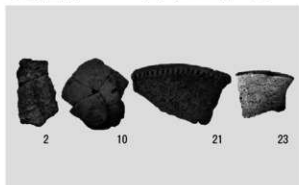
8013 溝（南西から）



8区 掘立柱建物1（南東から）



8013 溝土層断面（南から）



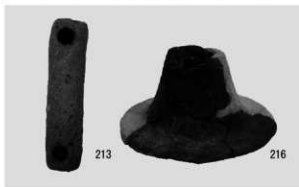




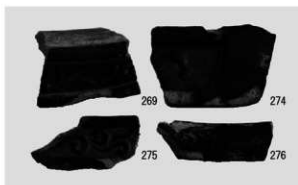














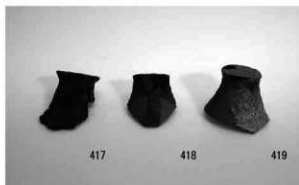
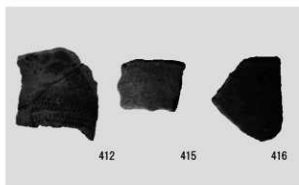




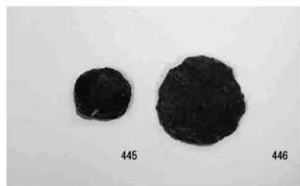
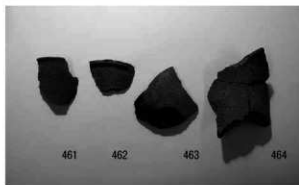
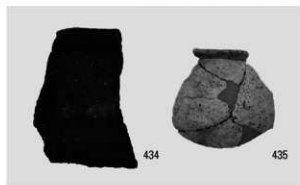
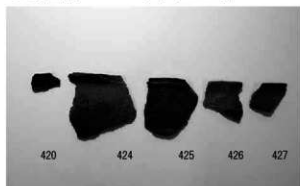
写真図版 47 5区出土土器

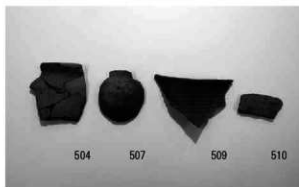
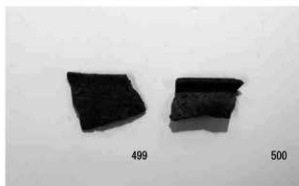
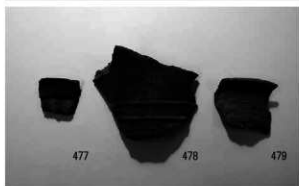


写真図版 48 5区出土土器

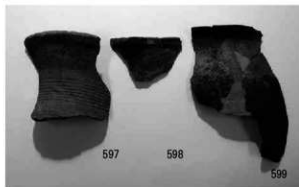
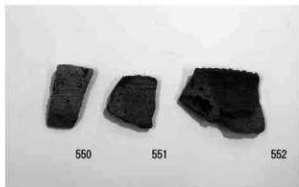
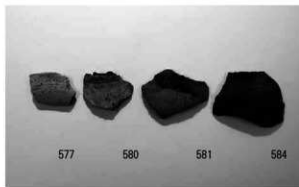
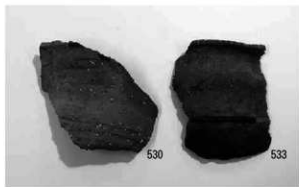
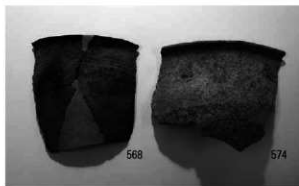
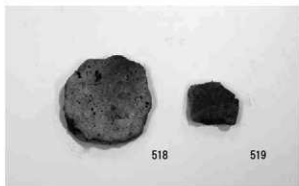


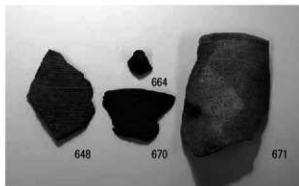
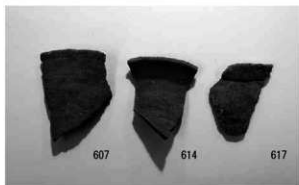
写真図版 49 5区出土土器



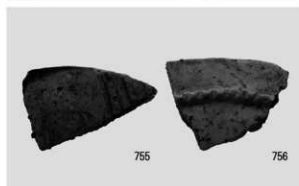
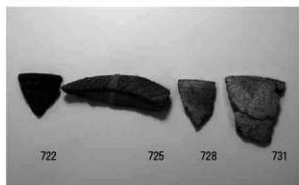
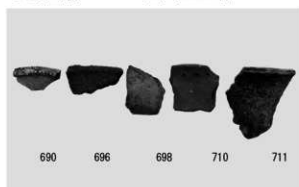


写真図版 51 5区出土土器

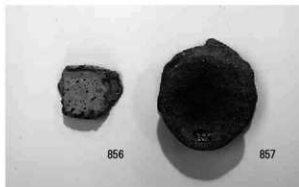
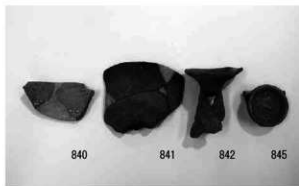
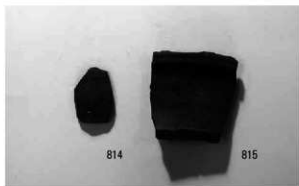
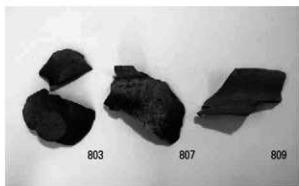




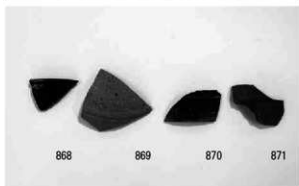
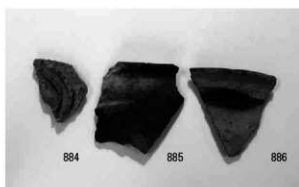
写真図版 53 5区出土土器



写真図版 54 5区出土土器



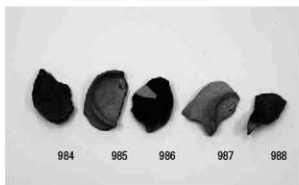
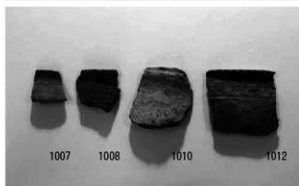
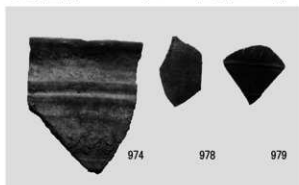
写真图版 55 5区出土土器

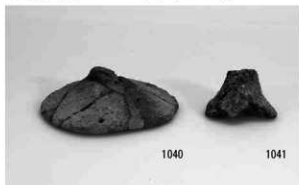


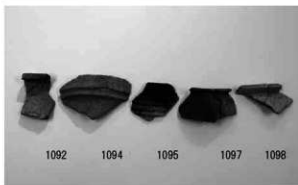


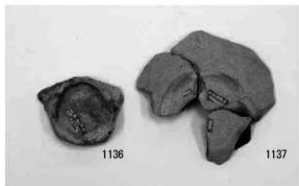


写真図版 58 5区・6区出土土器

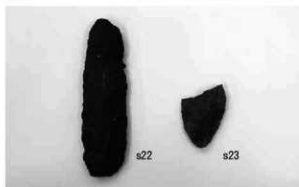
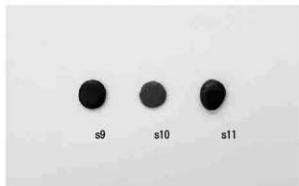
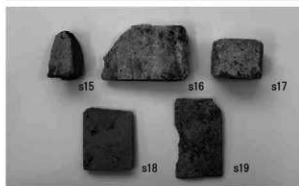
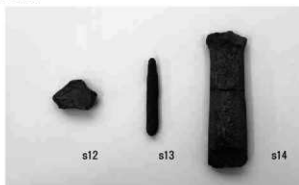


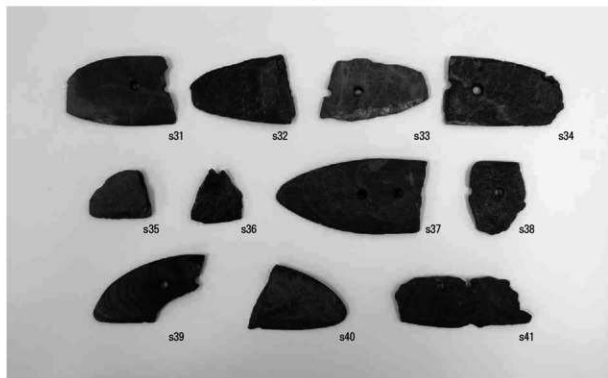
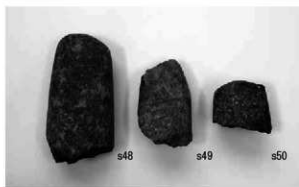
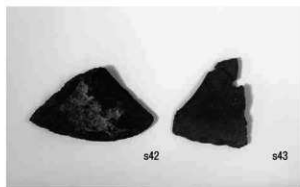
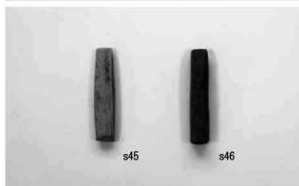
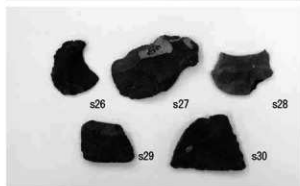




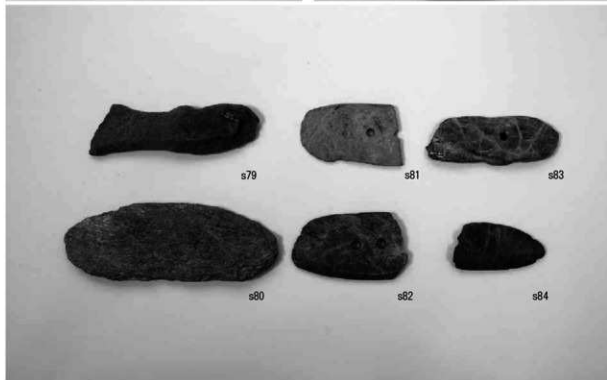
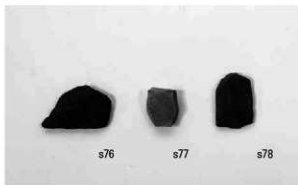
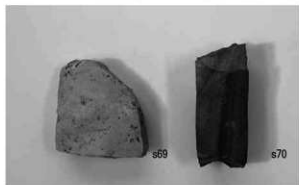
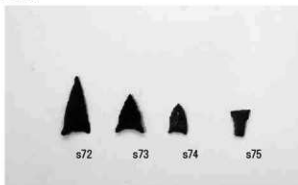


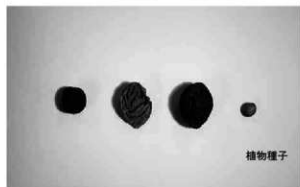
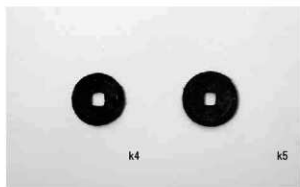
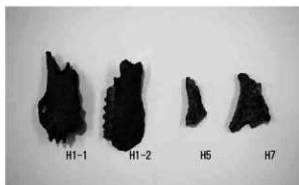
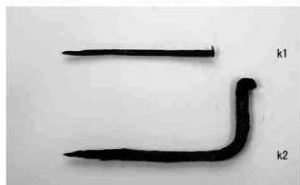
写真図版 62 1～5区出土石器・石製品











写真図版 67 木製品



報告書抄録

[illegible]

神 前 遺 跡

—和歌山橋本線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2014 年 3 月 25 日

編集・発行 公益財団法人和歌山県文化財センター

印刷・製本 白光印刷株式会社